

砂

子

瀬

遺

跡

IV

砂子瀬遺跡IV

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

二〇一四・三

2014年3月

青森県教育委員会

青森県教育委員会

砂子瀬遺跡IV

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2014年3月

青森県教育委員会



環状に分布する掘立柱建物跡（左が北）



第32・33号掘立柱建物跡（北から）



第104 A・B号竪穴住居跡（西から）

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成15年度から津軽ダム建設事業予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。

砂子瀬遺跡については平成18年度から24年度まで発掘を行い、これまで3冊の調査報告書を刊行しております。

本報告書は平成23・24年度の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土器埋設構造などが発見され、特に縄文時代後期における集落構造を考えるうえで、貴重な集落であることがわかりました。

この成果が今後、埋蔵文化財の保護と活用等に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導、ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成26年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 柿崎 隆司

例　言

- 1 本書は、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所による津軽ダム建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成23・24年度に発掘調査を実施した西目屋村砂子瀬遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は平成23年度9,300m²、平成24年度4,500m²である。
- 2 砂子瀬遺跡の所在地は、青森県中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字宮元、青森県遺跡番号は343008である。
- 3 砂子瀬遺跡の発掘調査報告書は、津軽ダム建設事業に伴って既に3冊刊行されており、本書は4冊目となる。
- 4 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は発掘調査を委託した国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所が負担した。
- 5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

　発掘調査期間　　平成23年5月11日～10月28日

　平成24年5月8日～6月29日

　整理・報告書作成期間　　平成24年4月1日～平成25年3月31日

　平成25年4月1日～平成26年3月31日

- 6 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター小田川哲彦総括主幹、葛城和穂文化財保護主査、工藤忍文化財保護主査、最上法聖文化財保護主事、加藤隆則文化財保護主事、永瀬史人文化財保護主事が担当し、文末に執筆者名を記した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。

- 7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

　航空写真撮影　　株式会社シン技術コンサル

　石器の石質鑑定　　青森県立郷土館主任学芸主査　島口　天

　剥片石器の実測　　株式会社ラング

　遺物の写真撮影　　シルバーフォト、フォトショップいなみ

　放射性炭素年代測定　　株式会社加速器分析研究所

　黒曜石産地推定　　株式会社アルカ

　火山灰分析　　国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科　柴　正敏

　土壤分析　　バリノ・サーヴェイ株式会社

- 8 発掘調査成果の一部は、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。

- 9 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

- 10 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の方々と機関からご協力・ご指導を得た（敬称略、順不同）。阿部昭典・岡村道雄・長田友也・上條信彦・小林克・閑根達人・中村大・山田康弘

- 11 本書に掲載した地形図（遺跡位置図等）は国土地理院発行の25,000分の1地形図を複写して使用した。

- 12 計測原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
- 13 挿図中の方位は、すべて座標北を示している。
- 14 全体図等の縮尺は、挿図毎にスケール等を示した。
- 15 遺構については、検出順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺構に使用した略号は、以下のとおりである。

S I－竪穴住居跡 S B－掘立柱建物跡 S K－土坑 S R－土器埋設遺構 S N－焼土遺構
S D－溝跡 S Q－配石遺構 S P－ピット

- 16 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。
- 17 遺構実測図の縮尺は、原則として竪穴住居跡の炉跡等は1/30、竪穴住居跡・ピット等は1/60、その他は1/60及び1/100に統一し、挿図毎にスケール等を示した。
- 18 遺構実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。これ以外は図毎に説明を付した。



- 19 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。
- 20 基本土層・遺構内堆積土層の色調表記等には、『新版標準土色帖 2004・2005年度版』（小山正忠・竹原秀雄）を使用した。
- 21 遺物については、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺物に使用した略号は、以下のとおりである。

P－土器 S－石器 D－土製品

- 22 遺物実測図には、挿図毎に1から通しの図番号を付した。
- 23 遺物実測図の縮尺は、原則として土器・礫石器は1/3、剥片石器・土製品・石製品は1/2に統一し、挿図毎にスケール等を示した。
- 24 遺物実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。これ以外は図毎に説明を付した。



- 25 遺物観察表には、出土地点・法量・諸特徴などを示した。破損品の残存値については（ ）表記してある。
- 26 遺物写真には、遺物実測図と共通の図番号を付した。
- 27 遺物写真の縮尺は、原則として1/3、剥片石器・土製品・石製品は1/2に統一したが、遺物の大きさによっては任意の縮尺で掲載した。
- 28 参考文献については巻末に収めたが、依頼原稿分は各文末に付した。

目 次

口絵	
序	
例言	
目次	
挿図・写真目次	
第1章 調査の概要	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査の方法	3
第3節 調査の経過	6
第2章 遺跡の概要	13
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	13
第2節 遺構の概要	13
第3節 出土遺物の分類	14
第4節 砂子瀬遺跡周辺の地形・地質	17
第5節 基本層序	20
第3章 検出遺構と出土遺物	22
第1節 A区	22
1 墓穴住居跡	22
2 掘立柱建物跡	52
3 土器埋設遺構	76
4 焼土遺構	77
5 溝跡	80
6 配石遺構	84
7 ピット	85
8 排て場	135
9 遺構外出土遺物	145
第2節 B区	174
1 溝跡	174
2 ピット	174
3 遺構外出土遺物	179
第3節 C区	182
1 土器埋設遺構	182
2 ピット	182
3 遺構外出土遺物	183
第4節 補遺	184
第4章 自然科学分析	185
第1節 放射性炭素年代測定	185
第2節 黒曜石産地推定	189
第3節 砂子瀬遺跡の火山灰分析	196
第4節 砂子瀬遺跡の土壤分析	199
第5章 総括	209
第1節 墓穴住居跡	209
第2節 掘立柱建物跡	213
第3節 土器	216
第4節 石器	218
第5節 砂子瀬遺跡における集落の変遷	220
引用・参考文献	222
遺構一覧表	223
遺物觀察表	237
写真図版	253
報告書抄録	305

挿図目次

図1 遺跡位置図	1	図53 A区ピット配置図(11)	100
図2 平成23・24年度調査区域図	2	図54 A区ピット配置図(12)	101
図3 砂子灘遺跡全体図	10	図55 A区ピット配置図(13)	102
図4 遺構配置図	11	図56 A区ピット配置図(14)	103
図5 基本層序	21	図57 A区ピット配置図(15)	104
図6 A区第102・103号堅穴住居跡・出土遺物	33	図58 A区ピット配置図(16)	105
図7 A区第104A・B号堅穴住居跡(1)	34	図59 A区ピット配置図(17)	106
図8 A区第104A・B号堅穴住居跡(2)	35	図60 A区ピット配置図(18)	107
図9 A区第104A・B号堅穴住居跡(3)	36	図61 A区ピット配置図(19)	108
図10 A区第104A・B号堅穴住居跡出土遺物(1)	37	図62 A区ピット配置図(20)	109
図11 A区第104A・B号堅穴住居跡出土遺物(2)	38	図63 A区ピット配置図(21)	110
図12 A区第105号堅穴住居跡(1)	39	図64 A区ピット配置図(22)	111
図13 A区第105号堅穴住居跡(2)	40	図65 A区ピット配置図(23)	112
図14 A区第105号堅穴住居跡出土遺物	41	図66 A区ピット配置図(24)	113
図15 A区第106・107号堅穴住居跡・出土遺物	42	図67 A区ピット(1)	114
図16 A区第108・109号堅穴住居跡・出土遺物	43	図68 A区ピット(2)	115
図17 A区第110・111号堅穴住居跡・出土遺物	44	図69 A区ピット(3)	116
図18 A区第112・113号堅穴住居跡・出土遺物	45	図70 A区ピット(4)	117
図19 A区第114号堅穴住居跡・出土遺物	46	図71 A区ピット(5)	118
図20 A区第115号堅穴住居跡・出土遺物(1)	47	図72 A区ピット(6)	119
図21 A区第115号堅穴住居跡出土遺物(2)	48	図73 A区ピット(7)	120
図22 A区第116号堅穴住居跡	49	図74 A区ピット(8)	121
図23 A区第116号堅穴住居跡出土遺物	50	図75 A区ピット(9)	122
図24 A区第117・118号堅穴住居跡・出土遺物	51	図76 A区ピット(10)	123
図25 A区掘立柱建物跡掲載区分図	62	図77 A区ピット(11)	124
図26 A区掘立柱建物跡配置図(1)	63	図78 A区ピット出土遺物(1)	125
図27 A区掘立柱建物跡配置図(2)	65	図79 A区ピット出土遺物(2)	126
図28 A区掘立柱建物跡(1)	66	図80 A区ピット出土遺物(3)	127
図29 A区掘立柱建物跡(2)	67	図81 A区ピット出土遺物(4)	128
図30 A区掘立柱建物跡(3)	68	図82 A区ピット出土遺物(5)	129
図31 A区掘立柱建物跡(4)	69	図83 A区ピット出土遺物(6)	130
図32 A区掘立柱建物跡(5)	70	図84 A区ピット出土遺物(7)	131
図33 A区掘立柱建物跡(6)	71	図85 A区ピット出土遺物(8)	132
図34 A区掘立柱建物跡(7)	72	図86 A区ピット出土遺物(9)	133
図35 A区掘立柱建物跡(8)	73	図87 A区ピット出土遺物(10)	134
図36 A区掘立柱建物跡出土遺物(1)	74	図88 A区捨て場	136
図37 A区掘立柱建物跡出土遺物(2)	75	図89 A区捨て場出土土器(1)	137
図38 A区土器埋設遺構・出土遺物	81	図90 A区捨て場出土土器(2)	138
図39 A区繞土遺構・出土遺物	82	図91 A区捨て場出土土器(3)	139
図40 A区溝跡・出土遺物	83	図92 A区捨て場出土土器(4)	140
図41 A区配石遺構	84	図93 A区捨て場出土土器(5)	141
図42 A・B区ピット掲載区分図	89	図94 A区捨て場出土土器(6)	142
図43 A区ピット配置図(1)	90	図95 A区捨て場出土土器(7)	143
図44 A区ピット配置図(2)	91	図96 A区捨て場出土石器・土製品・石製品	144
図45 A区ピット配置図(3)	92	図97 A区遺構外出土土器(1)	150
図46 A区ピット配置図(4)	93	図98 A区遺構外出土土器(2)	151
図47 A区ピット配置図(5)	94	図99 A区遺構外出土土器(3)	152
図48 A区ピット配置図(6)	95	図100 A区遺構外出土土器(4)	153
図49 A区ピット配置図(7)	96	図101 A区遺構外出土土器(5)	154
図50 A区ピット配置図(8)	97	図102 A区遺構外出土土器(6)	155
図51 A区ピット配置図(9)	98	図103 A区遺構外出土石器(1)	156
図52 A区ピット配置図(10)	99	図104 A区遺構外出土石器(2)	157

図105 A区遺構外出土石器（3）	158	図121 B区第1号溝跡	175
図106 A区遺構外出土石器（4）	159	図122 B区ピット配置図（1）	176
図107 A区遺構外出土石器（5）	160	図123 B区ピット配置図（2）	177
図108 A区遺構外出土石器（6）	161	図124 B区ピット・出土遺物	178
図109 A区遺構外出土石器（7）	162	図125 B区遺構外出土土器	180
図110 A区遺構外出土石器（8）	163	図126 B区遺構外出土石器・土製品	181
図111 A区遺構外出土石器（9）	164	図127 C区第1号土器埋設遺構・C区第1号ピット	183
図112 A区遺構外出土石器（10）	165	図128 C区遺構外出土遺物	183
図113 A区遺構外出土石器（11）	166	図129 第20号土坑・第160号土坑出土土製品	184
図114 A区遺構外出土石器（12）	167	図130 壺穴住居跡集成（1）	211
図115 A区遺構外出土石器（13）	168	図131 壺穴住居跡集成（2）	212
図116 A区遺構外出土石器（14）	169	図132 挖立柱建物跡平面形分類	215
図117 A区遺構外出土土製品（1）	170	図133 土器重量分布	216
図118 A区遺構外出土土製品（2）	171	図134 A・B区遺構外出土石器分布図	219
図119 A区遺構外出土土製品（3）	172	図135 A区遺構変遷図	221
図120 A区遺構外出土石製品	173		

写真目次

写真1 調査区全景（1）	253	写真36 A区ピット（5）	288
写真2 調査区全景（2）	254	写真37 A区ピット（6）	289
写真3 調査区全景（3）	255	写真38 A区ピット（7）	290
写真4 調査区全景（4）	256	写真39 A区捨て場・遺構外出土遺物	291
写真5 調査区全景（5）	257	写真40 B区ピット・C区ピット・土器埋設遺構	292
写真6 基本層序	258	写真41 A区壺穴住居跡出土遺物（1）	293
写真7 調査風景	259	写真42 A区壺穴住居跡出土遺物（2）	294
写真8 A区壺穴住居跡（1）	260	写真43 A区掘立柱建物跡・土器埋設遺構・溝跡出土遺物	295
写真9 A区壺穴住居跡（2）	261	写真44 A区ピット出土遺物（1）	296
写真10 A区壺穴住居跡（3）	262	写真45 A区ピット出土遺物（2）	297
写真11 A区壺穴住居跡（4）	263	写真46 A区ピット出土遺物（3）	298
写真12 A区壺穴住居跡（5）	264	写真47 A区捨て場出土遺物（1）	299
写真13 A区壺穴住居跡（6）	265	写真48 A区捨て場出土遺物（2）・A区遺構外出土遺物（1）	300
写真14 A区壺穴住居跡（7）	266	写真49 A区遺構外出土遺物（2）	301
写真15 A区壺穴住居跡（8）	267	写真50 A区遺構外出土遺物（3）	302
写真16 A区壺穴住居跡（9）	268	写真51 A区遺構外出土遺物（4）・B区ピット出土遺物	303
写真17 A区壺穴住居跡（10）	269	写真52 B区遺構外・C区出土遺物	304
写真18 A区壺穴住居跡（11）	270		
写真19 A区掘立柱建物跡（1）	271		
写真20 A区掘立柱建物跡（2）	272		
写真21 A区掘立柱建物跡（3）	273		
写真22 A区掘立柱建物跡（4）	274		
写真23 A区掘立柱建物跡（5）	275		
写真24 A区掘立柱建物跡（6）	276		
写真25 A区掘立柱建物跡（7）	277		
写真26 A区掘立柱建物跡（8）	278		
写真27 A区掘立柱建物跡（9）	279		
写真28 A区掘立柱建物跡（10）	280		
写真29 A区土器埋設遺構	281		
写真30 A区焼土遺構（1）	282		
写真31 A区焼土遺構（2）・溝跡・配石遺構	283		
写真32 A区ピット（1）	284		
写真33 A区ピット（2）	285		
写真34 A区ピット（3）	286		
写真35 A区ピット（4）	287		

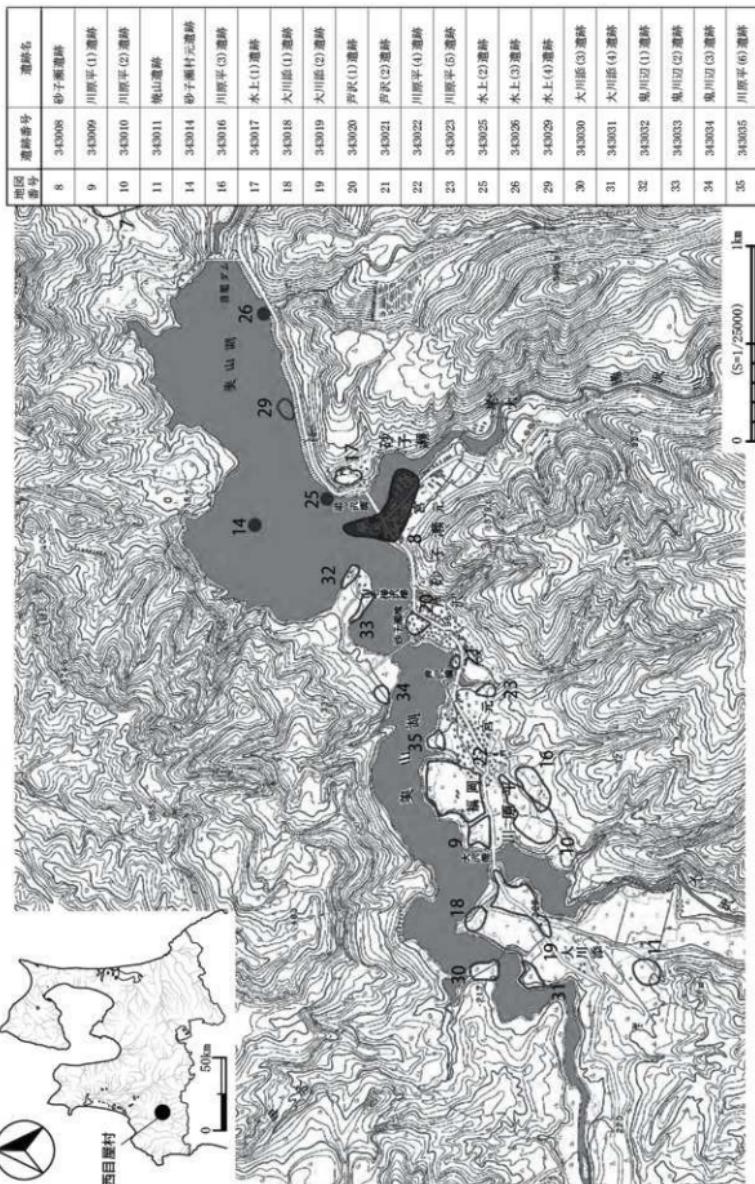


図1 遺跡位置図

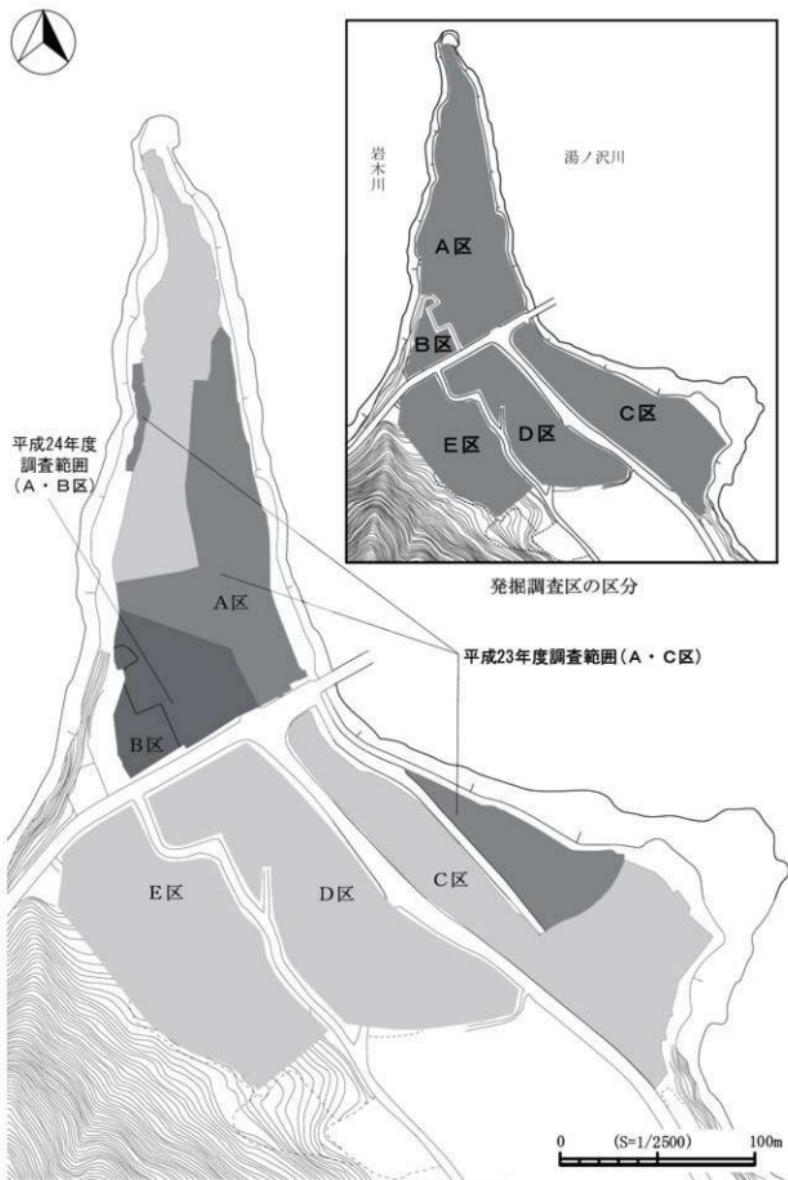


図2 平成23・24年度調査区域図

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

津軽ダム建設に先立つ発掘調査は平成15年度に着手している。砂子瀬遺跡については平成18年度から同24年度まで発掘調査を実施し、これまで3冊の報告書を刊行しており（青森県埋蔵文化財調査報告書 第466・482・513集、以下シリーズ番号のみ記載）、調査に至る経緯も記載済みである。

今回の報告書は、一連の調査の内、平成23・24年度の発掘調査を対象としたものである。区域としては、A区、B区、C区が対象であるが、A区については、平成21・22年度調査区（第513集）の隣接地の発掘調査を平成23年度に実施し、そのさらに南側の発掘調査をB区とあわせて平成24年度に実施した。C区については平成19年度の調査区（第466集）に囲まれた未調査区域について、平成23年度に発掘調査を実施した。

第2章 調査の方法

（1）発掘作業の方法

平成18～22年度に青森県埋蔵文化財調査センターが実施した本発掘調査により、縄文時代の遺物包含層と遺構（堅穴住居跡等）が確認されているため、縄文時代の遺構調査に重点をおいて、集落の時期・構造等を把握できるような調査方法を採用した。

〔測量基準点・水準点の設置・グリッド設定〕

測量基準杭及び標高値は、平成23年度調査では平成22年度調査で設定したものを使用したが、平成24年度調査では埋め戻しなどによって基準杭が失われていたため、業者に委託して新たに設置したものを使用した。グリッドは平成19年度調査で設定したものを継続して使用した。各グリッドは南から北にアルファベット、西から東に算用数字を付けてその組み合わせで呼称し、その名称は南西隅で代表させ、IVA-50（世界測地系でX=59100・Y=-50000）等と呼称した。

〔調査区について〕

調査区の呼称については、これまでの調査で使用してきたものを踏襲した（図2）。

〔基本土層〕

遺跡の基本土層については、表土から順にローマ数字を付けて呼称した。

〔表土等の調査〕

平成18～22年度の調査により、表土には現代の搅乱が含まれ、遺物が希薄であることが分かったので、重機を併用して掘削の省力化を図った。出土した遺物は、適宜地区単位で層位毎に取り上げた。

〔遺構の調査〕

検出遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。なお番号は、新たに付して使用したが、平成18～22年度調査のものとの重複を避けるためにA区ピットは1000番、A区堅穴住居跡・土器埋設遺構・焼土遺構は100番、A区溝跡・配石遺構・B区溝跡・ピット・C区土器埋設遺構・ピットは1番から使用した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的には4分割又は2分割で設定した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の平面図は、主に（株）CUBIC製「遺構実測支援システム」

を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図や竪穴住居跡に伴う炉の平面図等は、簡易造り方測量等で縮尺1/20・1/10の実測図を作成した。遺構内の出土遺物については、遺構単位・遺構内地区単位で層位毎に又は堆積土層一括で取り上げたが、床面(底面)や炉の出土遺物については、トータルステーションや簡易造り方測量により、必要に応じて縮尺1/20・1/10のドットマップ図・形状実測図等を作成した。

〔遺物包含層の調査〕

上層から層位毎に人力で掘削した。遺物が密集して出土した区域では、トータルステーションや簡易造り方測量により、縮尺1/20・1/10のドットマップ図や形状実測図を作成したが、遺物が散発的に出土した区域では、原則としてグリッド単位で層位毎に取り上げた。

〔写真撮影〕

写真撮影には、原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び1,790万画素のデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の検出状況・精査状況・完掘後の全景等について記録した。

(2) 整理・報告書作成作業の方法

平成23・24年度の発掘調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡18棟、掘立柱建物跡22棟（再報告1棟含む）、土器埋設遺構5基、焼土遺構12基、溝跡4条、配石遺構2基、ピット1110基等の遺構が検出され、縄文時代の土器・石器等の遺物が141箱出土した。縄文時代の集落の時期・構造等を解明するため、竪穴住居跡をはじめとする各遺構の構築時期と集落の変遷等の検討に重点をおいて整理・報告書作成作業を進めた。

〔図面類の整理〕

遺構の平面図は主にトータルステーションによる測量で作成したので、整理作業ではこれを原則として縮尺20分の1で図化し、簡易造り方測量で作成した堆積土層断面図や炉等の付属施設の実測図等との図面調整を行った。また、遺構一覧表を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

〔写真類の整理〕

35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状況、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。またデジタルカメラのデータは35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理した。

〔遺物の洗浄・注記と接合・復元〕

縄文時代の遺構内出土遺物及び包含層出土遺物を優先的に洗浄し、接合・復元作業を早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層等の整理を怠らないようにした。

〔報告書掲載遺物の選別〕

遺物全体の分類を適切に行行った上で、遺構に伴って使用・廃棄（放置）された資料、遺構の構築・廃絶時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代（時期）・形式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

〔遺物の観察・図化〕

充分観察した上で遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、観察表・計測表等を作成した。

〔遺物の写真撮影〕

業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

〔自然科学分析〕

遺構の年代を推定するために放射性炭素年代測定、基本層序から検出された火山灰の同定を行ったために火山灰分析、出土した黒曜石の産地を推定するために産地推定、沢の利用状況を解明するために土壤分析を行った。

〔遺構・遺物のトレース・版下作成〕

遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、(株) CUBIC製「トレースくん」を用いたデジタルトレースで行った。実測図版の版下作成は、「トレースくん」及びアドビ社のイラストレーターで行った。写真図版はデジタル写真を使用し、アドビ社のインデザインで版下を作成した。

〔遺構の検討・分類・整理〕

各遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係等に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

〔遺物の検討・分類・整理〕

遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・品種構成・個体数等について検討した。

〔調査成果の検討〕

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代の集落の時期・構造・変遷等について検討・整理した。

第3節 調査の経過

(1) 発掘作業の経過

平成23年度の発掘調査は9,300m²を対象として(図2)、5月11日から10月28日までの期間で、平成24年度の発掘調査は4,500m²を対象として(図2)、5月8日から6月29日までの期間でそれぞれ実施することになった。平成18~22年度に青森県埋蔵文化財調査センターが行った本発掘調査の結果、縄文時代の遺物包含層・遺構が確認されているので、表土から順次掘り下げて、縄文時代の遺物包含層の調査、縄文時代の遺構検出・調査の順に発掘作業を進めることにした。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

(平成23年度) 所長	松田 守正 (平成24年3月退職)
次長	成田 滋彦 (平成24年3月退職)
総務GM	木村 繁博 (平成24年3月退職)
調査第二GM	川口 潤
総括主幹	小田川哲彦 (発掘調査担当者)
文化財保護主査	工藤 忍 (発掘調査担当者)
文化財保護主査	葛城 和穂 (発掘調査担当者)
文化財保護主事	加藤 隆則 (発掘調査担当者)
文化財保護主事	最上 法聖 (発掘調査担当者)

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越 潔 国立大学法人 弘前大学名誉教授・故人 (考古学)
調査員	藤沼 邦彦 青森県文化財保護審議会委員 (考古学)
〃	葛西 勲 前青森短期大学教授 (考古学)
〃	福田 友之 青森県考古学会会長 (考古学)
〃	島口 天 青森県立郷土館主任学芸主査 (地質学)

(平成24年度) 所長	柿崎 隆司
次長 (総務GM)	高橋 雅人
調査第二GM	川口 潤
文化財保護主査	工藤 忍 (発掘調査担当者)
文化財保護主査	葛城 和穂 (発掘調査担当者)
文化財保護主事	加藤 隆則 (発掘調査担当者)
文化財保護主事	永瀬 史人 (発掘調査担当者)

専門的事項に関する指導・助言

調査員	三浦 圭介 北里大学非常勤講師 (考古学)
〃	福田 友之 青森県考古学会会長 (考古学)

〃	松山 力	日本地質学会会員	(地質学)
〃	島口 天	青森県立郷土館主任学芸主査	(地質学)

発掘作業の経過は、以下のとおりである。

〔平成23年度〕

- 4月下旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備、調査区の表土除去等、事前の準備作業を行った。
- 5月11日 発掘器材等を現地へ搬入し、雑木除去等の環境整備を行った。
- 5月12日 作業員を二手に分け、A区北側及びC区の遺構検出作業を同時に開始した。
- 5月中旬～ A区北側では、平成22年度調査と同様に掘立柱建物跡を構成すると考えられる柱穴群が検出され、順次精査を開始した。C区では、調査区の大半が現代の搅乱を受けていることが明らかとなった。
- 5月31日 C区の調査を終了した。
- 6月上旬～ A区北側では、柱穴群の調査が進み、6月28日には1回目の空中写真撮影を行った。
- 7月上旬～ A区の遺構精査と並行して、平成22年度調査区西側に隣接する区域の遺構検出作業及び精査を開始した。両区域からは竪穴住居跡及び掘立柱建物跡を構成する柱穴が多数検出され、環状に分布する掘立柱建物跡の全体形が明らかとなってきた。
- 8月上旬～ 平成22年度調査区の南側に隣接する区域を新たに拡張することとし、重機を使用して表土除去を行い、遺構検出作業を開始した。
- 10月上旬～ A区中央部分の精査がほぼ終了し、A区南端の遺構精査を本格的に開始した。
- 10月中旬～ A区南端は遺構の分布が希薄であることが判明し、調査は順調に推移した。10月20日には2回目の空中写真撮影を行い、10月23日には現地説明会を開催した。
- 10月28日 発掘作業を終了し、発掘器材・出土品等を搬出した後、現地から撤収した。
- 11月1日 所轄の警察署に県文化財保護課から遺物発見届を提出した。

〔平成24年度〕

- 4月下旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備、調査区の表土除去等、事前の準備作業を行った。
- 5月8日 発掘器材等を現地へ搬入し、雑木除去等の環境整備を行った。
- 5月9日 B区の包含層掘削及び遺構検出作業を開始した。
- 5月中旬～ 調査の結果、B区は遺構の分布が希薄であることが判明したため、A区を南北に縦断している沢の調査を開始した。
- 6月上旬 B区の調査を終了し、沢以外のA区について遺構検出作業を開始した。
- 6月中旬 沢の掘り下げと並行して、A区で検出された遺構の精査を開始した。
- 6月下旬 遺構の精査がほぼ終了し、6月22日には空中写真撮影を行った。
- 6月29日 砂子瀬遺跡におけるすべての調査を終了し、発掘器材・出土品等を搬出した後、現地から撤収した。
- 7月2日 所轄の警察署に県文化財保護課から遺物発見届を提出した。

(2) 整理・報告書作成作業の経過

平成23・24年度の砂子瀬遺跡の発掘調査では、縄文時代の堅穴住居跡18棟、掘立柱建物跡22棟（再報告1棟含む）、土器埋設遺構5基、焼土遺構12基、溝跡4条、配石遺構2基、ピット1110基、遺物が合わせて141箱（段ボール箱）出土した。報告書刊行事業は平成24・25年度に実施することになったが、写真類の整理作業等は発掘作業終了後の平成24年11月に終了している。この他の整理・報告書作成作業は平成24年4月1日から平成25年3月31日まで及び平成25年4月1日から平成26年3月31日までの期間で行った。砂子瀬遺跡は縄文時代の遺跡であり、検出遺構の中ではピットが多く、出土遺物の中では縄文時代後期の土器が多い点等を考慮して、これに応じた整理作業の工程を計画した。

整理・報告書作成体制は、以下のとおりである。

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

(平成24年度) 総括主幹 小田川哲彦（報告書作成担当者）

文化財保護主査 工藤 忍（報告書作成担当者）

文化財保護主査 葛城 和徳（報告書作成担当者）

文化財保護主事 加藤 隆則（報告書作成担当者）

文化財保護主事 最上 法聖（報告書作成担当者）

(平成25年度) 文化財保護主査 工藤 忍（報告書作成担当者）

文化財保護主査 葛城 和徳（報告書作成担当者）

文化財保護主事 最上 法聖（報告書作成担当者）

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

〔平成23年度〕

11月 写真類の整理作業と図面類の整理作業の一部を行った。

〔平成24年度〕

- 4月上旬～ 発掘作業で作成した図面類の整理作業を行った。遺物は順次接合・復元作業を進めた。
- 6月上旬～ 遺物の接合・復元作業を集中的に行った。この間に、石器・土製品・石製品類の報告書掲載遺物を選別した。
- 7月上旬～ 平成24年度調査の終了を受け、出土した遺物の洗浄・注記作業を開始した。
- 7月中旬～ 平成23年度調査分の土器類の接合・復元作業が終了したので、報告書掲載遺物の選別作業を行った。さらに、遺物の検討・分類・整理作業を進め、遺物観察表等の作成を開始した。
- 8月中旬～ 選別した報告書掲載遺物の実測・拓本等の図化作業を進めた。併せて遺物台帳を作成した。
- 12月上旬 遺構実測図・遺構データ等の整理作業は終了し、順次遺構実測図等のトレースを開始した。図化作業が終了した遺物から順次トレースを行った。トレースが終了した遺構・遺物については印刷用の版下作成を開始した。この間にシルバーフォト・フォト

ショッピングセンターに委託して報告書掲載遺物の写真撮影を行った。また、平成24年度調査で出土した遺物の接合・復元作業を開始した。

1月～ 平成24年度調査分の土器類の接合・復元作業が終了したので、報告書掲載遺物の選別作業を行った。さらに、遺物の検討・分類・整理作業を進め、遺物観察表等の作成を開始した。また、選別した報告書掲載遺物の実測・拓本等の図化作業を進め、併せて遺物台帳を作成した。図化作業が終了した遺物から順次トレースを行い、トレースが終了した遺構・遺物については印刷用の版下作成を行った。

〔平成25年度〕

4月上旬～ 平成24年度出土遺物の図化作業及び版下作成作業を行った。
6月下旬 火山灰分析を国立大学法人弘前大学理 工学研究科柴正敏教授に依頼した。
7月下旬 黒曜石産地推定を株式会社アルカに依頼した。
8月下旬 放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所に依頼した。
9月上旬 土壌分析をバリノ・サーヴェイ株式会社に、地形・地質に関する分析を青森県立郷土館島口天氏にそれぞれ依頼した。
12月上旬～ シルバーフォト・フォトショッピングセンターに委託して平成24年度出土遺物のうち、報告書掲載遺物の写真撮影を行った。
12月中旬～ 調査成果を総合的に検討して報告書の原稿作成を開始した。
1月～ 原稿・版下等が揃ったので報告書の割付・編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。
3月31日 3回の校正を経て報告書を刊行し、記録類・出土品を整理して収納した。

(葛城)

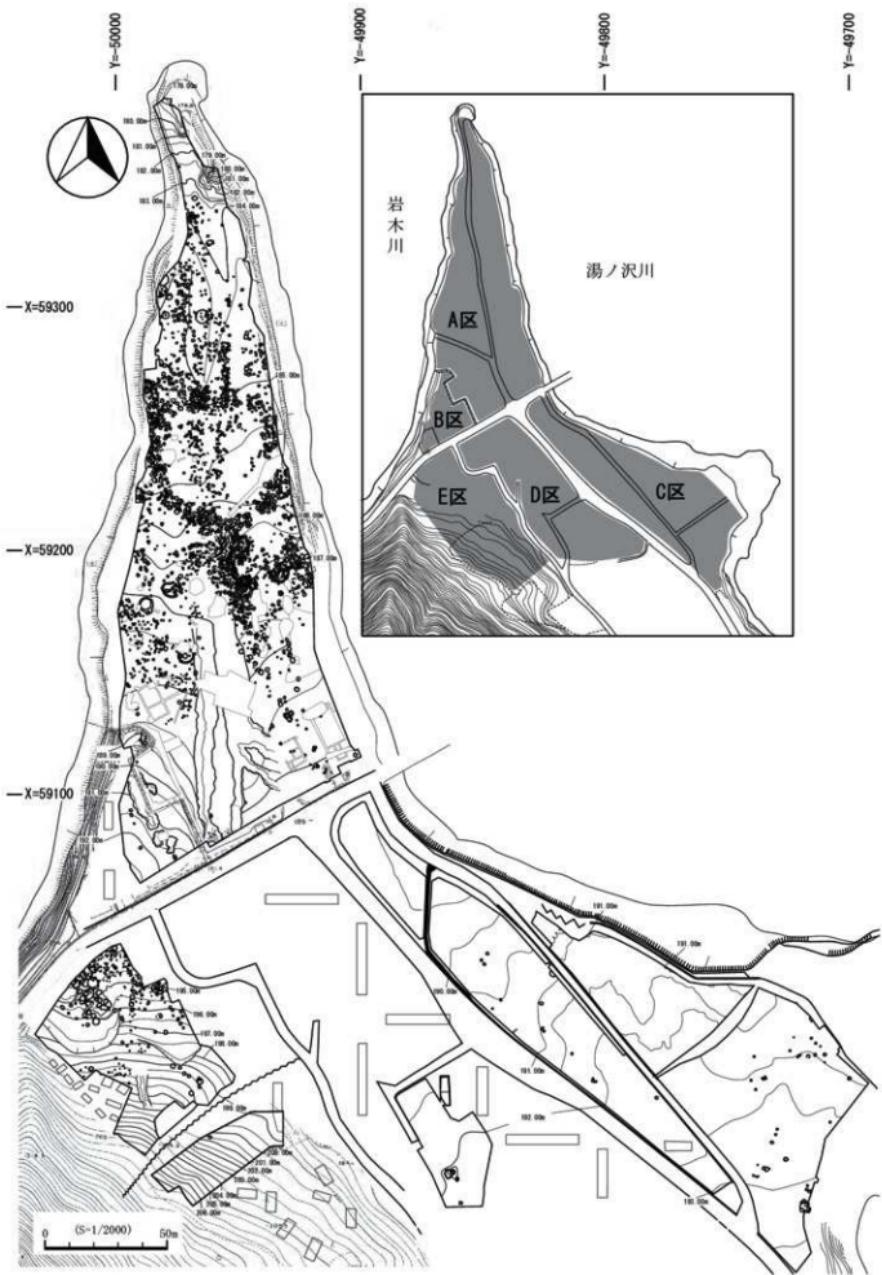


図3 砂子瀬遺跡全体図

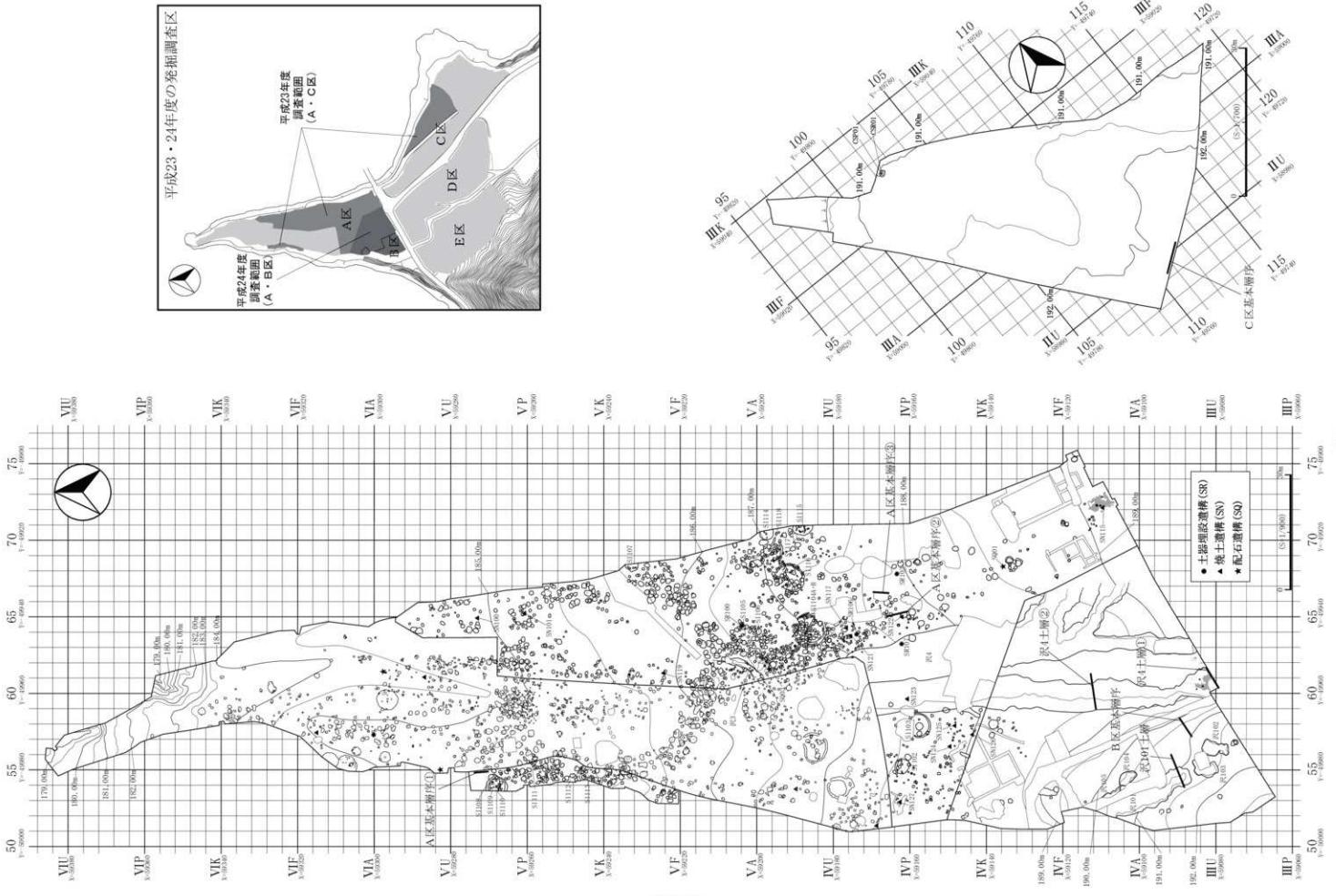


図4 造構配置図

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

砂子瀬遺跡は、岩木川と湯ノ沢川に挟まれた河岸段丘上に位置する。今回報告するA区東側及びB区は標高約185～192mの舌状台地上に、C区東側は標高191～192mの湯ノ沢川左岸の段丘上にそれぞれ位置する（図2）。

砂子瀬遺跡が所在する美山湖周辺では、現在までに本遺跡を含め22遺跡が登録されている（図1）。

本遺跡は、後述するように縄文時代後期前葉から後葉を主体とする遺跡と考えられる。本遺跡周辺における縄文時代後期の遺跡では、湯ノ沢川の対岸に位置する水上(1)・(2)遺跡がある。水上(2)遺跡は、縄文時代前期末葉から後期初頭にかけての大規模な集落跡である。水上(1)遺跡は、縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての集落跡である。本遺跡とこれらの遺跡との直接的な関係は不明であるが、本遺跡と時期的に前後する遺跡の存在は、当時の集団の移動のあり方を考える上で注目される。

第2節 遺構の概要

砂子瀬遺跡の調査区は、道路及び擁壁等、現代の構築物を介して便宜的にA～E区に区分した。C・D区の平成18・19年度の調査では、竪穴住居跡1棟、土坑33基、土器埋設遺構14基、配石遺構5基、屋外配石炉1基を、E区の平成20・21年度の調査では、竪穴住居跡1棟、土坑100基、土器埋設遺構1基、焼土遺構1基、ピット266基を検出した。A区は平成22～24年度に調査を行った。平成22年度に調査を行ったA区西側からは、竪穴住居跡7棟、土坑416基、掘立柱建物跡20棟、土器埋設遺構3基、焼土遺構5基、配石遺構2基、ピット729基が検出された。これらの遺構は縄文時代後期を主体とするものと考えられる（第466・482・513集）。

今回報告対象とするのは、A～C区であるが、A区については報告済みの平成22年度調査区（第513集）の東側及び西側隣接区域と西側の残存部にあたる。平成23・24年度に発掘調査により、新たに竪穴住居跡18棟、掘立柱建物跡22棟（再報告1棟含む）、土器埋設遺構5基、焼土遺構12基、溝跡4条、配石遺構2基、ピット1110基、捨て場1ヶ所が検出された。

竪穴住居跡はA区から検出されており、掘り込みが明瞭なものと、掘り込みが確認できなかつたものとに分けられる。炉形態は地床炉及び土器埋設炉であるが、炉が確認できなかつたものもある。

掘立柱建物跡は、平成22年度の発掘調査で環状に巡るように分布する可能性が示唆されたが、平成23年度の調査でその全体像を把握することができた。掘立柱建物跡はA区のほぼ中央付近に外径約60mの円を描くように分布するほか、その外側にも分布するものがあることが確認された。今回の報告は環状部分の東半部に位置する掘立柱建物跡など、新たに検出された遺構が中心となるが、A区全体の状況についても触ることとする。

ピットについては、遺構検出の時点において、単独の土坑であるのか、掘立柱建物跡を構成するような柱穴であるのか不明確なものが少なくなかったことから、円形の掘り込みをもつ遺構に対しては便宜的に全てピット番号を付して調査を行ったが、調査の過程、整理の過程で他の遺構に帰属させたものもある。また、ピットに伴う柱痕については平面及び断面で確認したが、土層断面図を作成しなかつたものもある。

これらの時期については、出土遺物から縄文時代後期前葉から後葉のものと考えられる。なお、各遺構の詳細については第3章及び遺構一覧表を参照されたい。

第3節 出土遺物の分類

平成23・24年度調査で出土した遺物の総量は段ボール箱で141箱である。

1 土器

平成23・24年度調査で出土した土器は縄文時代前期から後期の土器で、その大半は縄文時代後期の土器である。分類は時期ごとにI～III群に大別し各時期の土器型式により細別したが、型式を特定できない土器については器形・文様等の特徴から類別した。なお、I～III群の大別は、本報告と同じA区の報告に係る第513集と同様であるが、C～E区の報告に係る第466集・482集とは異なる。観察表における土器の計測値は（ ）表記が復元推定値、〔 〕表記が残存値を示す。

第I群 縄文時代前期の土器

第II群 縄文時代中期の土器

A類 中期前葉の円筒上層b式に比定されるもの。

B類 中期中葉の土器で、円筒上層c式に比定されるものをB1類、円筒上層d・e式の範疇で捉えられるものをB2類とした。

C類 中期後葉の最花式に比定されるもの。

第III群 縄文時代後期の土器

A類 後期初頭の土器で、地文縄文に幅広の沈線で三角形区画文などが描出される一群。馬立式（鈴木1998b）・董沢式（本間1987・1988）に相当する。

B類 後期前葉の土器で、十腰内I式（鈴木1998b）に比定されるものをB1類、磨消縄文による幾何学的な文様要素を有し、仮称四ツ石式（葛西1986・鈴木2013）相当を含む一群をB2類とした。

C類 中期後葉から後期前葉にかけての無文および地文縄文のみの土器で、網目状または縦～斜位の撚糸文が施されるものも本類に含む。胎土・色調はB1類に類似するものが主体を占める。

D類 後期中葉の土器で、平行沈線・入組曲線などを基調とする十腰内2式（鈴木1996）相当を含む一群をD1類、刻目帯や幅広の縄文帯などを特徴とする十腰内3式（鈴木1998a）相当を含む一群をD2類とした。

E類 後期中葉から後葉の土器で、口縁部や屈曲部などに1～2条の刻目帯がみられ、他の文様構成・文様要素が不明瞭な破片資料。概ね十腰内3式から十腰内IV群段階の範疇で捉えられる。

F類 後期後葉の土器で、幅広の縄文帯や木葉状入組文などを特徴とするものをF1類、大型の口縁突起、襷掛状文などの帶縄文の一群をF2類、幅狭の帶縄文に貼垢が多用されるものをF3類とした。細分が困難な破片資料については単にF類としたものもある。F1～3類は順に十腰内IV群段階、馬場瀬・中屋敷段階、瀧端段階（関根2005）に相当する。

G類 後期中葉から後葉にかけての無文および地文縄文のみの土器。深鉢形土器は口縁部が内

溝し、口唇部が肥厚ないしは内傾するものを本類に含む。

(最上)

2 石器

(1) 剥片石器

以下の12器種に大別した。分類は第513集に準じた。細別分類のないものや破損などにより不明のものは、観察表に器種のみを記した。同表で計測値に()をつけたものは、残存値を示す。

- ・石鏃 銳利な先端部が作り出された扁平な両面加工の小型石器。長さが5cmをこえるものについて便宜的に石槍に含めた。

I 類：無茎石鏃。

a 類：凹基、b 類：平基、c 類：円基、d 類：尖基

II 類：有茎石鏃。基部形状により細別した。

a 類：凸基、b 類：凹基、c 類：平基

III 類：柳葉形石鏃。

- ・石槍 銳利な先端部が作り出された刺突具と考えられる石器。石鏃に分類したものより重量があり長いもの。

- ・石錐 剥片の一端に横断面が菱形の刃部が作り出され、穿孔機能があるもの。

- ・石匙 剥片の一端に抉りを施し、つまみ部を作り出したもの。

I 類：柄の軸が刃部と平行するもの。

II 類：柄の軸が刃部と直行するもの。

III 類：柄の軸に対し刃部が斜行するもの。

- ・石鎌 剥片の縁辺を加工し、ヘラ状に整形し、刃部を下端に設けるもの。

- ・スクレーパー 上述の定型石器には属さないが、縁辺に連続する二次加工が施され意図的な刃部が作り出されたもの。

I 類：鈍角に調整された刃部を持つもの(搔器)。

II 類：鋭角に調整された刃部を持つもの(削器)。

- ・異形石器 特異な形状に整形しており、定型石器に含めることのできないもの。

- ・楔形石器 両極技法により相対する2辺の縁辺部に細かな剥離が認められるもの。

- ・微細剥離痕のある剥片 剥片の一部に微細な剥離が認められるもの。utilized flakeの略でU.F.と表記した。

- ・二次加工剥片 剥片の一部に二次加工が施されたもの。器種不明な定型石器の破片を含む。
retouched flakeの略でR.F.と表記した。

- ・石核 剥片を剥離した残片。

- ・剥片類 二次加工のない剥片・碎片。

(2) 磨石器

以下の8器種に大別した。細別分類不明のものは、観察表に器種のみを記した。磨石・敲石・凹石の機能を併せ持つものは、主要な使用痕により分類し、備考に副次的使用痕を記載した。

- ・磨製石斧

- ・磨石 主要な使用痕が研磨によるもの。
- ・敲石 主要な使用痕が敲打によるもの。
- ・凹石 主要な使用痕が、敲打の累積による顕著な凹みを形成するもの。
 - I 類：1面のみに凹み痕をもつもの。
 - II 類：複数面に凹み痕をもつもの。
- ・石鍤 紐かけのための抉りを施し、鍤として使用されたもの。
 - I 類：切目石鍤。鋭利な工具によって溝状の抉りを施したもの。
 - II 類：打欠石鍤。剥離または敲打によって抉りを施したもの。
- ・石皿 碠の平らな部分に平滑で広範囲な使用痕が認められる大型のもの。
 - I 類：有縁のもの。
 - II 類：無縁のもの。
- ・台石 加工のない大型礫を部分的に使用しているもの。
- ・礫器：礫を素材とし、一端に刃部を作出するもの。

(工藤)

3 土製品

以下のものを土製品として大別し、これらに該当しない土製品は不明土製品として一括した。

- ・土偶
- ・円盤状土製品
- ・ミニチュア土器
- ・スタンプ形土製品
- ・動物形土製品
- ・耳飾
- ・三角形土製品
- ・棒状粘土製品

4 石製品

以下のものを石製品として大別し、必要に応じて本文中に細分した。またこれらに該当しない石製品は不明石製品として一括した。

- ・石棒
- ・石冠
- ・円盤状石製品
- ・岩版
- ・有孔石製品

(葛城)

第4節 砂子瀬遺跡周辺の地形・地質

青森県立郷土館 島口 天

砂子瀬遺跡は、美山湖に湯ノ沢川が流入する地点の、両者に挟まれた南北に細長い三角形の平坦面上に立地する（図1左）。標高は約190mである。この平坦面は北方へ緩やかに傾斜するが、西側は美山湖に面した急崖、東側は湯ノ沢川に面した急崖となっている。大正時代の地形図（図1右）では本遺跡内に学校が記されており、西・北・東側の3方が崖に囲まれた台地になっている。よって、本遺跡西側の急崖は岩木川に、東側の急崖は湯ノ沢川によって浸食されてできたと考えられる。崖に露出している地層は、鎌田・根本（2003）によると火山礫凝灰岩を主とする藤倉川層である。

鎌田・根本（2003）によると、この地域に分布する新第三系は、下位より藤倉川層、砂子瀬層、大童子層、相馬安山岩類、赤石層及び大秋層からなり、各層は一連整合の関係にある。美山湖右岸側には藤倉川層が分布し、これは藤倉川層の一部を構成する安山岩質火碎岩である。層厚は600~800m、主として緑～紫緑色の火山礫凝灰岩からなり、淡緑色の凝灰岩及び凝灰角礫岩を伴う。一部でディサイト質溶結凝灰岩が挟まる。異質礫を多量に含む特徴があり、花崗岩類、安山岩、流紋岩、黒色の頁岩等の角礫を含む。美山湖左岸側及び上流域には砂子瀬層の主部が分布し、下位の藤倉川層と明瞭な境界をもたずして漸移的に変化する。

本遺跡内では、表土下に巨礫が密集している場所が見られ、礫密集部が帶状に分布している場所も確認されている。礫密集部の地層断面の観察では、礫に上方粗粒化の傾向が見られ、礫どうしは接触

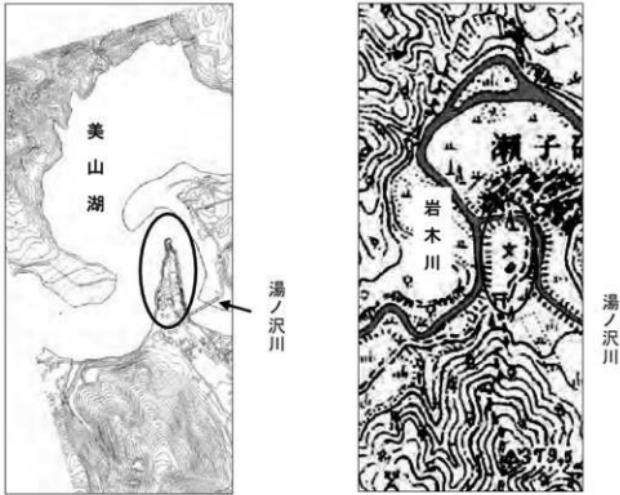


図1 津軽ダム事務所が作成した地形図（左）と大正4年発行の5万分の1地形図（右）

遺跡の位置は○で囲んだ範囲。大正時代の地形図には細かい等高線が記されていないため詳細な地形はわからないが、美山湖の出現によって周囲が水没して現在の地形（南北に長い三角形）が現れたか、東西の崖が崩れて現在の地形になったと考えられる。

することなく間を砂礫が充填していることから、これらは土石流堆積物と考えられた（写真1）。この場所は、湯ノ沢川が山間から出て岩木川に合流する所であるため、土石流は湯ノ沢川で発生したものと考えられる。同様の土石流堆積物は、対岸（湯ノ沢川右岸）の水上(2)遺跡でも確認されている。土石流堆積物が帶状に分布しているところもあることから、土石流は複数回発生した、または1回の土石流が枝分かれしたことが考えられる。土石流堆積物どうしの間には砂質シルト層が堆積しており（写真2）、これは土石流堆積物どうしの間にできた凹地を埋積したものと考えられる。

遺跡北端付近では、土石流堆積物が基盤の藤倉層を直接覆っているようすが観察された（写真3、4）。また、遺跡内の土層観察用トレチの断面では、土石流堆積物が2層確認されたものが複数あった。あるトレチにおいては、2層の土石流堆積物の間に淡灰色の砂質シルト層が挟まれているのが確認された（写真5）。別のトレチでは、ラミナが形成された砂層とシルト層の互層が挟まれているのが確認され、水流のある場所での堆積が考えられた。また、黄褐色のシルト質粘土層が挟まれているのが確認されたトレチもあり、これには植物根跡と思われる水酸化鉄のリング（ルートレット）が見られ、湿地での堆積が考えられた。さらに別のトレチでは、2層の土石流堆積物の間に細礫が堆積し、礫間を粗粒砂が充填して崩れやすくなっているようすが観察された（写真6）。

このように、2層の土石流堆積物に挟まれる堆積物が場所によって異なることは、2層の土石流堆積物の層準が同じと考えた場合、場所によって堆積環境が異なったことを意味する。また、2層の土石流堆積物の層準が異なることも考えられ、その場合は土石流が何度も発生して、堆積環境が変化したことを意味する。これらのことについて明らかにするには、各土石流堆積物について詳細な調査を行う必要があるため難しいが、少なくとも土石流堆積物が堆積した頃は湯ノ沢川の谷が現在ほど深くなく、本遺跡の位置する場所は湯ノ沢川の川原だったと考えられる。

小池（1994）は、「河成段丘」の形成に関する解説の中で「氷期の寒冷気候下では、中～高緯度地方を中心に森林限界が低下し、植生を失った山地斜面では凍結融解作用によって岩屑の生産が増加する。一方、凍結や氷河の拡大で山地河川の流量も減少することが多いので、河川は岩屑をすべて運びきることが不可能となる。したがって、山間の河谷は岩屑で埋積され、谷口には扇状地が形成される。気候が温暖化する間氷期や後氷期には、岩屑の生産が減少し、流量も増すことが多いので、下刻が復活し段丘が形成される。」と述べている。このことから本遺跡の立地する場所は、湯ノ沢川が最終氷期に形成した扇状地であり、土石流が発生して堆積したのもその頃と考えられる。土石流堆積物に挟まれる砂質シルトや細礫や粗粒砂などは、扇状地性の堆積物と考えられる。そして、その後の温暖化に伴って湯ノ沢川の流量が増して深い谷が形成され、現在見られるような地形ができた。

引用文献

- 鎌田耕太郎・根本直樹（2003）5万分の1表層地質図「川原平」、土地分類基本調査 川原平、青森県農林水産部農村整備課、p. 17-29.
- 小池一之（1994）河成段丘、地表環境の地学 - 地形と土壤、地学団体研究会編、東海大学出版会、p. 44-46.



写真1 地盤構造の断面

堆積構造の特徴から土石流堆積物と考えられる。



写真2 土石流堆積物の分布状況

複数の土石流堆積物の間に生じた凹地に砂質シルトが堆積している。土石流堆積物は盛り上がり、砂質シルト層は窪んでいる。



写真3 土石流堆積物の端部①

基盤の藤倉川層は、写真奥（北方）へ向かって緩く傾斜し、その途中まで土石流堆積物に覆われている。



写真4 土石流堆積物の端部②

写真1と対照側から撮影。土石流堆積物の層厚は薄いが、基盤層の凹地形にはやや厚く堆積している。



写真5 2層の土石流堆積物①

トレンチの底に下位の土石流堆積物が見え、上位の土石流堆積物との間に淡灰色の砂質シルト層が挟まれる。



写真6 2層の土石流堆積物②

2層の土石流堆積物の間（白い矢印の層準）には、細粒や粗粒砂が堆積して崩れやすい。

第5節 基本層序（図4・5）

調査区の層序については、平成22年度調査の所見を引き継いでいるものの、層番号は平成23年度調査時に新たに付している。調査区内の基本層序については複数箇所で作成した。場所によって土色などは異なるものの、第I～IV層をA区IVP-65グリッドの基本層序②で、第V層以下をA区IVQ-66グリッドの基本層序③でそれぞれ代表させる。

- 第I層 10YR3/4 暗褐色土 旧表土。場所によってこの直上に現代の碎石などが堆積する。
第II層 10YR4/6 褐色土 平成22年度調査の第IIa層に相当する。
第III層 10YR4/4 褐色土 平成22年度調査の第IIb～d層に相当する。平成23・24年度調査では明確に分層することができなかった。縄文時代の遺物包含層である。
第IV層 10YR5/6 黄褐色粘質土 平成22年度調査の第III層に相当する。本層以下は無遺物層である。本層以下の堆積状況については第2章第4節を参照されたい。
第V層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 砂礫層。
第VI層 10YR4/4 褐色土
第VII層 10YR4/4 褐色砂質土
第VIII層 10YR4/6 褐色粘土

A区基本層序①はA区北西端のVR-54グリッドに位置する。第II層は暗褐色土、第III層は黄褐色土である。第V層が褐色の砂礫層である。また、VI-60グリッドを中心に南北方向に約36mにわたって設定した土層観察用ベルトでは、環状に分布する掘立柱建物跡及びその内側における整地の痕跡は確認できなかった。

B区基本層序は斜面部のIIIY-57グリッドに位置する。第III層は暗褐色土、第IV層は褐色土、第V層は黄褐色の礫層である。

C区基本層序はIIU-111グリッドに位置する。第IIb層は部分的な堆積である。

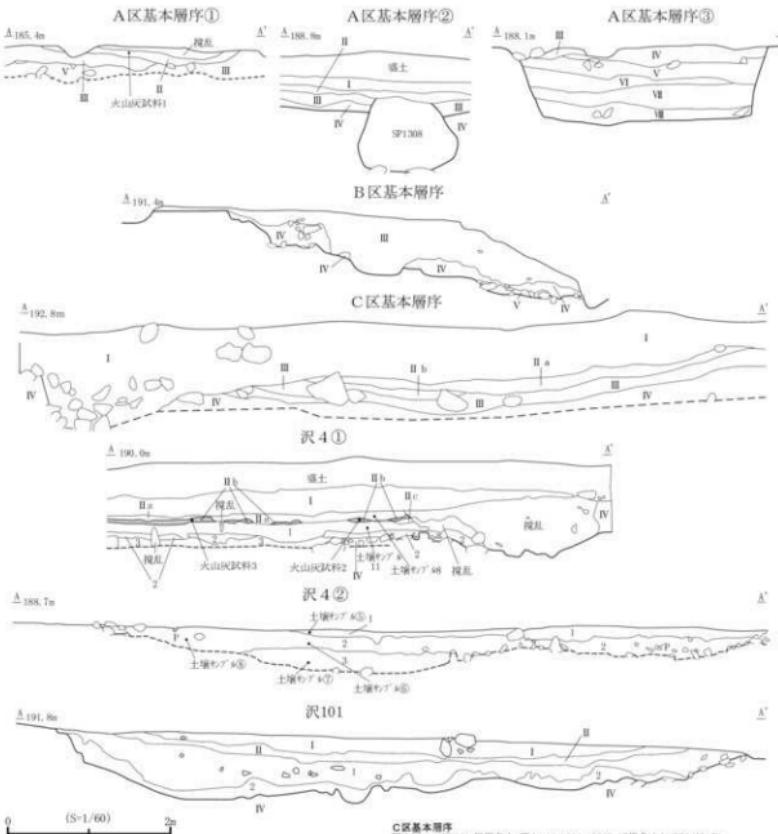
沢3はVA-60付近で確認された。確認長10m、最大幅187cm、最大深39cmで北東方向に傾斜する。出土遺物及び第34号掘立柱建物跡との重複関係から、縄文時代後期後葉以降に埋没したと考えられる。

沢4はA区南側で確認された。確認長89.7m、最大幅21m、最大深49cmで緩やかに北流する。A区南端では南側に延びるものと南東側に延びるものとに分岐する。沢4は堆積土の土壤分析の結果、沼沢湿地のような環境であったと考えられる（第4章第4節参照）。堆積土出土遺物から縄文時代後期後葉以降に埋没したと考えられる。

沢4土層①はA区最南端のIIIU-60グリッドに位置する。第1～3層は粘土質の沢堆積土である。第3層は無遺物層であるが、第1・2層からは縄文時代前期から後期後葉の土器が出土している。その直上に堆積する第II層は火山灰層を含み3層に分層した。火山灰はIIIU-60グリッドを中心に広がっており、分析の結果B-Tmと判明した（第4章第3節参照）。

沢4土層②はA区南側のIVD-59グリッドに位置する。第1層は褐灰色土、第2層は暗オリーブ灰色土、第3層は黄褐色土であり、いずれも粘土質である。第3層は無遺物層である。

沢101はB区のIIIY-54グリッドを中心に位置する。確認長24.9m、最大幅5.03m、最大深82cmである。堆積土中からは縄文時代中期から後期前葉の土器が出土している。この他にB区からは沢102～105が検出された。沢101と同一のものである可能性があるが、詳細は不明である。（葛城）

**A区基本層序①**

第Ⅰ層 10Y3/4 喀斯特土 繊(φ 3~100mm)3%, 黄褐色土(10YR5/8)5%, 繊(φ 2~120mm)1%, 腐化物(φ ~1mm)1%
第Ⅱ層 10Y5/6 黄褐色土 繊(φ 3~100mm)3%, 黄褐色土(10YR5/8)5%, 腐化物(φ ~1mm)1%

第Ⅲ層 10Y4/6 黄褐色土 繊(φ 3~100mm)40%, 腐化物(φ ~1mm)1%

A区基本層序②

第Ⅰ層 10Y3/4 喀斯特土 繊(φ 3~100mm)3%, 腐化物(φ ~13mm)1%

第Ⅱ層 10Y4/4 黄褐色土 繊(φ 3~220mm)3%, 明褐色地帯(7.5YR5/8)2%

第Ⅲ層 10Y4/4 黄褐色土 繊(φ 3~100mm)2%, 黄褐色土(10YR5/8)15%

第Ⅳ層 10Y5/6 黄褐色土 繊(φ 3~100mm)5%, 腐化物(φ 1~3mm)1%

A区基本層序③

第Ⅰ層 10Y3/4 喀斯特土 繊(φ 20~180mm)1%

第Ⅳ層 10Y4/4 黄褐色土 繊(φ 10~90mm)1%, 腐化物(φ ~2mm)1%

第Ⅴ層 10Y4/4 黄褐色土 繊(φ 20~120mm)40%

第Ⅵ層 10Y4/4 黄褐色土 繊(φ 30~50mm)30%

第Ⅶ層 10Y4/6 黄褐色土 繊(φ 80~180mm)25%

沢4②

第Ⅰ層 10Y2/4 喀斯特土 繊(φ 2~7mm)3%, 繊(φ 30~90mm)3%

第Ⅱ層 10Y2/6 黄褐色土 繊(φ 30~250mm)1%, 腐化物(φ 2~3mm)3%

第Ⅲ層 10Y5/6 黄褐色土 繊(φ 30~150mm)1%

C区基本層序

第Ⅰ層 10Y2/2 黒褐色土 繊(φ 10~200mm)30%, 喀斯特土(10YR4/6)30%, 穗石(φ 2~5mm)3%, 廉化物(φ 3~5mm)3%

第Ⅱ層 10Y2/3 黒褐色土 穗石(φ 2~5mm)5%, 廉化物(φ 2~6mm)3%, 穴隙(φ 5~10mm)2%, 穴隙粘土(φ 1~2mm)2%

第Ⅲ層 10Y2/3 黒褐色土 穗石(φ 10~20mm)2%, 廉化物(φ 1~2mm)2%, 黑褐色土(10YR4/6)2%

第Ⅳ層 10Y2/2 黒褐色土 穗石(φ 10~200mm)25%, 廉化物(φ 1~2mm)2%

第Ⅴ層 10Y4/6 黄褐色土 穹(φ 10~200mm)30%

沢4①

第Ⅰ層 10Y2/2 喀斯特土 穹(φ 2~4mm)10%

第Ⅱ層 10Y2/2 黒褐色土+10Y3/3 喀斯特土の混合土 穹化物(φ 2~4mm)10%

第Ⅲ層 10Y2/3 黒褐色土 穹(φ 10~20mm)2%, 黑褐色土(10YR4/6)2%

第Ⅳ層 10Y2/2 黒褐色土 穹(φ 30~130mm)25%

第Ⅴ層 10Y2/2 黄褐色土 穹(φ 40~140mm)15%, 廉化物(φ 2~10mm)1%

第Ⅵ層 10Y2/4 喀斯特土 穹(φ 40~45mm)75%, 黑褐色土

沢101

第Ⅰ層 10Y4/4 黒褐色土 穹(φ 20~230mm)35%, 廉化物(φ 2~3mm)1%

第Ⅱ層 2.5Y5/3 黃褐色土 穹(φ 20~200mm)15%, 廉化物(φ 2~10mm)7%

第Ⅲ層 2.5Y5/3 黃褐色土 穹(φ 30~60mm)1%

沢101

第Ⅰ層 10Y2/3 黑褐色土 穹(φ 2~10mm)7%, 穹(φ 30~170mm)1%

第Ⅱ層 2.5Y5/3 黄褐色土 穹(φ 40~160mm)7%, 廉化物(φ 2~5mm)1%

第Ⅲ層 2.5Y5/3 黑褐色土 穹(φ 50mm)20%, 穹(φ 30~330mm)10%, 廉化物(φ 5~40mm)10%

第Ⅳ層 10Y4/4 喀斯特土 穹(φ 10~80mm)35%, 廉化物(φ 2~3mm)2%

第Ⅴ層 10Y4/6 黄褐色土 穹(φ 30~240mm)25%, 廉化物

図5 基本層序

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 A区

A区は岩木川と湯ノ沢川に挟まれた舌状台地上に位置し、標高は179～189mである。南側から北側に向かって緩やかに傾斜しており、東側と西側は岩木川及び湯ノ沢川に向かって急激に落ち込む急崖となっている。調査区の東西両端で検出された遺構の広がりから、遺跡の所在する舌状台地の平坦面は現在より幅広であったと考えられる。その後、岩木川・湯ノ沢川の河川営力などにより壁面の崩落が起きたと考えられる。

平成23・24年度調査でA区から検出された遺構は、竪穴住居跡18棟、掘立柱建物跡22棟（再報告1棟含む）、土器埋設遺構4基、焼土遺構12基、溝跡3条、配石遺構2基、ピット1101基、捨て場1ヶ所である。

1 竪穴住居跡（図4・6～24）

これまでの砂子瀬遺跡の発掘調査で検出された竪穴住居跡の総数は27棟である。このうちA区から検出されたものは25棟で、今回報告する竪穴住居跡はすでに報告済みの7棟を除く18棟である。第2章で述べているとおり、平成23・24年度調査では円形の落ち込み全てにピット番号を付して調査を行った。このため整理作業時に遺構の再検討を行い、炉や壁周溝の有無、柱穴配置などを考慮して住居跡の認定を行った。またピットをはじめとする住居跡に伴う施設の名称については、名称変更に伴う混乱を避けるために調査時のものをそのまま使用した。

第102号竪穴住居跡（SI102：図6）

【位置・確認】IPV-54・55グリッドに位置する。第IV層上面で壁周溝と考えられる第18号溝跡を確認した。その後、複数のピット及び掘方と考えられる梢円形の落ち込みを確認した。

【重複】壁周溝と考えられる第18号溝跡との重複関係から、第2631・2700号ピットより古く、第2699・2806号ピットより新しい。

【平面形・規模】平面形及び規模は不明であるが、掘方と考えられる落ち込みは梢円形を呈する。規模は長軸3.88m、短軸3.51mであり、検出面からの深さは16cmである。

【堆積土】2層に分層した。1層は黒褐色土を主体とする第18号溝跡堆積土である。2層は掘方堆積土である。褐色土を主体とし、底面は凹凸が著しい。

【壁・床面】壁及び貼床などの明確な床面は確認できなかった。

【柱穴・施設】壁周溝と考えられる溝跡（第18号溝跡）を1条検出した。規模は長さ4.77m、幅52cm、深さ29cmで、本遺構の北側を弧状に巡る。ピットは7基検出した。平面形は円形もしくは梢円形で、規模は長軸24～100cm、短軸21～91cm、深さ17～31cmである。この内、第2594・2800号ピットでは柱痕を確認した。

【炉】炉は検出されなかった。

【出土遺物】土器は柱穴および溝跡の堆積土から第III群B1類・D1類・G類が出土した。図6-1は、第2594号ピットから出土した第III群D1類土器である。筒形の胴部から大きく開く器形で、平行沈線間に弧状区画文が施されている。石器は凹石1点（図6-2）、剥片3点（22.9g）が出土した。

〔小結〕本遺構は、掘り込みが確認できなかったが壁周溝と考えられる溝跡から住居跡と考えられる。また図示した楕円形の落ち込みは、壁周溝の内側で収束していること、底面形状が凹凸をもつことなどから掘方と考えられる。また、本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期中葉のものと考えられる。

第103号竪穴住居跡 (SI103: 図6)

〔位置・確認〕IVN・0-57・58グリッドを中心に位置する。現代の搅乱を除去後に半円形の溝状の落ち込みを確認した。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕壁周溝と考えられる第19号溝跡の形状から円形を呈すると考えられる。推定規模は長軸約6.8m、短軸約5.8mである。

〔堆積土〕上部が搅乱で失われており、堆積土は確認できなかった。

〔壁・床面〕壁周溝と柱穴のみの確認であるため、壁は確認できなかった。また、貼床など明確な床面も確認できなかった。

〔柱穴・施設〕壁周溝と考えられる溝跡（第19号溝跡）を1条検出した。規模は長さ11.34m、幅50cm、深さ43cmで、本遺構の南側及び北東側の一部を弧状に巡る。ピットは4基検出した。平面形は円形で、規模は長軸45～193cm、短軸38～191cm、深さ20～70cmである。これらは第19号溝跡の内側に分布することから本遺構に含めたが、第19号溝跡と重複する第2702号ピットを含め新旧関係は不明である。

〔炉〕炉は検出されなかった。

〔出土遺物〕遺物は図示しなかったが、柱穴および溝跡の堆積土から第III群C類・G類土器の小破片が少量と剥片1点(4.2g)が出土した。

〔小結〕本遺構は、掘り込みが確認できなかったが壁周溝と考えられる溝跡から住居跡と考えられる。また、本遺構の時期は、数点ではあるが第III群G類土器が出土していることから、縄文時代後期中葉から後葉の可能性が考えられる。

第104A・B号竪穴住居跡 (SI104: 図7～11)

〔位置・確認〕IVU・V-64・65グリッドに位置する。第IV・V層上面で焼土及び円形の溝跡を確認した。後述するように複数の溝跡及び土器埋設遺構が検出されたことから、少なくとも2時期の住居跡が存在すると判断し、古段階を第104A、新段階を第104B号竪穴住居跡として報告する。

〔重複〕第2305・2399号ピットが第104A号竪穴住居跡の壁周溝と考えられる第6号溝跡と重複し、前者が古い。また、第2128・2129・2318・2321・2451・2452・2474・2518号ピットが第104B号竪穴住居跡の壁周溝と考えられる第7・8号溝跡と重複し、前者が古い。第2304・2441号ピットが第5・6・8号溝跡とそれぞれ重複し、前者が新しい。第2655号ピットは第104A号竪穴住居跡の土器埋設炉と考えられる第105号土器埋設遺構と重複し、前者が古い。第2673・2704号ピットは第104B号竪穴住居跡の土器埋設炉と考えられる第104号土器埋設遺構と重複し、前者が古い。

〔平面形・規模〕第104A号竪穴住居跡の壁周溝と考えられる第6・7号溝跡及び第104B号竪穴住居跡の壁周溝と考えられる第5・8号溝跡の規模から推定すると、第104A号竪穴住居跡は径約7.5m、第104B号竪穴住居跡は径約8.9mのそれぞれ円形を呈すると考えられる。

〔堆積土〕床面での確認のため、堆積土は確認できなかった。

〔壁・床面〕床面での確認のため、壁は確認できなかった。

〔柱穴・施設〕溝跡を5条検出した。第5～8号溝跡は北側がピットとの重複で、南東側が搅乱によつてそれぞれ失われているが、いずれも円形を呈すると考えられる。規模は第5号溝跡が確認長3.59m、幅55cm、深さ29cm、第6号溝跡が確認長3.00m、幅49cm、深さ19cm、第7号溝跡が確認長12.93m、幅75cm、深さ38cm、第8号溝跡が第7号溝跡との分岐点からの確認長9.04m、幅45cm、深さ34cm、第15号溝跡が確認長3.61m、幅28cm、深さ36cmである。第6・7号溝跡は第104A号竪穴住居跡、第5・7・8号溝跡は104B号竪穴住居跡の壁周溝と考えられる。第15号溝跡はこれらの最外周部に位置していることと、第5号溝跡が分岐して第6号溝跡に合流していることから2回以上の建て替えの可能性もある。また、第7号溝跡の南側は幅が広がっているが、これは第8号溝跡構築時の拡張によるものと考えられる。

ピットは67基確認した。計測値などの詳細は遺構一覧表を参照されたい。これらがすべて本住居跡に伴うかは不明であるが、少なくとも規模、配置、柱痕の有無及び重複関係から、第2393（もしくは2308）・1683・2494・2673（もしくは2704）号ピットは第104A号竪穴住居跡、第2447（もしくは2309）・2419・2284・2335号ピットは第104B号竪穴住居跡の主柱穴である可能性が考えられる。

〔炉〕土器埋設炉を2基検出した。第104・105号土器埋設遺構ともに正立で埋設され、内外からは焼土が検出された。第105号土器埋設遺構検出面及び堆積土中からは直径10cm程度の被燃のみられない自然礫がまとまって出土した。重複は確認できなかつたが、第105号土器埋設遺構から出土した自然礫及び火床面の状況より、第104号土器埋設遺構機能時には第105号土器埋設遺構は閉塞されていた可能性が高いことから、第105号土器埋設遺構は第104号土器埋設遺構より古いと考えられる。このことから第105号土器埋設遺構は第104A号に、第104号土器埋設遺構は第104B号竪穴住居跡にそれぞれ伴うと考えられる。また、第109・110号焼土遺構は第104・105号土器埋設遺構の火床面である。第111号焼土遺構は117×54cmの楕円形を呈し、地床炉の可能性がある。第109・110号焼土遺構の北側に隣接する焼土はいずれかに伴う可能性がある。

〔出土遺物〕土器は埋設炉、柱穴、溝跡から第III群E類・F類・G類などが出土した（図10-1～10）。1は第III群B1類の壺形土器である。2・3は第III群E類で、口縁部に沿つて2条の刻目帯が施されている。6～8は第III群F類である。6は壺形土器で、口縁部に小突起がみられ、横位展開の繩文帯が施される。異種原体による羽状繩文が施文されている。7は微隆起線文が施文されている。8は幅狭の帶繩文に貼瘤がみられる。9は第104号土器埋設遺構、10は第105号土器埋設遺構の炉体土器で、口縁部を欠く粗製の深鉢形土器である。9は斜繩文、10は異種原体による羽状繩文で、いずれも第III群G類に属する。石器は石鏃1点（図10-11）、石匙1点（図10-12）、スクレーパー5点（図10-13・14、非掲載32.4g）、石核2点（図11-1、非掲載258.7g）、U.F.5点（57.8g）、R.F.4点（25.0g）、剥片203点（937.0g）、凹石2点（図11-2・3）が出土した。U.F.1点（5.7g）と剥片3点（2.3g）は黒曜石である。

〔小結〕本遺構は、掘り込みが確認できなかつたが土器埋設炉及び壁周溝と考えられる溝跡が複数検出されたことから、少なくとも2棟の竪穴住居跡の存在が想定される。明確な重複関係は確認できなかつたが、土器埋設炉の位置関係及び検出状況から、第104A号竪穴住居跡から第104B号竪穴住居跡への変遷が考えられる。これらの年代については、土器埋設炉の炉体土器や柱穴・溝の出土遺物から繩文時代後期後葉のものと考えられる。

第105号竪穴住居跡 (SI105: 図12~14)

【位置・確認】 VA・B-63・64グリッドに位置する。第V層上面で焼土と多数のピットを確認した。

【重複】 第1163号ピットが第100号土器埋設遺構と重複し、本遺構が古い。

【平面形・規模】 平面形は不明であるが、ピットの分布範囲から約8.3mの円形を呈すると考えられる。

【堆積土】 床面での確認のため、堆積土は確認できなかった。

【壁・床面】 床面はほぼ平坦であるが、貼床は確認できなかった。

【柱穴・施設】 ピットは64基検出した。平面形は円形もしくは楕円形である。計測値等は遺構一覧表を参照されたい。これらが全て本遺構に伴うかは不明であるが、規模、配置、柱痕の有無及び重複関係から第1162・1657・1658・1659号ピットが主柱穴の可能性がある。

【炉】 本遺構からは第107・108・112・113号焼土遺構が検出された。第107号焼土遺構が本遺構の地床炉と考えられる。規模は90×65cm、厚さは12cmである。

【出土遺物】 土器は柱穴および炉から第III群A類・B1類・C類が出土した(図14-1~10)。1は第III群A類、2~10は第III群B1類である。7は浅鉢形土器で底部が高台状を呈する。8~10は壺形土器で、8の内外面には赤色顔料の塗布痕跡が認められる。石器は石鏃3点(図14-11・12、非掲載1.3g)、石槍1点(図14-13)、スクレーパー7点(図14-14・15、非掲載43.0g)、U.F.4点(38.0g)、R.F.10点(79.6g)、剥片は125点(676.3g)、磨石2点(図14-16、非掲載684.6g)、石錘3点(図14-17~19)が出土した。U.F.1点(1.6g)と剥片3点(2.2g)は黒曜石である。土製品は3点出土した。図14-20は第2268号ピットから出土した土偶の胸部破片である。顔、左腕及び胸部下半を欠損する。両腕には縫合位に貫通孔が施される。無文で、腹部には窪みがみられる。図14-21は第1618号ピットから出土した沈線の施文される円盤状土製品である。図示しなかつたが、この他にミニチュア土器と考えられる小破片が第2415号ピットから出土した。石製品は1点出土した。図14-22は第1164号ピットから出土した凝灰岩製の不明石製品である。表裏及び側面には研磨痕がみられる。

【小結】 本遺構は掘り込み及び壁周溝が検出されなかつたことから掘立柱建物跡の可能性も考えられる。本遺構の年代は、出土土器から縄文時代後期前葉の十腰内I式期と考えられる。

第106号竪穴住居跡 (SI106: 図15)

【位置・確認】 IVY-61・62グリッドに位置する。第IV・V層上面で焼土及び硬化面を確認した。

【重複】 第2059・2379号ピットと重複し、第2059号ピットより古く、第2379号ピットより新しい。また第3号配石遺構とも重複し、検出層位から本遺構が古い。

【平面形・規模】 平面形・規模ともに不明である。

【堆積土】 床面での確認のため、堆積土は確認できなかった。

【壁・床面】 貼床と考えられる硬化面を検出した。壁周溝と考えられる第9号溝跡の内側に3.9×1.9mの範囲で分布する。

【柱穴・施設】 本遺構周辺からピットを20基検出した。大半が第9号溝跡の内側に沿うように分布する。また、貼床の南東側からは溝跡(第9号溝跡)が検出された。確認長2.33m、幅52cm、深さ28cmであり、壁周溝の可能性が考えられる。

【炉】 地床炉を1基検出した。規模は111×45cm、深さは6cmである。堆積土は4層に分層した。1

層は火床面である。火床面の北東側からは自然礫が4層に埋め込まれた状態で出土した。これ以外に礫や明確な抜き取り痕は確認できなかったが、石囲炉の可能性も考えられる。

〔出土遺物〕 土器は柱穴および炉から第III群A類・B1類・C類が出土した(図15-1~3)。1・2は第III群B1類である。1の口唇波頂部には焼成前の穿孔がみられ、釣手状を呈する。3は第III群C類で、網目状燃系文が施されている。石器は、R.F.が1点(39.5g)、剥片15点(93.6g)が出土した。

〔小結〕 本遺構は掘り込みが確認できなかったが、炉、硬化面及び壁周溝と考えられる溝跡から住居跡と判断した。本遺構の年代は、出土土器から縄文時代後期前葉の十腰内I式期と考えられる。(葛城)

第107号堅穴住居跡(SI107: 図15)

〔位置・確認〕 調査区東端のVII-1-68グリッドに位置する。第II層直下で円形の黒褐色土の落ち込みを確認し、第1593号ピットとして調査を行った。

〔平面形・規模〕 本遺構の東側は、急崖地形のため残存していないものと思われ、平面形は不明である。規模は残存部分の長軸が3.42m、確認面からの深さが71cmである。

〔堆積土〕 3層に分層した。1・2層は黒褐色土及び褐色土を主体とし、多量の礫が混入している。

〔壁・床面〕 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はやや凸凹があり、貼床は検出されなかつた。

〔柱穴・施設〕 ピットは4基検出した。平面形は円形及び梢円形である。規模は長軸36~50cm、深さ10~24cmである。

〔炉〕 炉は検出されなかつた。

〔出土遺物〕 遺物は図示しなかつたが、土器は柱穴の堆積土から第III群B1類の小破片が少量出土している。石器は、R.F.1点(10.9g)、剥片6点(41.9g)が出土した。

〔小結〕 堅穴状の掘り込み、柱穴配置等から住居跡と判断した。本遺構の年代は、数点ではあるが第III群B1類土器が出土していることから、縄文時代後期前葉の可能性が考えられる。(最上)

第108号堅穴住居跡(SI108: 図16)

〔位置・確認〕 VR-54グリッドを中心位置する。第II層の直下で壁周溝と考えられる第10号溝跡やピット群を確認し、住居跡として調査を行った。その後住居跡の中央より土器埋設炉(第118号焼土遺構)を検出し、位置的な検討から本遺構に帰属するものと判断した。

〔重複〕 西側に第110号堅穴住居跡が位置するが、直接的な重複関係はない。このほか第109号堅穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。

〔平面形・規模〕 西側は調査区域外に延びているが、壁周溝は直径5.5m程度の円形と思われる。残存部での壁周溝の外周規模は南北方向で5.6m、検出面からの深さは30~50cm程度である。

〔堆積土〕 壁周溝の堆積土は2層に分層した。暗褐色土を主体とし北側では底面付近に褐色土もみられる。

〔壁・床面〕 堅穴状の掘り込みではなく壁は不明である。B-B'セクション3・4層は掘方堆積土と思われるが、その平面的な範囲は明確にできなかつた。

〔柱穴・施設〕 円形の壁周溝となる第10号溝跡の内側にピット5基を確認した。平面的な位置関係より第2504・2407・2462・2461号ピットが主柱穴の可能性がある。第2462号ピットでは柱痕を確認して

おり、柱痕の規模は直径25~30cm程度である。

〔炉〕 第II層直下、住居跡の中央で土器埋設炉を1基検出した。埋設時の掘方は確認できず、床面(第3・4層)敷設とともに土器を埋設したものと思われる。

〔出土遺物〕 土器は炉、柱穴、溝跡から第III群B 1類・C類・D 1類が出土した(図16-1~3)。1は炉体土器で、胴部下半を欠く無文の深鉢形土器であり、二次被熱が著しい。頭部がわずかに「く」の字状に屈曲し、口縁部が長く外傾して立ち上がる器形を呈する。第III群C類に属するものとしたが、器形の特徴は第III群B 2類に類似しており、図16-3とほぼ同時期の可能性も否定できない。2は第III群B 1類である。3は第2462号ピットの底面出土の第III群D 1類で、沈線に沿って円形刺突文がみられる。石器は第2407号ピット堆積土からR.F. 1点(30.2g)、剥片1点(19.4g)が出土した。

〔小結〕 第110号竪穴住居跡と直接的な重複関係はないが、出土遺物の新旧関係より本遺構が古いと思われる。土器埋設炉と円形の壁周溝との位置関係から両者を同一遺構のものと判断したが、両者が別時期のもので、同一の建物を構成しない可能性もある。本遺構の年代は、出土土器から縄文時代後期中葉頃と考えられる。

第109号竪穴住居跡(SI109: 図16)

〔位置・確認〕 IVR-54グリッドを中心に位置する。第108号竪穴住居跡を精査中に楕円形のにぶい黄褐色土の落ち込み(第2404号ピット)を確認したほか、同住居跡に伴う第118号焼土遺構の下面から第120号焼土遺構を検出した。第2404号ピットはA-A'セクションの3層(第12号溝跡)と堆積土が類似することから、両者を同一の住居を構成する施設と判断した。第12号溝跡は壁周溝の一部、また楕円形で底面が一定しない浅いすり鉢状となる第2404号は住居掘方とみられる。

〔重複〕 第108号竪穴住居跡および第110号竪穴住居跡と重複し、いずれの遺構よりも古い。

〔平面形・規模〕 平面形が楕円形である第2404号ピットは掘方で、住居の平面形としては不明である。掘方の規模は長軸3.6m、短軸2.8mであり、検出面からの深さは最深部で35cmである。

〔堆積土〕 掘方で2層、壁周溝部で1層を確認した。前述のように、掘方にあたる第2層と壁周溝にあたる堆積土第3層は類似している。

〔壁・床面〕 壁および床面は確認できなかった。

〔柱穴・施設〕 柱穴4基と壁周溝を検出した。壁周溝内には小規模なピットを2基検出している。

〔炉〕 住居跡西寄りで地床炉を1基検出した。地床炉は長軸35cm×短軸32cmの円形範囲で被熱している。B-B'セクションでの第1層は被熱部で、厚さは16cmである。

〔出土遺物〕 土器は図示しなかったが、柱穴の堆積土から第III群G類の小破片が少量出土している。石器は第2388号ピットから圓石1点(763.6g)、第2404号ピットからU.F. 2点(34.5g)、剥片20点(76.8g)、石錐1点(図16-4)、第2466号ピットからR.F. 1点(5.4g)、剥片6点(118.1g)、第2468号ピットから剥片1点(6.4g)が出土した。

〔小結〕 第120号焼土遺構は第108号竪穴住居跡に伴う第118号焼土遺構の直下で検出した。西側に偏在する位置関係から、本住居に伴わない可能性もある。本遺構の年代は、出土遺物および重複遺構の新旧関係から、縄文時代後期中葉頃と考えられる。

第110号竪穴住居跡 (SI110 : 図17)

【位置・確認】 IVR-53グリッドに位置する。第III層を精査中に調査区域外に延びる褐色土の弧状範囲を検出した。調査区域内では炉などの住居跡と認定する施設の検出は見られないが、壁が急角度で立ち上がり、掘り込みが明確な竪穴状となることから竪穴住居跡と判断した。

【重複】 第108号竪穴住居跡、第109号竪穴住居跡と重複する。第109号竪穴住居跡とは直接重複関係があり本遺構が新しい。第108号竪穴住居跡とは直接的な重複関係はないが、出土遺物の新旧関係より本遺構の方が新しいものと思われる。

【平面形・規模】 西側は急崖地形のため平面形は不明であるが、円形を基調とするものと思われる。規模は長軸2.95m、検出面からの深さは35cmである。

【堆積土】 2層に分層した。第1層は竪穴堆積土で、第2層は第2436号ピットの堆積土である。

【壁・床面】 壁は比較的急角度で立ち上がる。基本層第IV層を直接床面としており、貼床等は見られない。床面はおおむね平坦である。

【柱穴・施設】 竪穴南側の壁寄りでピットを2基検出した。ともに長軸35cm、深さ20cm程度の小規模なものである。ピット堆積土はともに単層である。

【炉】 検出していない。

【出土遺物】 堆積土から第III群G類土器が出土した。図17-1は壺形ないしは注口土器で、底部が上げ底状を呈する。石器は図示しなかったが、黒曜石の石核が1点(55.6g)出土した(第4章第2節SKS 2-21)。原礫面が残存せず、大まかに90度または180度の打面転移を繰り返し剥片剥離を行っている。3~4cm程度の矩形剥片を剥離した痕跡が観察される。

【小結】 本遺構の年代は出土土器および重複遺構の新旧関係から縄文時代後期中葉から後葉と考えられる。

第111号竪穴住居跡 (SI111 : 図17)

【位置・確認】 VP-55グリッドに位置する。第III層を精査中に第2390号ピットを検出した。第2390号ピットはしまりのある暗褐色粘質土が弧状に広がった浅い土坑で、小規模なピットと溝が隣接した遺構である。東側は平成22年度調査区域側に延びていたと見られ、このときは明確に確認できなかったが、柱痕を伴う柱穴が複数みられることから、これらを竪穴住居跡の貼床、壁周溝および柱穴とみなし報告する。

【重複】 南側で第38号掘立柱建物跡を構成する柱1(第2439号ピット)と重複し本遺構が古い。また、東側で第15号掘立柱建物跡を構成する柱4(第217号土坑)と隣接しているが、新旧関係は不明である。

【平面形・規模】 平面形および規模は不明である。

【堆積土】 確認できなかった。

【壁・床面】 壁は確認できなかった。貼床は西側の一部のみを確認した。B-B'セクションでは貼床は3層に分層した。いずれも粘性が高く良く締まっている。色調は基本層第IV層に似ており、掘り返した同層を埋め戻したものと思われる。

【柱穴・施設】 貼床の範囲に接するように壁周溝の一部を検出した。壁周溝内には小規模なピットを1基確認した。主柱穴は平面的な位置関係から第134・136・218号土坑の既報告3基と第217号ピットと思われる。柱穴4基のいずれでも柱痕を確認した。柱痕の規模は直径35~60cmである。主柱穴以外のピットは9基検出し、第132・462号土坑、第2386・2521号ピットの4基で柱痕を検出した。第

2390号ピットの西側に位置する第2484・2485・2385・2386号ピットの4基については、本竪穴住居跡との帰属関係は不明である。

〔炉〕検出していない。

〔出土遺物〕土器は柱穴の堆積土から第III群B類・F類・G類（青森県埋文報第513集の図41-10・27・28を含む）が出土した。図17-2は第2390号ピット堆積土出土の第III群G類の壺形土器で、無節Lの斜縄文がみられる。図17-3は第III群F2類の注口土器である。石器は第2178号ピット柱痕から石皿1点（図17-4）と、第2390号周溝堆積土からR.F.1点（9.5g）、剥片5点（15.9g）、第2178号・2485号ピットから剥片3点（13.5g）が出土した。

〔小結〕本遺構の年代は、出土土器から縄文時代後期後葉と考えられる。

第112号竪穴住居跡（SI112：図18）

〔位置・確認〕VM-54グリッドに位置する。第II層直下で半円状の暗褐色土の落ち込みとして確認した。炉やその他の住居を構成する施設は未検出であるが、壁が急角度で立ち上がること、底面が平坦となる状況から竪穴住居跡と判断した。

〔重複〕南東で第37号掘立柱建物跡を構成する柱4（第1974号ピット）と重複するほか、第2163・1947・2440号ピットと重複する。新旧関係は第2163号ピットよりも古く、第1947・2440号ピットよりも新しい。また第37号掘立柱建物跡との新旧関係は明らかにできなかった。

〔平面形・規模〕西側は急崖地形のため平面形は不明であるが、おおむね円形と思われる。規模は長軸2.7mで、検出面からの深さは39cmである。

〔堆積土〕4層に分層した。第1～4層は自然堆積土とみられ、竪穴が埋まりきらずに第II層が竪穴内に落ち込んでいる。

〔壁・床面〕壁は全体的に緩やかに外傾しながら立ち上がる。床面はおおむね平坦で、第IV層を直接床面としており、貼床はみられない。

〔柱穴・施設〕検出していない。

〔炉〕検出していない。

〔出土遺物〕土器は堆積土から第III群E類・F類・G類が出土した（図18-1～5）。1は第III群E類である。2・3は第III群F類の壺形土器である。4・5は第III群G類である。石器は、堆積土からスクレーパー1点（10.1g）、剥片20点（182.3g）が出土した。

〔小結〕本遺構の年代は、出土土器から縄文時代後期後葉と考えられる。

第113号竪穴住居跡（SI113：図18）

〔位置・確認〕VJ・K-54グリッドに位置する。第V層上面で壁周溝とみられる第4号溝跡を確認した。その後ピット群を確認し、住居跡として調査を行った。

〔重複〕西側は急崖地形であり、東側は平成22年度調査区に及んでいる。このほか南側は風倒木に壊されている。第36号掘立柱建物跡を構成する柱5（第2382号ピット）と重複し、本遺構が新しい。

〔平面形・規模〕全容は不明だが、平面形は直径6.8m程度の円形とみられる。第4号溝跡は、幅25～70cmで、検出面からの深さは20～30cm程度と一定しない。

〔堆積土〕 第4号溝跡の堆積土は褐色土ないしは暗褐色土である。

〔壁・床面〕 壁および貼床は確認されていない。

〔柱穴・施設〕 円形の壁周溝となる第4号溝跡の内側からピット14基を検出した。このうち8基で柱痕を確認したが柱穴配置は不明である。このうち第1757号ピットおよび第1829号ピットは掘方規模が比較的しっかりとしており、本堅穴住居跡の柱穴の可能性も考えられる。そのほか第1743・1755・1758・2183・2185・2193号ピットの6基で柱痕を確認した。

〔炉〕 検出していない。

〔出土遺物〕 土器は柱穴および溝跡の堆積土から第III群B類・F類・G類が出土した。図18-6は第III群F類で、口唇部は内傾し、口縁部には縄文帯がみられる。石器は、石礫1点（図18-7）、剥片16点（83.8g）が出土した。土製品は1点出土した。図18-8は第2183号ピットから出土した不明土製品である。上部には貫通孔が施される。下部は二叉になっており、端部はソケット状を呈する。両面には沈線が施され、赤彩が施される。

〔小結〕 本遺構の年代は、出土土器および重複遺構の新旧関係から縄文時代後期後葉と考えられる。

第114号堅穴住居跡（SI114：図19）

〔位置・確認〕 IVY-70グリッドに位置する。第II層直下で円形の黒褐色土の落ち込みとして確認し、第1224号ピットとして調査を行った。

〔重複〕 重複する遺構はないが、東側は調査区域外に延びている。

〔平面形・規模〕 東側は急崖地形のため全容は不明だが、おおむね直径3.5m程度の円形プランと思われる。規模は残存長軸3.6mで、検出面からの深さは45cmである。

〔堆積土〕 黒色の強いシルト土で4層に分層した。全体的に礫を多く含んでおり、堆積土上位を第II層が覆っている。

〔壁・床面〕 壁は全体的に緩やかに外傾しながら立ち上がる。床面は若干の凹凸があり平坦ではない。基本層第IV層を直接床面としており、貼床は検出されなかった。

〔柱穴・施設〕 ピットを3基検出した。柱痕は確認されず、小規模のため柱穴となるかは不明である。Pit 1は炉2と重複する。堆積土上部が炉2の燃焼面となっており、新旧関係は炉2の方が新しい。

〔炉〕 堅穴中央で2基検出した。炉1は西側に位置し、東側に炉2が隣接する。前述のとおり炉2はPit 1と直接重複しており、新旧関係は本遺構の方が新しい。炉1はPit 1とは直接重複せず新旧関係は不明である。炉1は直径30cm程度の円形範囲に被熱し、炉2は南北にやや長い50cm×30cmの楕円形範囲に被熱している。厚さはともに5cm未満である。

〔出土遺物〕 土器は堆積土から第III群B類・E類・F類・G類が出土した（図19-1～9）。特に第III群F2類の出土量が多い。1は第III群E類で口唇部が肥厚し、2条の刻目帯がみられる。2～8は第III群F類である。2・3は胴部に撚掛状文が施されている。4は鉢形土器の復元個体である。口縁部には小突起がみられ、縄文帯と一段低い無文帯とが交互に横位展開している。7は櫛齒状条線による充填文様が施され、貼瘤がみられる。9は第III群G類の鉢形土器で4の器形に類似し、異種原体による羽状縄文が施されている。石器は石匙2点（図19-10・11）、石核1点（図19-12）、剥片5点（39.9g）が出土した。このうち剥片1点（5.2g）は黒曜石である。

〔小結〕本遺構の年代は、出土土器から縄文時代後期後葉と考えられる。

第115号堅穴住居跡 (SI115: 図20・21)

〔位置・確認〕 IVV・W-70グリッドに位置する。第IV層上面で第II層の円形の落ち込みを確認し、第1232号ピットとして調査を行った。

〔重複〕 重複する遺構はないが、東半は急崖地形である。

〔平面形・規模〕 東半が調査区域外に及んでいるため全容は不明だが、おおむね4.5~5 m程度の円形プランになるものと思われる。規模は残存長軸5 mで、検出面からの深さは約50cmである。

〔堆積土〕 3層に分層した。第2・3層は壁際堆積土、第4層は床面堆積土で、暗褐色土の第1層が堅穴全体を覆っている。第5~8層はピット堆積土である。

〔壁・床面〕 壁は北側では緩やかに外傾し、南側では比較的急角度で立ち上がる。床面はおおむね平坦で、基本層第IV層を直接床面としており、貼床はみられない。

〔柱穴・施設〕 堅穴内で大小のピットを10基検出した。Pit 9では小規模な柱痕を検出した。ほかのピットでは柱痕はみられずいずれも単層である。規模は長軸30~80cm程度、深さは36cmであるピット6を除き20cm未満の浅いものである。主柱穴は判然とせず、柱穴配置も不明である。

〔炉〕 検出していない。

〔出土遺物〕 土器は堆積土中から多量に出土した。第III群B類・D1類・E類・F類・G類土器が出土している(図20-1~20)。特に第III群F2類の出土量が多い。1・2は第III群D1類の浅鉢形土器である。1の胴部には平行沈線間に弧状区画文、2の胴部には平行沈線間に斜行沈線が施文されている。3~5は第III群E類で、口唇部が肥厚し、口縁部に沿って1~2条の刻目帯がみられる。6~14は第III群F類である。6は口縁部に繩文帯を有し、突起がみられる深鉢形土器である。7は口縁突起部が欠損している。8・9は胴部に櫛掛状の文様が施される壺形土器である。13は口縁部に大小の突起がみられる深鉢形土器である。14は櫛齒状条線による充填文様が施され、貼脂がみられる。15~20は第III群G類で、地文に斜繩文(19・20)、縱走繩文(18)、異種原体による羽状繩文(15・16)がみられる深鉢形土器や、底部上げ底状の壺形ないしは注口土器(17)などが認められる。石器は、石鐵5点(図20-21~24、非掲載1.2g)、スクレーパー13点(図20-25、図21-1・2、非掲載155.1g)、U.F.6点(図21-3、非掲載79.6g)、R.F.12点(107.4g)、剥片350点(2384.0g)、敲石1点(図21-4)、石皿2点(図21-5・6)が出土した。図20-24の石鏃と図示していないスクレーパー1点は、住居跡壁際から出土した。石皿はいずれも縁が平坦なもので、図21-6の石皿は床面からやや浮いた位置で出土している。土製品は3点出土した。図21-7はミニチュア土器である。胴部及び台部に横位の沈線が施文される。また、胴部には異種原体による羽状繩文が施文される。頭部上面には沈線が施文され、中心には縦位に盲孔が施される。底面は摩減している。図示しなかったが、この他に台付鉢を模したミニチュア土器の小破片が出土した。

〔小結〕 本遺構の年代は、出土土器から縄文時代後期後葉と考えられる。

第116号竪穴住居跡 (SI116 : 図22・23)

【位置・確認】 IVx-68グリッドを中心に位置する。第IV・V層上面で壁周溝とみられる第1号溝跡と同溝跡の内側より複数の焼土遺構およびピット群を確認し、住居跡として調査を行った。竪穴状の掘り込みは見られない。ピット群は弧状に巡る第1号溝跡の内側では稠密に分布し、この外側では疎らとなる。また内側のピット群は外側に分布するものより掘り込み自体が深く、柱痕を伴うものが多い。複数の焼土遺構の存在、柱痕を伴う柱穴群の切り合い、壁周溝と柱穴群の切り合い等の状況、また壁周溝の巡る範囲より北側にも柱穴群が分布する状況等から、壁周溝を伴う住居跡や伴わない段階の住居跡が多少の地点移動をしながら数回の建て替えがあったものと思われる。なお図22に示した4基の柱穴（第1496・1244・1377・1274号ピット）は壁周溝に伴う段階の主柱穴と判断したものである。以下では、確実に捉えられた壁周溝を伴う段階の住居跡を中心に記述する。

【重複】 壁周溝と焼土遺構、ピットがそれぞれ著しい重複を見せてている。

【平面形・規模】 竪穴状の掘り込みではなく平面形および規模は不明であるが、壁周溝からは長軸8m前後の円形であったものとみられる。

【堆積土】 壁周溝に伴う堆積土は5層確認した。東側のA-A'セクションでは暗褐色土や黒褐色土の比較的黒みの強い土、南側B-B'セクションでは褐色土やにぶい黄褐色土など比較的明るみのある土を確認した。

【壁・床面】 壁や床面は検出していない。

【柱穴・施設】 壁周溝は幅30~70cm、深さ12~28cmで東側の溝内にピットがみられる。壁周溝の巡る内側からはピット46基を検出した。これらはa. 柱痕を伴う規模の大きいピット、b. 柱痕を伴わない規模の大きいピット、c. 柱痕を伴わない小規模なピット、の3つに整理される。前二者は柱痕の有無の違いはあるものの、堆積土の状況に相違はなく、ともに柱穴と判断される。一方後者は深さが20cmにも満たない小規模なもので柱穴とは捉えられない。住居跡に伴う柱穴はaおよびbのピットで構成されていたものと判断される。

壁周溝段階に伴う柱穴は規模や位置関係などから第1496・1244・1377・1274号ピットの4基とみられる。このうち第1244号ピットで柱痕を確認した。それぞれ規模は第1496号ピットが104cm×86cm、深さ63cm、第1244号ピットが106cm×96cm、深さ77cm、第1377号ピットが86cm×55cm、深さ58cm、第1274号ピットが124cm×118cm、深さ65cmである。

このほか、規模や柱痕、堆積土の状況から柱穴と判断されるものは、以下のとおりである。a. 柱痕を伴う規模の大きいピットとして第1430・1456・1495・1503・1493・1207・1511・1273・1380号ピット、b. 柱痕を伴わない規模の大きいピットとして第1549・1514・1204・1243・1546号ピットがある。

【炉】 壁周溝の巡る範囲の内側から焼土遺構を4基検出した。いずれも小規模な範囲で焼けている。第103号焼土遺構は第1496号ピットよりも新しく、第105号焼土遺構は第1655号ピット及び第1697号ピット等よりも古い。

第103・106号の2基の焼土遺構では、断面観察で火床面の中央部に別の土が入り込んでいる状況を確認した(C-C'およびE-E'セクション)。それぞれ規模は第103号焼土遺構が73×53cm、厚さ16cm、第104号焼土遺構が33×31cm、第105焼土遺構が35×32cm、厚さ12cm、第106号焼土遺構が51×48cm、厚さ19cmである。

【出土遺物】 土器は炉、柱穴、溝跡から第III群B類・E類・F類・G類が出土した(図23-1~6)。

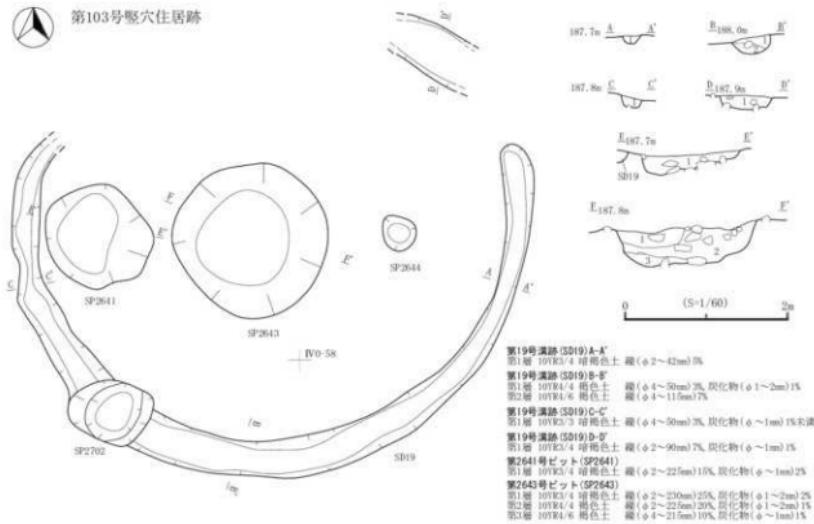
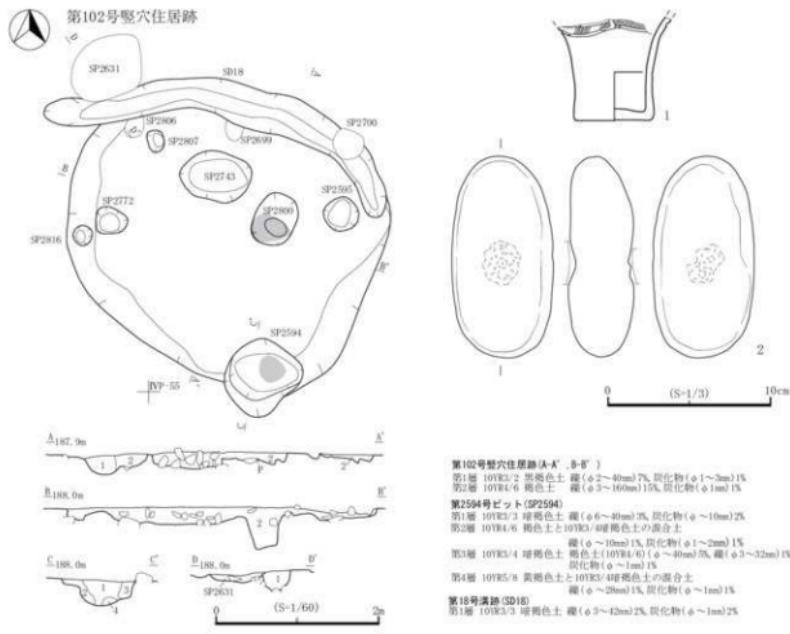


図6 A区第102・103号縫穴住居跡・出土遺物

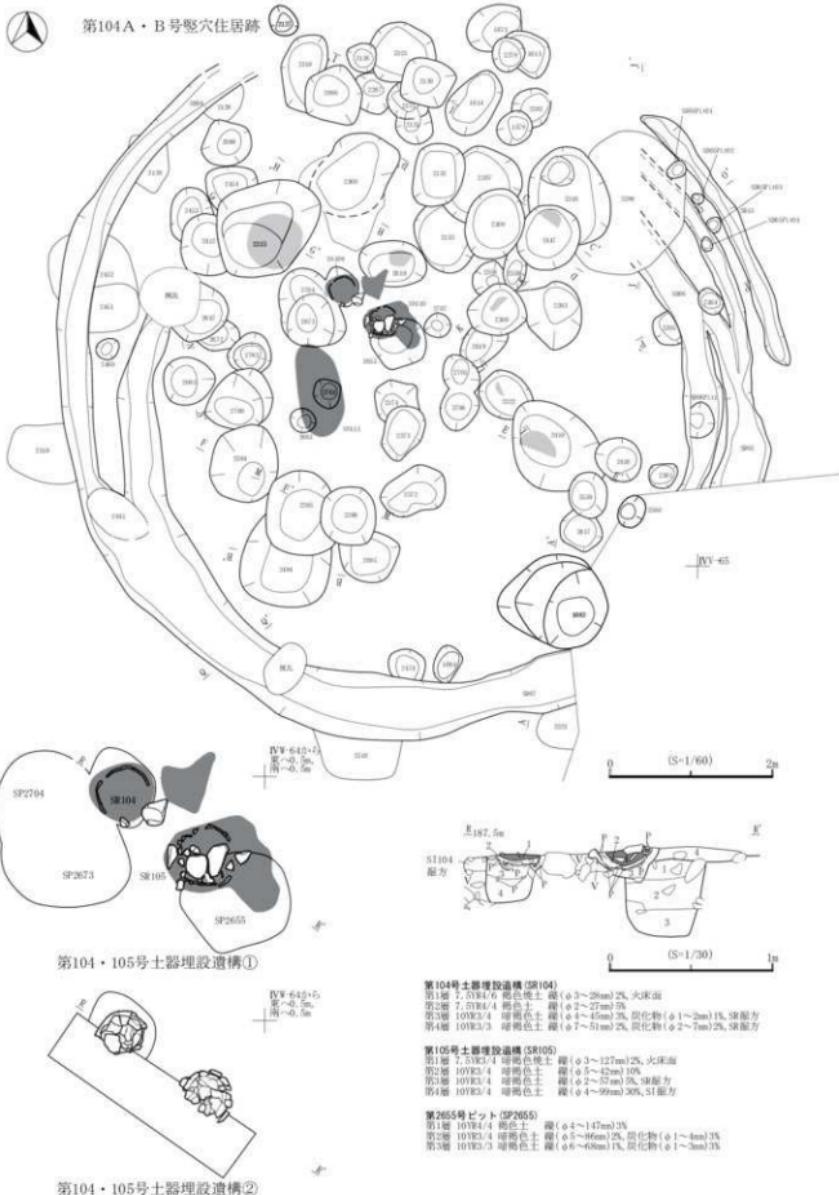
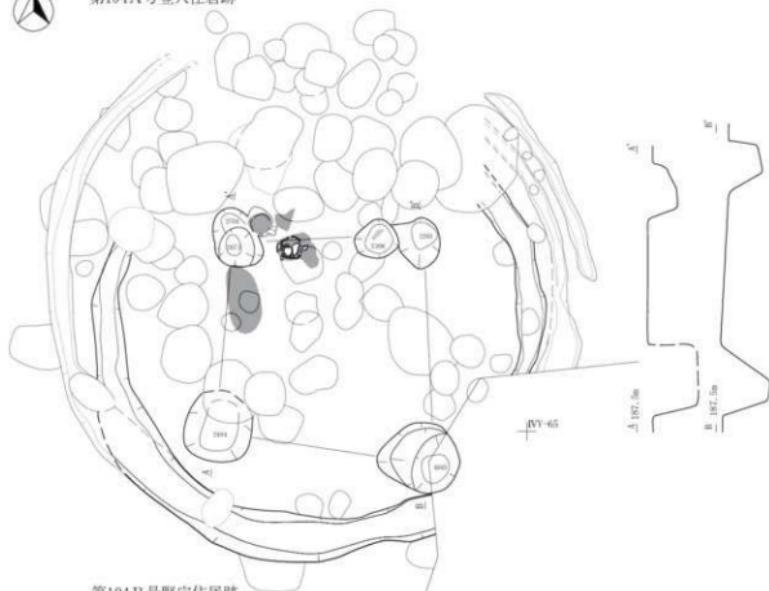


図7 A区第104A・B号竪穴住居跡 (1)



第104A号竪穴住居跡



第104B号竪穴住居跡

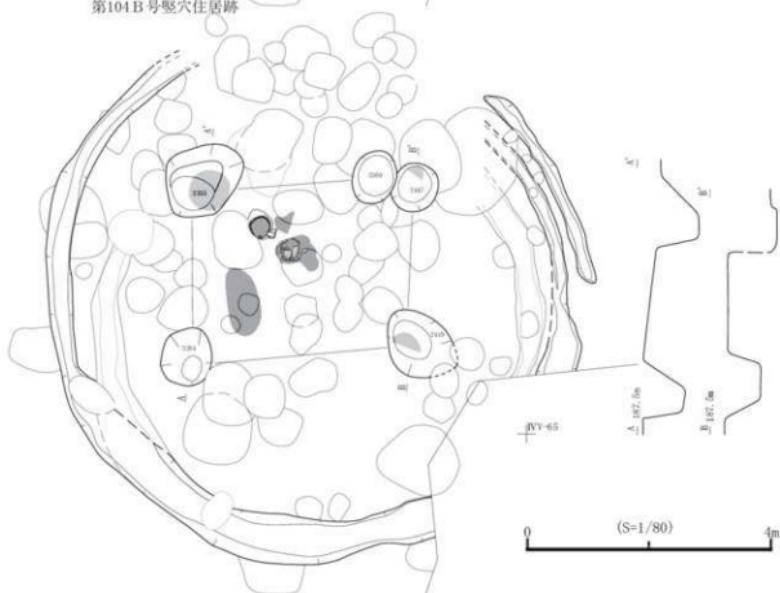
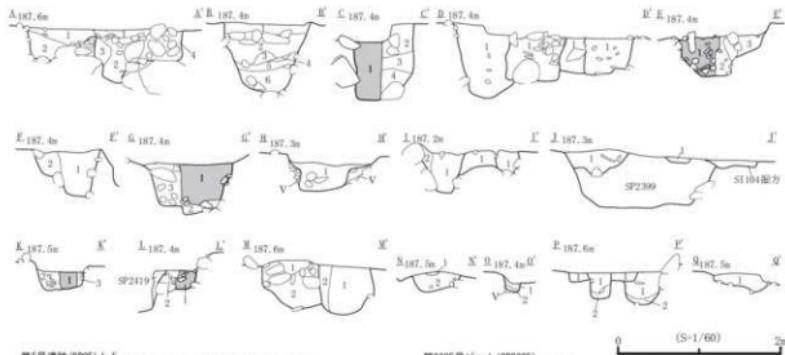


図8 A区第104A・B号竪穴住居跡（2）



- 第5号溝跡(3005)トJ
第108E/3 に亘る黄褐色土と107B/6 明黄色土の混合土
混化物(△1~2mm)2%, 硬(△2~14mm)1%
- 第5号溝跡(3005)P-P'
第108E/4 黄褐色土
混化物(△1~3mm)3%
- 第5号溝跡(3005)J
第108E/2 黄褐色土 硬(△2~4mm)1%、混化物(△1~5mm)1%
- 第5号溝跡(3005)P-P'
第108E/4 黄褐色土 硬(△4~20mm)1%、混化物(△1~2mm)1%
- 第5号溝跡(3007)
第108E/4 黄褐色土 硬(△20~70mm)5%、混化物(△2~5mm)3%
第108E/6 黄褐色土 混化物(△2~7mm)3%、硬(△15~50mm)3%
- 第10号溝跡(3015)
第108E/3 黄褐色土
明黄色土17.7Kg(△1.5mm)2%, 硬(△2~5mm)1%
混化物(△20~150mm)1%, 硬石(△1~2mm)1%
第10号 108E/4 に亘る黄褐色土と107A/6 黄褐色土の混合土
明黄色土(△1.5mm)1%、混化物(△1~10mm)1%
- 第1683号ビット(3P1983)
第108E/3 黄褐色土 混化物(△1~5mm)3%, 硬(△2~110mm)2%
- 第10号ビット(3P1984)
第108E/4 黄褐色土 硬(△20~150mm)1%, 混化物(△1~10mm)2%
- 第10号ビット(3P1985)
第108E/4 黄褐色土 硬(△2~15mm)7%, 混化物(△2~15mm)7%
- 第10号ビット(3P1986)
第108E/4 黄褐色土 硬(△30~300mm)5%, 混化物(△5~8mm)3%
- 第200号ビット(3P2093)
第108E/3 黄褐色土
明黄色土10.7Kg(△2~5mm)1%未満、地土無量
7.7Kg(△1~2mm)1%、混化物(△1~10mm)1%
- 第12号ビット(3P2126)
第108E/3 黄褐色土 混化物(△1~15mm)3%, 硬(△3~110mm)2%
- 第21号ビット(3P2130)
第108E/3 黄褐色土 硬(△1~2mm)3%, 混化物(△4~90mm)2%
第108E/4 黄褐色土 硬(△3~30mm)3%, 混化物(△1~10mm)1%
- 第12号ビット(3P2132)
第108E/2 黄褐色土 硬(△5~120mm)7%, 混化物(△2~9mm)3%
- 第224号ビット(3P2284)
第108E/3 黄褐色土 硬(△5~120mm)7%, 混化物(△1~13mm)2%
第108E/4 黄褐色土 硬(△5~80mm)3%, 混化物(△1~10mm)1%
- 第225号ビット(3P2285)
第108E/3 黄褐色土 明黄色土 硬(△2~25mm)5%, 混化物(△1~10mm)1%
地土無量(△1~31mm)2%, 混化物(△1~10mm)1%未満
- 第226号ビット(3P2286)
第108E/4 黄褐色土 硬(△5~75mm)7%, 混化物(△1~10mm)1%
第108E/4 黄褐色土 硬(△5~80mm)3%, 混化物(△1~10mm)1%
- 第224号ビット(3P2284)
第108E/4 黄褐色土 硬(△2~40mm)2%, 混化物(△1~10mm)2%
第108E/6 黄褐色土 硬(△2~70mm)1%, 混化物(△1~1mm)1%未満

第225号ビット(3P2205)
第108E/4 黄褐色土 混化物(△1~3mm)3%, 硬(△3~120mm)1%, 混化物(△1~8mm)1%
第108E/6 黄褐色土 硬(△2~130mm)1%, 混化物(△1~1mm)1%

第220号ビット(3P2207)
第108E/4 明黄色土 硬(△2~195mm)30%, 混化物(△1~3mm)5%

第220号ビット(3P2208)
第108E/3 明黄色土 硬(△5~8mm)2%, 混化物(△1~8mm)2%
第108E/3 明黄色土 硬(△9~60mm)1%, 混化物(△1~3mm)1%未満
第108E/3 に亘る明黄色土 硬(△9~60mm)30%, 混化物(△1~3mm)1%未満

第220号ビット(3P2209)
第108E/4 明黄色土 硬(△3~300mm)40%, 混化物(△3~12mm)7%

第222号ビット(3P2221)
第108E/4 明黄色土 硬(△3~10mm)7%, 混化物(△1mm)1%, 砂質
第108E/6 黄褐色土 硬(△2~242mm)15%

第2225号ビット(3P2235)
第108E/4 黄褐色土 硬(△2~90mm)3%, 明黄色土(△1mm)1%未満

第233号ビット(3P2235)
第108E/3 明黄色土 硬(△5~7mm)7%, 混化物(△1~10mm)7%
明黄色土(△1~10mm)1%, 明黄色土(△1~10mm)1%, 明黄色土(△1~10mm)1%未満

第233号ビット(3P2235)
第108E/3 に亘る黄褐色土 硬(△1~10mm)1%, Kオーリー色粘土(△1/2~1mm)1%, 明黄色土(△1~10mm)1%, 明黄色土(△1~34mm)1%, 明黄色土(△1~34mm)1%, Kオーリー色粘土(△1~3mm)1%, 明黄色土(△1~10mm)1%, 明黄色土(△1~10mm)1%

第239号ビット(3P2260)
第108E/3 明黄色土 硬(△3~80mm)5%, 混化物(△1~2mm)3%

第2410号ビット(3P2410)
第108E/4 明黄色土 硬(△2~7mm)20%, 混化物(△2~7mm)7%
第108E/4 黄褐色土 硬(△2~32mm)1%, 混化物(△1~1mm)1%
第108E/4 明黄色土 硬(△2~12mm)5%, 混化物(△2~9mm)3%

第2441号ビット(3P2447)C-C'
第108E/4 明黄色土 硬(△1~5mm)7%, 硬(△2~50mm)5%
第108E/4 黄褐色土 硬(△2~2mm)20%, 混化物(△1~1mm)1%未満
第108E/2 明黄色土 硬(△2~6mm)10%, 混化物(△1~3mm)1%
第108E/2 明黄色土 硬(△2~16mm)7%, 混化物(△1~7mm)1%
第108E/6 黄褐色土 硬(△2~160mm)1%, 混化物(△1~7mm)1%

第2441号ビット(3P2447)D-D'
第108E/6 明黄色土 硬(△2~80mm)10%, 混化物(△32~80mm)3%

第249号ビット(3P2494)
第108E/3 明黄色土 混化物(△3~30mm)10%, 混化物(△1~3mm)2%

第108E/3 明黄色土 混化物(△3~55mm)20%, 混化物(△1~3mm)2%

第108E/3 明黄色土 混化物(△3~50mm)10%, 混化物(△1~3mm)1%

第108E/3 明黄色土 混化物(△3~50mm)10%, 混化物(△1~3mm)1%

第108E/3 明黄色土 混化物(△3~90mm)30%, 混化物(△1~1mm)1%

第108E/3 明黄色土 混化物(△2~160mm)1%, 混化物(△1~4mm)2%

図9 A区第104A・B号竪穴住居跡(3)

1は第III群B1類、2~6は第III群F類である。石器は、石鎌4点(図23-7~9、非掲載0.7g)、石錐1点(図23-10)、スクレーパー6点(図23-11・12、非掲載82.0g)、U.F.12点(80.2g)、R.F.12点(図23-13、非掲載117.0g)、剥片149点(1354.5g)が出土した。第1号溝跡のPit 1からは、珪質頁岩製のスクレーパー(図23-12)、R.F.(図23-13)とともにこれらと同一母岩の縦長剥片1点(非掲載)が1箇所にまとまって出土した。図23-12と13は直接接合するが、縦長剥片とは接合しない。製品、未製品、素材剥片が一括出土しており、石器の管理・保有を考える上で貴重な事例である。

〔小結〕本遺構の年代は、出土土器から繩文時代後期後葉と考えられる。

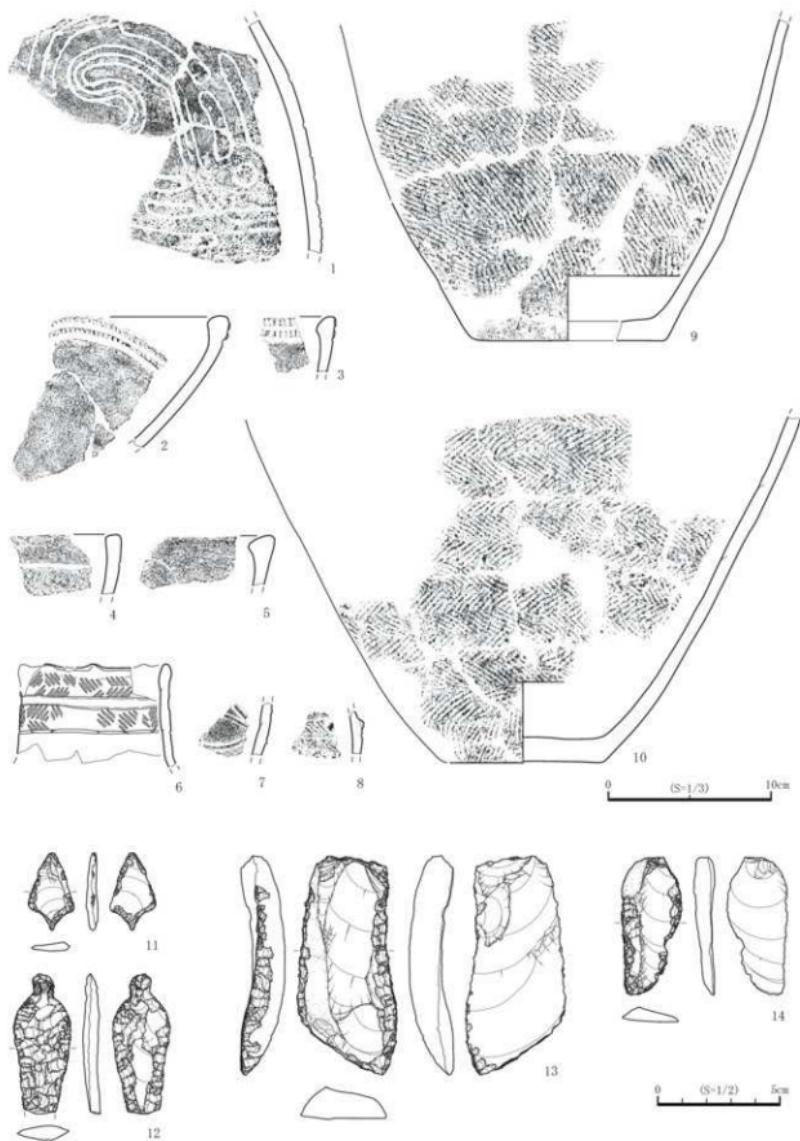


図10 A区第104A・B号竪穴住居跡出土遺物（1）

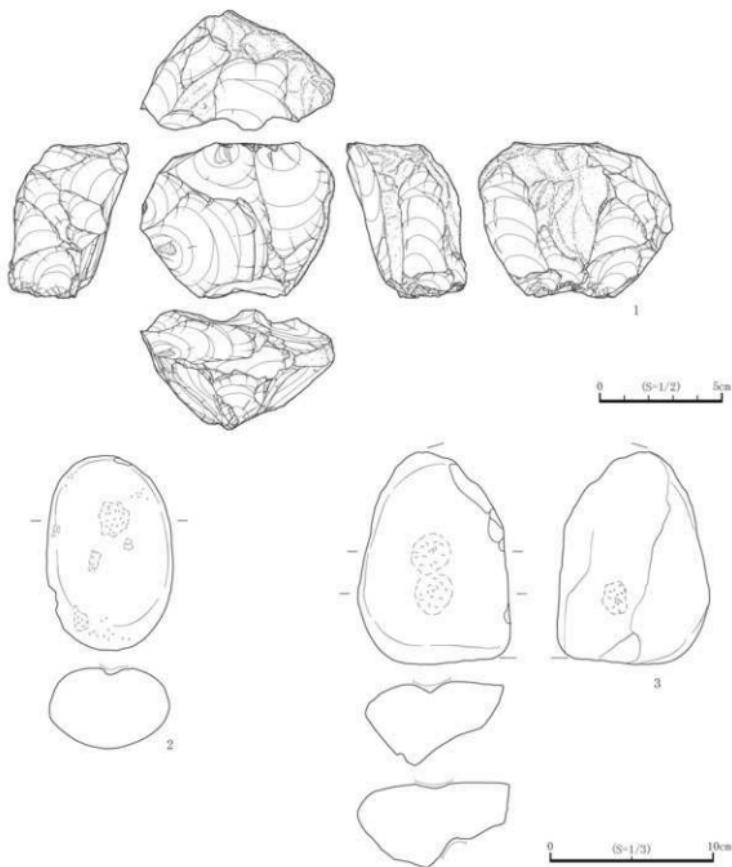


図11 A区第104A・B号竪穴住居跡出土遺物（2）

第117号竪穴住居跡 (SI117: 図24)

【位置・確認】 IVY-69グリッドに位置する。第IV層を精査中に壁周溝とみられる弧状の第2号溝跡を検出した。また同溝跡の内側にピット群が見られたことから、住居跡として調査を行った。竪穴状の掘り込みはみられない。

【重複】 北東側で第118号竪穴住居跡が隣接する。遺構どうしの直接的な重複関係はないが、本来的には同住居跡と重複していたものと思われる。このほか第2号溝跡は、多数のピットと重複する。

【平面形・規模】 掘り込みのない住居跡のため、平面形の理解となるものは第2号溝跡のみである。同溝跡から推せば長軸6m前後の円形であったと思われるが、溝跡は一部で途切れており不明である。

【堆積土】 確認できなかった。

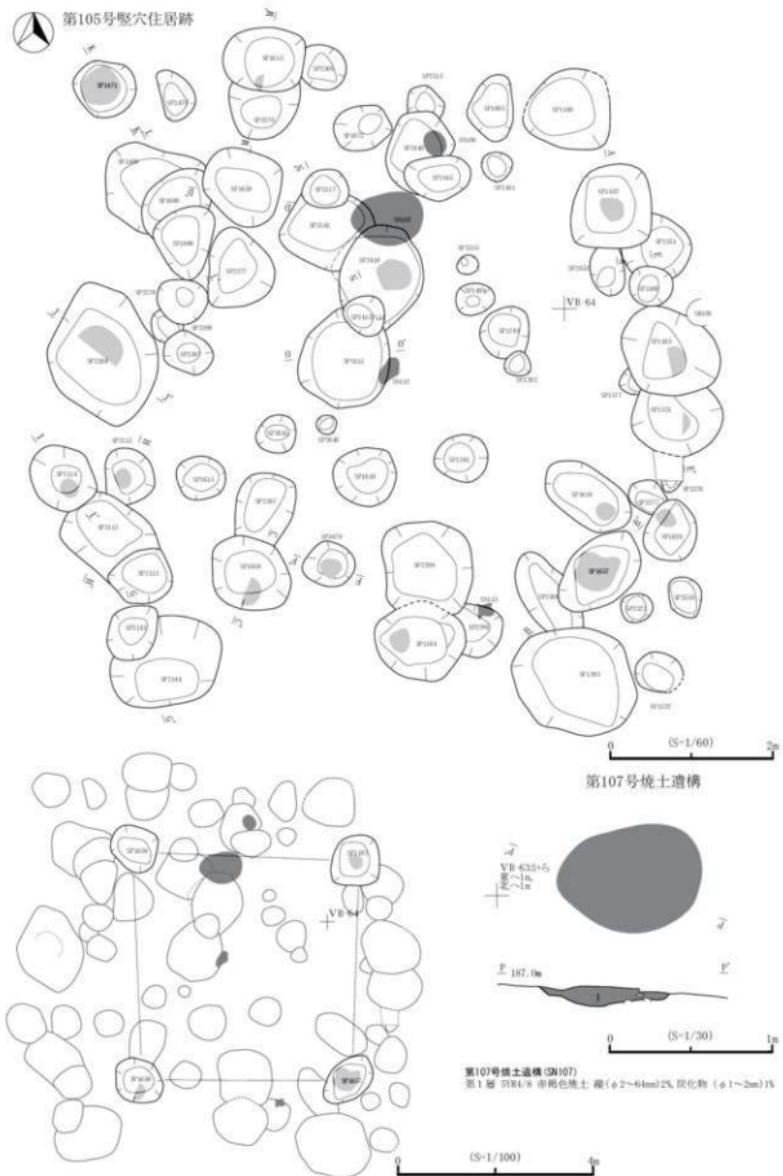
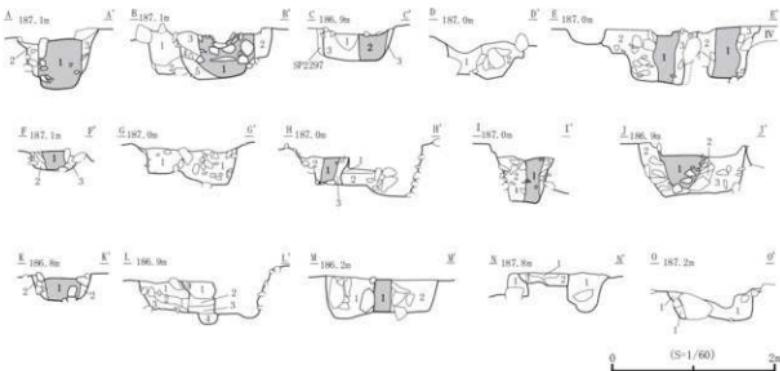


図12 A区第105号竪穴住居跡（1）



第116号ピット(SP116)
①187.1m 壁面 黄褐色土 磨(φ2~24mm)1%、炭化物(φ1~10mm)5%
②187.2m 壁面 黄褐色土 磨(φ2~5mm)2%
③187.3m 壁面 黄褐色土 磨(φ30~100mm)2%、炭化物(φ1~15mm)2%
④187.4m 壁面 黄褐色土

第117号ピット(SP117)
①197.2m 壁面 黄褐色土 磨(φ2~2mm)5%、磨(φ19~60mm)5%
②197.3m 壁面 黄褐色土 磨(φ2~3mm)5%、磨(φ2~3mm)2%
③197.4m 壁面 黄褐色土 磨(φ25~100mm)1%、磨(φ2~3mm)2%
④197.5m 壁面 黄褐色土 磨(φ60~330mm)1%、炭化物(φ3~10mm)2%
⑤197.6m 壁面 黄褐色土

第140号ピット(SP140)
①187.1m 壁面 黄褐色土 磨(φ1~20mm)10%、炭化物(φ1~5mm)3%
②187.2m 壁面 黄褐色土 磨(φ1~2mm)5%、磨(φ4~15mm)2%
③187.3m 壁面 黄褐色土 磨(φ1~7mm)3%、磨(φ1~3mm)2%
④187.4m 壁面 黄褐色土

第141号ピット(SP141)
①187.1m 壁面 黄褐色土 磨(φ1~120mm)10%、炭化物(φ1~3mm)3%
②187.2m 壁面 黄褐色土 磨(φ1~150mm)2%

第152号ピット(SP152)
①107.2m 壁面 黄褐色土 炭化物(φ5~10mm)5%、磨(φ50~60mm)1%
②107.3m 壁面 黄褐色土 磨(φ2~20mm)5%、磨(φ1~1mm)2%
③107.4m 壁面 黄褐色土 磨(φ2~20mm)5%、磨(φ1~2mm)2%
④107.5m 壁面 黄褐色土

第165号ピット(SP165)
①107.2m 壁面 黄褐色土 磨(φ5~10mm)10%、炭化物(φ1~10mm)9%
②107.3m 壁面 黄褐色土 磨(φ5~240mm)25%、炭化物(φ1~1mm)1%

第167号ピット(SP167)
①107.2m 壁面 黄褐色土 磨(φ2~387mm)7%，炭化物(φ2~11mm)1%，
②107.3m 壁面 黄褐色土 磨(φ2~31mm)1%
第2層 107K3/4 壁面 黄褐色土 磨(φ1~10mm)3%，炭化物(φ1~1mm)3%，
③107.4m 壁面 黄褐色土 磨(φ1~3mm)1%
④107.5m 壁面 黄褐色土 磨(φ2~105mm)1%，炭化物(φ2~2mm)1%
⑤107.6m 壁面 黄褐色土

第165号ピット(SP168)
①107.2m 壁面 黄褐色土 磨(φ4~8mm)7%，炭化物(φ1~16mm)5%，
第2層 107R2/2 壁面 黄褐色土 磨(φ1~10mm)2%、炭化物(φ1~1mm)10%，
第3層 107R3/4 壁面 黄褐色土 磨(φ2~4mm)2%

第167号ピット(SP169)
①107.2m 壁面 黄褐色土 磨(φ2~220mm)10%、炭化物(φ1~5mm)1%
第2層 107R2/2 壁面 黄褐色土 磨(φ1~10mm)25%、炭化物(φ1~20mm)1%
第3層 107R3/2 壁面 黄褐色土 磨(φ2~21mm)2%

第167号ピット(SP170)
①107.2m 壁面 黄褐色土 磨(φ1~37mm)25%、炭化物(φ2~12mm)2%
②107.3m 壁面 黄褐色土 磨(φ1~10mm)10%、炭化物(φ1~1mm)1%
③107.4m 壁面 黄褐色土 磨(φ1~7mm)1%、炭化物(φ1~1mm)1%
④107.5m 壁面 黄褐色土 磨(φ1~1mm)1%

第168号ピット(SP1680)
①107.2m 壁面 黄褐色土 磨(φ1~7mm)5%、磨(φ2~32mm)1%，
②107.3m 壁面 黄褐色土 磨(φ2~11mm)5%、磨(φ1~1mm)1%
③107.4m 壁面 黄褐色土 磨(φ1~4mm)1%、磨(φ1~1mm)1%
④107.5m 壁面 黄褐色土 磨(φ1~1mm)1%

第211号ピット(SP211)
①107E2/2 壁面 黄褐色土 磨(φ2~3mm)5%、炭化物(φ1~1mm)1%
②107E3/2 壁面 黄褐色土 磨(φ2~9mm)25%、炭化物(φ1~1mm)2%
③107E4/2 壁面 黄褐色土

第2114号ピット(SP2114)
①107H2/4 壁面 黄褐色土 磨(φ4~6mm)5%、炭化物(φ1~1mm)2%
②107H3/4 壁面 黄褐色土 磨(φ2~12mm)25%、磨(φ1~4mm)1%
③107H4/4 壁面 黄褐色土 磨(φ2~9mm)25%、炭化物(φ1~1mm)1%
④107H5/4 壁面 黄褐色土

第2115号ピット(SP2115)
①107I2/4 壁面 黄褐色土 磨(φ1~3mm)75%、炭化物(φ1~9mm)5%
②107I3/4 壁面 黄褐色土 磨(φ1~2mm)25%、炭化物(φ1~2mm)2%
③107I4/4 壁面 黄褐色土 磨(φ2~9mm)75%

第214号ピット(SP214)
①107K2/4 壁面 黄褐色土 磨(φ2~19mm)30%

第2144号ピット(SP2144)
①107L2/4 壁面 黄褐色土 磨(φ4~152mm)10%，炭化物(φ1~9mm)5%

第226号ピット(SP226)
①107R2/2 壁面 黄褐色土 磨(φ2~4mm)7%，磨(φ3~10mm)5%
②107R3/2 壁面 黄褐色土 磨(φ2~109mm)30%，磨(φ1~1mm)7%
③107R4/2 壁面 黄褐色土 磨(φ1~2mm)1%，磨(φ2~11mm)7%

第227号ピット(SP2270)
①107R4/3 壁面 黄褐色土 磨(φ1~360mm)25%、炭化物(φ1~15mm)5%

第2310号ピット(SP2310)
①107R3/4 壁面 黄褐色土 磨(φ2~165mm)10%，炭化物(φ1~4mm)5%
②107R4/4 壁面 黄褐色土 磨(φ2~11mm)3%，炭化物(φ1~3mm)3%

第2415号ピット(SP2415)
①107R5/3 壁面 黄褐色土 磨(φ5~490mm)20%，炭化物(φ1~3mm)1%未満

第2416号ピット(SP2416)
①107R5/4 壁面 黄褐色土 磨(φ4~110mm)7%，炭化物(φ1~1mm)2%

第2516号ピット(SP2516)
①107R5/4 壁面 黄褐色土 磨(φ1~10mm)25%，磨(φ1~1mm)2%
②107R6/4 壁面 黄褐色土 磨(φ1~1mm)1%
第2層 107R2/2 壁面 黄褐色土 磨(φ1~10mm)3%，炭化物(φ1~2~10mm)2%
③107R4/6 壁面 黄褐色土 磨(φ1~1mm)25%，炭化物(φ1~1~3mm)2%
④107R5/6 壁面 黄褐色土 磨(φ2~290mm)25%，炭化物(φ1~2mm)3%

図13 A区第105号竪穴住居跡（2）

【壁・床面】掘り込みはなく壁は検出していない。また貼床もみられない。

【柱穴・施設】壁周溝のほか、多数のピット群を検出した。やや規模が大きく柱痕のある第1407～1409号ピットの3基は本造構の柱穴とみられる。本来は4本柱穴になるものと思われ、他造構（第1116号ピット）の位置にも柱穴が存在していた可能性が高い。

【炉】検出していない。

【出土遺物】土器は柱穴および溝跡の堆積土から第III群B類・E類・F類・G類が出土した（図24-

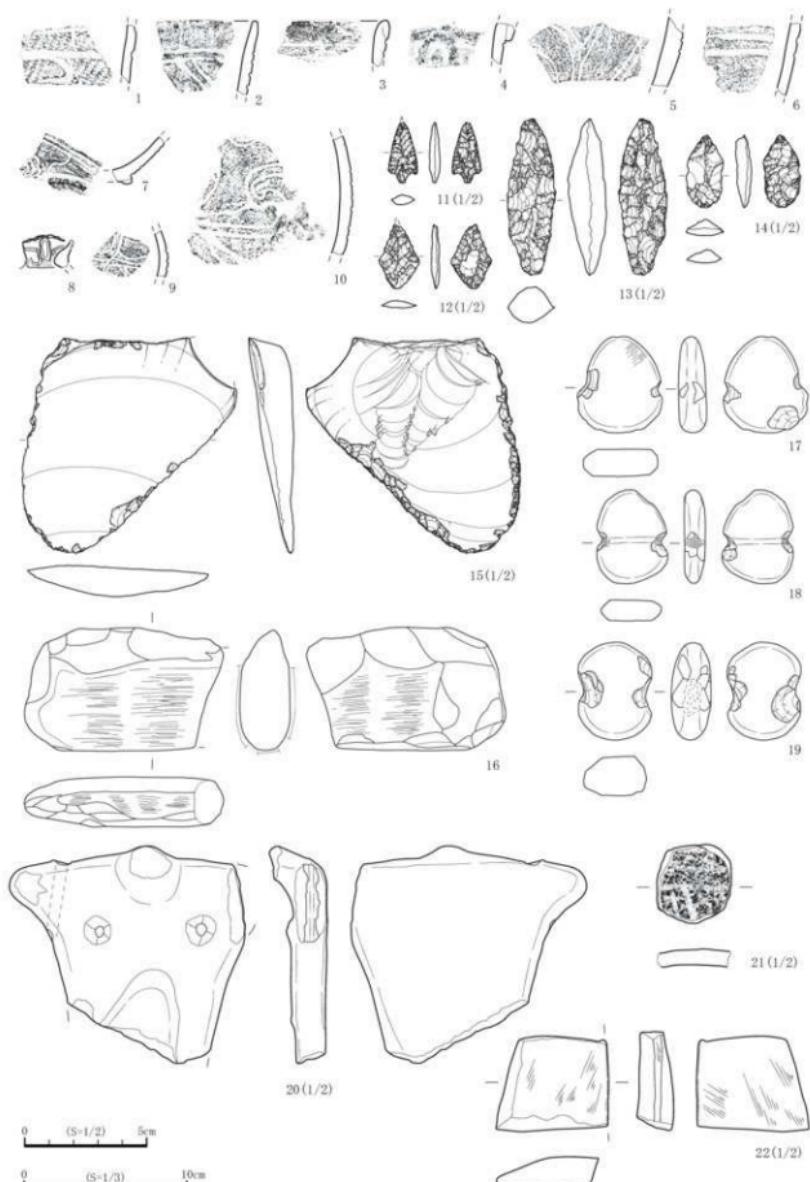


図14 A区第105号竪穴住居跡出土遺物

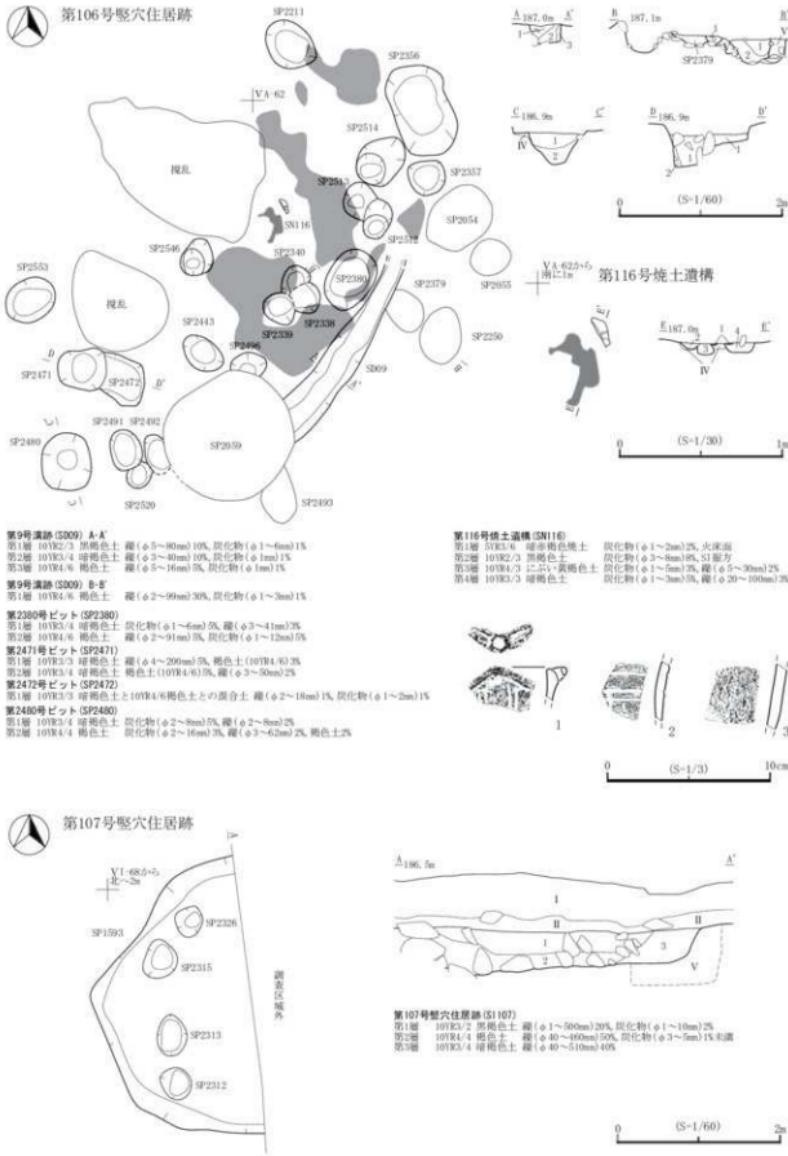


図15 A区第106・107号竪穴住居跡・出土遺物

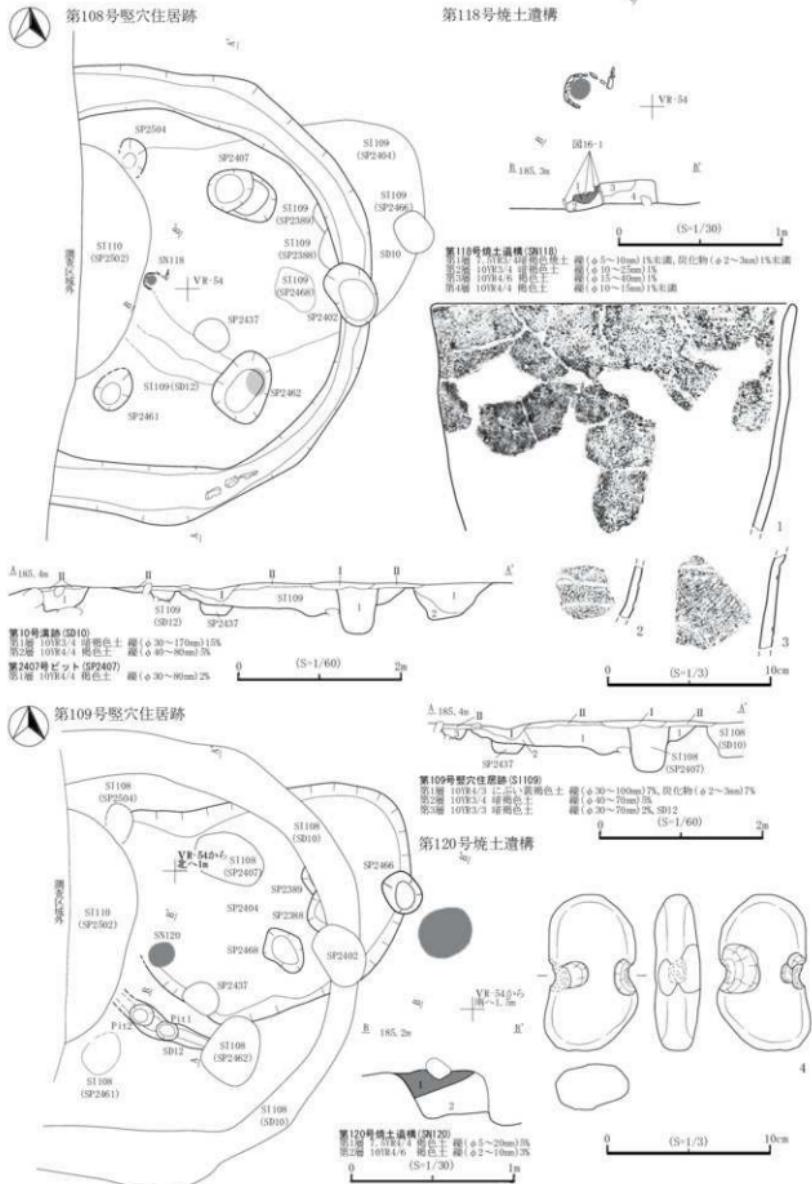


図16 A区第108・109号竪穴住居跡・出土遺物

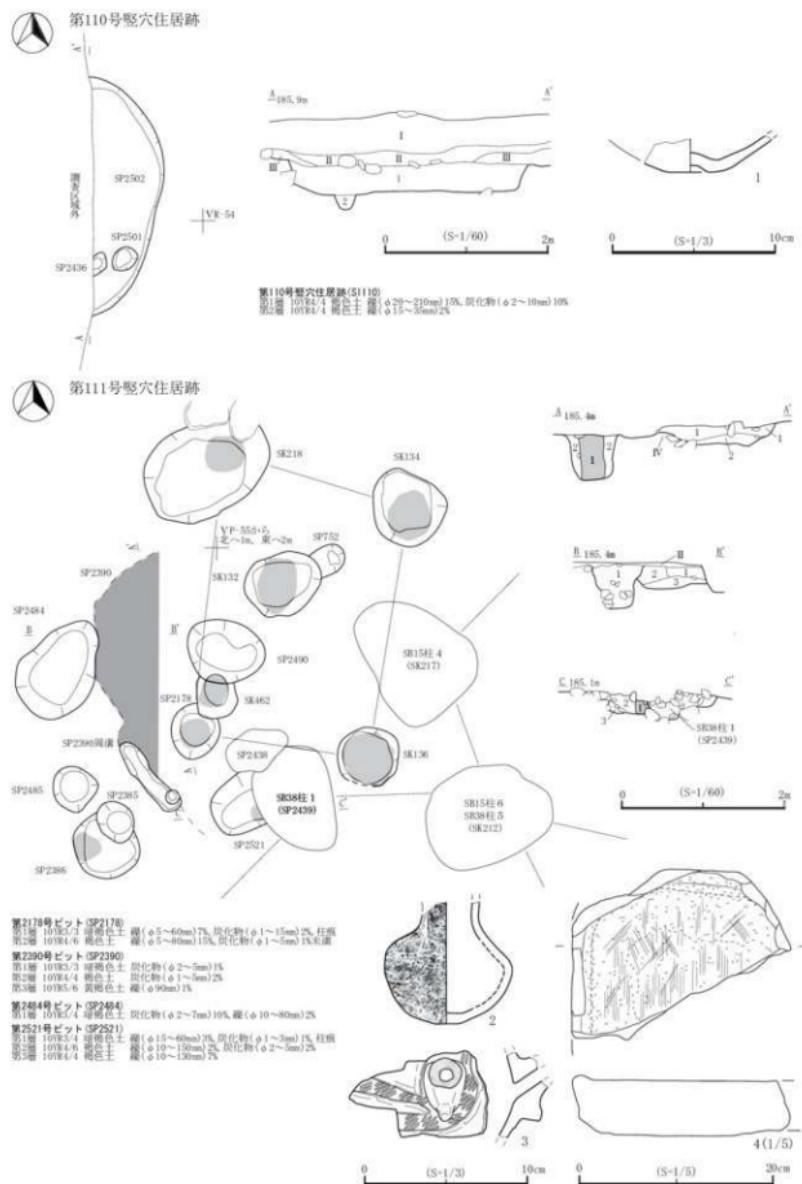


図17 A区第110・111号竪穴住居跡・出土遺物

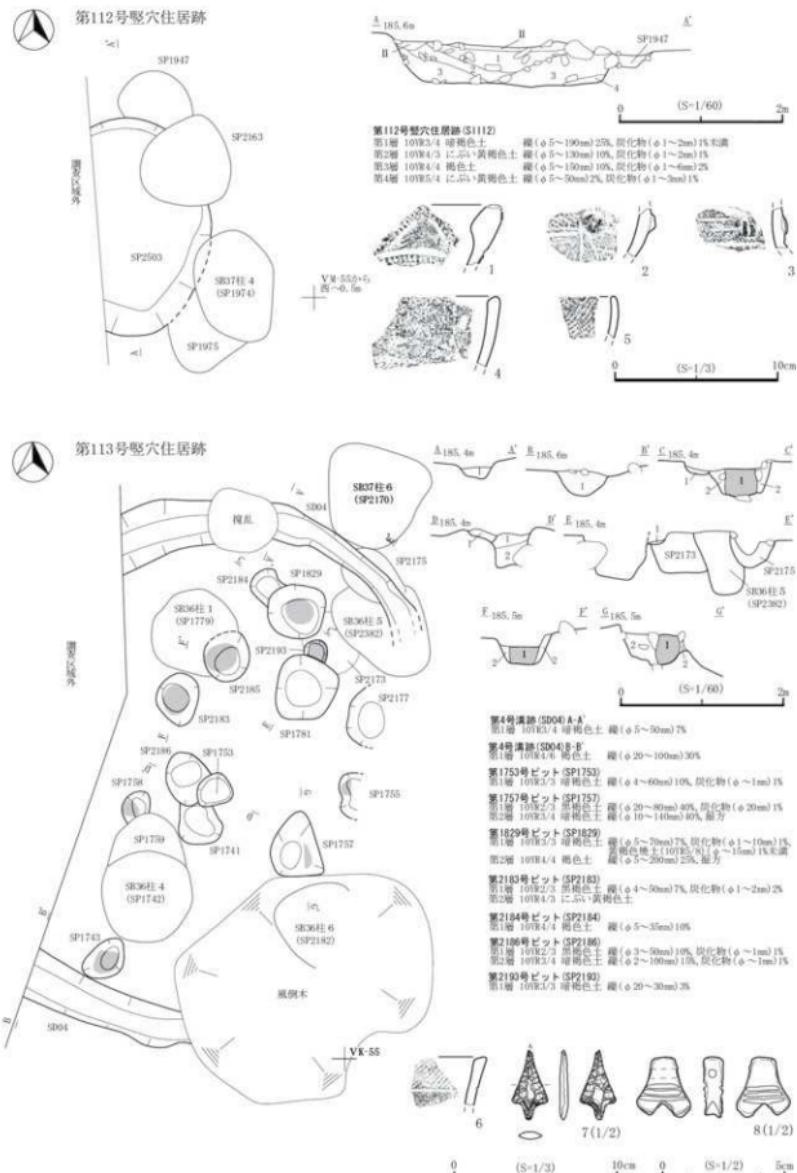


図18 A区第112・113号竪穴住居跡・出土遺物

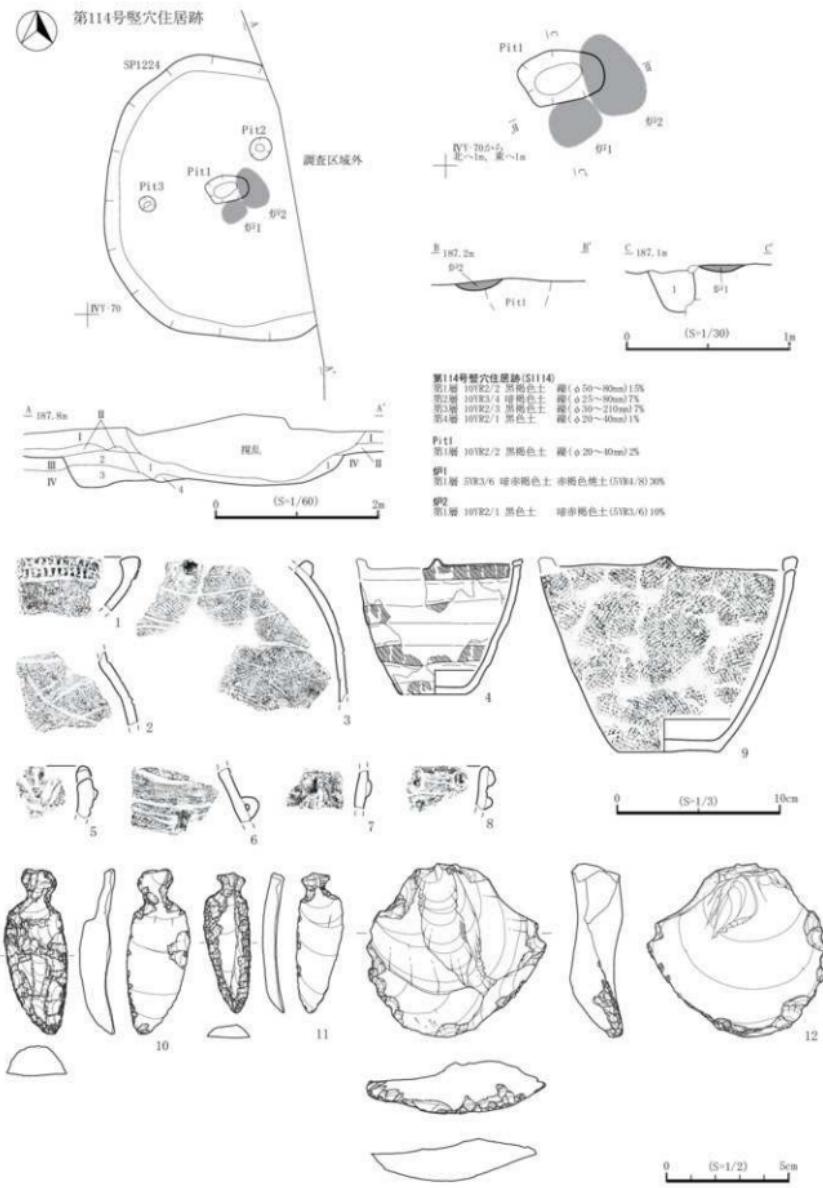


図19 A区第114号竪穴住居跡・出土遺物

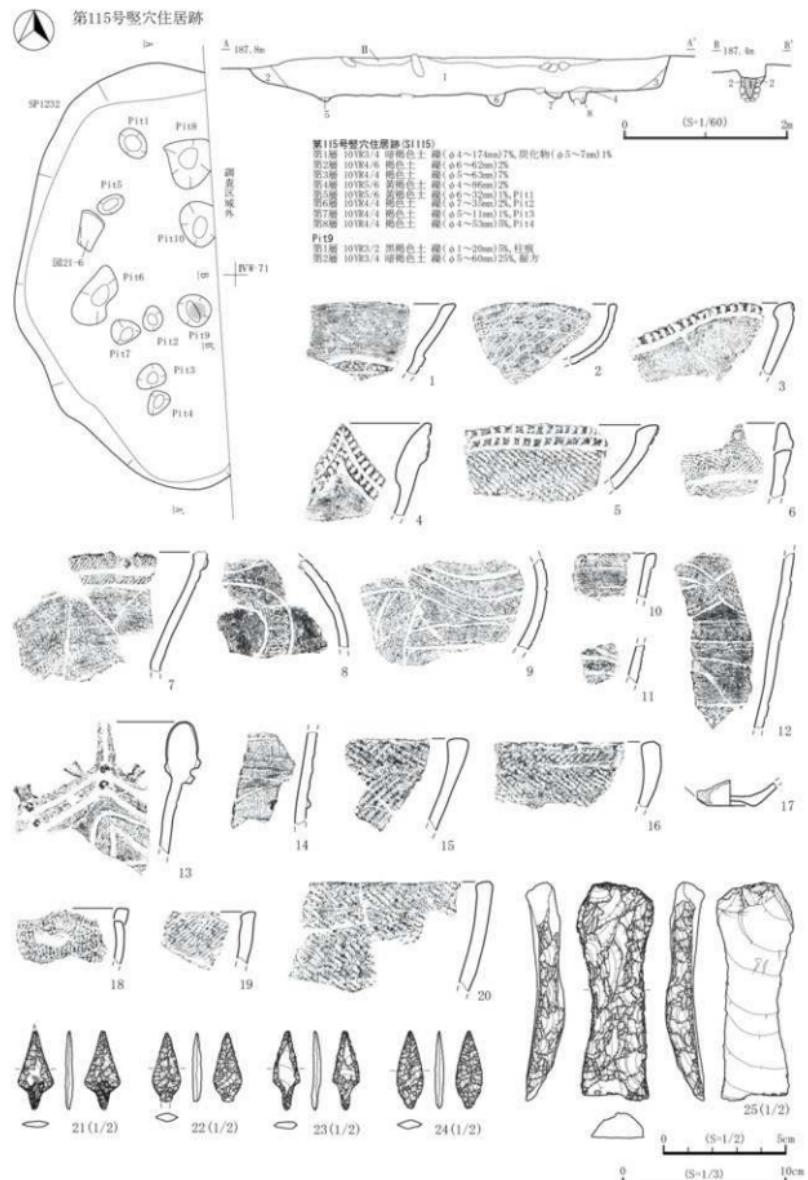


図20 A区第115号竪穴住居跡・出土遺物（1）

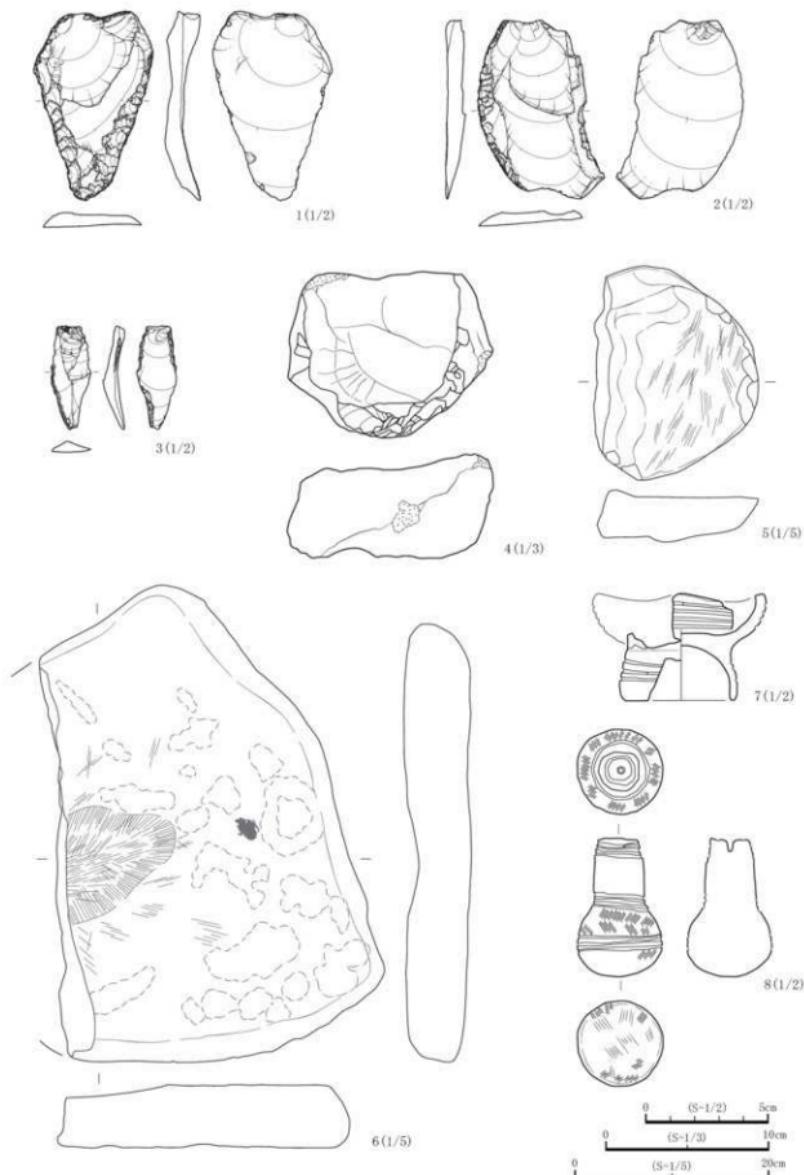
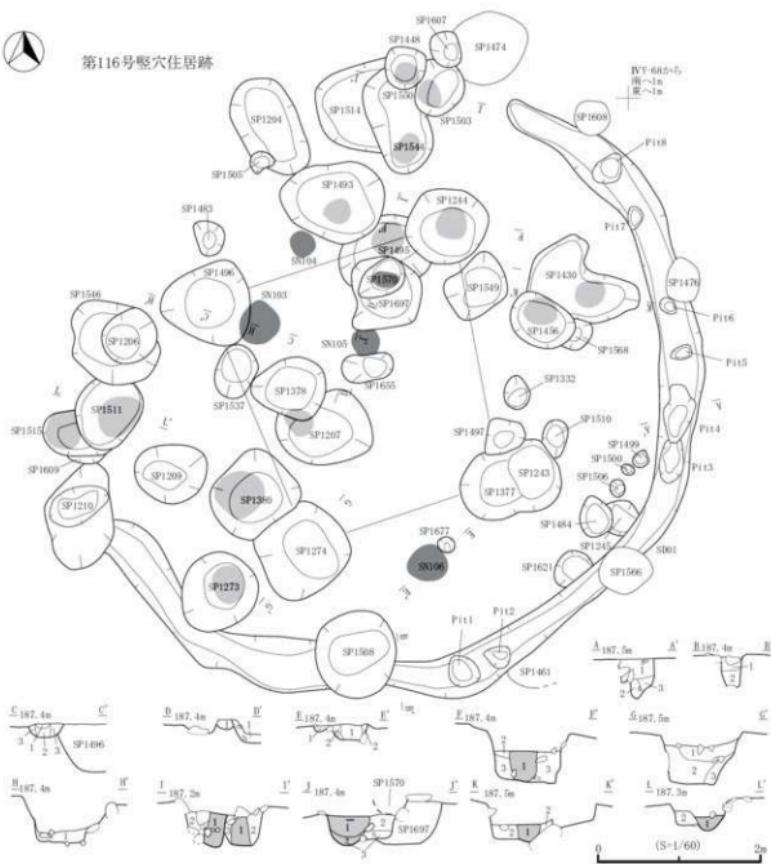


図21 A区第115号竪穴住居跡出土遺物（2）



第116号竪穴住居跡



第1号横跡(300)A~K'

第1層 10Y2/4 黒褐色土 繊(φ 10~20mm)2%, 塩化物(φ 2~4mm)1%
第2層 10Y2/3 黑褐色土 繊(φ 20~50mm)1%, 塩化物(φ 1~2mm)1%

第3層 10Y2/2 黑褐色土 繊(φ 20~60mm)1%, 塩化物(φ 1~3mm)1%

第2号横跡(300)B~B'

第1層 10Y4/4 にじみ黄褐色土 繊(φ 2~18mm)7%, 塩化物(φ 1~2mm)1%L

第2層 10Y4/6 黄褐色土 繊(φ 1~20mm)3%, 塩化物(φ 1~2mm)1%L

第10号堆土遺構(3N10)

第1層 10Y4/4 黄褐色土 繊(φ 4~17mm)1%, 塩化物(φ 2~4mm)1%

第2層 10Y4/4 黄褐色土 繊(φ 2~7mm)2%, 塩化物(φ 1~2mm)1%

第3層 10Y4/4 黄褐色土 繊(φ 2~50mm)10%, 繊(φ 3~55mm)1%, 塩化物(φ 2~3mm)1%

第10号堆土遺構(3N105)

第1層 10Y4/4 黄褐色土 繊(φ 5~20mm)3%, 塩化物(φ 2~10mm)1%

第6号堆土遺構(3N106)

第1層 7.5Y3/4 黄褐色土 塩化物(φ 0.5~1mm)3%, 小繊(φ 2~10mm)5%

第2層 7.5Y3/4 黄褐色土 繊(φ 10~30mm)20%, 焙土粒20%

第124号ピット(SP1244)

第1層 10Y2/4 黄褐色土 繊(φ 20~25mm)5%, 塩化物(φ 2~5mm)2%

第2層 10Y2/4 黄褐色土 繊(φ 4~17mm)7%, 塩化物(φ 2~20mm)1%

第3層 10Y2/4 黄褐色土 繊(φ 40~150mm)7%, 塩化物(φ 8~15mm)1%

第127号ピット(SP1274)

第1層 10Y4/4 黄褐色土 繊(φ 2~80mm)5%, 塩化物(φ 1~5mm)2%

第2層 10Y4/4 黄褐色土 繊(φ 4~60mm)20%, 塩化物(φ 1mm)1%

第3層 10Y2/5 黄褐色土 繊(φ 3~40mm)10%

第140号ピット(SP1430)

第1層 10Y2/3 黑褐色土 繊(φ 5~50mm)10%, 塩化物(φ 1~20mm)5%
第2層 10Y4/4 黄褐色土 繊(φ 10~100mm)20%, 黄褐色土(φ 1~5mm)15%
塩化物(φ 1~5mm)5%

第144号ピット(SP1448)

第1層 10Y2/3 黑褐色土 繊(φ 6~100mm)13%, 塩化物(φ 1~2mm)1%
第2層 10Y4/4 黄褐色土 繊(φ 5~120mm)20%, 塩化物(φ 1~3mm)2%
第3層 10Y4/8 黄褐色土 繊(φ 1~30mm)25%

第150号ピット(SP1503)

第1層 10Y2/3 黑褐色土 繊(φ 10~90mm)2%, 塩化物(φ 1mm)1%
第2層 10Y4/4 黄褐色土 繊(φ 5~110mm)15%, 塩化物(φ 1~3mm)2%

第145号ピット(SP1445)

第1層 10Y2/3 黄褐色土 塩化物(φ 2~10mm)3%, 繊(φ 10~80mm)1%
第2層 10Y4/4 黄褐色土 烧土ブロック(φ 10~70mm)20%, 繊(φ 10~70mm)35%,
小繊(φ 5~8mm)1%

第146号ピット(SP1496)

第1層 10Y4/4 黄褐色土 繊(φ 10~90mm)7%, 塩化物(φ 3~5mm)1%
第2層 10Y2/4 喀色土 繊(φ 7~110mm)40%

第151号ピット(SP1511)

第1層 10Y2/3 黑褐色土 繊(φ 4~50mm)3%, 塩化物(φ 1~2mm)1%
第2層 10Y4/4 黄褐色土 繊(φ 2~67mm)15%, 塩化物(φ 1~2mm)1%

第167号ピット(SP1677)

第1層 7.5Y3/4 喀色土 小繊(φ 1~3mm)10%

図22 A区第116号竪穴住居跡

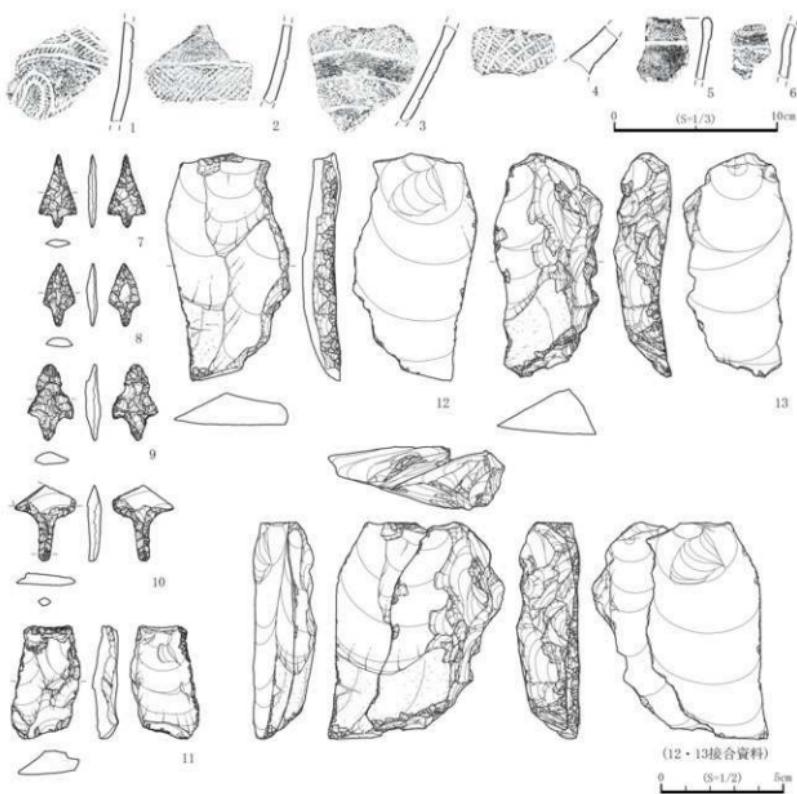


図23 A区第116号竪穴住居跡出土遺物

1～6)。1・2は第III群B1類、3～5は第III群F類、6は第III群G類である。5は口縁突起下に貼瘤がみられる。石器は、石匙1点(図24-7)、U.F. 2点(88.3g)、R.F. 3点(28.2g)、剥片22点(113.1g)が出土している。これらのうち剥片1点(7.9g)は黒曜石である。

〔小結〕本遺構の年代は、出土土器から縄文時代後期後葉と考えられる。

第118号竪穴住居跡 (SI118: 図24)

〔位置・確認〕IVY-70グリッドを中心に位置する。第IV層上面で第3号溝跡を検出した。炉や柱穴などの施設を持たないが、当遺跡では円形(弧状)の周溝が住居跡の壁周溝になるケースが多いため、ここでも住居跡と判断して報告する。なお、竪穴状の掘り込みはみられない。

〔重複〕墓坑とみられる第1116号ピットと北側で重複するほか第3号溝跡は第1194号ピットと重複する。

〔平面形・規模〕掘り込みのない住居跡のため平面形は不明だが、円形プランと思われる。

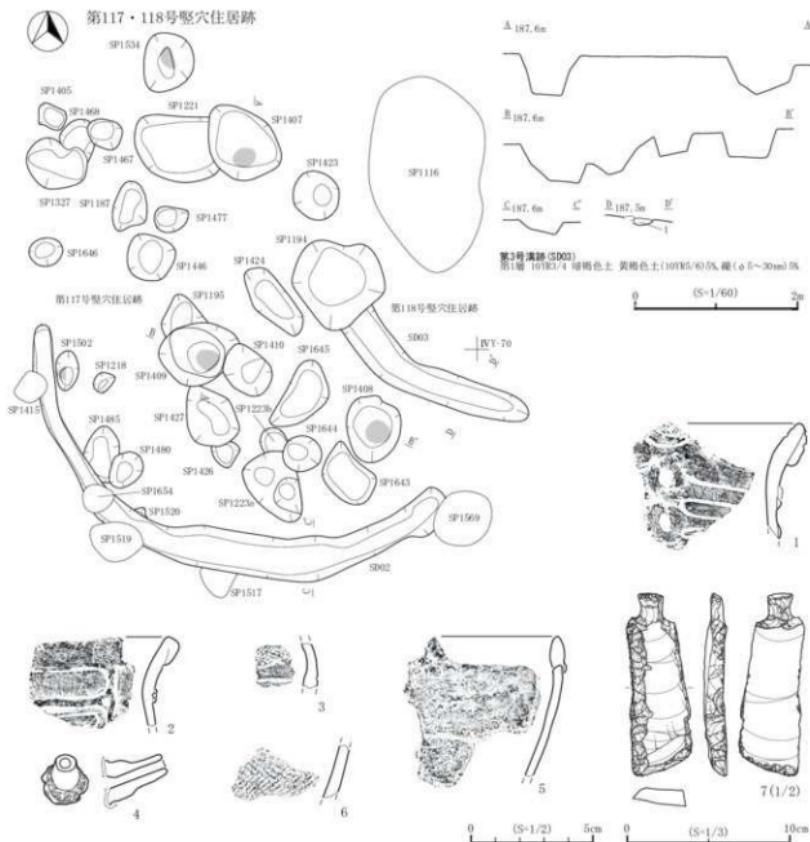


図24 A区第117・118号竪穴住居跡・出土遺物

〔堆積土〕 検出されなかった。

〔壁・床面〕 竪穴状の掘り込みではなく、壁は検出していない。また貼床も確認できなかった。

〔柱穴・施設〕 壁周溝とみられる第3号溝跡を検出した。規模は幅35~45cm、深さ10cmで、北側は第1194号ピットと重複し途切れている。

〔炉〕 検出していない。

〔出土遺物〕 出土していない。

〔小結〕 住居跡と判断できる施設に乏しいが、弧状の溝跡は竪穴住居跡の壁周溝とみられる。遺物の出土もなく、本遺構の年代は不明である。
(加藤)

2 挖立柱建物跡（図25～37）

本遺跡では、平成22・23年度調査において総数41棟の掘立柱建物跡を検出した。掘立柱建物跡は41棟中26棟が環状に分布し、その北側・南側に15棟が分布する（図25～27）。

この内20棟については第513集において報告済みであり、本節では平成23年度に調査した22棟（再報告1棟含む）について記載する。なお、第16号掘立柱建物跡については平成22年度に調査し、既報告（第513集）の掘立柱建物跡であるが、平成23年度調査において当該建物跡を構成する柱穴の一部が検出されたため、改めて本報告書で報告する。

掘立柱建物跡の認定には、柱穴の配置・規模・底面標高値などを検討した上で抽出した。掘立柱建物跡を構成する柱穴には、遺構番号とは別に柱番号を付した。建物規模の計測値、新旧関係等は一覧表に示した。柱番号の設定基準、計測値の記載基準、建物構造に関する用語等については、第513集に準じた。

掘立柱建物跡の時期については基本的に構成柱穴の出土土器に依拠した。ただし、A区における土器出土の遺構は大多数が堆積土中に第III群B類・C類の土器片を含み、時期的に後出の土器と混在する場合も少なくない。このような出土状況は掘立柱建物跡にも当てはまり、出土土器が複数型式に跨る場合、先行型式の土器片は混入の可能性が高いものと思われる。一方で、出土土器が第III群B類・C類の小破片に限られる場合は、出土量なども加味して時期を検討した。

第16号掘立柱建物跡（SB16：図28）

【位置・確認】 VH-55グリッドを中心位置する。柱1は第V層上面で確認した。柱2～6は平成22年度調査で検出、精査が行われたものである。

【重複】 柱4が第359号土坑と、また柱6が第425号土坑と重複する。新旧関係は柱4が第359号土坑よりも新しく、柱6と第425号土坑とは不明である。

【平面形・規模】 6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸柱5～6間が5.0m、梁行が柱3～4間で4.8m、桁行が柱1～4間で3.7mである。梁行が長く、張出部が両側ともに短い構造である。

【柱穴・堆積土】 柱穴は掘方長軸が110～195cmの円形及び楕円形で、検出面からの深さは柱2・3・4・6が45～60cmとやや浅く、柱1・5が80～94cmとやや深い。各柱穴の堆積土は暗褐色土及び黒褐色土を主体とし、特に柱2～6の掘方部分は礫が多く含む土で裏込めされている。柱1、柱5で柱底を確認し、柱2、柱5の底面で柱のアタリを検出した。柱底は直径約40～60cmである。柱1では堆積土中層（底より約30cm上位）で硬化面を検出した。

【出土遺物】 第III群B1類・F類土器及び土製品などの遺物が出土した（第513集の図40-14・15・17・18・27～30）。石器は剥片が25点（124.9g）出土した。

【小結】 本遺構の時期は、柱2から出土した第III群F類土器（第513集の図40-30）から縄文時代後期後葉のものと考えられる。
(加藤)

第21号掘立柱建物跡（SB21：図28・36）

【位置・確認】 VP-61グリッドを中心位置する。第V層上面で確認した。柱3・4・6は平成22年度調査で検出、精査が行われたものである。

【重複】 第22号掘立柱建物跡と重複し、本遺構が古い。この他複数のビットと重複するが、新旧関係

等の詳細は一覧表に示した。

〔平面形・規模〕 6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸柱5-6間が3.7m、梁行が柱1-2間で5.1m、桁行が柱2-3間で3.6mである。梁行が長く、張出部が両側ともに短い構造である。

〔柱穴・堆積土〕 柱穴は掘方長軸が88~135cmの円形及び梢円形で、検出面からの深さは柱3・4・6が47~66cm、柱1・2・5が79~119cmである。総じて平成23年度調査で検出された後者が深い傾向があるが、これは検出面の標高に起因しており、底面標高値は183.9~184.3mの範囲に収まる。各柱穴の堆積土は褐色土及び黒褐色土を主体とする。柱2~4・6からは径32~52cmの柱痕が検出された。

〔出土遺物〕 土器は第III群B1類・C類（第513集の図41-25・36を含む）が出土した。平成23年度調査の出土土器を図示した（図36-1~3）。1・2は第III群B1類、3は第III群C類である。石器はR.F.2点（13.1g）、剥片26点（173.6g）が出土した。

〔小結〕 本遺構の時期は、出土遺物及び第22号掘立柱建物跡との重複関係から、縄文時代後期前葉頃のものと考えられる。

第22号掘立柱建物跡（SB22：図28・36）

〔位置・確認〕 VP-62グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

〔重複〕 第21号掘立柱建物跡と重複し、本遺構が新しい。この他複数のピットと重複するが、新旧関係等の詳細は一覧表に示した。

〔平面形・規模〕 6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸5-6間が4.3m、梁行が柱3-4間で3.9m、桁行が柱2-3間で3.3mである。梁行が長く、張出部が両側ともに短い構造である。

〔柱穴・堆積土〕 柱穴は掘方長軸が120~149cmの円形及び梢円形で、検出面からの深さは49~132cmである。各柱穴の堆積土は黒褐色～褐色土を主体とする。柱1の1層は黄褐色粘土であり、本遺構廃絶後の閉塞行為が想定される。柱2~5からは径36~58cmの柱痕が検出された。

〔出土遺物〕 土器は第III群B1類・C類が出土した（図36-4~12）。他の掘立柱建物跡と比較して第III群B1類・C類の出土量が多く、破片数にして432片を数える。4~10は第III群B1類で、充填縄文や櫛歯状沈線文などが施されている。11~12は第III群C類で、網目状や斜方向の撚糸文がみられる。石器は石鏃1点（0.6g）、スクレーパー1点（図36-13）、U.F.1点（17.9g）、R.F.2点（10.4g）、剥片72点（476.1g）、磨製石斧1点（図36-14）が出土した。石製品は1点出土した。図36-15は柱6（第1340号ピット）出土の縞灰岩製の円盤状石製品である。側縁に研磨加工が、裏面には横位の線刻がそれぞれ施される。

〔小結〕 本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉のものと考えられる。

（葛城）

第23号掘立柱建物跡（SB23：図29・36）

〔位置・確認〕 V0-66グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

〔重複〕 本遺構の南側半分ほどが第24号掘立柱建物跡と重複関係にある。新旧関係は構成柱穴の直接の重複関係が認められないため不明である。

〔平面形・規模〕 4本柱で構成される建物跡で、平面形はほぼ正方形である。柱間距離は南北方向の柱1-2が4.4m、東西方向の柱1-4が4.1mで、南北方向がやや長い。

〔柱穴・堆積土〕 柱穴は掘方長軸が110～131cmの円形及び梢円形で、検出面からの深さが60～82cmである。柱穴の堆積土は黒褐色土が主体である。柱4には径約40cmの柱痕が認められ、掘方部分は礫を多く含む暗褐色土で裏込めされている。

〔出土遺物〕 土器は第III群B 1類・F類が出土した。図36-16は柱2（第1078号ピット）出土の第III群F類土器で、口縁突起の頂部に1条の刻目が施されている。石器はU.F. 1点(5.4g)、R.F. 1点(37.0g)、剥片13点(149.2g)が出土した。土製品は1点出土した。図36-17は柱3（第1043号ピット）出土のミニチュア土器で、台付鉢を模している。手捏ね成形で口縁部は波状を呈する。

〔小結〕 本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期後葉のものと考えられる。

第24号掘立柱建物跡 (SB24: 図29・36)

〔位置・確認〕 VN-66グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

〔重複〕 本遺構の北側半分ほどが第23号掘立柱建物跡と重複関係にある。新旧関係は構成柱穴の直接の重複関係が認められないため不明である。

〔平面形・規模〕 6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸柱5-6間が4.0m、梁行が柱1-2間で4.0m、桁行が柱2-3間で3.2mである。梁行が長く、張出部が両側ともに短い構造である。

〔柱穴・堆積土〕 柱穴は柱2～6が掘方長軸約110～130cmの円形、柱1が掘方長軸170cmの梢円形である。検出面からの深さは46～64cmである。柱1は底面にわずかな段差を有する。各柱穴の堆積土は褐色土が主体で、柱痕は確認されなかった。

〔出土遺物〕 土器は柱1（第1076号ピット）から第III群F類が出土した（図36-18）。0段多条原体による充填縄文と、一段低く整形された無文部が認められる。石器は石核1点(21.2g)、剥片2点(17.0g)、磨製石斧1点（図36-19）が出土した。

〔小結〕 柱1の底面直上から採取した炭化物について放射性炭素年代を測定した結果、3,610±20yrBPの年代値が得られている（第4章第1節参照）。本遺構の時期は、出土遺物から推定すると縄文時代後期後葉のものと考えられる。

第25号掘立柱建物跡 (SB25: 図29・36)

〔位置・確認〕 VL-66グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

〔重複〕 第26号掘立柱建物跡と重複し、本遺構が古い。この他複数のピットと重複するが、新旧関係等の詳細は一覧表に示した。

〔平面形・規模〕 6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸柱5-6間が4.8m、梁行が柱3-4間で4.1m、桁行が柱1-4間で4.0mである。梁行がやや長く、張出部が両側ともに短い構造である。

〔柱穴・堆積土〕 柱穴の平面形は円形及び梢円形である。柱穴の規模は柱1・3・4・6の掘方長軸が約120～150cm、柱2・5の掘方長軸が約170～190cmである。検出面からの深さは51～78cmである。柱2・3・5では直径42～61cmの柱痕を確認し、柱2の底面では柱のアタリを検出した。また、柱4・6の底面では約40～60cmの範囲で硬化面を検出した。各柱穴の堆積土は暗褐色土が主体である。掘方部分は礫を多く含む土で裏込めされている。

〔出土遺物〕 土器は第III群B 1類・F類土器が出土した。図36-20は柱1（第1042号ピット）出土の第III群F類で、単節原体による充填繩文と一段低く整形された無文部がみられる。石器は石籠1点（図36-21）、R.F. 2点（20.8 g）、剥片27点（189.9 g）が出土した。土製品は1点出土した。図36-22は柱6（第1045号ピット）出土の円盤状土製品で、単節斜繩文が施されている。

〔小結〕 柱4（第1072号ピット）の堆積土中から採取した炭化物について放射性炭素年代を測定した結果、 $3,650 \pm 20$ yrBPの年代値が得られている（第4章第1節参照）。本遺構の時期は、出土遺物から推定すると繩文時代後期後葉のものと考えられる。

第26号掘立柱建物跡（SB26：図30・36）

〔位置・確認〕 VL-66グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

〔重複〕 第25号掘立柱建物跡と重複し、本遺構が新しい。この他複数のピットと重複するが、新旧関係等の詳細は一覧表に示した。

〔平面形・規模〕 6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸柱5-6間に4.9m、梁行が柱1-2間で4.2m、桁行が柱2-3間で4.6mである。桁行が長く、張出部が両側ともに短い構造である。

〔柱穴・堆積土〕 柱穴の平面形は円形及び橢円形である。柱穴の規模は柱1・2・4～6の掘方長軸が約100～120cm、柱3の掘方長軸が169cmである。検出面からの深さは48～75cmである。各柱穴の堆積土は暗褐色土が主体である。柱3・6には直径30～59cmの柱痕が認められ、掘方部分は礫を多く含む土で裏込めされている。

〔出土遺物〕 土器は第III群B 1類・C類が少量出土した。図36-23・24は第III群B 1類である。石器は石槍1点（図36-25）、石籠1点（図36-26）、剥片16点（214.8 g）が出土した。土製品は2点出土した。図36-27・28はいずれも柱6（第1037号ピット）出土の三角形土製品である。

〔小結〕 本遺構の時期は、出土遺物から繩文時代後期前葉以降と思われるが、重複する第25号掘立柱建物跡との新旧関係から後期後葉のものと考えられる。

第27号掘立柱建物跡（SB27：図30・36）

〔位置・確認〕 VG-67グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

〔重複〕 複数のピットと重複するが、新旧関係等の詳細は一覧表に示した。

〔平面形・規模〕 6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸柱5-6間に4.7m、梁行が柱1-2間で4.1m、桁行が柱2-3間で3.6mである。梁行が長く、張出部が両側ともに短い構造である。

〔柱穴・堆積土〕 柱穴は掘方長軸が約110～180cmの円形及び橢円形で、検出面からの深さが42～116cmである。各柱穴の堆積土は暗褐色土が主体である。柱3・6には直径25～47cmの柱痕が認められ、掘方部分は礫を多く含む土で裏込めされている。柱5における第1117号ピットと第1488号ピットの新旧関係は不明である。

〔出土遺物〕 土器は第III群B 1類・D 1類・F類が出土した（図36-29～31）。30は第III群D 1類で、平行沈線間に縦位の短沈線区画がみられる。31は柱5（第1117号ピット）出土の第III群F類で、異種原体による羽状繩文が施されている。石器はU.F. 1点（12.2 g）、剥片15点（76.2 g）が出土した。

図示はしていない。土製品は小片のため図示しなかったが、ミニチュア土器が1点出土した。

〔小結〕本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期後葉のものと考えられる。

第28号掘立柱建物跡（SB28：図30・36）

〔位置・確認〕VF-66グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

〔重複〕第29・30号掘立柱建物跡と重複するが、構成柱穴の直接の重複関係は認められず、新旧関係は不明である。

〔平面形・規模〕6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸柱5-6間が4.7m、梁行が柱1-2間で4.7m、桁行が柱1-4間で3.6mである。梁行が長く、張出部が両側ともに短い構造である。

〔柱穴・堆積土〕柱穴は掘方長軸が121～169cm、検出面からの深さが82～113cmである。各柱穴の堆積土は暗褐色土が主体である。柱1～3・5・6には直径約30～40cmの柱痕が認められ、掘方部分は礫を多く含む土で裏込めされている。柱6の柱痕検出時の平面観察では、柱痕周辺の礫が東側でやや乱れている状況を確認した。土層断面では柱痕堆積土が底面より35cm上位で途切れしており、掘方東側では深さ約30cmの浅い掘り込みがみられることから、柱の抜き取り痕跡等の可能性も考えられる。

〔出土遺物〕土器は第III群B1類・C類が出土した。図36-32は第III群B1類で、櫛歯状沈線文が施文されている。石器はスクリーパー1点（図36-33）、U.F. 1点（6.2g）、剥片15点（134.3g）が出土した。土製品は1点出土した。図36-34は柱5（第1369号ピット）出土の沈線が施文される円盤状土製品である。

〔小結〕柱3（第1571号ピット）の柱痕の堆積土から採取した炭化物について放射性炭素年代を測定した結果、 $3,540 \pm 20$ yrBPの年代値が得られている（第4章第1節参照）。本遺構の時期は、出土遺物、放射性炭素年代の測定値などから縄文時代後期前葉から中葉頃の可能性が考えられる。

第29号掘立柱建物跡（SB29：図31・36）

〔位置・確認〕VF-66グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

〔重複〕第28・30号掘立柱建物跡と重複する。第30号掘立柱建物跡との新旧関係は、本遺構が古い。第28号掘立柱建物跡との新旧関係は、構成柱穴の直接の重複関係が認められないため不明である。第30号掘立柱建物跡とは柱2を共有するが、複数の柱穴が重複する痕跡は確認できなかった。この他複数のピットと重複するが、新旧関係等の詳細は一覧表に示した。

〔平面形・規模〕6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸柱5-6間が4.5m、梁行が柱1-2間で4.0m、桁行が柱1-4間で3.6mである。梁行が長く、張出部が両側ともに短い構造である。

〔柱穴・堆積土〕柱穴は掘方長軸が約100～160cmの円形及び楕円形で、検出面からの深さが70～117cmである。各柱穴の堆積土は黒褐色土及び暗褐色土が主体である。柱1・2・6には直径32～51cmの柱痕が認められ、掘方部分は礫を多く含む土で裏込めされている。

〔出土遺物〕土器は第III群A類・B1類・C類が出土した。図36-35・36は第III群B1類で、36は櫛歯状沈線文が施文されている。石器は石鏃1点（図36-39）、U.F. 3点（30.0g）、R.F. 2点（24.9g）、剥片19点（88.9g）が出土した。

〔小結〕本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉以降のものと考えられる。

第30号掘立柱建物跡（SB30：図31・36）

〔位置・確認〕VF-66グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

〔重複〕第28・29号掘立柱建物跡と重複する。第29号掘立柱建物跡との新旧関係は、本遺構が新しい。第28号掘立柱建物跡との新旧関係は、構成柱穴の直接の重複関係が認められないと明確である。第29号掘立柱建物跡とは柱2を共有し、複数の柱穴が重複する痕跡は確認できなかったが、位置関係や主軸方位がほぼ同じであるため、第29号掘立柱建物跡廃絶後の建て替え等の可能性も考えられる。この他複数のピットと重複するが、新旧関係等の詳細は一覧表に示した。

〔平面形・規模〕6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸柱5-6間が5.5m、梁行が柱1-2間で5.2m、桁行が柱1-4間で4.4mである。梁行が長く、張出部が両側ともに短い構造である。

〔柱穴・堆積土〕柱穴は掘方長軸が143～185cmの円形及び楕円形で、検出面からの深さが73～90cmである。各柱穴の堆積土は黒褐色土及び暗褐色土が主体である。柱1・2・5には直径約40～50cmの柱痕が認められ、掘方部分は礫を多く含む土で埋めされている。

〔出土遺物〕土器は第III群B1類・C類が出土した。図36-37・38は第III群B1類である。石器は、石鏃1点（図36-39）、U.F.2点（19.5g）、R.F.2点（19.2g）、剥片20点（112.9g）が出土し、うち剥片2点（3.6g）は黒曜石である。第29号掘立柱建物跡と共有する柱2（第1127号ピット）からは石鏃1点（前述）、U.F.2点（19.5g）、R.F.1点（2.0g）、剥片10点（70.4g）が出土している。

〔小結〕本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉以降のものと考えられる。 (最上)

第31号掘立柱建物跡（SB31：図31・37）

〔位置・確認〕VE-68グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

〔重複〕第1070号ピットと重複し、新旧関係は不明である。

〔平面形・規模〕6本柱で構成される建物跡で、平面形は南北に長い亀甲形である。柱間距離は主軸柱5-6間が5.8m、梁行が柱3-4間で3.7m、桁行が柱2-3間で3.9mである。桁行がやや長く、張出部が両側ともやや長い構造である。

〔柱穴・堆積土〕柱穴の規模は掘方長軸が60～108cm、検出面からの深さが深いものでも約70cmと、他の掘立柱建物跡の柱穴と比較しても小規模である。各柱穴の堆積土は黒褐色土及び暗褐色土が主体である。柱3・6からは直径23～44cmの柱痕が検出された。

〔出土遺物〕土器は第III群B1類・F類・G類が出土した（図37-1～6）。1は第III群B1類、2～4は第III群F類である。4は柱3（第1132号ピット）の掘方堆積土から出土した土器で、充填繩文と一段低く整形された無文部とがみられる。5・6は第III群G類である。石器は、石鏃1点（図37-7）、石核1点（27.7g）、R.F.2点（18.7g）、剥片17点（159.5g）、石錐1点（図37-8）が出土した。石核は長軸42mm、幅39mm、厚さ18mmの黒曜石である。最終剥離面から推測される剥片は、原礫径に比例し小型である。

〔小結〕本遺構は環状に分布する掘立柱建物跡群から南側にやや離れて位置する。平面形は南北に長い亀甲形で柱穴は全体的に小規模である。本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期後葉のものと考えられる。 (加藤)

第32号掘立柱建物跡 (SB32 : 図32・37)

【位置・確認】 VD-64グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

【重複】 第33号掘立柱建物跡と重複し、本遺構が新しい。位置関係、主軸方位、柱穴規模の近似性などから、第33号掘立柱建物跡廃絶後の建て替え等の可能性も考えられる。この他複数のピットと重複するが、新旧関係等の詳細は一覧表に示した。

【平面形・規模】 6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸柱5-6間が4.5m、梁行が柱3-4間で4.2m、桁行が柱1-4間で3.7mである。梁行が長く、張出部が両側ともに短い構造である。

【柱穴・堆積土】 柱穴の規模は、他の掘立柱建物跡と比較して特に大きく、掘方長軸が130~199cm、検出面からの深さが76~110cmである。各柱穴の堆積土は黒褐色土及び暗褐色土が主体である。各柱穴には径21~45cmの柱痕が認められ、掘方部分は礫を多く含む土で裏込めされている。柱痕径は掘方の平面規模と比して小さく、他の掘立柱建物跡とほぼ同規模である。柱1の北壁には巨礫が存在する。巨礫についての詳細は第33号掘立柱建物跡の項で後述する。

【出土遺物】 土器は第III群B類・C類が出土した。図37-9は第III群B2類の鉢形土器片である。口縁部が内湾し、横位の縄文帯が施文されている。石器は、石鏃1点(0.4g)、R.F.1点(20.5g)、剥片23点(156.9g)が出土した。

【小結】 本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉以降のものと考えられる。

第33号掘立柱建物跡 (SB33 : 図32・37)

【位置・確認】 VD-64グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

【重複】 第32号掘立柱建物跡と重複し、本遺構が古い。この他複数のピットと重複するが、新旧関係等の詳細は一覧表に示した。

【平面形・規模】 6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸柱5-6間が4.6m、梁行が柱1-2間で4.3m、桁行が柱2-3間で3.6mである。梁行が長く、張出部が両側ともに短い。

【柱穴・堆積土】 柱穴の規模は、他の掘立柱建物跡と比較して特に大きく、掘方長軸が約110~220cm、検出面からの深さが88~124cmである。各柱穴の堆積土は黒褐色土及び暗褐色土が主体である。柱1・3~6には径約20~40cmの柱痕が認められ、掘方部分は礫を多く含む土で裏込めされている。柱痕径は掘方の平面規模と比して小さく、他の掘立柱建物跡とほぼ同規模である。柱1の周囲には巨礫が2石存在する。巨礫間の距離は直線距離で約1mである。巨礫の規模は、西壁側の巨礫が約120×100cm、北壁側の巨礫が約130×100cmを測る。両巨礫の最上面の高さは遺構検出面から約50~60cm高い。包含層の厚さを考慮しても、両巨礫は本遺構の構築時に地表面から露出していた可能性がある。巨礫は第V層中の自然礫で、人為的に動かされた痕跡等はみられなかった。

【出土遺物】 土器は第III群B類・C類が出土した。図37-10~13は第III群B1類土器である。10は口唇波頂部に刺突文が施されている。石器は石鏃2点(図37-14・15)、U.F.2点(10.1g)、R.F.3点(7.8g)、剥片33点(188.0g)、圓石1点(図37-16)が出土した。土製品は1点出土した。小片のため図示しなかったが、柱4(第1524号ピット)から棒状粘土製品が1点出土した。

【小結】 本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉以降のものと考えられる。

第34号掘立柱建物跡 (SB34 : 図33・37)

〔位置・確認〕 VD-62グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

〔重複〕 本遺構の西側半分ほどが第35号掘立柱建物跡と重複関係にある。新旧関係は、構成柱穴の直接の重複関係が認められないため不明である。なお、VA～C-61・62グリッド付近で検出した沢3の堆積は、柱3の土層観察から本遺構構築後のものと考えられる。

〔平面形・規模〕 6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸柱5-6間が3.7m、梁行が柱1-2間で3.6m、桁行が柱2-3間で2.9mと、他の掘立柱建物跡と比較して小規模である。梁行が長く、張出部が両側ともに短い構造である。

〔柱穴・堆積土〕 柱穴の規模は掘方長軸が102～151cm、検出面からの深さが46～85cmである。各柱穴の堆積土は暗褐色土が主体である。柱1・3・4・6には直径28～47cmの柱痕が認められ、掘方部分は礫を多く含む土で裏込めされている。

〔出土遺物〕 土器は第III群B1類・D類が出土した(図37-17～19)。17は第III群B1類、18は第III群D1類である。18は頸部に有段の屈曲を有し、胸部に鋸歯状文が施文されている。19はO段多条の異方向回転施文による羽状綱文がみられる。施文手法が遺構外出土の図101-22に類似し、第III群D2類とした。石器はU.F.1点(14.1g)、R.F.2点(34.0g)、剥片17点(117.1g)が出土した。

〔小結〕 本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期中葉頃のものと考えられる。

第35号掘立柱建物跡 (SB35 : 図33・37)

〔位置・確認〕 VD-62グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

〔重複〕 本遺構の東側半分ほどが第34号掘立柱建物跡と重複関係にある。構成柱穴の直接の重複関係が認められないため、新旧関係は不明である。柱3は縄文時代後期前葉の十腰内I式期と考えられる第2344号ピットと重複し、本遺構が古い。この他複数のピットと重複するが、新旧関係等の詳細は一覧表に示した。

〔平面形・規模〕 6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸柱5-6間が5.1m、梁行が柱1-2間で4.6m、桁行が柱2-3間で3.8mである。梁行が長く、張出部が両側ともに短い構造である。

〔柱穴・堆積土〕 柱穴は掘方長軸が約100～150cmの円形及び楕円形で、検出面からの深さが54～96cmである。各柱穴の堆積土は暗褐色土及び褐色土が主体である。柱4には径約40cmの柱痕が認められ、掘方部分は礫を多く含む土で裏込めされている。

〔出土遺物〕 土器は第III群B1類が出土した(図37-20・21)。石器は、スクレーパー1点(35.8g)、U.F.1点(30.1g)、R.F.1点(3.6g)、剥片33点(1035.2g)が出土した。剥片33点中24点(980.6g)は、柱1の堆積土からまとめて出土した。いずれも珪質頁岩の縦長剥片で同一母岩のものも認められるが、接合関係はみられなかった。

〔小結〕 本遺構の時期は、出土遺物及び重複関係から縄文時代後期前葉頃のものと考えられる。(最上)

第36号掘立柱建物跡 (SB36 : 図33・37)

〔位置・確認〕 VL-55グリッドに位置する。第V層上面で確認した。柱2・3は平成22年度調査で検出、精査が行われたものである。

〔重複〕 第113号堅穴住居跡の壁周溝(第4号溝跡)と本遺構の柱5(第2382号ピット)が重複し、新

旧関係は本遺構の方が古い。この他複数のビットと重複するが、新旧関係等の詳細は一覧表に示した。

〔平面形・規模〕6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸柱5~6間に4.1m、梁行が柱1~2間に4.4m、桁行が柱1~4間に3.0mである。梁行が長く、張出部が両側ともに短い構造である。

〔柱穴・堆積土〕柱穴の規模は掘方長軸が約100~140cm、検出面からの深さが約40~80cmである。各柱穴の堆積土は暗褐色土及び褐色土が主体である。柱3を除くすべての柱穴で柱痕を確認した。柱痕の規模は、直径25~50cm程度である。

〔出土遺物〕土器は第III群B1類・C類・F類土器が出土している。図37-22は第III群F類で、帶縄文と貼縫がみられる。石器はR.F.1点(5.7g)、剥片29点(225.7g)が出土した。

〔小結〕本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期後葉のものと考えられる。

第37号掘立柱建物跡 (SB37: 図34・37)

〔位置・確認〕VM-55グリッドを中心に位置する。第V層上面で確認した。柱2・3は平成22年度調査で検出、精査が行われたものである。

〔重複〕柱4が第112号竪穴住居跡と重複し、柱6が第113号竪穴住居跡の壁周溝(第4号溝跡)と接するが新旧関係は明らかにできなかった。この他重複のビットと重複するが、新旧関係等の詳細は一覧表に示した。

〔平面形・規模〕6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸柱5~6間に5.3m、梁行が柱3~4間に4.7m、桁行が柱1~4間に4.3mである。梁行が長く、張出部が両側ともに短い構造である。

〔柱穴・堆積土〕柱穴の規模は掘方長軸が約130~150cm、検出面からの深さが約50~80cmである。各柱穴の堆積土は暗褐色土及び褐色土が主体である。すべての柱穴で柱痕を確認した。柱痕の規模は直径30~50cm程度である。柱4の柱痕は南側に向かって傾いており、底面では灰黄褐色土の硬化面を確認した。

〔出土遺物〕土器は第III群B1類・C類・F類が出土した。図37-23は柱4(第1974号ビット)の掘方堆積土から出土した第III群F類土器である。口縁部には突起がみられる。異種原体による羽状縄文と一段低く整形された無文部がみられる。石器は石鏃1点(2.0g)、石匙1点(15.7g)、U.F.4点(57.6g)、剥片43点(407.8g)、蔽石1点(図37-24)が出土した。

〔小結〕図示しなかったが、柱4(第1974号ビット)の掘方の堆積土から採取した炭化物について放射性炭素年代を測定した結果、 $3,550 \pm 20$ yrBPの年代値が得られている(第4章第1節参照)。本遺構の時期は、出土遺物から推定すると縄文時代後期後葉のものと考えられる。

第38号掘立柱建物跡 (SB38: 図34・37)

〔位置・確認〕V0-56グリッドを中心に位置し、第V層上面で確認した。柱2・3・5は平成22年度調査で検出、精査が行われたもので、柱1・4・6は、柱痕の有無や位置関係等から柱2・3・5と組み合う掘立柱建物跡と判断した。

〔重複〕柱1が第111号竪穴住居跡の柱穴(第2521号ビット)と重複し、本遺構が新しい。本遺構の柱5は第15号掘立柱建物跡(第513集にて既報告)の柱6と柱穴を共有している。調査段階では明らかにできなかったが、柱5は複数の柱穴が重複していた可能性が高い。この他複数のビットと重複す

るが、新旧関係等の詳細は一覧表に示した。

〔平面形・規模〕 6本柱で構成される建物跡で、平面形は扁平な亀甲形である。柱間距離は主軸柱5-6間が5.1m、梁行が柱3-4間で4.5m、桁行が柱2-3間で3.8mである。梁行が長く、張出部が両側ともに短い構造である。

〔柱穴・堆積土〕 柱穴の規模は掘方長軸が約115~175cm、検出面からの深さが約40~70cmである。各柱穴の堆積土は暗褐色土及び褐色土が主体である。すべての柱穴で柱痕を確認した。柱痕の規模は、直径30~60cm程度である。柱4の底面付近では硬化面を確認している。

〔出土遺物〕 土器は第III群B1類・F類・G類が出土した。図37-25は第III群F類で、口縁部に貼瘤がみられる。石器はR.F.3点(11.8g)、剥片17点(83.1g)が出土した。

〔小結〕 本遺構の時期は、出土遺物及び第111号堅穴住居跡との重複関係から縄文時代後期後葉のものと考えられる。

第39号掘立柱建物跡 (SB39 : 図34・37)

〔位置・確認〕 VB-69グリッドを中心に位置する。第V層上面で確認した。

〔重複〕 重複する遺構はないが、柱1は調査区域外に延びている。

〔平面形・規模〕 4本柱で構成される建物跡で、平面形は方形である。柱間距離は南北方向の柱穴3-4間が4.1m、東西方向の柱2-3間が3.7mで、南北方向がやや長い。

〔柱穴・堆積土〕 柱穴の規模は掘方長軸が約70~140cm、検出面からの深さが約40~70cmである。柱穴の堆積土は暗褐色土ないしは褐色土が主体である。柱痕は、柱3・4では柱痕を確認した。柱痕の規模は直径35~40cm程度である。

〔出土遺物〕 土器は第III群B1類・F類・G類が出土した。図37-26~28は第III群F類である。27は貼瘤を起点とする幅狭の帶縄文が施文されている。28には格子目文が施文されている。図37-29は第III群G類で、口唇部が内傾する無文の深鉢形土器片である。石器は石鏃1点(0.8g)、石匙1点(2.8g)、R.F.3点(58.8g)、U.F.2点(26.7g)、剥片14点(29.8g)が出土した。土製品は2点出土した。いずれも小片のため図示しなかつたが、柱4(第1140号ピット)からミニチュア土器の口縁部及び底部が出土した。

〔小結〕 本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期後葉のものと考えられる。

第40号掘立柱建物跡 (SB40 : 図35・37)

〔位置・確認〕 IVT-67グリッドを中心に位置し、第V層上面で確認した。

〔重複〕 第41号掘立柱建物跡とは柱3を共有しており、同柱は建て替え等の可能性も考えられるが、複数の柱穴の切り合いという痕跡は確認できなかった。

〔平面形・規模〕 4本柱で構成される建物跡で、平面形は方形である。柱間距離は南北方向の柱3-4が2.0m、東西方向の柱1-4が1.9mで、南北方向がやや長い。後述する第41号掘立柱建物跡とは、建物の軸方向が東へ15°程度振れている。

〔柱穴・堆積土〕 柱穴の規模は掘方長軸が約60~140cm、検出面からの深さが約40~50cmである。柱1を除くすべての柱穴で柱痕を確認した。柱痕の規模は直径20~40cm程度である。

〔出土遺物〕 土器は第III群B1類・D1類が出土した。図37-30は柱4(第1326号ピット)の掘方堆積土から出土した第III群D1類土器で、鋸歯状文が施文されている。石器はスクレーパー1点(0.6

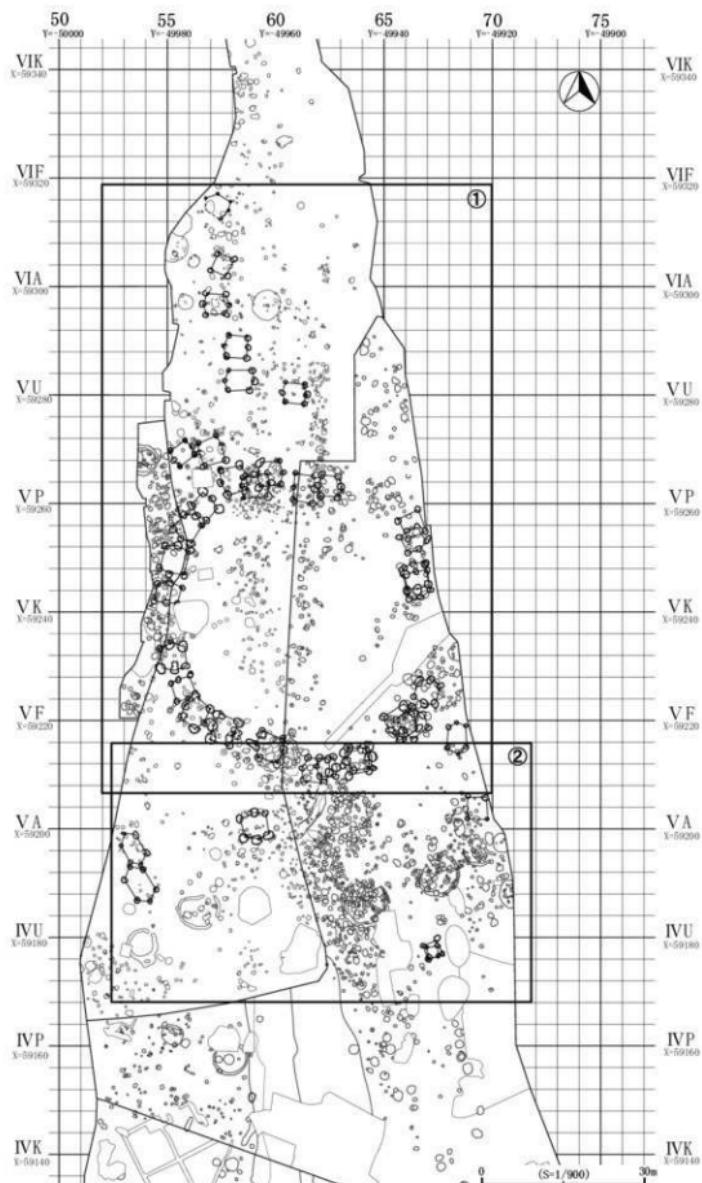


図25 A区掘立柱建物跡掲載区分図

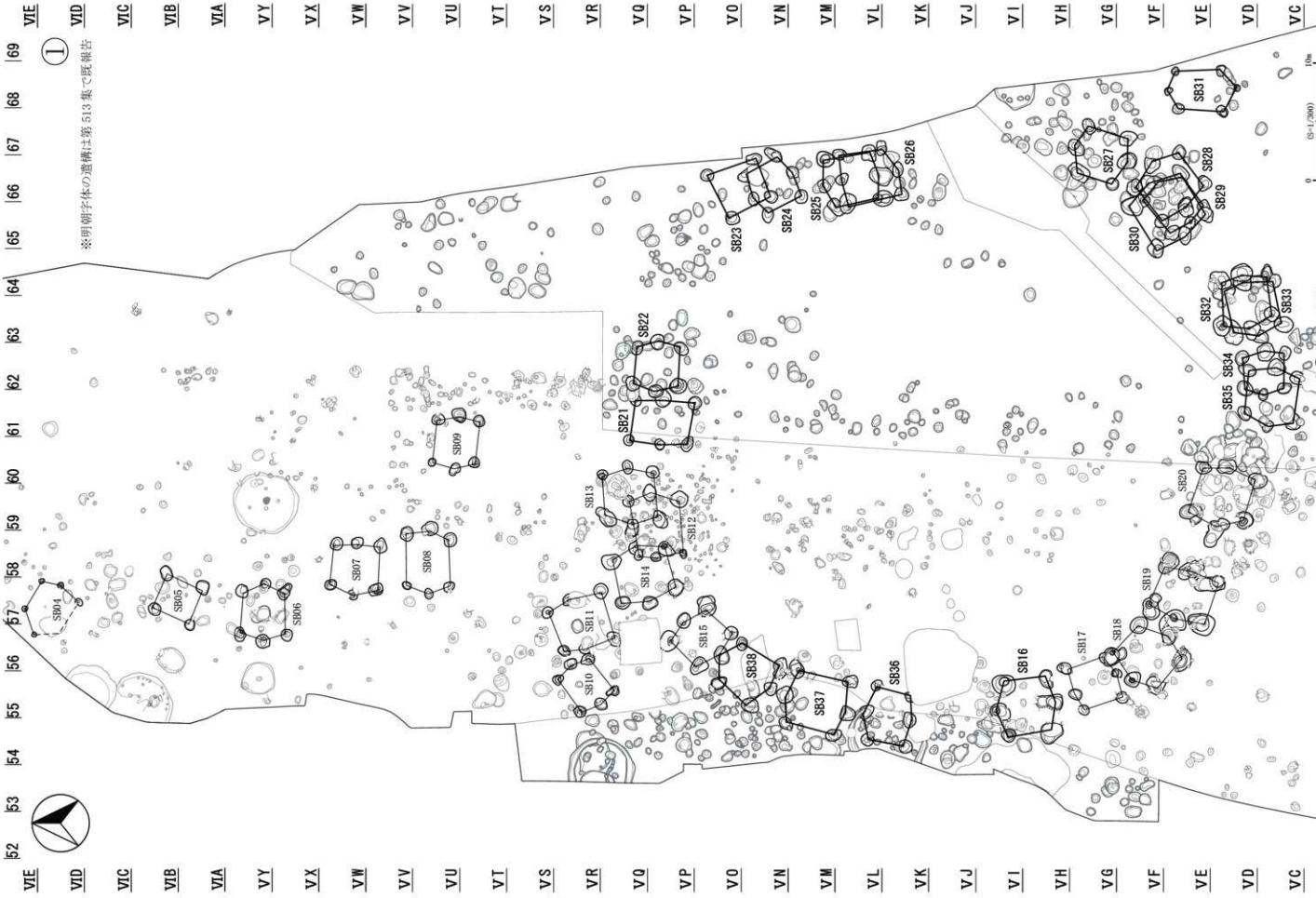


図26 A区掘立柱建物跡配置図（1）

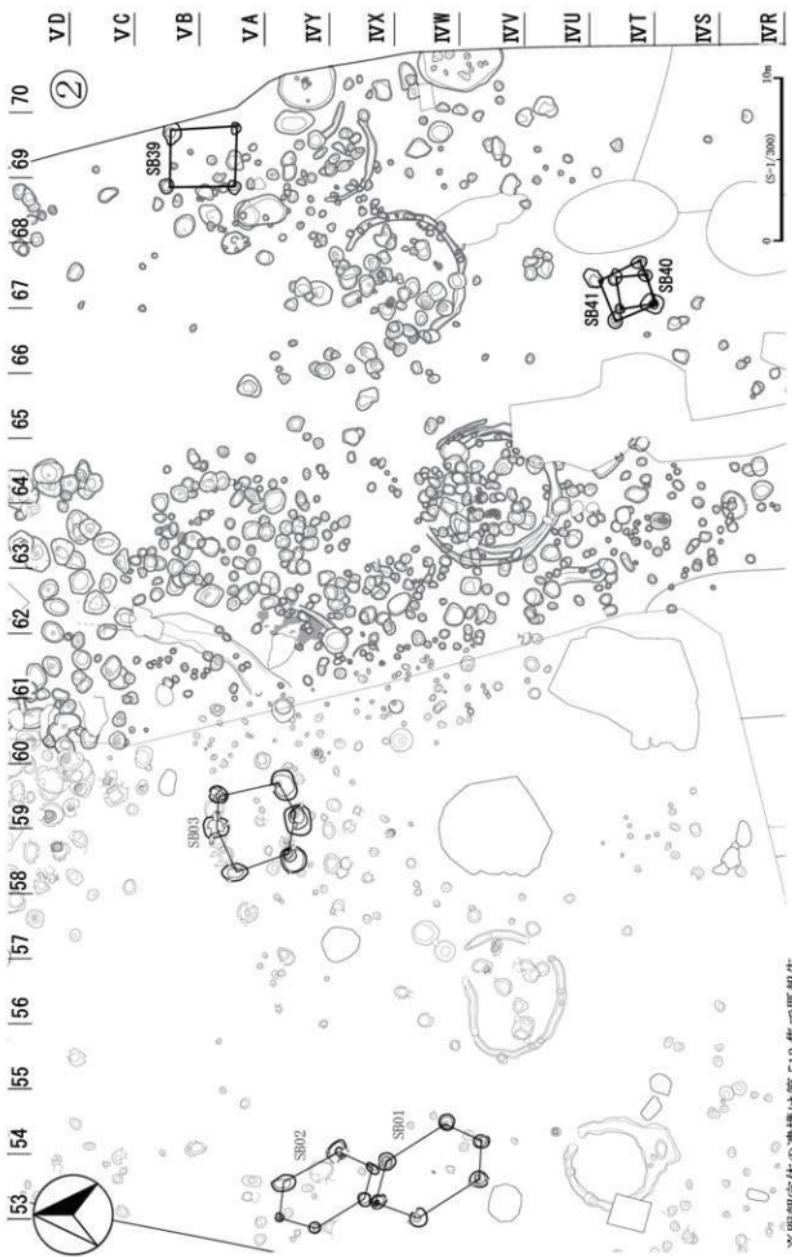


図27 A区掘立柱建物跡配置図（2）

※明朝字体の遺構は第513集で既報告

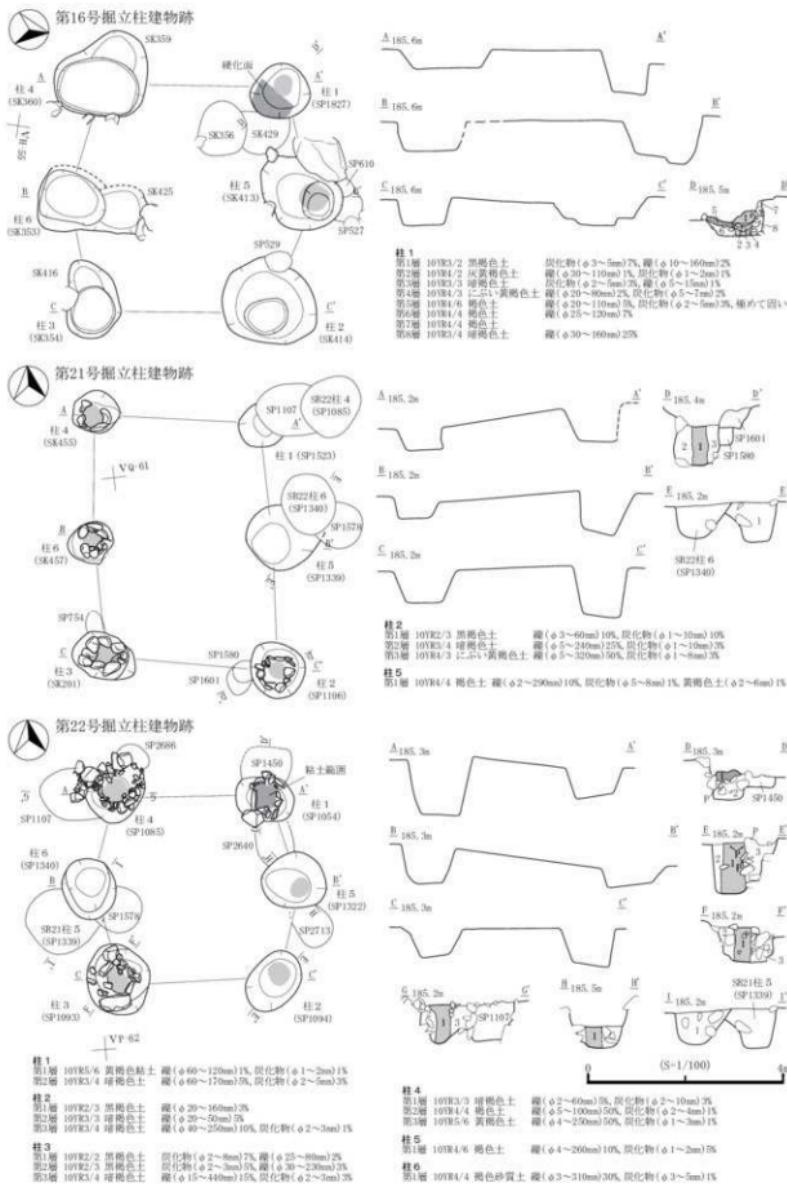


图28 A区掘立柱建物跡（1）

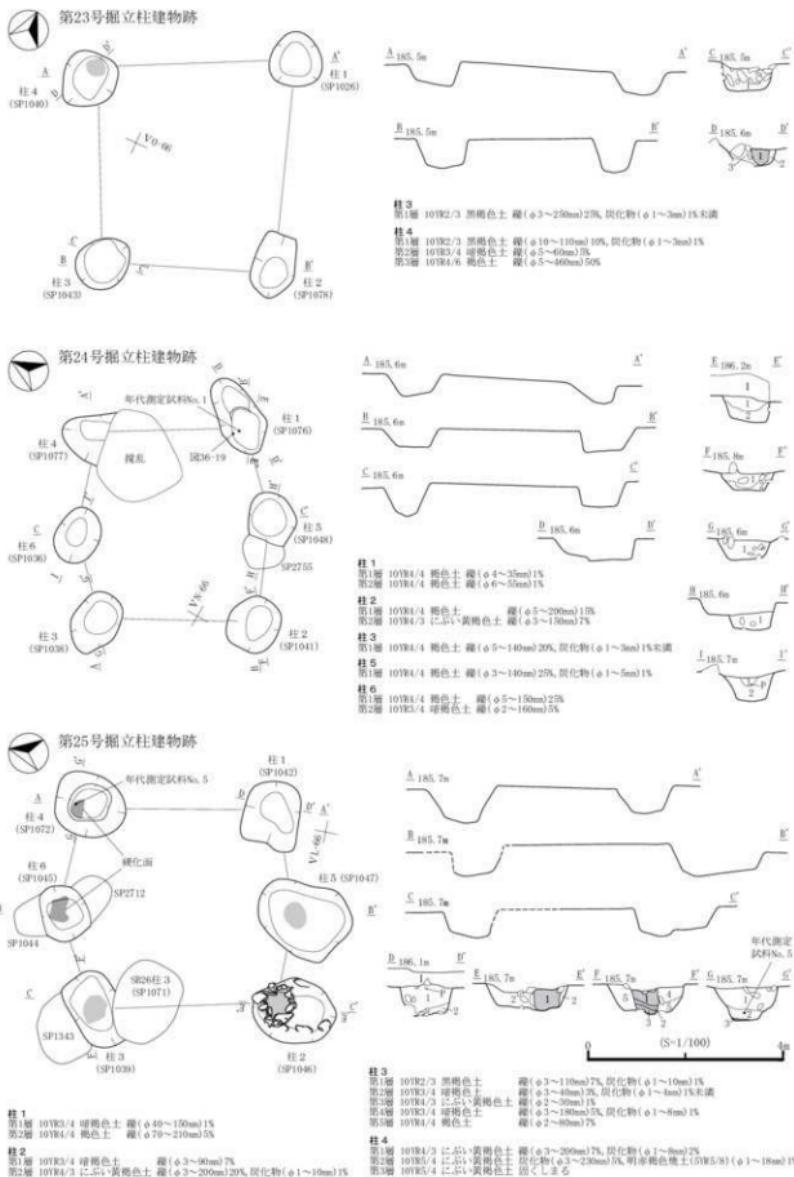
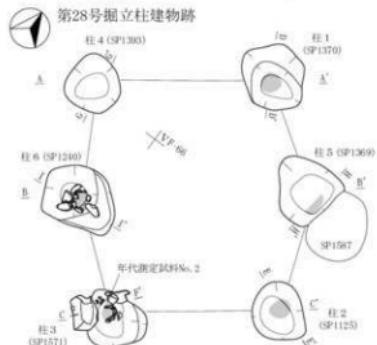
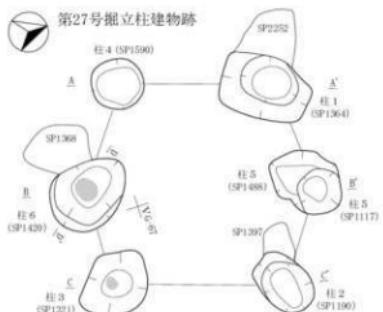
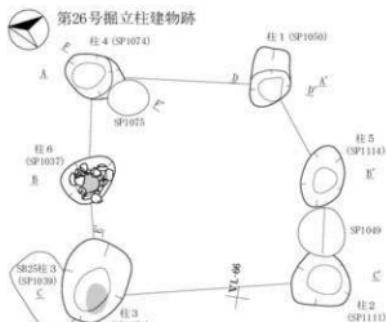


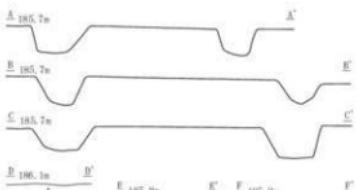
図29 A区掘立柱建物跡（2）



柱1
第1層 10TR2/3 砂褐色土 種(Φ 5~150mm)50%, 塩化物(Φ 1mm)15%
第2層 10TR4/4 粗粒土 種(Φ 5~100mm)25%, 塩化物(Φ 1mm)2%
第3層 10TR5/3 黄褐色土 種(Φ 5~160mm)25%, 塩化物(Φ 1mm)1%

柱2
第1層 10TR3/3 砂褐色土 種(Φ 3~190mm)7%, 塩化物(Φ 1~4mm)1%
第2層 10TR4/4 粗粒土 種(Φ 3~110mm)30%, 塩化物(Φ 1~4mm)2%
第3層 10TR5/3 黄褐色土 種(Φ 5~160mm)25%, 塩化物(Φ 1mm)1%
第4層 10TR2/3 粘土質褐色土 種(Φ 20~100mm)18%

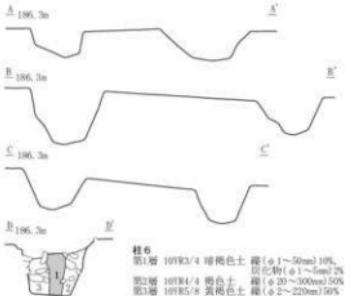
柱3
第1層 10TR3/4 砂褐色土 種(Φ 5~90mm)10%, 塩化物(Φ 1~25mm)10%
第2層 10TR4/6 粗粒土 種(Φ 5~100mm)35%, 塩化物(Φ 1~4mm)5%
第3層 10TR5/6 黄褐色土 種(Φ 4~210mm)20%, 塩化物(Φ 1~2mm)2%
第4層 10TR5/4 上・下・中・下部褐色土 種(Φ 1~50mm)15%, 塩化物(Φ 1~10mm)3%
第5層 10TR2/3 上・下・中部褐色土 種(Φ 4~30mm)10%



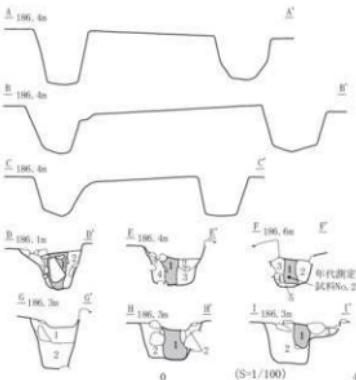
柱1
第1層 10TR1/4 砂褐色土 種(Φ 3~130mm)7%, 塩化物(Φ 1~10mm)1%

柱3
第1層 10TR1/3 砂褐色土 種(Φ 10~20mm)10%, 塩化物(Φ 1~3mm)5%
第2層 10TR1/3 にい・黄褐色土 種(Φ 10~40mm)30%

柱4
第1層 10TR3/4 砂褐色土 種(Φ 20~40mm)3%
第2層 10TR4/4 粗粒土 種(Φ 30~300mm)15%



柱6
第1層 10TR3/4 粗粒土 種(Φ 1~50mm)10%,
塩化物(Φ 1~5mm)2%
第2層 10TR5/8 黄褐色土 種(Φ 2~220mm)50%



柱4
第1層 10TR3/4 砂褐色土 種(Φ 3~37mm)25%, 塩化物(Φ 1~3mm)1%濃
第2層 10TR3/4 粗粒土 種(Φ 20~40mm)7%

柱5
第1層 10TR3/4 砂褐色土 塩化物(Φ 3~7mm)5%, 種(Φ 20~80mm)5%
第2層 10TR3/4 粗粒土 塩化物(Φ 3~7mm)5%, 種(Φ 20~80mm)5%

柱6
第1層 10TR3/3 砂褐色土 種(Φ 3~140mm)20%, 塩化物(Φ 1~3mm)1%濃
第2層 10TR4/4 粗粒土 種(Φ 3~30mm)40%
第3層 10TR4/4 黄褐色土 種(Φ 3~150mm)20%

図30 A区掘立柱建物跡 (3)

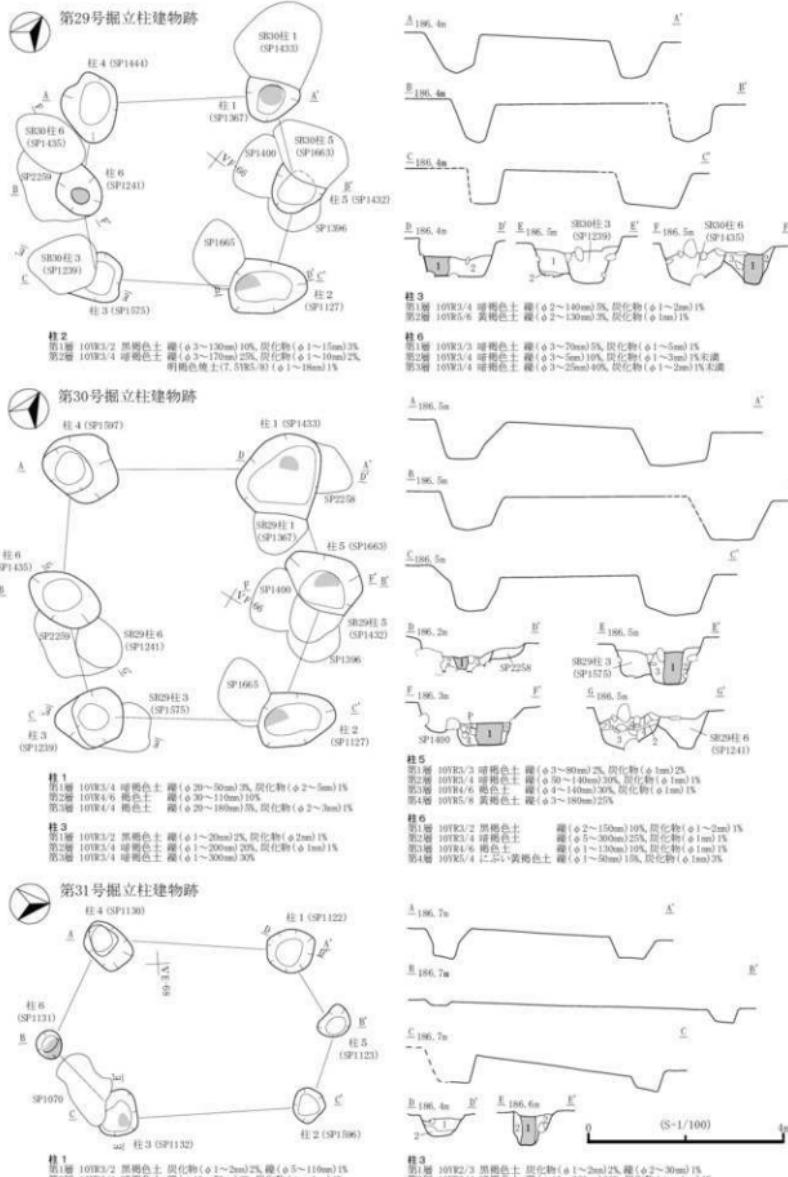
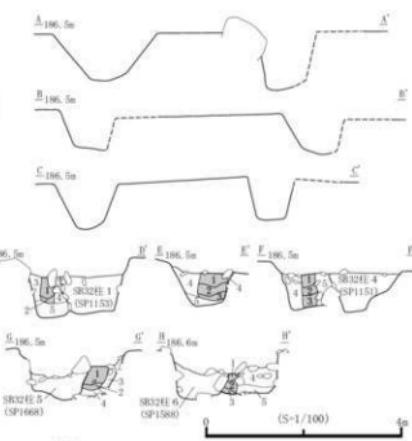
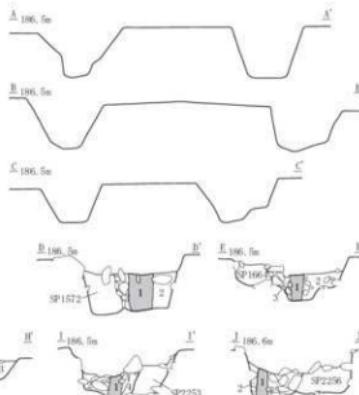
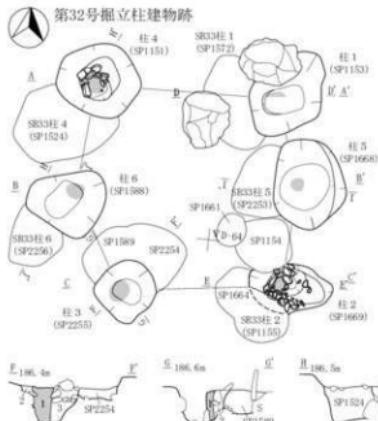


图31 A区掘立柱建物跡（4）



柱1	第1層 10YR2/4 混褐色土 廉化物(φ 5~10mm)7%, 繩(φ 20~70mm)3% 第2層 10YR4/2 12.5-1 黄褐色土 繩(φ 5~70mm)10% 第3層 10YR4/4 黄褐色土 繩(φ 30~160mm)5%, 廉化物(φ 2~7mm)3% 第4層 10YR2/6 黄褐色土 繩(φ 50~70mm)8%
柱2	第1層 10YR2/4 混褐色土 繩(φ 5~10mm)7%, 廉化物(φ 1~15mm)2% 第2層 10YR4/2 12.5-1 黄褐色土 繩(φ 5~70mm)10%未満
柱3	第1層 10YR4/2 黄褐色土 繩(φ 5~35mm)2%, 廉化物(φ 1~5mm)1% 第2層 10YR2/2 黑褐色土 廉化物(φ 1~2mm)2%, 繩(φ 5~30mm)1% 第3層 10YR4/4 黄褐色土 繩(φ 2~160mm)20%, 廉化物(φ 1~1mm)1% 第4層 10YR3/4 混褐色土 繩(φ 2~360mm)20%, 廉化物(φ 1~1mm)1%未満

図32 A区掘立柱建物跡（5）

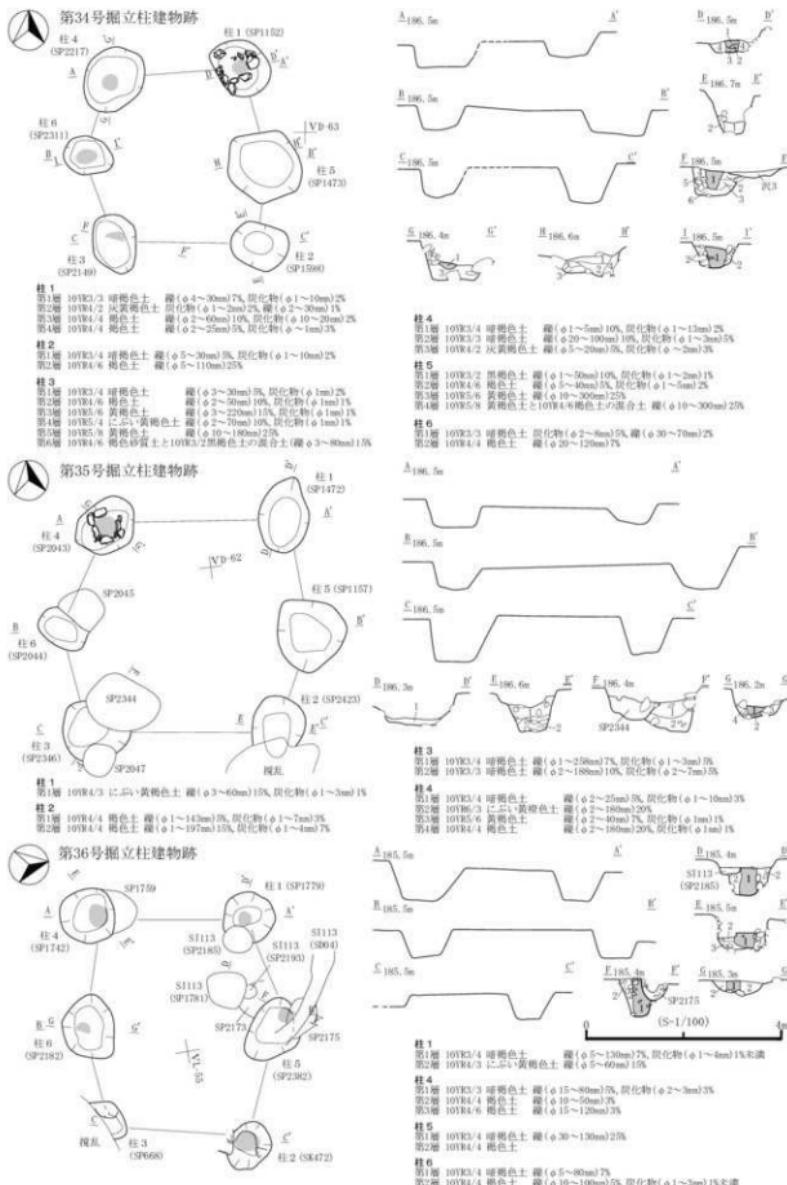


図33 A区掘立柱建物跡（6）

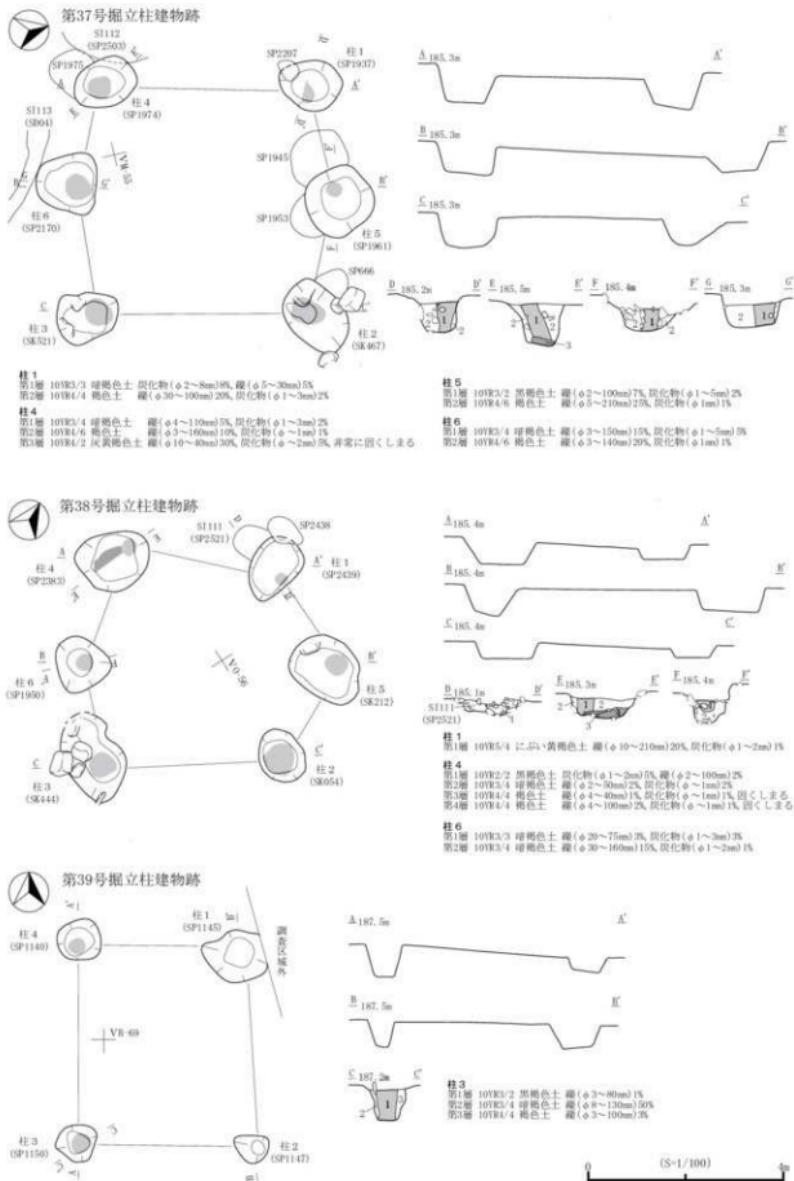


図34 A区掘立柱建物跡 (7)

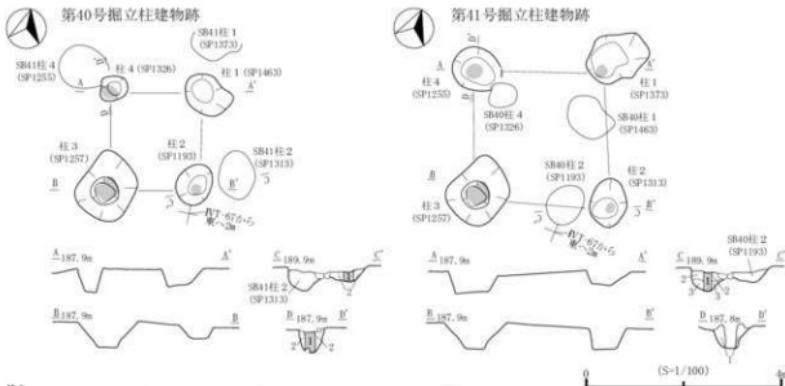


図35 A区掘立柱建物跡（8）

g)、剥片3点(16.1g)が出土した。このうち第41号掘立柱建物跡と共有する柱3(第1257号ピット)からは剥片2点(11.6g)、スクレーパー1点(前述)が出土している。

〔小結〕本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期中葉のものと考えられる。

第41号掘立柱建物跡 (SB41: 図35)

〔位置・確認〕IVT-67グリッドを中心に位置し、第V層上面で確認した。

〔重複〕第40号掘立柱建物跡とは柱3を共有している。前述の通り同柱は建て替え等の可能性も考えられるが、複数の柱穴の切り合いという痕跡は確認できなかった。

〔平面形・規模〕4本柱で構成される建物跡で、平面形は方形である。柱間距離は南北方向の柱1-2が2.9m、東西方向の柱2-3が2.8mで、南北方向がやや長い。前述の第40号掘立柱建物跡とは、建物の軸方向が西へ15°程度振れている。

〔柱穴・堆積土〕柱穴の規模は掘方長軸が約100~140cm、検出面からの深さが約30~55cmである。すべての柱穴で柱痕を確認した。柱痕の規模は直径20~40cm程度である。

〔出土遺物〕土器は図示していないが、第III群B類の小破片が少量出土している。石器は剥片2点(32.9g)が出土した。これに加え、前述した第40号掘立柱建物跡と共有する柱3からの出土石器がある。

〔小結〕本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉以降のものと考えられる。 (加藤)

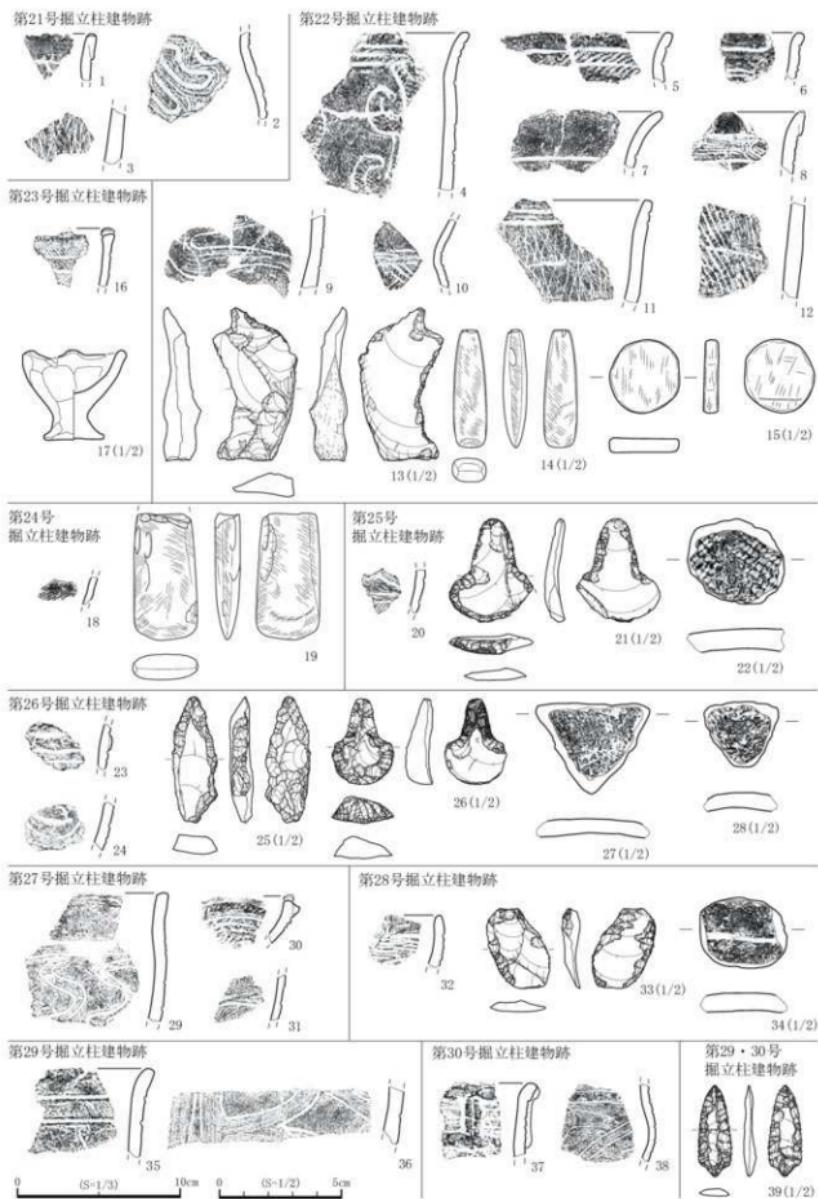
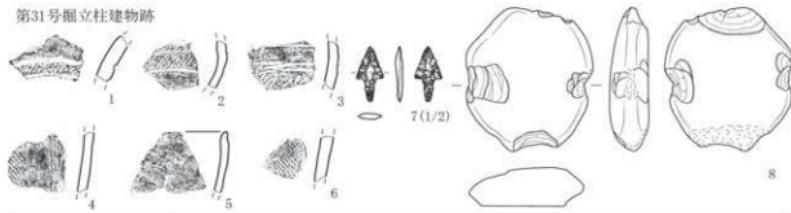
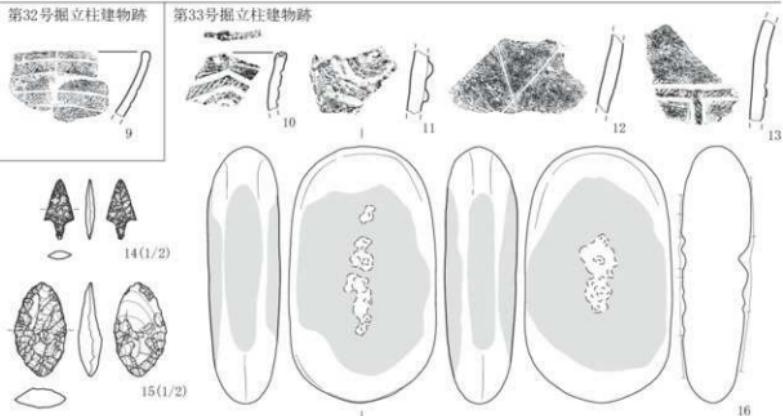


图36 A区掘立柱建物跡出土遺物 (1)

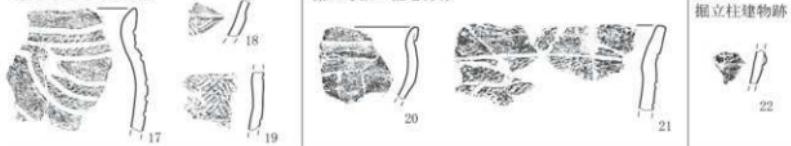
第31号掘立柱建物跡



第32号掘立柱建物跡



第34号掘立柱建物跡



第35号掘立柱建物跡

第36号
掘立柱建物跡

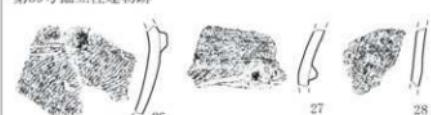
第37号掘立柱建物跡



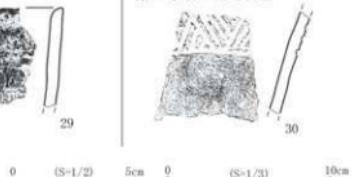
第38号掘立柱建物跡



第39号掘立柱建物跡



第40号掘立柱建物跡



0 (S-1/2) 5cm 0 (S-1/3) 10cm

图37 A区掘立柱建物跡出土遺物 (2)

3 土器埋設遺構（図4・38）

土器埋設遺構は4基検出した。第101・102号土器埋設遺構は欠番、第104・105号土器埋設遺構は第104号堅穴住居跡の土器埋設炉である。

第100号土器埋設遺構（SR100）

【位置と確認】VA・B-64グリッドに位置する。第IV層で確認した。

【重複】第105号堅穴住居跡の第1163号ピットと重複し、本遺構が新しい。

【平面形・規模】土器は正立で埋設され、口縁部及び底部を欠損する。掘方は径31cmの円形で、深さは18cmである。

【堆積土】2層に分層した。1層は土器内堆積土、2層は掘方と考えられる。1層下部からは直径約16cmの自然礫が出土した。

【出土遺物】第III群B1類の深鉢形土器が出土した（図38-1）。口縁部と底部を欠く胴部の復元個体で、2条単位の沈線による方形区画文が施文されている。石器はU.F.2点（11.8g）が出土している。

【小結】本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉のものと考えられる。

第103号土器埋設遺構（SR103）

【位置と確認】IVP-67グリッドに位置する。第IV層で確認した。

【平面形・規模】土器は正立で埋設され、口縁部及び底部を欠損する。掘方は長軸26cmのほぼ円形で、深さは10cmである。

【堆積土】2層に分層した。1層は土器内堆積土、2層は掘方と考えられる。

【出土遺物】第III群A類の深鉢形土器の胴部破片が出土した（図38-2）。現存状況が良好でなく、復元個体にはならなかった。地文縄文に三角形区画文が施文されている。

【小結】本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期初頭のものと考えられる。

第106号土器埋設遺構（SR106）

【位置と確認】IVS-63グリッドに位置する。第III層を精査中に確認した。

【平面形・規模】土器は横位で埋設され、胴部上半を欠損する。本遺構の周辺に56×43cmの不整形の範囲にまばらな焼土範囲を確認した。

【堆積土】2層に分層した。1層中には焼土及び炭化物が含まれるが、その量はわずかであり、また土器にも明確な被熱痕は確認できなかった。2層は掘方と考えられるが、平面で確認することはできなかった。

【出土遺物】第III群C類の深鉢形土器が出土した（図38-3）。底部から胴部下半にかけての復元個体である。地文は単節L.Rの斜縄文で、底部に網代痕がみられる。

【小結】堅穴住居跡に伴う土器埋設炉の可能性も考えられるが、焼土の分布がまばらであること、本遺構の周囲に主柱穴と考えられるピットが確認できなかったことから土器埋設遺構とした。本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代中期末葉から後期前葉のものと考えられる。

第107号土器埋設遺構（SR107）

【位置と確認】IVP-63グリッドに位置する。沢4を精査中に確認した。

〔平面形・規模〕土器は正立て埋設され、胴部上半を欠損する。

〔堆積土〕2層に分層した。1層は土器内堆積土、2層は掘方と考えられるが、平面で確認することはできなかった。2層中から7~8cm程度の自然縫が2点出土した。いずれも土器と接して出土しており、土器埋設時に設置されたと考えられる。

〔出土遺物〕第III群C類の深鉢形土器が出土した(図38-4)。底部から胴部下半にかけての復元個体である。地文は無節Rの斜縄文である。

〔小結〕本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代中期末葉から後期前葉のものと考えられる。(葛城)

4 焼土遺構(図4・39)

焼土遺構は12基検出した。第102・114号焼土遺構は欠番、第103~106号焼土遺構は第116号堅穴住居跡、第107・108・112・113号焼土遺構は第105号堅穴住居跡、第109~111号焼土遺構は第104A・B号堅穴住居跡、第116号焼土遺構は第106号堅穴住居跡、第118号焼土遺構は第108号堅穴住居跡、第120号焼土遺構は第109号堅穴住居跡にそれぞれ伴うものである。

第100号焼土遺構(SN100)

〔位置と確認〕VS-64グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

〔平面形・規模〕28×24cmの楕円形を呈する。

〔堆積土〕土層図は作成しなかったが、赤褐色焼土がブロック状に堆積している。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔小結〕周辺からはピットが検出されたが、規模、分布状況などから堅穴住居跡及び掘立柱建物跡を構成するものではないと判断した。検出層位から縄文時代のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。

第101号焼土遺構(SN101)

〔位置と確認〕VP-65グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

〔平面形・規模〕67×59cmの不整形を呈する。

〔堆積土〕土層図は作成しなかった。火床面は赤褐色を呈するが、焼成の度合いは弱い。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔小結〕本遺構が検出された場所は掘立柱建物跡が環状に分布する範囲にあたる。周辺には複数のピットが分布するが掘立柱建物跡は検出されなかった。検出層位から縄文時代のものと考えられるが、遺物が出土しなかつたため詳細な時期は不明である。

第115号焼土遺構(SN115)

〔位置と確認〕IVC-72グリッドに位置する。捨て場1層上面で確認した。

〔平面形・規模〕98×91cmの不整形を呈する。

〔堆積土〕3層に分層した。火床面の厚さは8cmである。窪地に堆積したと考えられる1層を除き、赤褐色及び暗赤褐色焼土を含む2・3層が火床面と考えられる。2・3層の下面是第IV層である。

〔出土遺物〕図示しなかったが、第III群B類土器の小破片が少量出土した。

〔小結〕 繩文時代後期前葉のものと考えられる捨て場1層上面に構築されていることから、繩文時代後期前葉以降のものと考えられる。

第117号焼土遺構（SN117）

〔位置と確認〕 IVT-64グリッドに位置する。第III層精査中に確認した。

〔平面形・規模〕 47×37cmの不整形を呈する。

〔堆積土〕 2層に分層した。火床面の厚さは6cmである。1層は暗赤褐色焼土を主体とする火床面、2層は掘方もしくはピット堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔小結〕 本遺構の周辺からはピットが検出されたが、規模、分布状況などから竪穴住居跡及び掘立柱建物跡を構成するものではないと判断した。検出層位から繩文時代のものと考えられるが、遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明である。

第119号焼土遺構（SN119）

〔位置と確認〕 VG-61グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

〔平面形・規模〕 26×22cmの不整形を呈する。

〔堆積土〕 褐色焼土を主体とする。火床面の厚さは8cmである。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔小結〕 本遺構の検出位置は、掘立柱建物跡が環状に分布する範囲の内側にある。周辺からはピットが検出されたが、規模、分布状況などから竪穴住居跡及び掘立柱建物跡を構成するものではないと判断した。検出層位から繩文時代のものと考えられるが、遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明である。

第121号焼土遺構（SN121）

〔位置と確認〕 IVS・T-63グリッドに位置する。第III層を精査中に確認した。

〔重複〕 第2577号ピットと重複し、本遺構が新しい。

〔平面形・規模〕 69×61cmの不整形を呈する。

〔堆積土〕 暗褐色土を主体とし、明赤褐色焼土が10%程度含まれる。火床面の厚さは13cmである。

〔出土遺物〕 土器は第III群B1類・C類土器の小破片が少量出土した。図39-1は第III群B1類の深鉢形土器片である。石器はスクレーパー1点(87.5g)、U.F.3点(15.6g)、R.F.1点(1.6g)、剥片2点(72.1g)が出土した。

〔小結〕 本遺構の周辺からはピットがまとまって検出されたが、規模、分布状況などから竪穴住居跡及び掘立柱建物跡を構成するものではないと判断した。また火床面の形成が弱いことから、第2577号ピット堆積土の可能性も考えられる。本遺構の時期は、出土遺物およびピットとの重複関係から繩文時代後期前葉以降のものと考えられる。

第122号焼土遺構（SN122）

〔位置と確認〕 IVP-64グリッドに位置する。第III層精査中に確認した。

〔平面形・規模〕 63×35cmの不整形を呈する。

〔堆積土〕 2層に分層した。1層は褐色焼土を主体とする火床面と考えられる。2層は明確な火床面ではないが、層上部には赤褐色焼土が含まれる。火床面の厚さは11cmである。

〔出土遺物〕 図示しなかったが、第III群B1類土器の小破片が少量出土した。

〔小結〕 周辺からはピットが検出されたが、規模、分布状況などから竪穴住居跡及び掘立柱建物跡を構成するものではないと判断した。本遺構の時期は出土遺物から縄文時代後期前葉以降のものと考えられる。

第123号焼土遺構 (SN123)

〔位置と確認〕 IVK-59グリッドに位置する。沢4を精査中に確認した。

〔平面形・規模〕 59×57cmの不整形を呈する。

〔堆積土〕 暗褐色焼土を主体とする。火床面の厚さは4cmである。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔小結〕 検出状況から縄文時代のものと考えられるが遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明である。

第124号焼土遺構 (SN124)

〔位置と確認〕 IVM-56グリッドに位置する。第III層を精査中に確認した。

〔平面形・規模〕 105×72cmの不整形を呈する。

〔堆積土〕 にぶい赤褐色焼土を主体とする。火床面の厚さは12cmである。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔小結〕 検出層位から縄文時代のものと考えられるが遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明である。

第125号焼土遺構 (SN125)

〔位置と確認〕 IVM-57グリッドに位置する。第III層を精査中に確認した。

〔平面形・規模〕 52×46cmの不整形を呈する。

〔堆積土〕 褐色焼土を主体とする。火床面の厚さは7cmである。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔小結〕 検出層位から縄文時代のものと考えられるが遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明である。

第126号焼土遺構 (SN126)

〔位置と確認〕 IVK-57グリッドに位置する。第III層を精査中に確認した。

〔平面形・規模〕 85×72cmの不整形を呈する。

〔堆積土〕 2層に分層した。1層は暗赤褐色焼土を主体とする火床面である。2層は焼土塊を含むが黒褐色土を主体とし、掘方と考えられる。火床面の厚さは17cmである。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔小結〕 検出層位から縄文時代のものと考えられるが遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明である。

第127号焼土遺構 (SN127)

【位置と確認】 IVP-52グリッドに位置する。第III層を精査中に確認した。調査時には竪穴住居跡に伴う炉として精査した。本遺構の周辺からはピットが検出されたが、規模、分布状況などから竪穴住居跡及び掘立柱建物跡を構成するものではないと判断し、整理作業時に焼土遺構とした。

【平面形・規模】 南側は現代の搅乱で失われているが、残存する焼土範囲は45×24cmの不整形を呈する。焼土の北西側に隣接して長さ24cmの自然縫が出土した。この自然縫の南北には抜き取り痕と考えられる落ち込みを検出した。のことから、本来は石囲炉であった可能性も考えられる。

【堆積土】 4層に分層した。1層は火床面、2~4層は掘方と考えられる。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

【小結】 検出層位から縄文時代のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。

(葛城)

5 構跡 (図40)

3条検出した。第11・13・14・17・20・21・24号構跡は欠番、第1号構跡は第116号竪穴住居跡、第2号構跡は第117号竪穴住居跡、第3号構跡は第118号竪穴住居跡、第4号構跡は第113号竪穴住居跡、第5~8・15号構跡は第104号竪穴住居跡、第9号構跡は第106号竪穴住居跡、第10号構跡は第108号竪穴住居跡、第12号構跡は第109号竪穴住居跡、第18号構跡は第102号竪穴住居跡、第19号構跡は第103号竪穴住居跡の壁周溝と考えられる。

第16号構跡 (SD16)

【位置と確認】 IVT・U-62・63グリッドに位置する。第III層を精査中に確認した。炉が検出されなかったこと及び本遺構の平面形が直線状を呈することなどから構跡として調査を行った。

【重複】 第2098号ピットと重複し、本遺構が古い。また第2670・2703号ピットと重複し、本遺構が新しい。本遺構の周辺にはこの他にも複数のピットが検出されているが、新旧関係は不明である。

【平面形・規模】 南北両端ともにピットとの重複などにより明確ではないが、確認長2.73m、最大幅1.17m、最大深39cmである。

【堆積土】 A-A'・B-B'ラインとともに4層に分層した。検出面からは火山灰が帶状に検出された。

【出土遺物】 土器は第III群B 1類・E類・F類が出土している。図40-1~3は第III群F類である。1は口縁部に突起がみられる。2は第III群F 1類で木葉状入組文が施されている。異種原体による羽状繩文が施され、無文部が一段低く整形されている。石器は、堆積土から石鏃1点(3.2g)、U.F. 1点(44.1g)、R.F. 1点(8.3g)、剥片47点(397.3g)が出土した。

【小結】 周辺の遺構との関係及び出土土器から縄文時代後期後葉のものである可能性が高い。

第22号構跡 (SD22)

【位置と確認】 IVL-55・56グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

【平面形・規模】 長さ2.8m、幅83cmの構造を呈する。深さは32cmである。

【堆積土】 2層に分層した。1層は黒褐色土を主体とする壁際堆積土、2層は暗褐色土を主体とする底面直上土である。第IV層を掘り込んで構築されており、埋没過程で第III層が堆積している。

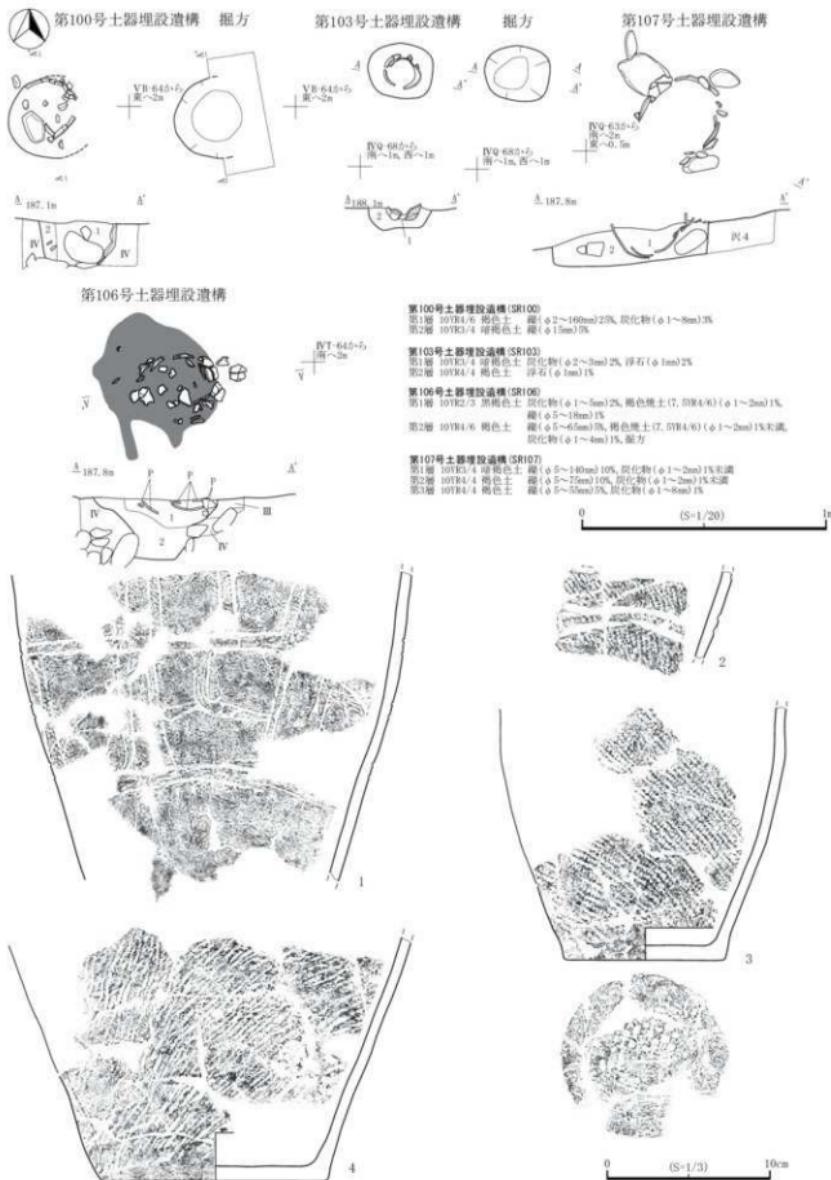


図38 A区土器埋設遺構・出土遺物

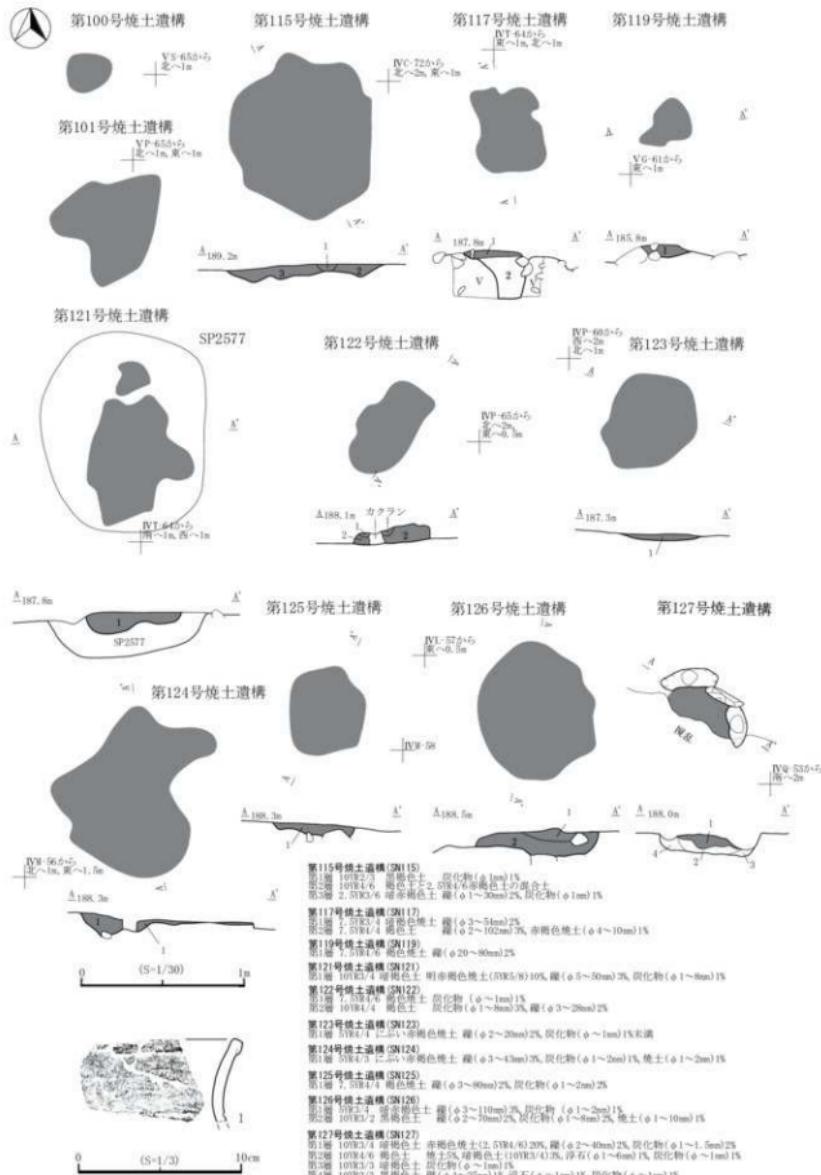


図39 A区焼土遺構・出土遺物

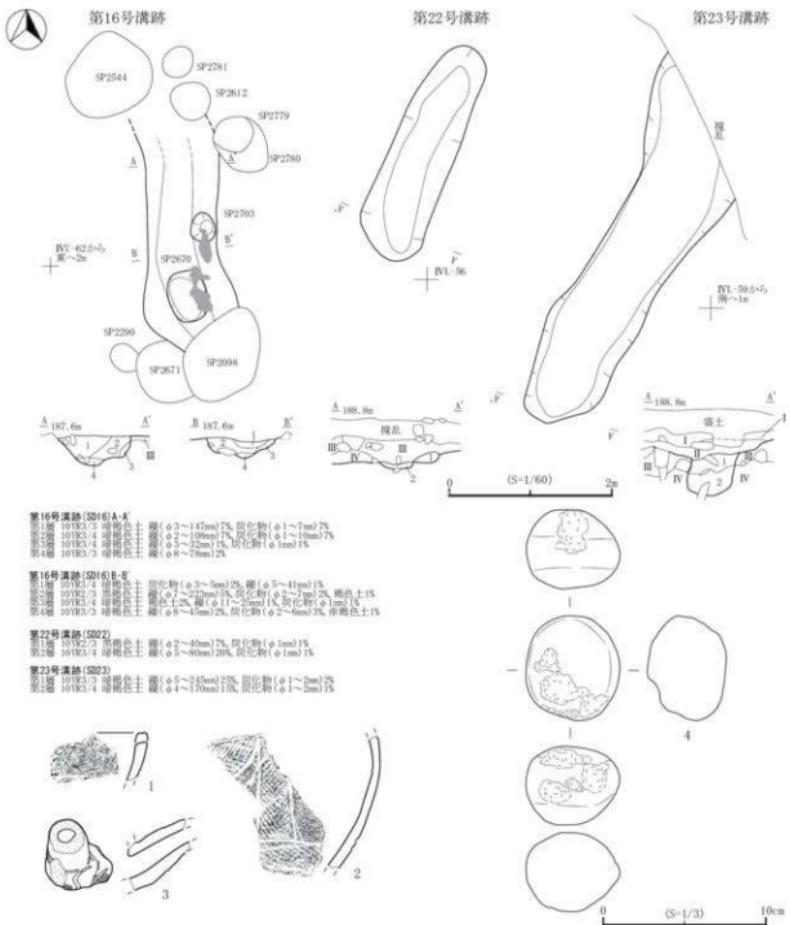


図40 A区溝跡・出土遺物

〔出土遺物〕 遺物は蔽石 1点（図40-4）と剥片 1点（2.8 g）が出土した。

〔小結〕 第III層が堆積していることから縄文時代のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。

第23号溝跡 (SD23)

〔位置と確認〕 IVK・L-58グリッドに位置する。第IV層上面で確認した。

〔平面形・規模〕 北側が現代の搅乱で失われているが、確認長4.75m、幅83cmの直線的な溝状を呈する。深さは62cmである。

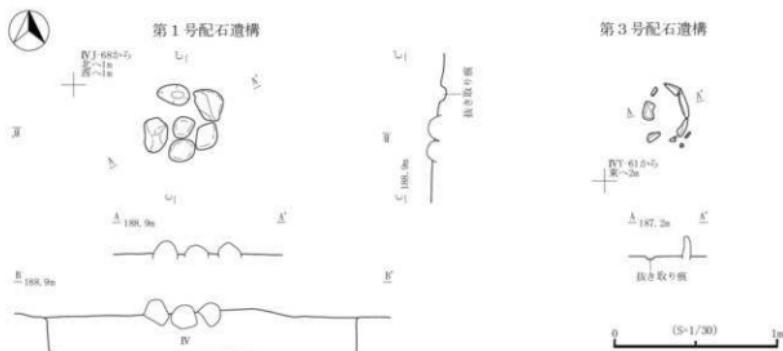


図41 A区配石遺構

〔堆積土〕2層に分層した。いずれも暗褐色土を主体とし自然縞を含む。

〔出土遺物〕図示しなかつたが、第III群B類土器の小片が少量出土している。

〔小結〕出土遺物及び周辺の遺構との関係から縄文時代後期前葉以降のものと考えられる。(葛城)

6 配石遺構(図4・41)

A区中央及び南側からそれぞれ1基ずつ検出した。第2号配石遺構は欠番である。

第1号配石遺構 (SQ01)

〔位置と確認〕A区南側のIVJ-67・68グリッドに位置する。第IV層上面で確認した。

〔平面形・規模〕総数5個の花崗岩と考えられる円礫のうち、直径14cm程度のものを中央に、これより大きい直径20cm程度の4個をその周りに配置する。北側には抜き取り痕が確認されており、本来は6個で構成されていたと考えられる。すべて自然縞である。掘方は確認できなかった。また、本遺構の下部から遺構は検出されなかつた。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかつた。

〔小結〕検出層位から縄文時代のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。

第3号配石遺構 (SQ03)

〔位置と確認〕A区中央部のIVY-61グリッドに位置する。第III層を精査中に確認した。

〔重複〕第106号堅穴住居跡と重複し、検出層位から本遺構が新しい。

〔平面形・規模〕直径5~18cm程度の3個の板状礫を弧状に立位で配置する。東側には抜き取り痕が1ヶ所確認されており、本来は36×29cmの円形を呈していた可能性がある。すべて自然縞である。掘方は確認できなかつた。また、本遺構の周辺には小礫が複数確認されているが、本遺構との関係は不明である。本遺構の下部から遺構は検出されなかつた。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかつた。

〔小結〕検出層位から縄文時代のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。

(葛城)

7 ピット（図42～87）

平成23・24年度調査でA区から検出されたピットは1101基である。整理作業時に全てのピットの再検討を行い、竪穴住居跡、掘立柱建物跡に伴うもの、及び調査時、整理時に欠番としたものを除いたものを下記の分類に従い報告する。各ピットの平面図・土層図については、調査時に土層図を作成したA群・B群1類のものを掲載した。その他のピットは、ピット配置図（図43～66）で平面図のみを掲載した。なお、計測値などの詳細は遺構一覧を参照されたい。

A群 柱痕が確認できたもの

B群 柱痕が確認できなかったもの

1類 開口部の長軸規模が1m以上のもの

2類 開口部の長軸規模が1m未満のもの

A群 柱痕が確認できたもの（図67～69）

111基検出した。このうち土層図を作成した44基を図67～69に示した。主に竪穴住居跡や掘立柱建物跡の分布と重なるようにA区中央部で検出されており、南側ではほとんど見られない。検出層位は第IV層及び第V層上面である。

平面形は円形、梢円形及び不整形を呈する。規模は長軸23～211cm、深さ14～102cmである。柱痕規模は15～67cmである。

堆積土の色調は柱痕部が掘方より総じて暗く、掘方には第V層起源の自然疊が裏込めされることが多い。本群は柱痕が確認できたことから柱穴としての用途が考えられる。分布範囲は竪穴住居跡や掘立柱建物跡のそれと重なるものが多い。この傾向は縄文時代後期後葉期に最も顕著であり、これらは竪穴住居跡及び掘立柱建物跡を構成する可能性が考えられる。時期は出土遺物から縄文時代後期前葉から後葉にかけてのものと考えられる。

注目される出土状況を示す遺構として、第1219・2344号ピットがあげられる。いずれも柱痕堆積土から土器が出土している。

第1219号ピットでは柱痕部の底面から20cm程度浮いた位置で、5～15cm程度の小疊5個の上に置かれた状態で注口土器（図79-33）が出土した。土器は頸部と注口部を欠いており、胴下部最大径付近で上下に割れ、胴部下半は器の原型のまま残り、細かく割れた胴上半部破片の受け皿となっている。落ち込んだ破片はすべて土器の内面を上に向け、2～3層の入れ子状となっている。石器は土器破片の最上部でU.F.1点（非掲載）が、また土器下部で石匙（図79-32）が出土した。検出面では20～30cmの自然疊3個がピット全体を覆っており、柱痕部はこれより10cm程度掘り下げた段階で確認している。以上のような出土状況および土器の割れ方の観察から、土器を破碎後意図的に柱痕部に埋め戻したものと考えられる。

第2344号ピットは柱痕堆積土の上位から複数個体の土器片が重なり合った状態で出土した。土器片の重なりは約20cmの厚さで認められ、柱痕堆積土は土器を境にして土色・土質等の違いがみられなかつた。土器片の多くは別個体で接合関係がほとんどみられず、個体数で25個体を数える。この内の4個体以外は土器片の内面を上方に向けた状態で出土している。これらは、第1219号ピットが後期後葉、第2344号ピットが後期前葉と時期差はあるものの、土器を破碎後、柱穴柱痕部へ土器を意図的に埋設する行為として注目される。遺跡内では他に縄文時代後期前葉のものと考えられる第22号掘立柱建物

跡の柱1（第1054号ピット）において、黄褐色粘土による柱穴の閉塞行為が確認されている（図28）。

土器は第III群に属するものが出土している。第III群B類・F類の破片資料が主体である。第III群A類土器は、第1214・2608号ピットなどから出土した。図79-29・30は地文LRに三角形区画文が施文されている。第III群B1類の内、十腰内I式古相の土器は第1975・2191・2401号ピットなどから出土した。図83-12は波状口縁の深鉢形土器である。図85-13は浅鉢形土器の高台状底部で、内外面に赤色顔料塗布の痕跡がみられる。第III群B1類の内、十腰内I式新相の土器は第1081・2344号ピットなどから出土した。図85-4～7は胴部上半を中心に文様帶が構成されている。第III群F類・G類土器は、第1174・1219・1261・1391・1449・1946・2190号ピットなどから出土している。図79-33は第III群F3類の注口土器である。器形は口頭部が長く、底部が上げ底状を呈する。頭部から胴部上半にかけて幅狭の帯繩文が施文され、貼瘤が多く用されている。注口の欠損部にはアスファルトが付着している。図81-1・4は第III群F2類の口縁突起で、4は突起下に橋状把手・貼瘤・焼成前穿孔がみられ、全面に赤色顔料が塗布されている。

石器は石鐵4点、石槍1点、石匙5点、石錐1点、スクレーパー5点、石核2点、U.F.14点、R.F.21点、剥片104点、磨石1点、敲石1点、凹石1点、石錐2点、石皿1点が出土している。石鐵はIa類、IIb類、IIc類がみられる。石匙はI～III類がある。石核はすべて原縫面を有するものである。剥片では、黒曜石のものが1点（1.6g）出土している。石錐は、小型円錐を打ち欠き、さらに敲打を加え抉りを作出するものがある（図82-18・図86-3）。

土製品は5点出土した。第1474・1566号ピット出土の図81-5・14、第2214号ピット出土の図84-8は土偶である。図81-5は土偶の左腕片と考えられる。図81-14は胴部下半片で、両面に沈線が施文される。図84-8は土偶の脚部片と考えられる。中実で横位沈線及び単節斜繩文が施文される。第1589号ピット出土の図82-3、第2191号ピット出土の図83-13は沈線が施文される三角形土製品である。

B群 柱痕が確認できなかったもの（図70～77）

1類 開口部の長軸規模が1m以上のもの

188基検出した。このうち土層図を作成した78基を図70～77に示した。これらは調査区全域に分布し、第IV層及び第V層上面で確認した。平面形は円形、橢円形及び不整形を呈する。規模は長軸100～311cm、深さ15～109cmである。堆積土は黒褐色～褐色土を主体とし第V層起源の自然礫が含まれるものが多い。

これらの中には、遺構の分布及び遺物の出土状況から機能・用途が推測できるものがある。A区南側に分布する一群（第1215・1295・1297・1299・1375・1554・1583・2620・2648・2651・2834号ピット）は、他遺構の分布が希薄な区域にまとまって構築されている。また、長軸規模が152～216cm、確認面からの深さが51～85cmと大型で、壁もほぼ垂直に立ち上がるものが多いことなど、規格性がみられることから貯蔵穴と考えられる。時期は出土遺物から縄文時代後期前葉のものと考えられる。

このほか墓の可能性が考えられるものとして第1116・1900号ピットがある。

第1116号ピットは南北に長い長円形の掘り込みである。南側の底面からやや浮いた位置から、台付土器（図78-28）や石棒（図78-31）等が出土した。時期は縄文時代後期後葉である。

また、第1900号ピットは長軸121cm、短軸95cm、深さ47cmの土坑状の掘り込みで、7層からは同一個体の深鉢形土器片が意図的に分割・廃棄（埋納）されたような状態で出土した。図84-1・2の口縁部片がピット南北壁際の離れた位置で出土し、3の胴部片が1と隣り合うような位置で出土してい

る。土器片の上部からは石竈（図84-4）、ピット北西隅からは石製品（図84-5）も出土し、直上でこれらを埋め戻すような状態で自然疊も出土した。時期は縄文時代後期前葉である。

このほか、ピット上位に焼土遺構の確認されたものに第2577・2582号ピットがある。ともに周辺に住居跡は確認できなかった。

第1110・2648号ピットはB群2類とした第1403・2649号ピットとの重複関係から、後者が柱痕で前者がその掘方の可能性がある。第2518号ピットは堆積土の状況から1～4層が柱痕の可能性がある。

土器は第III群に属するものが出土した。第III群A類土器は、第1211号ピットから出土した（図79-25～27）。第III群B 1類の内、十腰内I式古相の土器は第1900号ピットから出土した（図84-1～3）。深鉢形土器の同一個体で、胴部には長楕円の沈線文による文様区画がなされ、区画内に「く」の字状を基調とする文様が施文されている。図82-8・9は第1675号ピット出土の第III群B 1類土器である。8は3単位の波状口縁の壺形土器で、頸部にも同単位の橋状把手がみられる。9は蓮華花卉文が施文されるもので、同様のモチーフの土器は捨て場からまとまって出土している。図81-11・12は第1554号ピット出土の第III群B 2類土器である。口縁部は大きく外傾して立ち上がり、口縁部付近に横位沈線と斜方向の沈線がみられる。沈線間には充填繩文が施され、12の口唇部には繩文施文が認められる。第III群D 1類土器は、第1267・2833号ピットなどから出土した。第III群F・G類土器は、第1110・1116・1149・1225・1371・1417・2163・3025号ピットなどから出土した。図78-28は第III群F 1類の台付土器である。八戸市風張(1)遺跡（八戸市教委2003）や大鷗町駒木沢(2)遺跡（青森県教委2013b）などに台付注口の類例がみられる。口縁部・頸部・胴部下間に刻目帯が施され、胴部最大径部には4単位の貼瘤がみられる。胴部上半には木葉状入組文、胴部下半には格子目文が施文されている。内外面ともに丁寧なミガキ調整がなされている。図87-12・13は第3025号ピット出土の壺形ないしは注口土器の同一個体である。ピット中央部付近の堆積土上層から正立状態で出土した（写真38）。図示した以外にも同一個体の破片が出土しているが、器面の摩耗・剥落が著しく接合しなかった。

石器は石鎚10点、石匙5点、石錐3点、石斧5点、スクレーパー20点、U.F.61点、R.F.58点、剥片173点、磨製石斧3点、磨石1点、敲石4点、凹石4点、石錘2点、石皿1点が出土している。

石鎚はI d類、II a類、II b類、II c類がみられる。基部に黒色物質が付着するものがある。石匙は、つまみ部に黒色物質の付着するものがある。石錐はつまみ部を持つもの（図78-22・図83-8）が多いが、棒状のもの（図78-27）もある。石斧は刃部に脂状物質が付着しているものがある（図79-5）。スクレーパーはI類・II類とともに剥片の周縁に弧状の刃部を持つものがある（図79-1・図80-18・19）。敲石は敲打部が原縛の外縁に連続しているもの（図78-11）がある。凹石は原縛が棒状のものと楕円のものがあり、II類に分類されるもののうち敲打痕が複数みられるもの（図80-27・図84-14）がある。楕円縛の扁平な箇所に磨面が観察されるものがあり（図80-28）、敲打前に粉碎等の作業を行った痕跡とみられる。

土製品は8点出土し、5点を図示した。第1211・1375・2273号ピットから出土した円盤状土製品3点（図79-28・図80-26・図84-15）、第1583・3004号ピットから出土したミニチュア土器2点（図81-24・図87-16）である。この他に第1299号ピットからミニチュア土器が2点、第2620号ピットからミニチュア土器が1点出土したが、いずれも小片のため図示しなかった。

石製品は3点出土した。第1116号ピット出土の図78-31は泥岩製の石棒である。頭部には直線及び曲線の線刻が施される。第1299号ピット出土の図80-15は緑色凝灰岩製の岩版である。平面長方形で

全面に研磨加工が施される。第1900号ピット出土の図84-5は凝灰岩製の有孔石製品である。両面に渦巻状の線刻が、側面には周回する線刻がそれぞれ施される。また左右2ヶ所に貫通孔が施される。

2類 開口部の長軸規模が1m未満のもの

802基検出した。A区で検出されたピットの大半が本類に含まれる。調査区全域に分布し、第IV層及び第V層上面で確認した。平面形は円形、楕円形及び不整形を呈する。規模は長軸28~99cm、深さ4~87cmであり、長軸40~60cm、深さ20~40cmのものが多い。

これらは柱痕が確認できなかったものの、規模及び断面形状から柱穴と考えられるものが相当数含まれる。第105・106号堅穴住居跡周辺の本類ピットについては、他の住居跡を構成する柱穴の可能性が考えられる。時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉から後葉のものと考えられる。

土器は第III群に属するものが出土している。第III群B類・F類の破片資料が主体である。第III群A類土器は、第1390・1696号ピットなどから出土した。図86-20は横位の縄文帯が施される鉢形土器で、器面は半肉彫手法によらず、胎土・色調などもB類の範疇で捉えられるため第III群B 2類とした。第III群D 1類土器は、第1263・1458・1551・1563号ピットなどから出土した。図81-10は、重複関係にある第1551・1563号ピットから出土した壺形土器の接合資料で、頸部に装飾突起がみられる。第III群F・G類土器は、第1139・1146・1277・1687・2197・2463号ピットなどから出土した。第1277号ピット出土の図80-9は第III群F 2類の口縁部片で櫛歯状条線文がみられる。図81-4と同様、橋状把手と焼成前穿孔が認められ、全面に赤色顔料が塗布されている。

石器は石鏃12点、石槍1点、石匙2点、石錐5点、スクレーパー10点、石核1点、U.F. 25点、R.F. 35点、剥片237点、敲石2点、凹石4点、石錐1点が出土している。

石繙はI d類、II a類、II b類、II c類、III類がみられる。II a類が多い。石匙はI類とIII類がみられ、つまみ部に黒色物質の付着するものがある(図78-12)。石錐はつまみ部を持つもの(図79-24・図80-11・図86-16)と、棒状のもの(図84-7)がある。石核は大型の剥片を素材とし表裏を作業面として約3cm程の剥片の剥離の痕跡を持つものがある(図87-3)。凹石は原礫が棒状のものと楕円のものがあり、II類のうち敲打痕が複数有するもの(図87-2)と楕円縫の扁平な箇所に磨面が観察され、磨石を転用したものがある(図86-4)。

土製品は5点出土し、4点を図示した。第1109・2017・2455号ピットから出土した円盤状土製品3点(図78-21・図82-23・図86-2)、第1696号ピットから出土したミニチュア土器1点(図82-11)である。この他に第1285号ピットからミニチュア土器が出土したが、小片のため図示しなかった。

石製品は5点出土し、4点を図示した。第2497号ピット出土の図86-8・9は流紋岩製の石棒である。接合しなかったが同一個体と考えられる。第2566号ピット出土の図86-14は緑色凝灰岩製の有孔石製品である。中央に貫通孔が施される。第2826号ピット出土の図87-7は凝灰岩製の円盤状石製品である。また、図示しなかったが円盤状石製品が第1165号ピットから出土している。

[小結]

ピットとして報告するもののうち、A群については柱痕が確認されたことから柱穴と考えられる。また、B群については不明な点が多いものの、住居跡や掘立柱建物跡周辺に分布するものも多いことから柱穴と考えられるものも相当数含まれているが、1類の中には墓(第1116・1900号ピット)や10

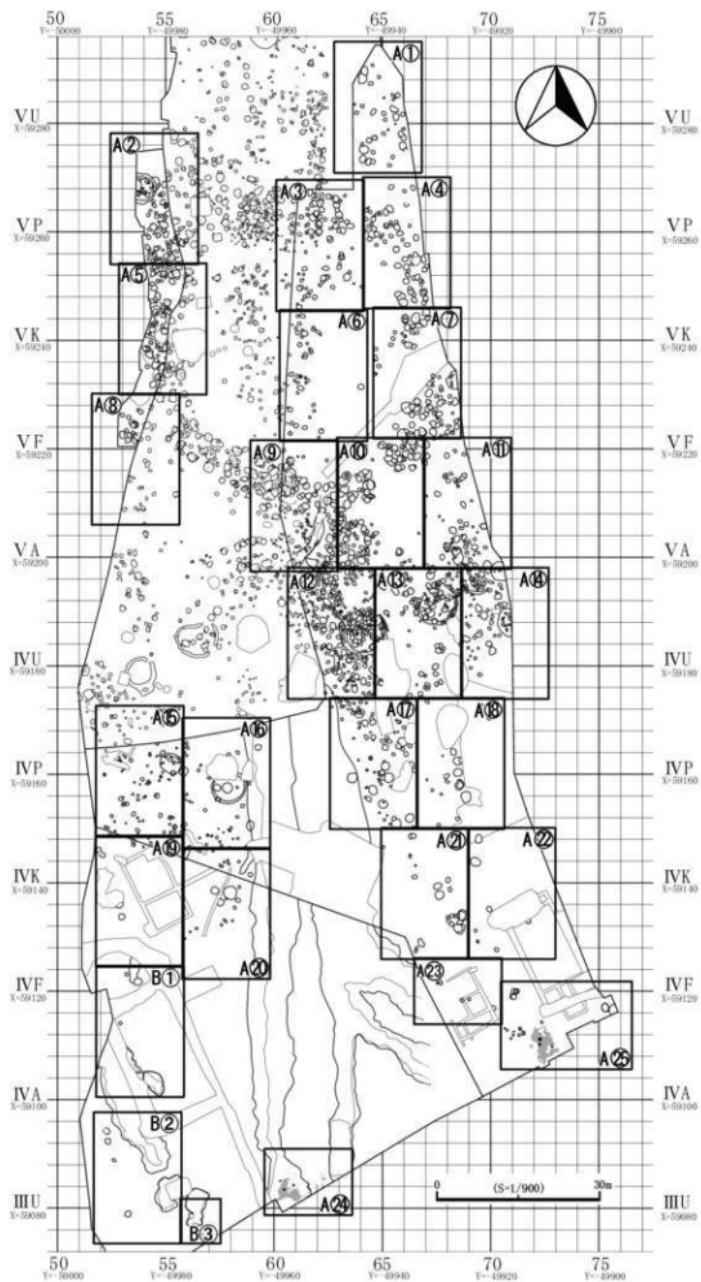


図42 A・B ピット掲載区分図

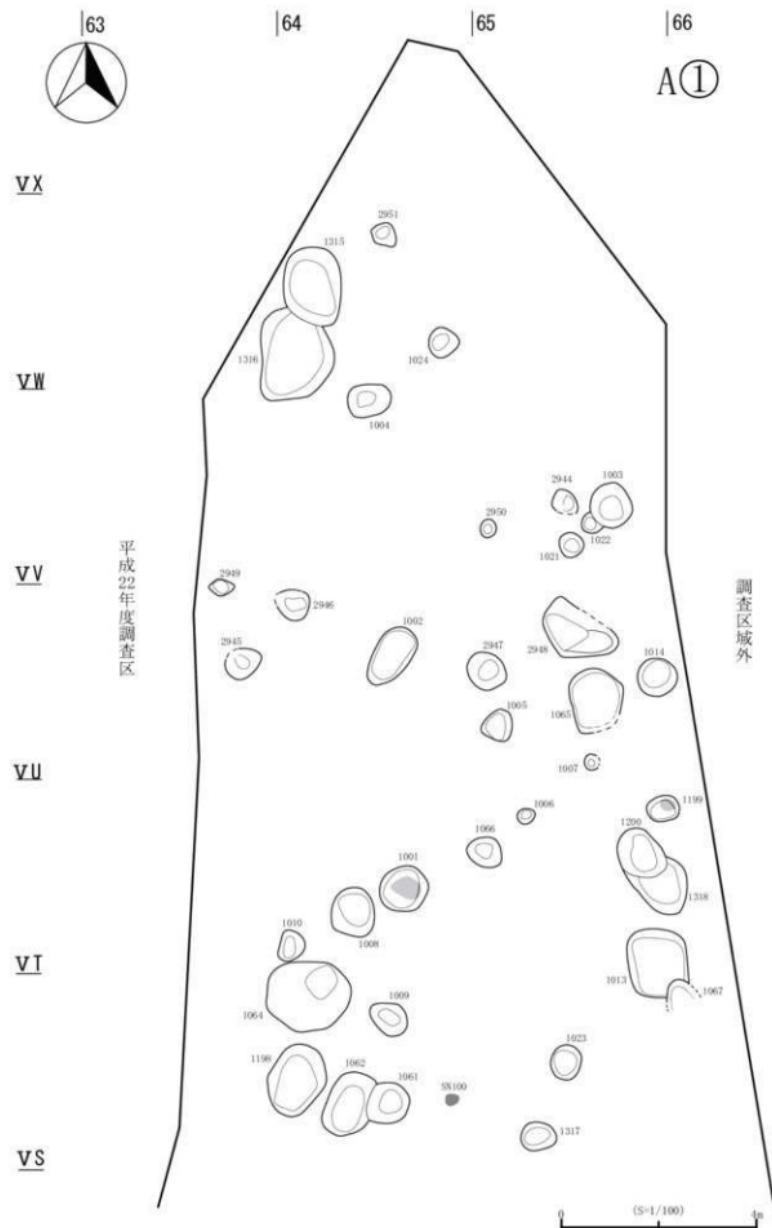


図43 A区ピット配置図（1）

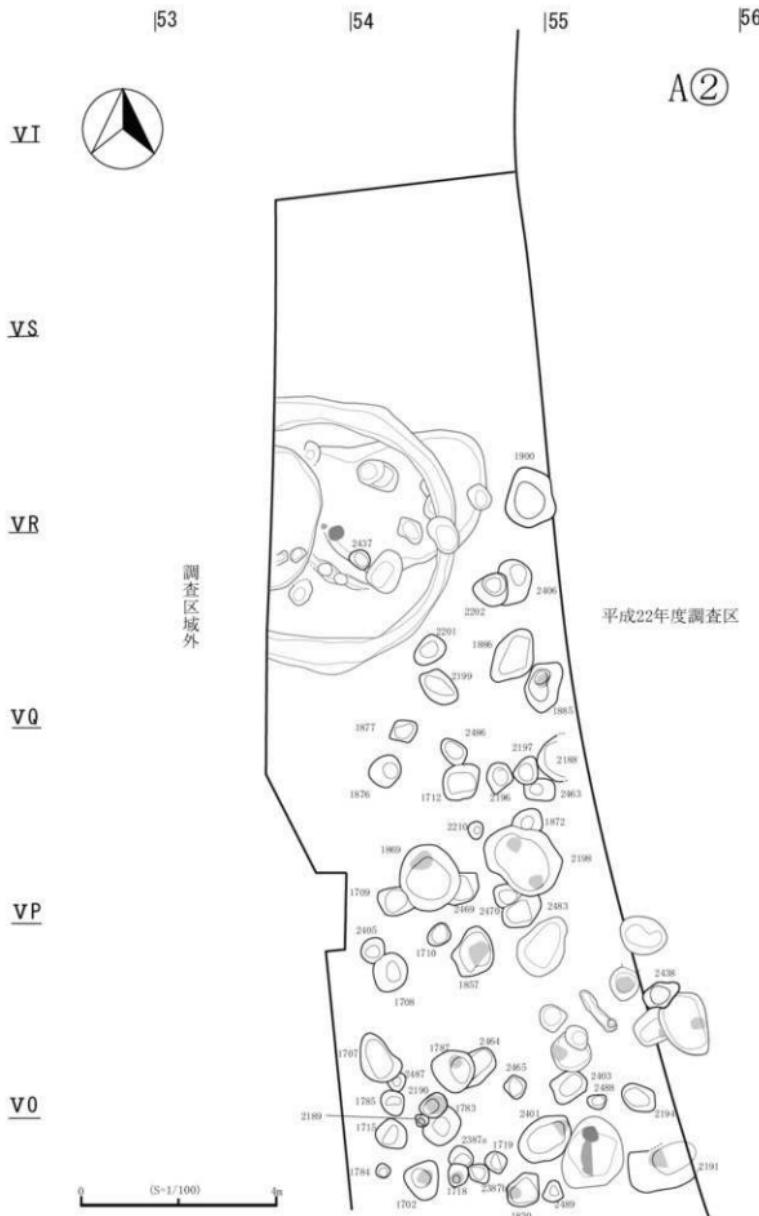


図44 A区ピット配置図（2）

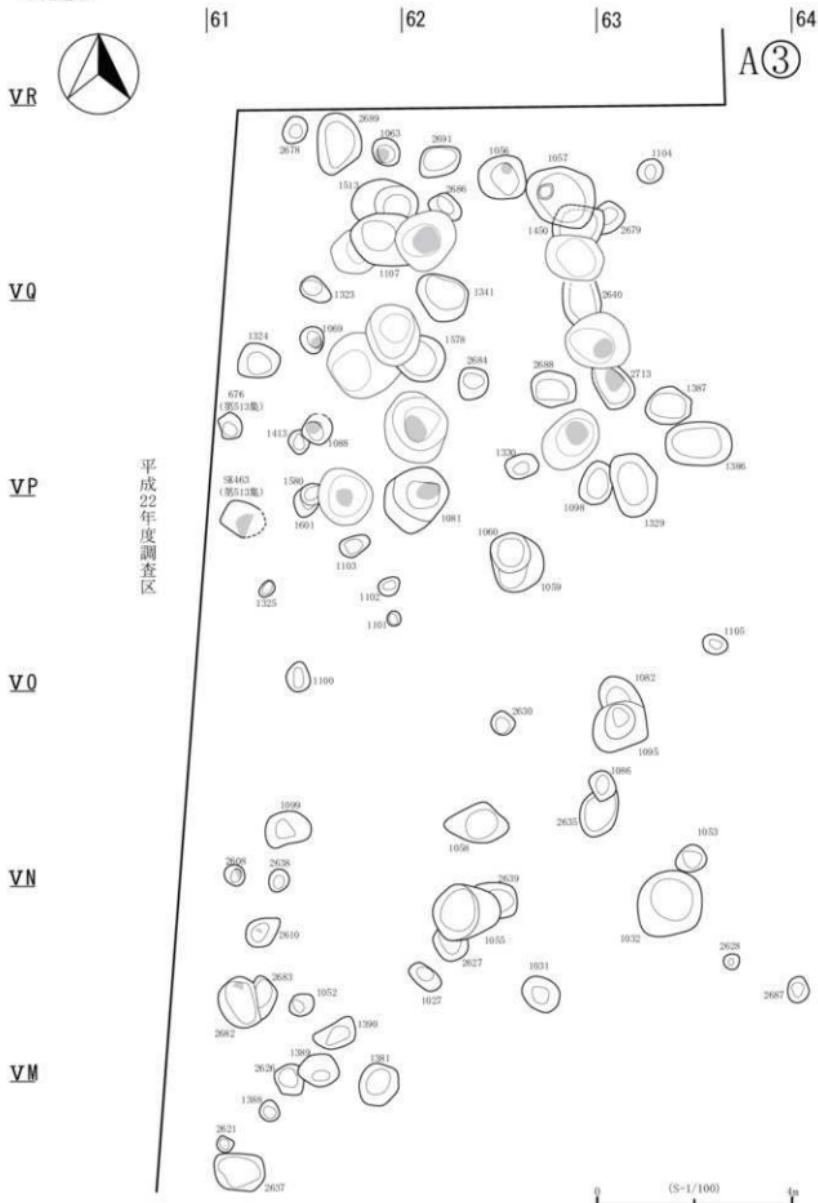


図45 A区ピット配置図（3）

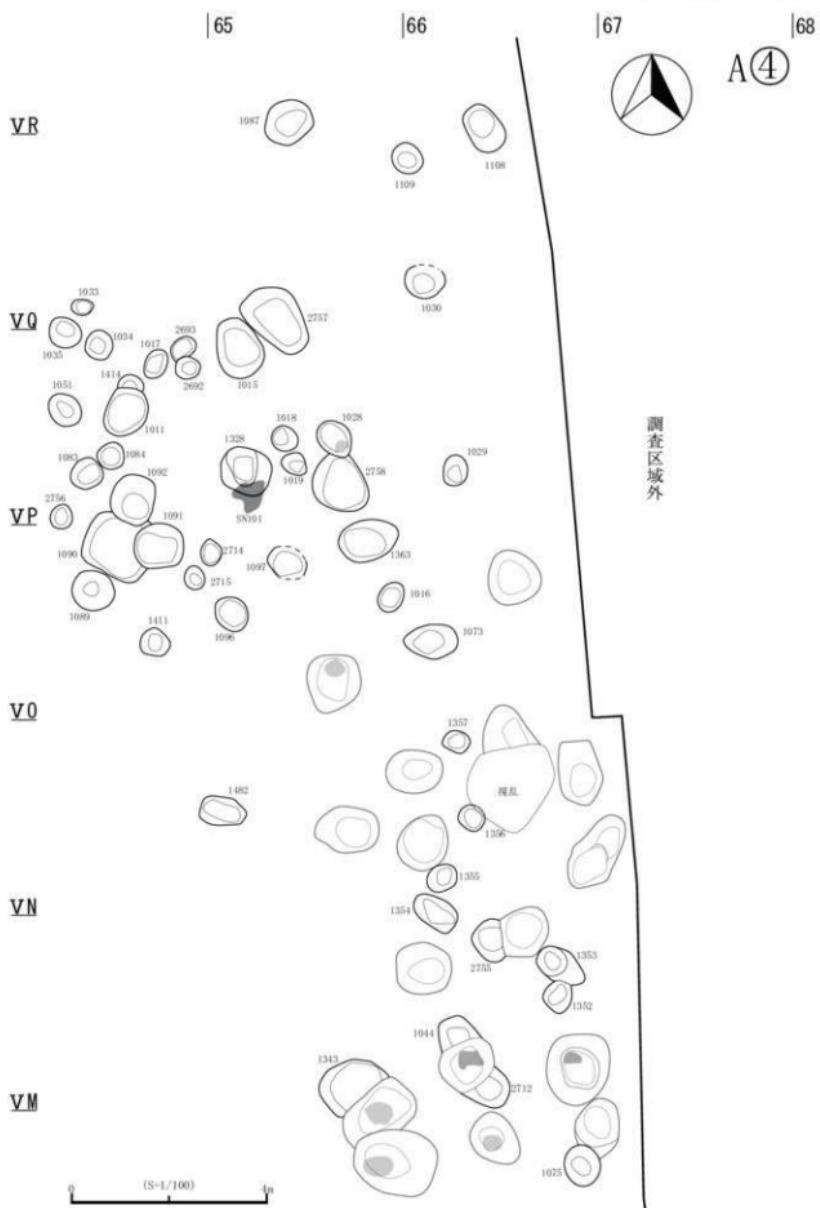


図46 A区ピット配置図（4）

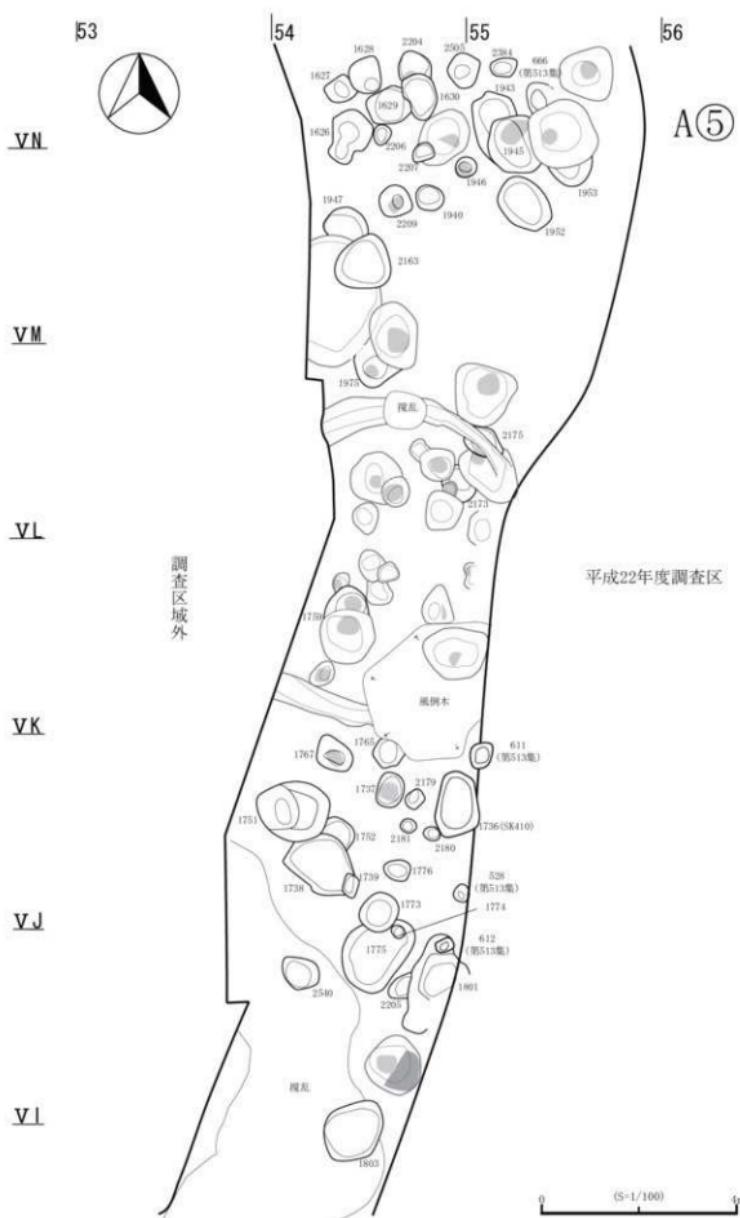


図47 A区ピット配置図 (5)

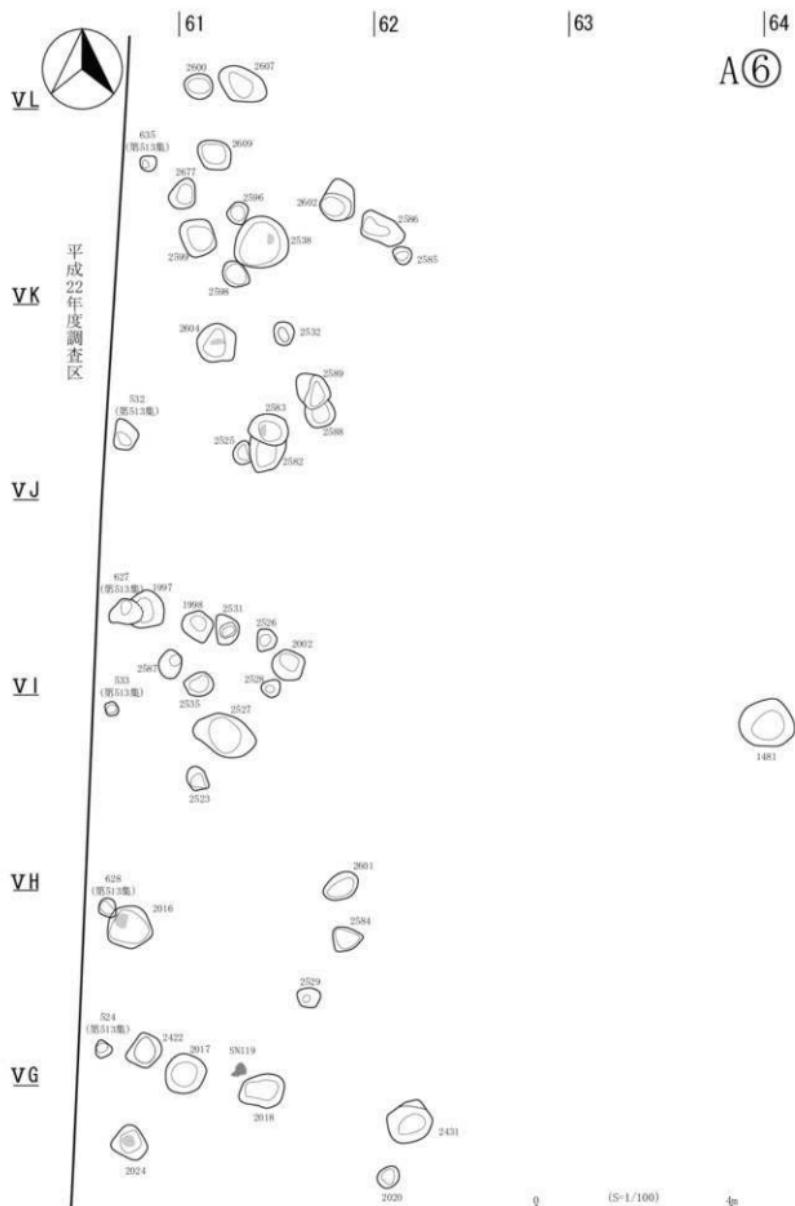


図48 A区ピット配置図（6）

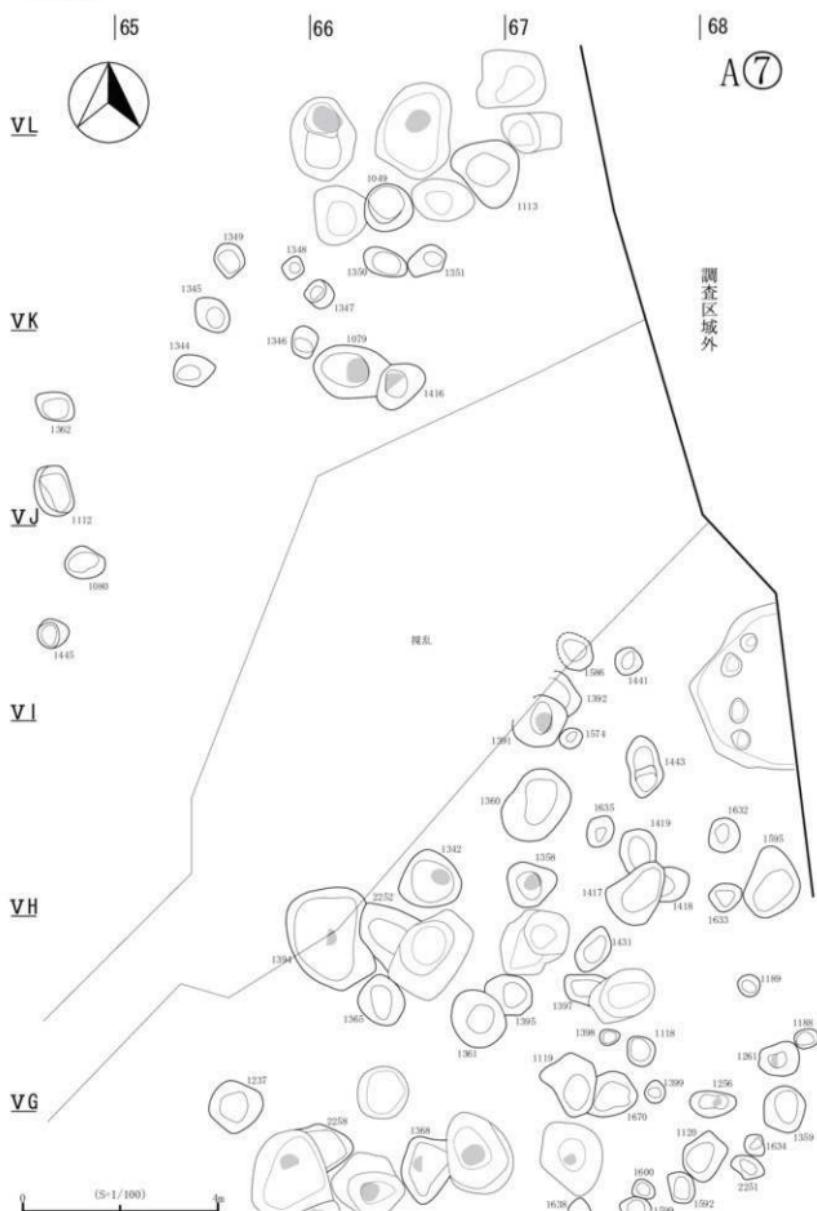


図49 A区ピット配置図 (7)

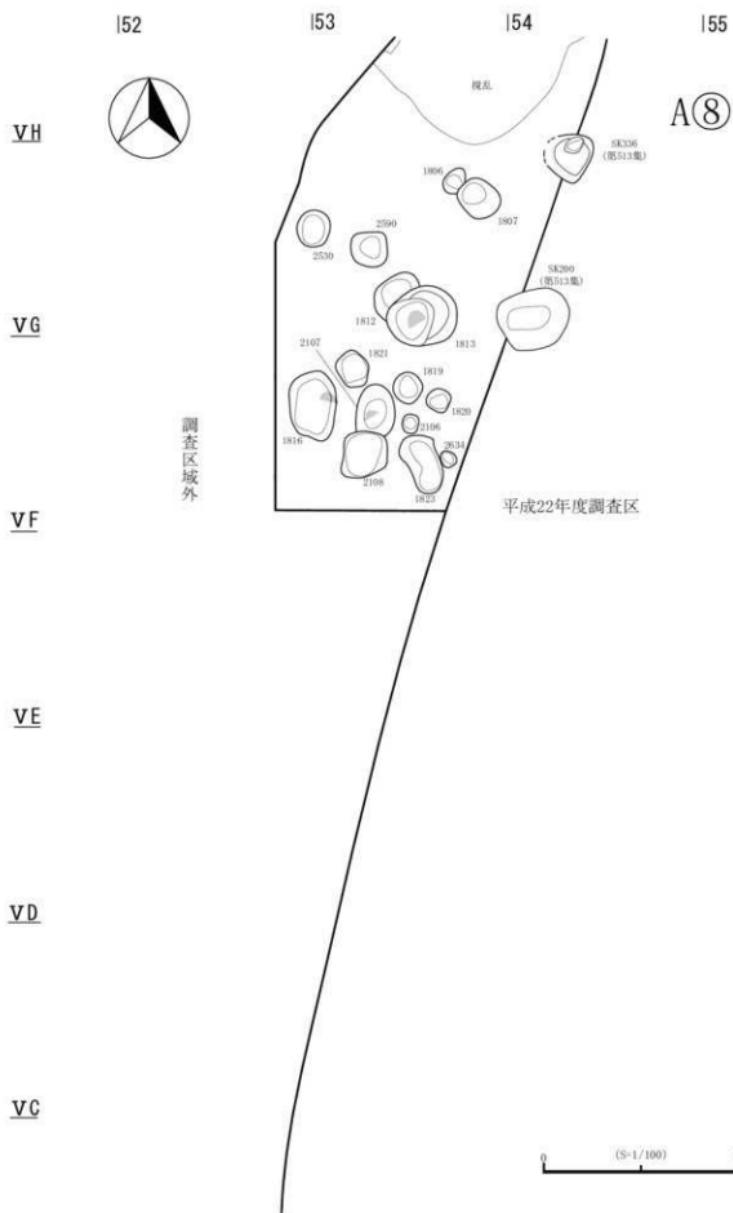


図50 A区ピット配置図（8）



図51 A区ピット配置図 (9)

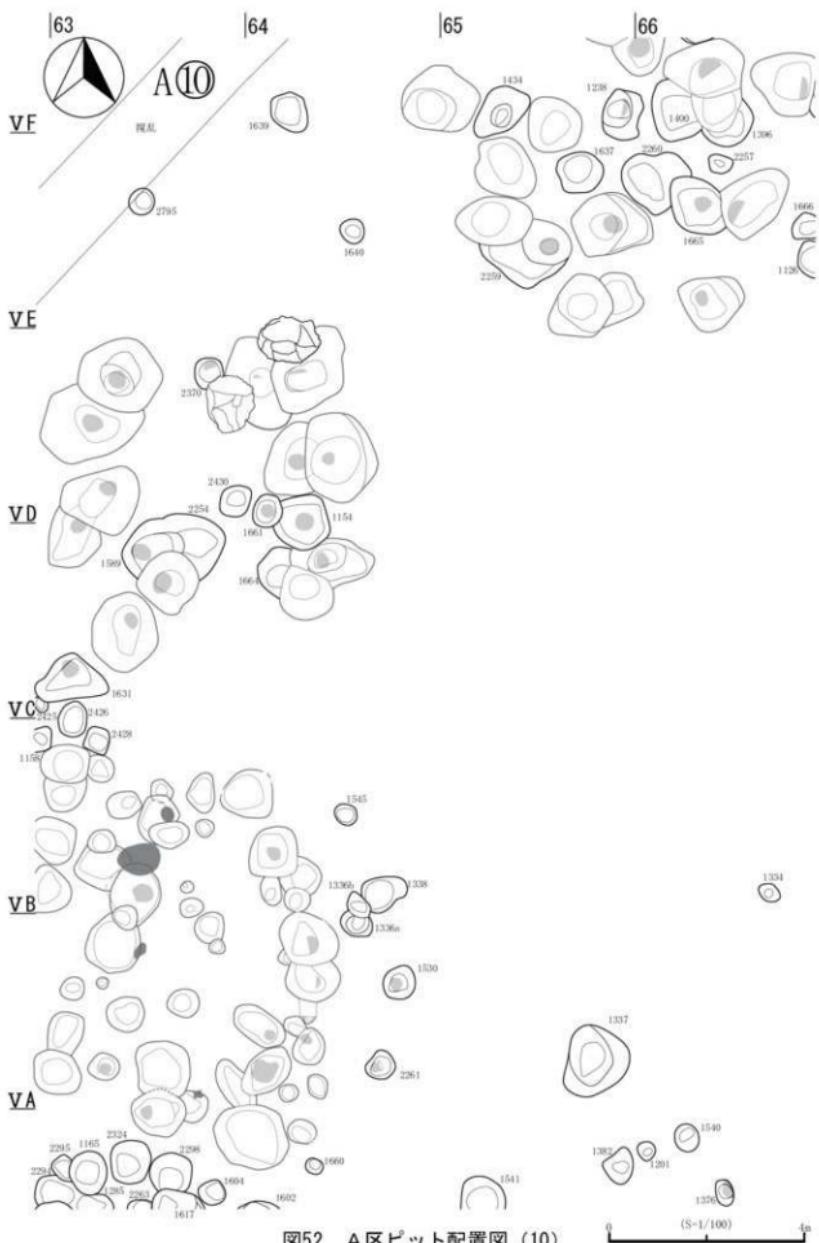


図52 A区ピット配置図（10）

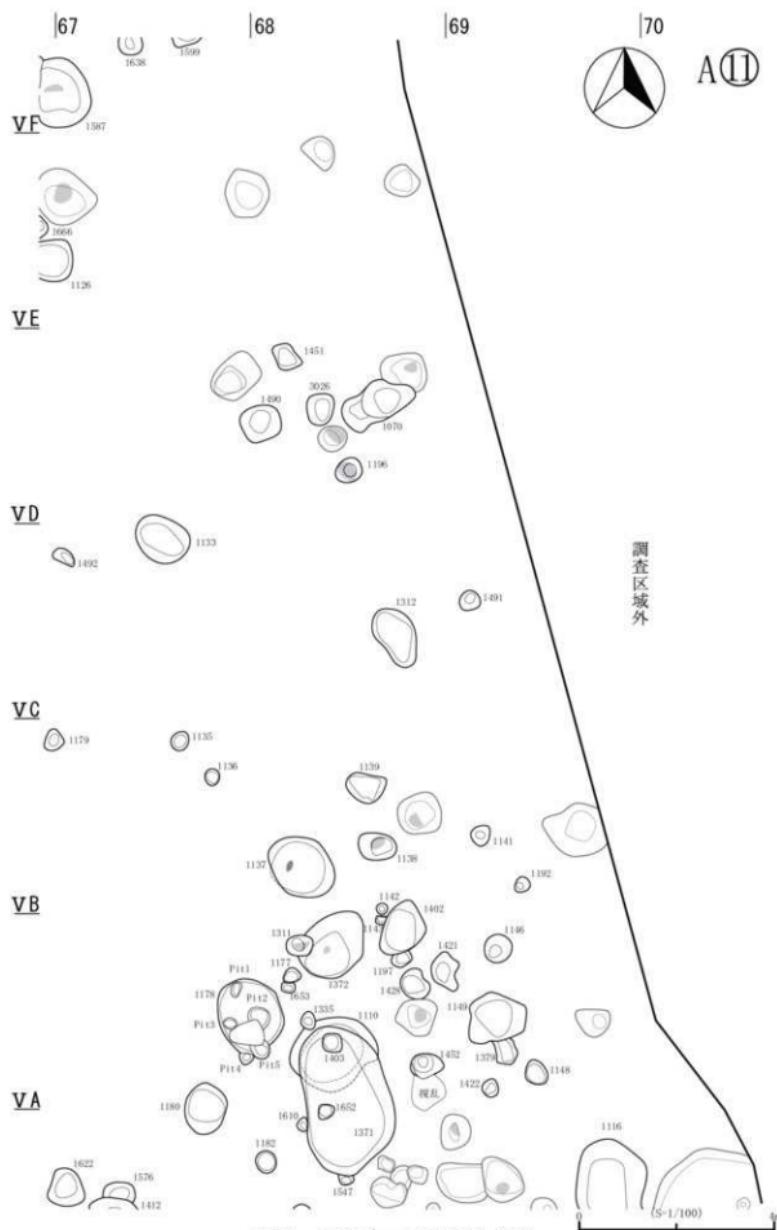


図53 A区ピット配置図 (11)

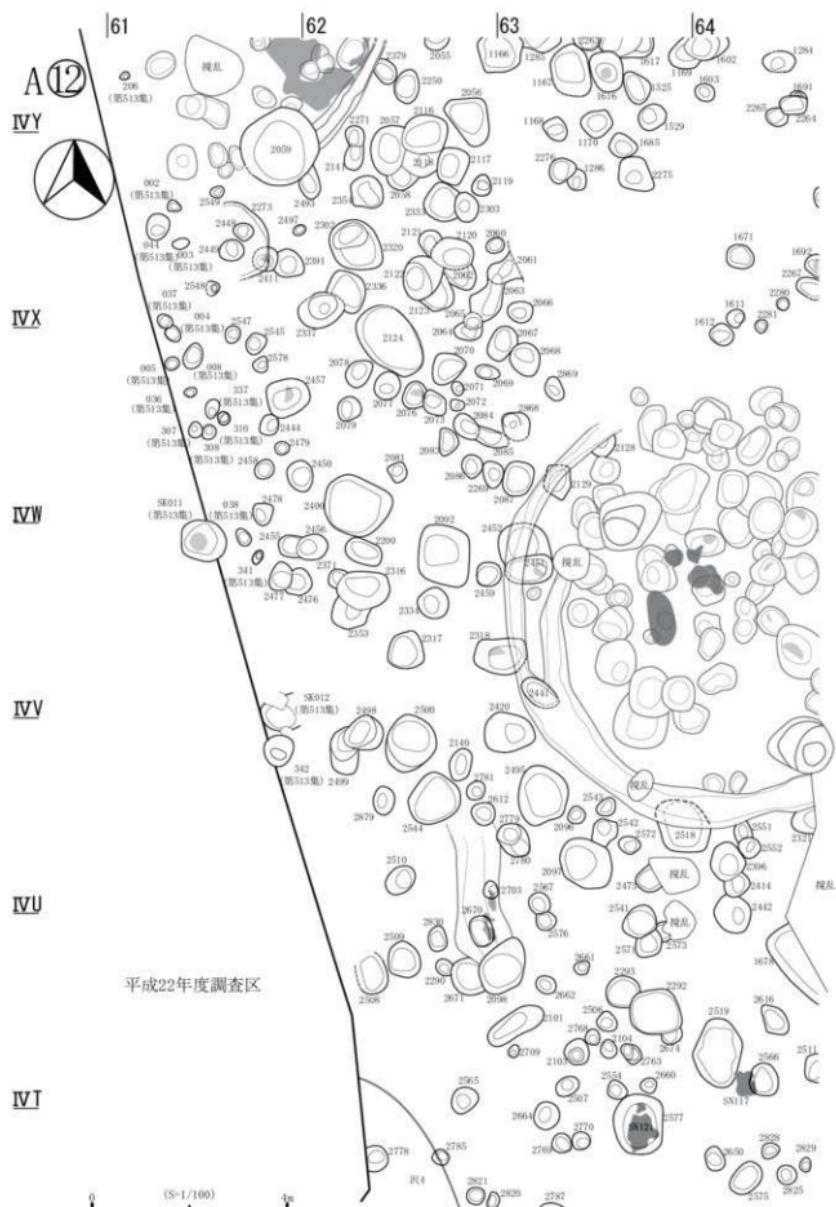


図54 A区ピット配置図（12）

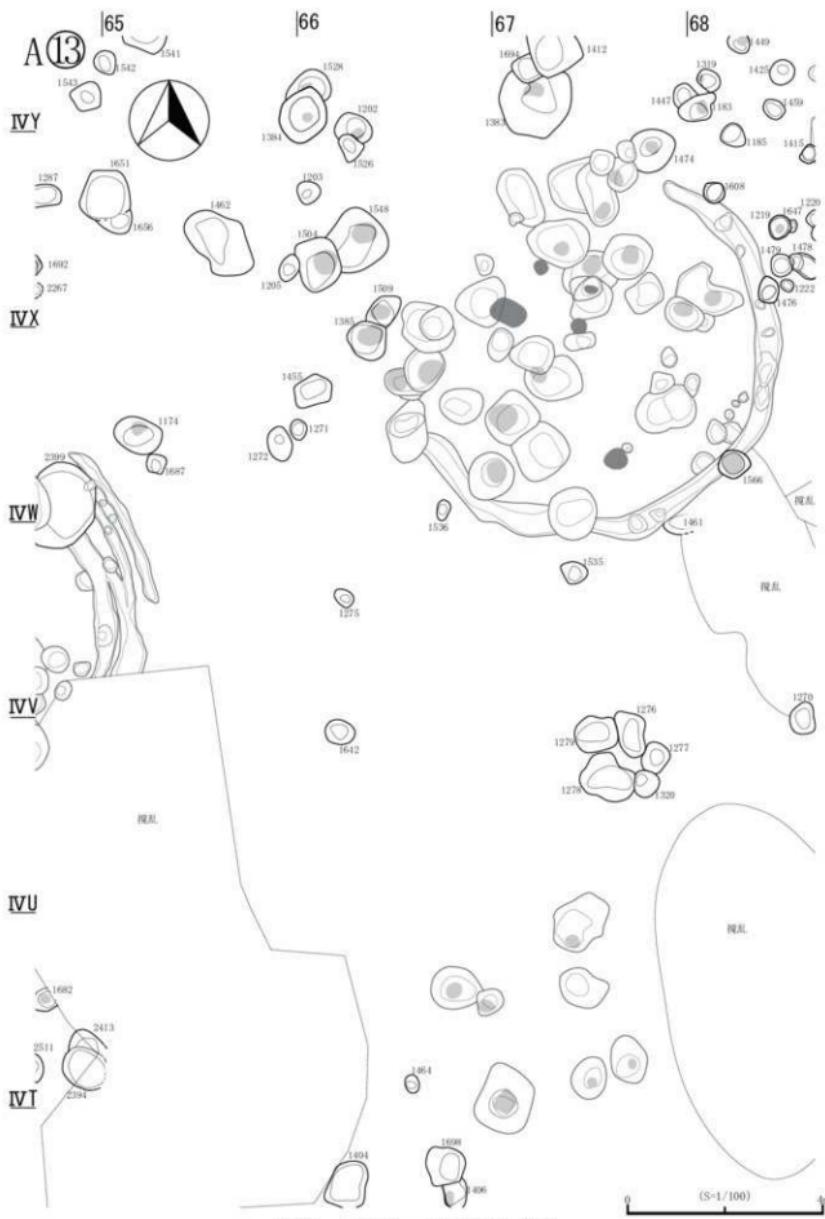


図55 A区ピット配置図 (13)

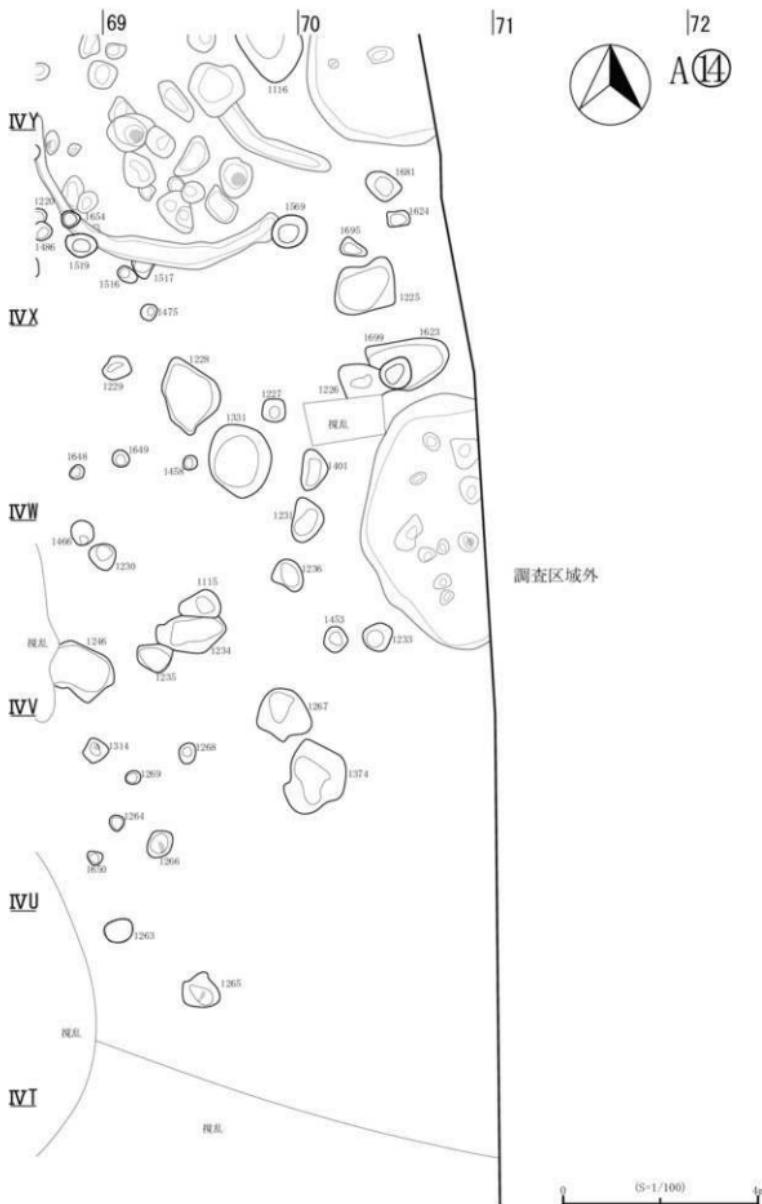
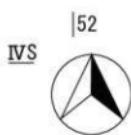


図56 A区ピット配置図 (14)



|53

|54

|55

A(15)

IVR

平成22年度調査区

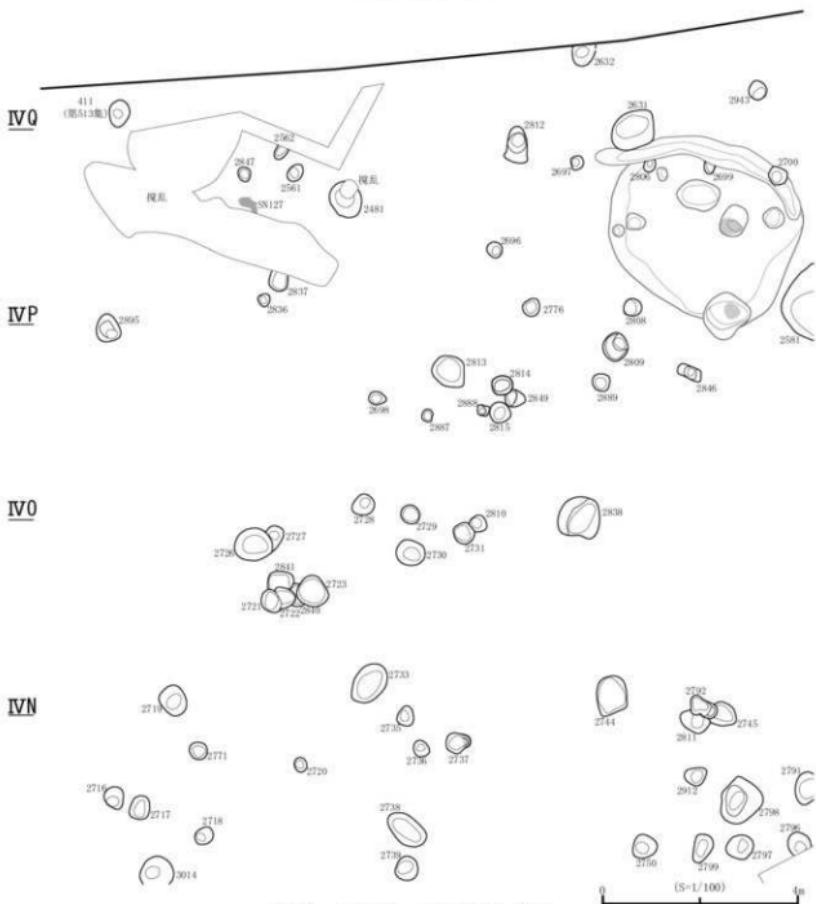


図57 A区ピット配置図 (15)

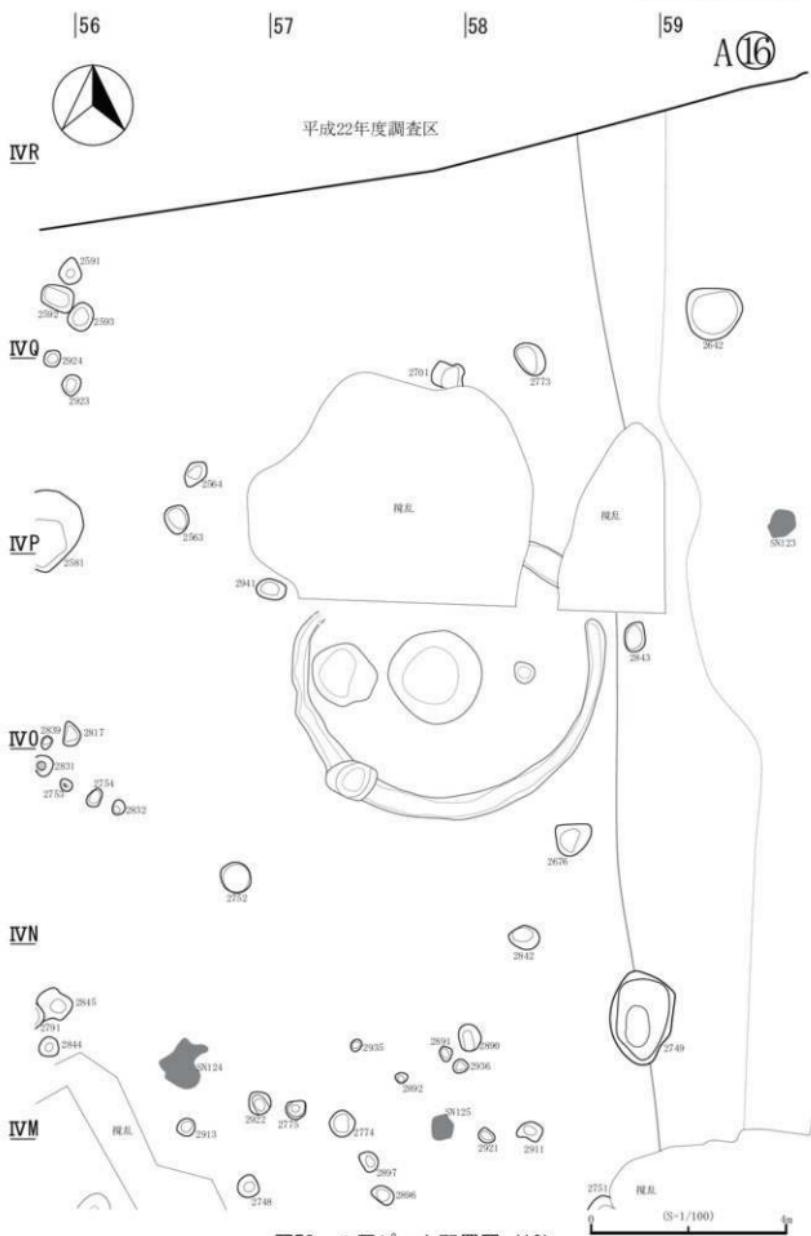


図58 A区ピット配置図 (16)

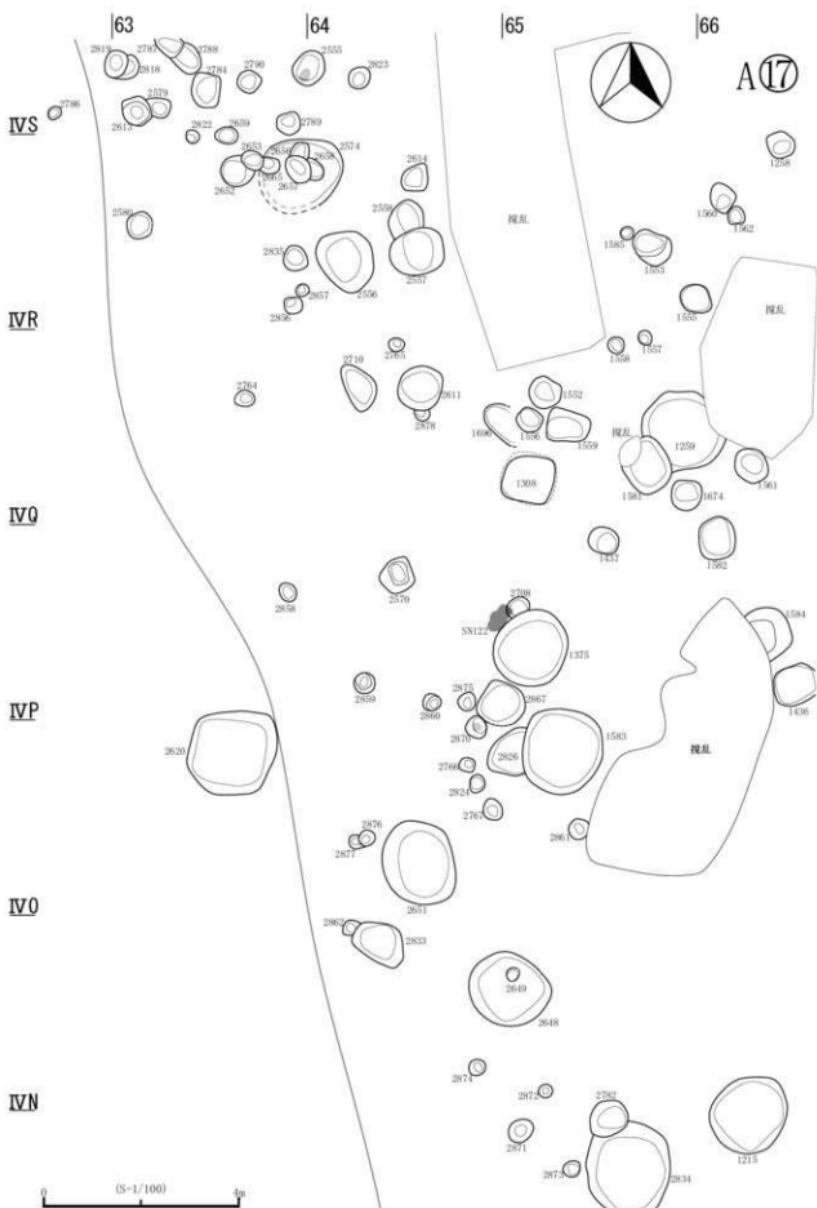


図59 A区ピット配置図 (17)

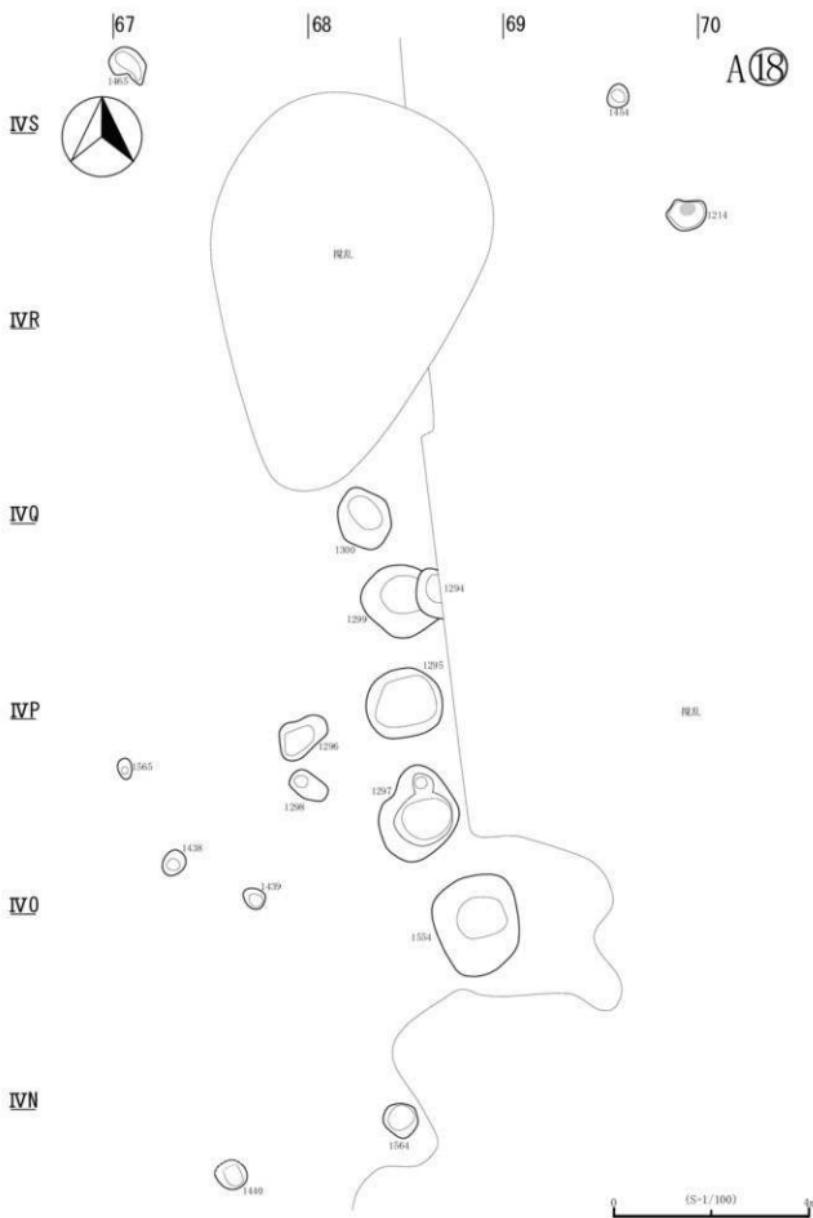


図60 A区ピット配置図 (18)

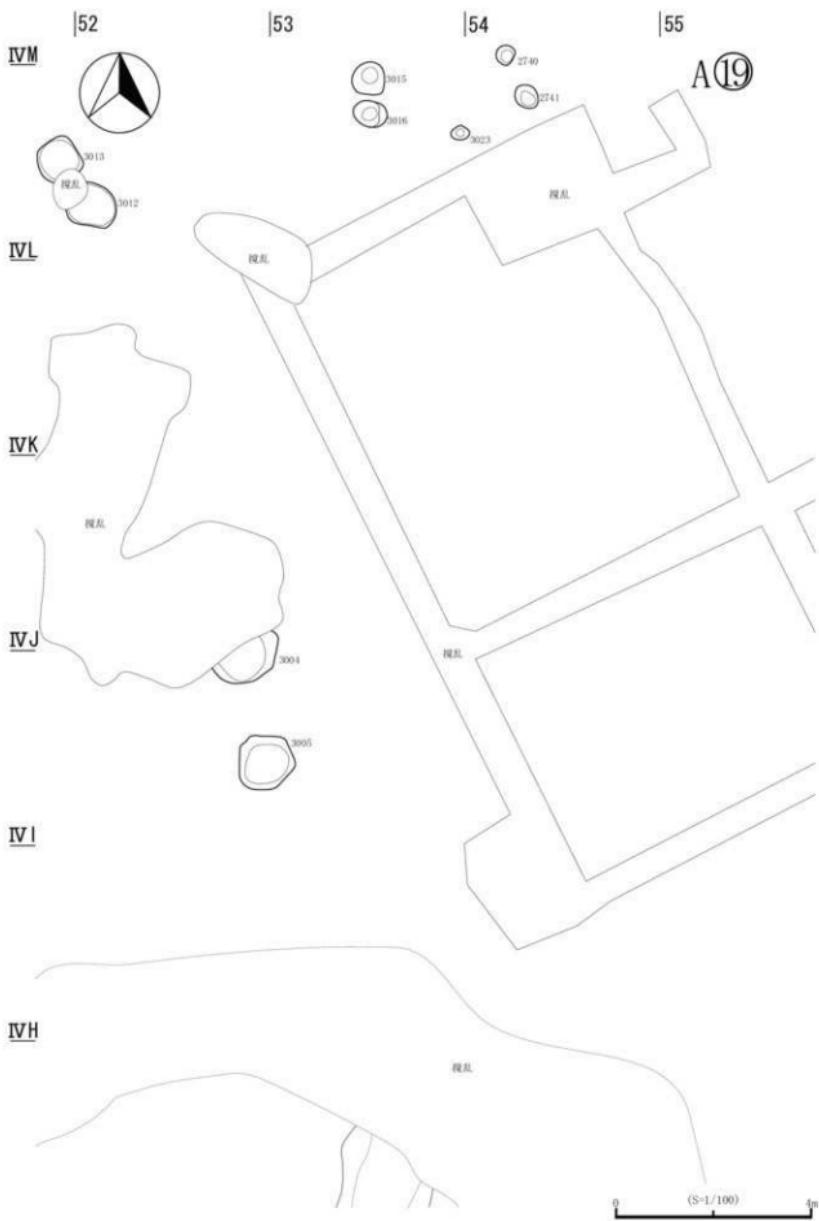


図61 A区ピット配置図 (19)

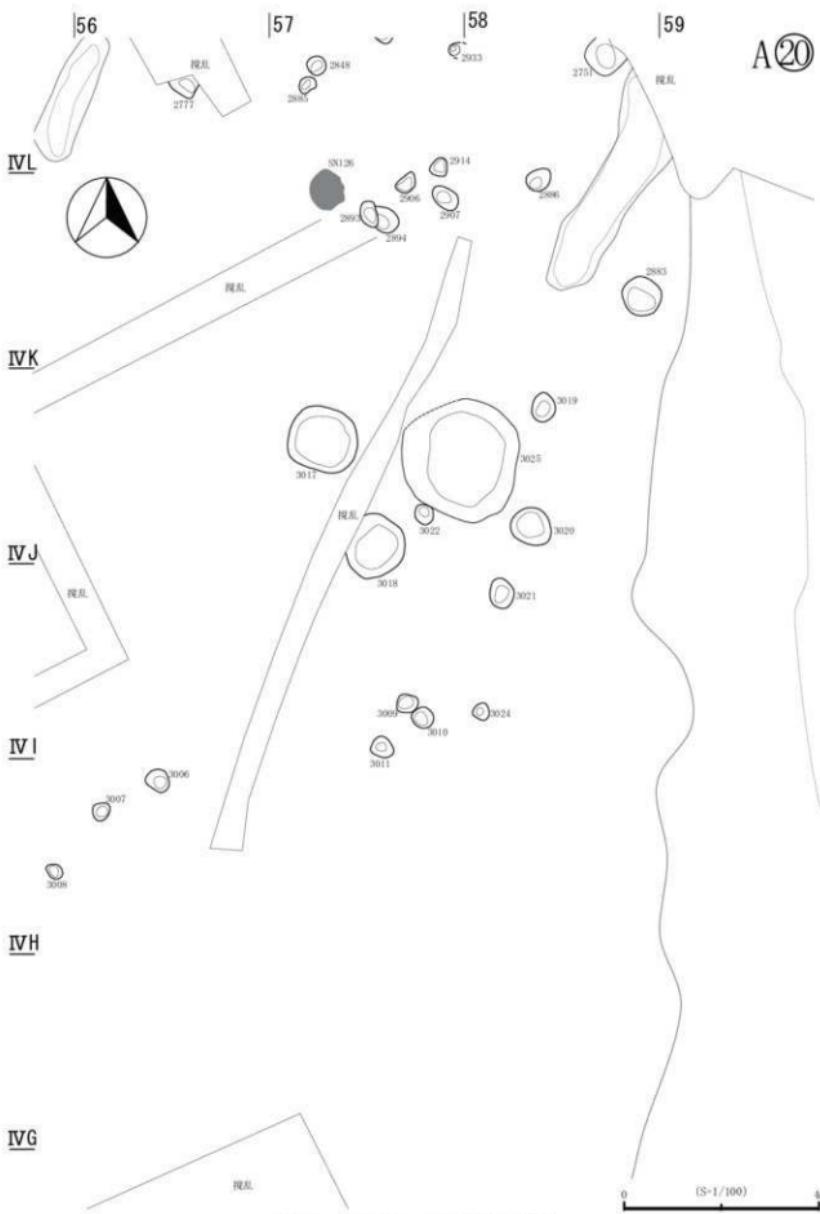


図62 A区ピット配置図 (20)

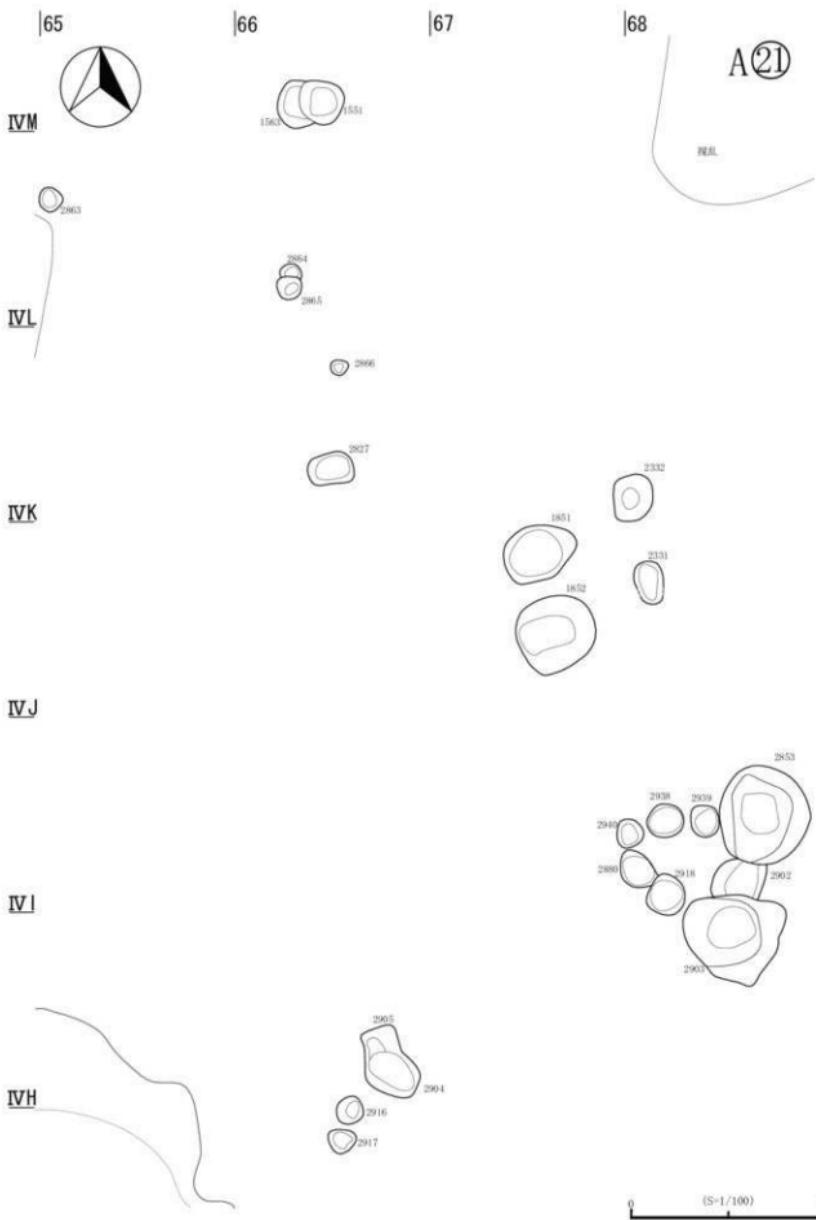


図63 A区ピット配置図 (21)

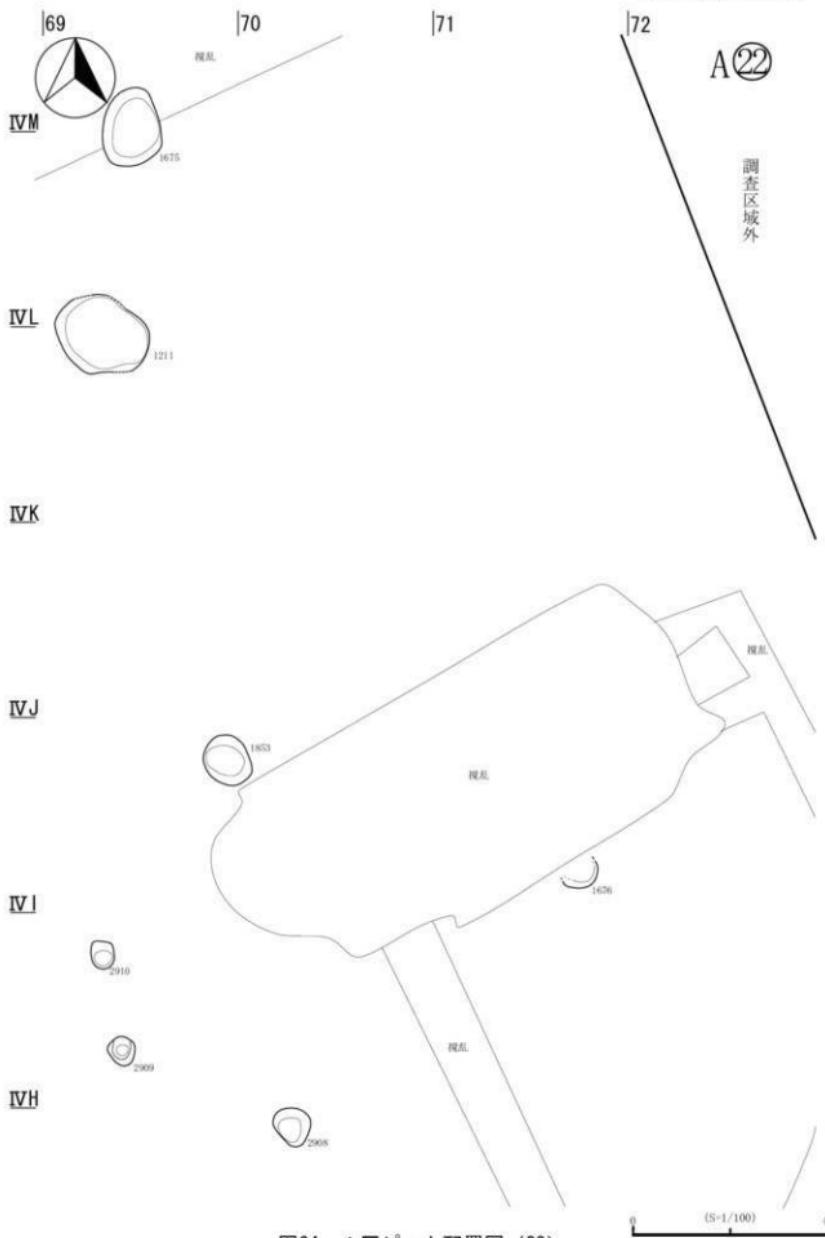


図64 A区ピット配置図 (22)

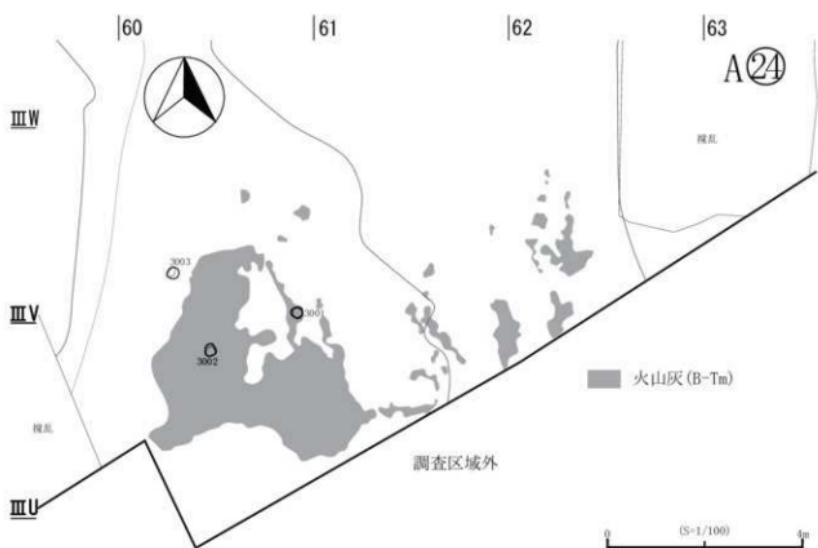
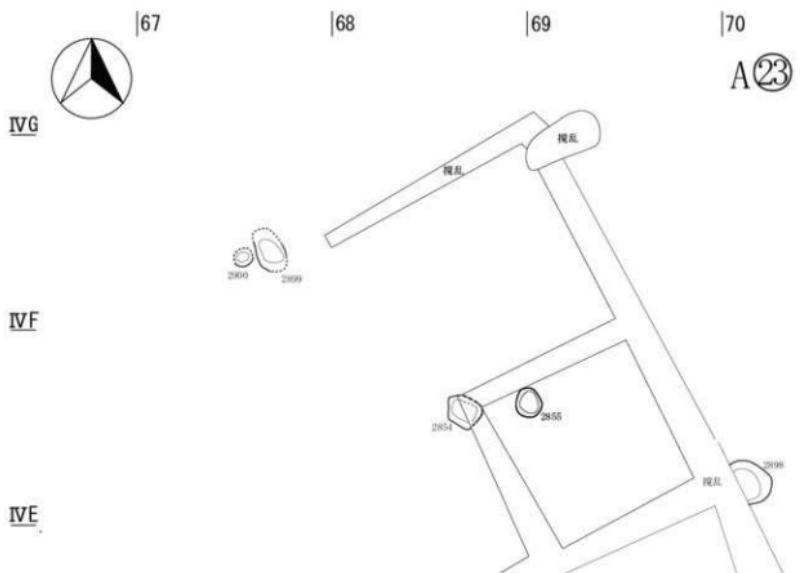


図65 A区ピット配置図 (23)

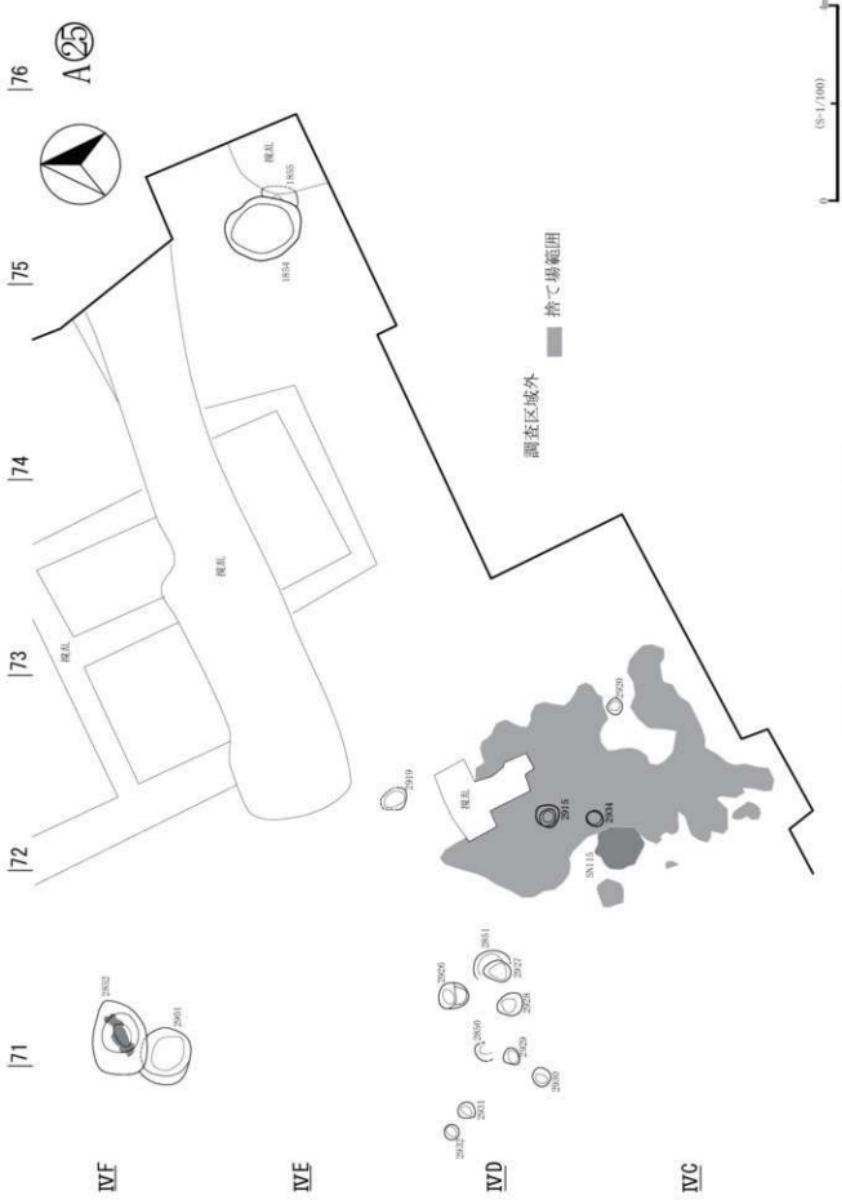


図66 A区 ピット配置図 (24)

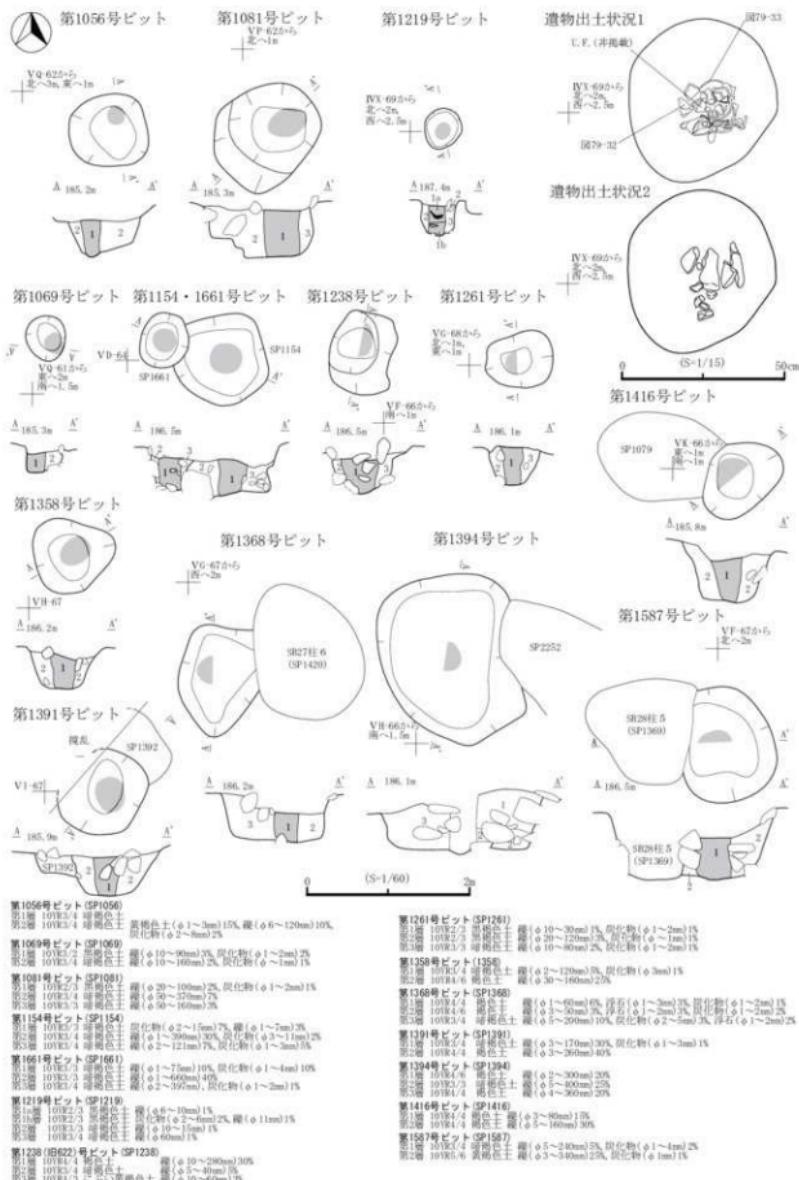


図67 A区ビット (1)



第1589号ピット (SP1589)

縫隙 (φ 5~50mm) 5%, 固化物 (φ 1~10mm) 2%
101/4.3 黄褐色土 (φ 5~10mm) 10%, 固化物 (φ 1~5mm) 3%
101/4.4 黄褐色土 (φ 5~10mm) 40%, 固化物 (φ 1~4mm) 1%
101/4.5 黄褐色土 (φ 3~10mm) 30%, 固化物 (φ 1~2mm) 1%

第1616号ピット (SP1616)

縫隙 (φ 10~100mm) 5%, 固化物 (φ 1~10mm) 3%
101/4.2 黄褐色土 (φ 5~10mm) 20%, 固化物 (φ 1~5mm) 3%
101/4.3 黄褐色土 (φ 3~10mm) 20%, 固化物 (φ 1~5mm) 1%
101/4.4 黄褐色土 (φ 3~10mm) 15%, 固化物 (φ 1~5mm) 2%

第1665号ピット (SP1665)

縫隙 (φ 4~170mm) 5%, 固化物 (φ 1~10mm) 15%
101/4.2 黄褐色土 (φ 5~100mm) 70%, 固化物 (φ 1~5mm) 3%
101/4.3 黄褐色土 (φ 5~100mm) 20%, 固化物 (φ 1~5mm) 1%
101/4.4 黄褐色土 (φ 3~100mm) 20%, 固化物 (φ 1~5mm) 1%

第1682号ピット (SP1682)

縫隙 (φ 10~100mm) 10%, 固化物 (φ 2~30mm) 5%, 固化物 (φ 1~2mm) 1%
101/4.2 黄褐色土 (φ 10~100mm) 45%, 固化物 (φ 3~60mm) 2%, 固化物 (φ 2~3mm) 2%
101/4.3 黄褐色土 (φ 10~100mm) 15%, 固化物 (φ 3~60mm) 2%, 固化物 (φ 2~3mm) 2%

第2016号ピット (SP2016)

縫隙 (φ 1~10mm) 6%
101/3.2 黄褐色土 (φ 1~10mm) 20%, 固化物 (φ 1~3mm) 1%
101/3.3 黄褐色土 (φ 1~10mm) 10%, 固化物 (φ 1~3mm) 1%
101/3.4 黄褐色土 (φ 2~160mm) 7%

第2046号ピット (SP2046)

縫隙 (φ 10~300mm) 15%, 固化物 (φ 1mm) 1%
101/3.2 黄褐色土 (φ 3~340mm) 25%, 固化物 (φ 1~3mm) 2%
101/3.3 黄褐色土 (φ 3~80mm) 20%, 固化物 (φ 1~3mm) 2%
101/3.4 黄褐色土 (φ 3~200mm) 20%, 固化物 (φ 1mm) 1%

第2076号ピット (SP2076)

縫隙 (φ 10~100mm) 25%, 固化物 (φ 1~5mm) 2%
101/3.2 黄褐色土 (φ 3~65mm) 15%, 固化物 (φ 1~3mm) 1%
101/3.3 黄褐色土 (φ 3~65mm) 15%, 固化物 (φ 1~3mm) 1%
101/3.4 黄褐色土 (φ 3~65mm) 15%, 固化物 (φ 1~3mm) 1%

第2214号ピット (SP2214)

縫隙 (φ 5~200mm) 30%, 固化物 (φ 1~5mm) 2%
101/4 黄褐色土 (IVY-64±5, 壁~1m) 1%
101/4.1 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/4.2 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/4.3 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/4.4 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%

第2234号ピット (SP2234)

縫隙 (φ 5~65mm) 35%, 固化物 (φ 1~10mm) 1%
101/3 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/3.1 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/3.2 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/3.3 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/3.4 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%

第2235号ピット (SP2235)

縫隙 (φ 1~140mm) 3%, 固化物 (φ 3~7mm) 5%, 黄褐色土 (φ 7mm) 1%
101/3.2 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 20%, 固化物 (φ 1~3mm) 1%
101/3.3 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 20%, 固化物 (φ 1~3mm) 1%
101/3.4 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 15%, 固化物 (φ 2~4mm) 3%

第2261号ピット (SP2261)

縫隙 (φ 3~27mm) 1%
101/2.1 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/2.2 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/2.3 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/2.4 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%

第2318号ピット (SP2318)

縫隙 (φ 5~100mm) 20%, 固化物 (φ 1~10mm) 2%
101/3 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/3.1 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/3.2 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/3.3 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/3.4 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%

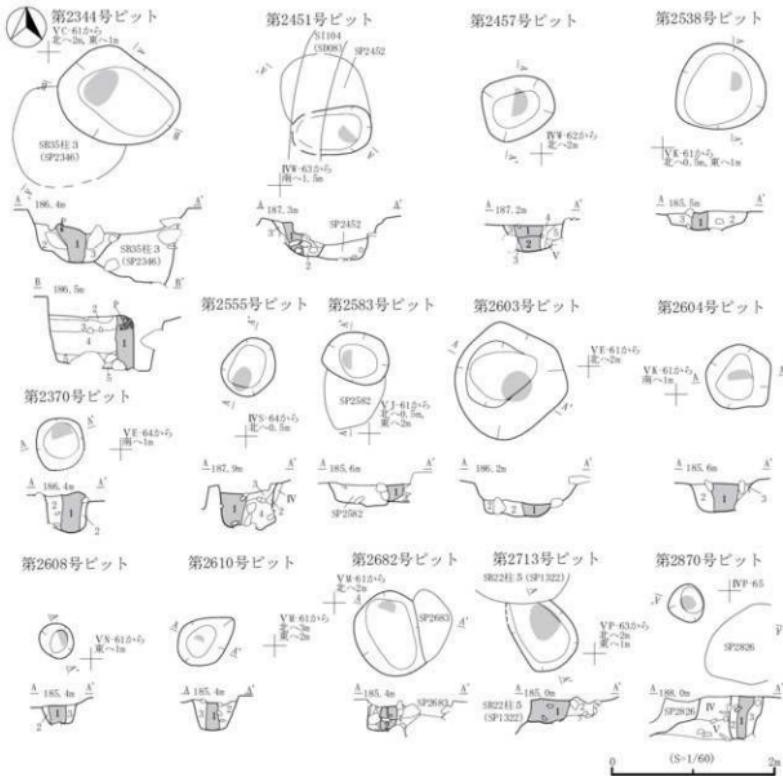
第2328号ピット (SP2328)

縫隙 (φ 1~10mm) 25%, 砂 (φ 5~10mm) 2%
101/3 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/3.1 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/3.2 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/3.3 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/3.4 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%

第2343号ピット (SP2343)

縫隙 (φ 5~10mm) 25%, 黄褐色土 (φ 3~7mm) 10%, 固化物 (φ 1~5mm) 1%
101/3 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/3.1 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/3.2 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/3.3 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%
101/3.4 黄褐色土 (IVB-61±5, 壁~1m) 1%

図68 A区ピット (2)



第2344号ピット (SP2344)

10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 2~9cm) 1%、炭化物 (φ 2~7cm) 7%
10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 1~30cm) 30%、炭化物 (φ 1~1cm) 3%
10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 1~3cm) 35%、炭化物 (φ 1~4cm) 2%
10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 1~3cm) 35%、炭化物 (φ 1~4cm) 2%
10VE1/4 黄褐色土 (φ 30~41cm) 8%、炭化物 (φ 1~2cm) 3%

第2370号ピット (SP2370)

10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 2~21cm) 3%、炭化物 (φ 2~4cm) 1%
10VE1/4 黄褐色土 (φ 1~7cm) 2%

第451号ピット (SP2451)

10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~16cm) 20%、炭化物 (φ 1~2cm) 1%、柱状
10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~10cm) 30%、炭化物 (φ 1~2cm) 1%
10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~11cm) 41%、炭化物 (φ 1~2cm) 1%

第452号ピット (SP2452)

10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~18cm) 1%、炭化物 (φ 1~4cm) 1%
10VE1/4 黄褐色土 壁面 (φ 1~2cm) 1%、壁面 (φ 5~25cm) 1%
10VE1/3 二つの黄褐色土 壁面 (φ 5~10cm) 10%、炭化物 (φ 1~1cm) 2%、
10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~10cm) 15%、炭化物 (φ 1~5cm) 1%、
10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~10cm) 20%、炭化物 (φ 1~6cm) 1%

第2538号ピット (SP2538)

10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~27cm) 1%、炭化物 (φ 1~3cm) 2%
10VE1/4 黄褐色土 壁面 (φ 3~9cm) 1%、炭化物 (φ 1cm) 1%
10VE1/4 壁面土 壁面 (φ 3~10cm) 1%

第2555号ピット (SP2555)

10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~10cm) 10%、炭化物 (φ 1cm) 1%
10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~10cm) 10%、炭化物 (φ 1cm) 1%
10VE1/6 黄褐色土 (φ 1~30cm) 5%、炭化物 (φ 1cm) 1%
10VE1/6 黄褐色土 (φ 1~30cm) 5%、炭化物 (φ 1cm) 1%
10VE1/6 黄褐色土 (φ 1~13cm) 20%、炭化物 (φ 1~2cm) 1%

第2603号ピット (SP2603)

10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 1~50cm) 10%、炭化物 (φ 1~2cm) 1%

第2604号ピット (SP2604)

10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~35cm) 24%、炭化物 (φ 1~5cm) 1%、明褐色地土 (7.5YR 5/8) 1%
10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~10cm) 7%、炭化物 (φ 1~3cm) 1%
10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~21cm) 49%、炭化物 (φ 1~3cm) 1%、明褐色地土 (7.5YR 5/8) 1%

第2603号ピット (SP2603)

10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 4~12cm) 7%
10VE1/4 黄褐色土 壁面 (φ 1~4cm) 3%

第2604号ピット (SP2604)

10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~35cm) 24%、炭化物 (φ 1~5cm) 1%、明褐色地土 (7.5YR 5/8) 1%

10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~10cm) 7%、炭化物 (φ 1~3cm) 1%

10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~21cm) 49%、炭化物 (φ 1~3cm) 1%、明褐色地土 (7.5YR 5/8) 1%

第2606号ピット (SP2606)

10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~30cm) 2%、炭化物 (φ 3~5cm) 1%

10VE1/4 黄褐色土 壁面 (φ 1~11cm) 1%

10VE1/4 黄褐色土 壁面 (φ 4~44cm) 1%

第2610号ピット (SP2610)

10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~30cm) 3%、炭化物 (φ 1cm) 2%

10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 2~30cm) 20%、炭化物 (φ 1~2cm) 1%

10VE1/4 黄褐色土 壁面 (φ 4~24cm) 15%

第2607号ピット (SP2607)

10VE1/3 壁面土 壁面 (φ 5~80cm) 1%、炭化物 (φ 1~3cm) 3%

10VE1/4 黄褐色土 壁面 (φ 1~25cm) 11%

10VE1/4 黄褐色土 壁面 (φ 1~10cm) 11%

10VE1/3 黄褐色土 壁面 (φ 20~80cm) 1%、炭化物 (φ 1~2cm) 2%

第2613号ピット (SP2613)

10VE1/4 黄褐色土 壁面 (φ 3~11cm) 1%

第2617号ピット (SP2617)

10VE1/4 黄褐色土 壁面 (φ 2~55cm) 3%

10VE1/6 黄褐色土 壁面 (φ 2~55cm) 3%

10VE1/6 黄褐色土 壁面 (φ 3~70cm) 2%

第2713号ピット (SP2713)

10VE1/4 黄褐色土 壁面 (φ 3~7cm) 1%

第2720号ピット (SP2720)

10VE1/4 黄褐色土 壁面 (φ 2~7cm) 1%、壁面 (φ 25~60cm) 3%

10VE1/6 黄褐色土 壁面 (φ 2~25cm) 2%、壁面 (φ 1~2cm) 1%

10VE1/6 黄褐色土 壁面 (φ 3~70cm) 2%、壁面 (φ 1~2cm) 1%

図69 A区ピット (3)

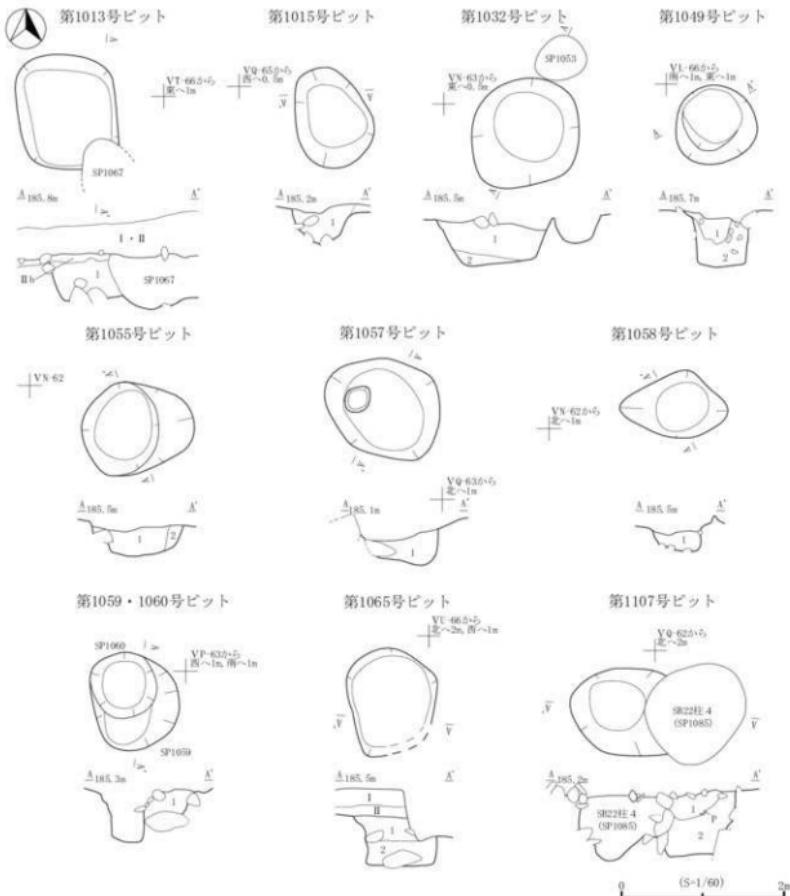


図70 A区ピット (4)

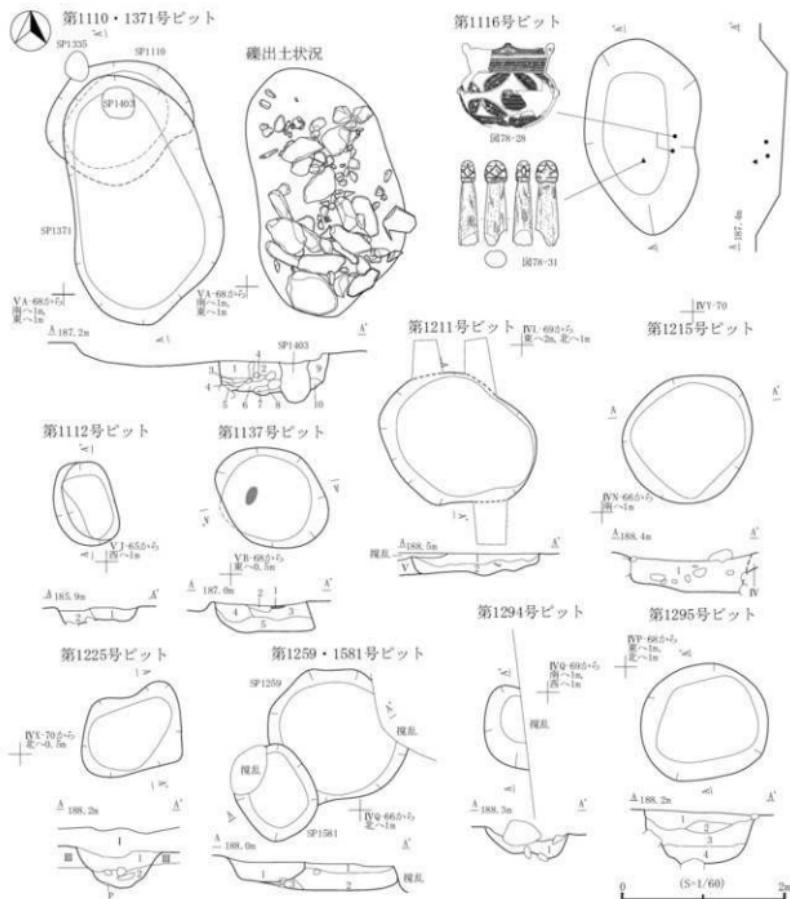
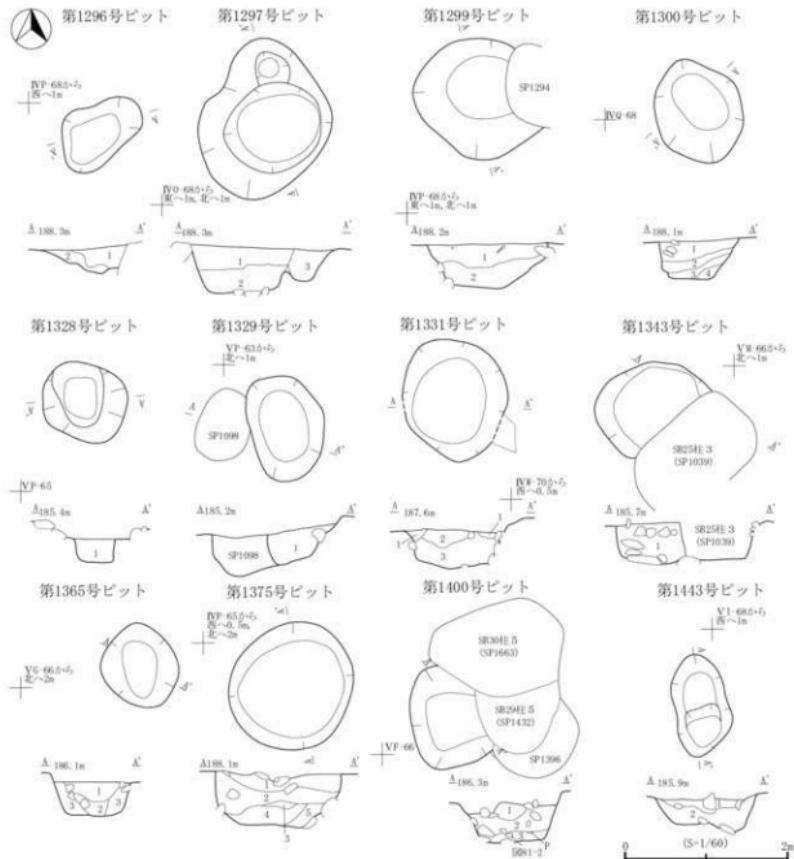


図71 A区ピット (5)



第1296号ピット (SP1296) 岩物 ($\phi 1 \sim 2m$) 15%, 岩物 ($\phi 5 \sim 20cm$) 15%
第2回 10183/4 増強色土 砂 ($\phi 10 \sim 50mm$) 2%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 3mm$) 1%

第1297号ピット (SP1297) 岩物 ($\phi 1 \sim 2m$) 15%, 岩物 ($\phi 10 \sim 50mm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%
第3回 10183/4 増強色土 砂 ($\phi 10 \sim 22mm$) 10%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10mm$) 2%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%
第5回 10183/3 增強色土 砂 ($\phi 12 \sim 16mm$) 2%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 2cm$) 1%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 3cm$) 1%

第1299号ピット (SP1299) 岩物 ($\phi 1 \sim 2m$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 3%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 2cm$) 1%
第2回 10183/4 增強色土 砂 ($\phi 10 \sim 30mm$) 5%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 2cm$) 1%

第1300号ピット (SP1300) 岩物 ($\phi 1 \sim 2m$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 2%, 增強色土 (150kg/m³) 1%
第3回 10183/4 增強色土 砂 ($\phi 10 \sim 40mm$) 10%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 2%, 增強色土 (150kg/m³) 1%

第1328号ピット (SP1328) 岩物 ($\phi 1 \sim 2m$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%
第4回 10183/4 增強色土 砂 ($\phi 10 \sim 40mm$) 10%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%

第1329号ピット (SP1329) 岩物 ($\phi 1 \sim 2m$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%

第1331号ピット (SP1331) 岩物 ($\phi 1 \sim 2m$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%

第1343号ピット (SP1343) 岩物 ($\phi 1 \sim 2m$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%
第2回 10183/4 增強色土 砂 ($\phi 10 \sim 40mm$) 10%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%

第3回 10182/3 黒褐色土 砂 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 2.5cm$) 15%, 增強色土 (100kg/m³) 15%

第1343号ピット (SP1343) 岩物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%, 增強色土 砂 ($\phi 10 \sim 40mm$) 10%

第1365号ピット (SP1365) 岩物 ($\phi 1 \sim 2m$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%, 增強色土 砂 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%

第1375号ピット (SP1375) 岩物 ($\phi 1 \sim 2m$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%
第2回 10183/4 增強色土 砂 ($\phi 10 \sim 22mm$) 10%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10mm$) 2%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%
第3回 10183/5 增強色土 砂 ($\phi 10 \sim 40mm$) 10%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%

第1400号ピット (SP1400) 岩物 ($\phi 1 \sim 2m$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%
第2回 10183/4 增強色土 砂 ($\phi 10 \sim 40mm$) 10%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%

第3回 10184/4 增強色土 砂 ($\phi 10 \sim 40mm$) 10%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%

第1443号ピット (SP1443) 岩物 ($\phi 1 \sim 2m$) 15%, 增強色土 砂 ($\phi 10 \sim 40mm$) 10%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%
第2回 10183/4 增強色土 砂 ($\phi 10 \sim 40mm$) 10%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 20cm$) 15%, 岩化物 ($\phi 1 \sim 10cm$) 15%

図72 A区ピット (6)



第1450号ピット (SP1450)

第1回 10mE-4 褐褐色土 塗化物(φ3~10mm)3%, 砂(φ20~75mm)2%

第1554号ピット (SP1554)

第1回 10mE-2/3 黒褐色土 塗化物(φ5~6mm)15%, 塗化物(φ1~5mm)5%, 浮石(φ1~3mm)5%
第2回 10mE-3 黑褐色土 塗化物(φ5~6mm)8%, 塗化物(φ1~10mm)5%, 砂(φ1~2mm)5%

第1617号ピット (SP1617)

第1回 10mE-4 黑褐色土 塗化物(φ3~7mm)2%, 塗化物(φ3~12mm)2%, 褐色土3%
第2回 10mE-4 黑褐色土 塗化物(φ1~2mm)15%, 塗化物(φ1~5mm)5%
第3回 10mE-3 黑褐色土 塗化物(φ1~10mm)15%, 塗化物(φ1~2mm)1%
第4回 10mE-3 黑褐色土 塗化物(φ2~7mm)1%, 塗化物(φ1~17mm)1%
第5回 10mE-3 黑褐色土 塗化物(φ1~10mm)2%, 塗化物(φ3~6mm)1%

第1675号ピット (SP1675)

第1回 10mE-3 黑褐色土 塗化物(φ10~15mm)2%, 塗化物(φ1~20mm)25%, 浮石(φ1~2mm)1%
第2回 10mE-3 黑褐色土 塗化物(φ10~14~41mm)1%, 塗化物(φ5~10mm)1%, 塗化物(φ1~5mm)1%
第3回 10mE-3 黑褐色土 塗化物(φ10~20mm)1%, 塗化物(φ5~10mm)1%, 塗化物(φ1~5mm)2%
第4回 10mE-3 黑褐色土 塗化物(φ10~50mm)1%, 塗化物(φ5~10mm)1%, 塗化物(φ1~5mm)1%
第5回 10mE-2/3 黑褐色土 塗化物(φ10~40mm)1%, 塗化物(φ5~10mm)1%, 塗化物(φ1~2mm)1%
第6回 10mE-3 黑褐色土 塗化物(φ10~20mm)2%, 塗化物(φ1~3mm)2%, 砂(φ1~2mm)1%
第7回 10mE-3 黑褐色土 塗化物(φ10~25mm)2%, 塗化物(φ1~3mm)2%, 砂(φ1~2mm)1%

第1851号ピット (SP1851)

第1回 10mE-4 黑褐色土 砂(φ10~200mm)20%, 塗化物(φ1mm)1%

第1852号ピット (SP1852)

第1回 10mE-6 黑褐色土 塗化物(φ1~100mm)10%, 塗化物(φ1~14mm)5%
第2回 10mE-4 黑褐色土 塗化物(φ5~33mm)25%, 塗化物(φ1~5mm)3%

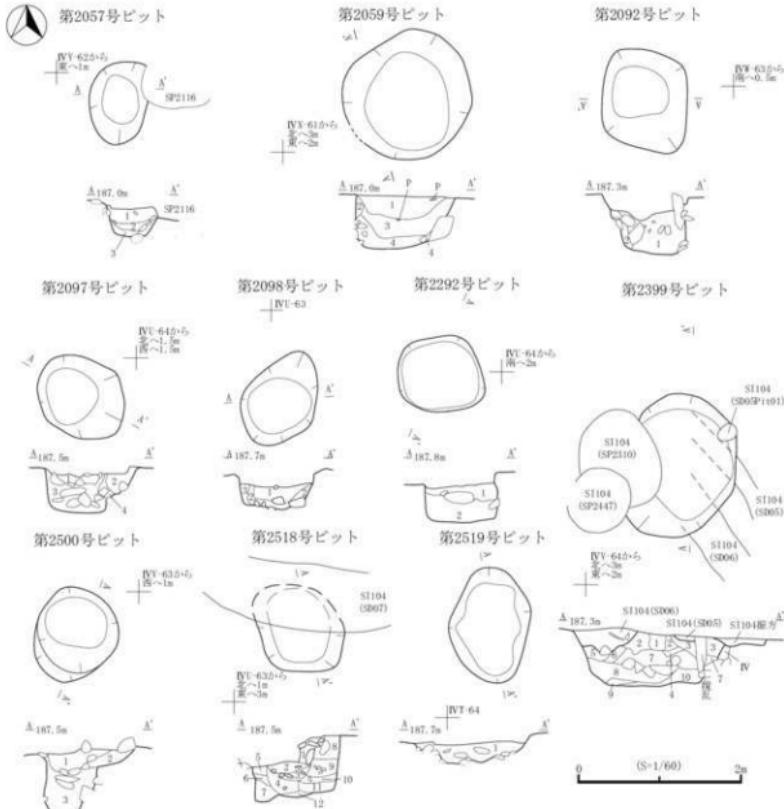
第1853号ピット (SP1853)

第1回 10mE-6 黑褐色土の混合土 塗化物(φ2~3mm)2%, 塗化物(φ1~10mm)7%
第2回 10mE-6 黑褐色土 塗化物(φ20~50mm)1%

第1900号ピット (SP1900)

第1回 10mE-4 黑褐色土 塗化物(φ2~3mm)2%, 塗化物(φ10~40mm)5%, 塗化物(φ2~3mm)1%
第2回 10mE-4 黑褐色土 塗化物(φ10~40mm)5%, 塗化物(φ2~3mm)1%
第3回 10mE-3 黑褐色土 塗化物(φ10~40mm)7%, 塗化物(φ2~10mm)7%
第4回 10mE-3 黑褐色土 塗化物(φ10~40mm)6%, 塗化物(φ5~20mm)5%, 塗化物(φ5~20mm)5%
第5回 10mE-3 黑褐色土 塗化物(φ10~40mm)5%, 塗化物(φ2~5mm)1%
第6回 10mE-3 黑褐色土 塗化物(φ10~40mm)5%, 塗化物(φ5~10mm)5%
第7回 10mE-5 黑褐色土

図73 A区ピット (7)



第2057号ピット (SP2057)

51 107E/4 黒褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 2mm$) 5%
51 107E/4 黒褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 2mm$) 10%
51 107E/6 黒褐色土 細化物 ($\phi 2 \sim 3mm$) 5%, 細化物 ($\phi 1 \sim 2mm$) 1%

第2059号ピット (SP2059)

51 1 107E/3 黒褐色土 細化物 ($\phi 2 \sim 3mm$) 5%, 細化物 ($\phi 1 \sim 2mm$) 1%
51 2 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 2mm$) 5%
51 3 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 2mm$) 5%
51 4 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 2mm$) 5%, 細化物 ($\phi 1 \sim 4mm$) 5%,
51 5 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 2mm$) 5%, 黄褐色土 2%

第2097号ピット (SP2097)

51 1 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 8mm$) 10%

第2098号ピット (SP2098)

51 1 107E/3 黑褐色土 細化物 ($\phi 2 \sim 11mm$) 5%, 細化物 ($\phi 1 \sim 4mm$) 5%
51 2 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 2 \sim 13mm$) 5%, 黑褐色土 5%
51 3 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 2mm$) 5%
51 4 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 4mm$) 5%, 黑褐色土 5%
51 5 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 147mm$) 5%, 黑褐色土 5%, 黄褐色土 2%

第2292号ピット (SP2292)

51 1 107E/2 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 200mm$) 10%, 黄褐色土 5%
51 2 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 190mm$) 25%, 黄褐色土 5%
51 3 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 140mm$) 20%, 黄褐色土 5%

第2399号ピット (SP2399)

51 1 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 30mm$) 10%, 黄褐色土 5%
51 2 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 1mm$) 2%, 黄褐色土 5%
51 3 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 1mm$) 2%, 黄褐色土 5%
51 4 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 1mm$) 2%, 黄褐色土 5%
51 5 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 1mm$) 2%, 黄褐色土 5%
51 6 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 1mm$) 2%, 黄褐色土 5%
51 7 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 1mm$) 2%, 黄褐色土 5%
51 8 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 1mm$) 2%, 黄褐色土 5%
51 9 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 1mm$) 2%, 黄褐色土 5%
51 10 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 1mm$) 2%, 黄褐色土 5%

第2500号ピット (SP2500)

51 1 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 20mm$) 10%, 黄褐色土 5%
51 2 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 100mm$) 25%, 黄褐色土 5%
51 3 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 200mm$) 20%, 黄褐色土 5%

第2518号ピット (SP2518)

51 1 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 21mm$) 5%, 細化物 ($\phi 1 \sim 2mm$) 2%, 黑褐色土 5%
51 2 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 52mm$) 5%, 黄褐色土 ($\phi 2 \sim 4mm$) 5%
51 3 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 1mm$) 2%, 黑褐色土 5%
51 4 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 12mm$) 5%, 黄褐色土 ($\phi 1 \sim 7mm$) 25%
51 5 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 4mm$) 5%, 黄褐色土 ($\phi 1 \sim 7mm$) 25%
51 6 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 1mm$) 2%, 黄褐色土 5%
51 7 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 1mm$) 2%, 黄褐色土 5%
51 8 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 1mm$) 2%, 黄褐色土 5%
51 9 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 1mm$) 2%, 黄褐色土 5%
51 10 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 1mm$) 2%, 黄褐色土 5%
51 11 107E/4 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 1mm$) 2%, 黄褐色土 5%

第2519号ピット (SP2519)

51 1 107E/3 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 200mm$) 10%, 黑褐色土 (107E/4) 5%,
51 2 黑褐色土 細化物 ($\phi 1 \sim 2mm$) 5%

図74 A区ピット (8)



図75 A区ビット (9)

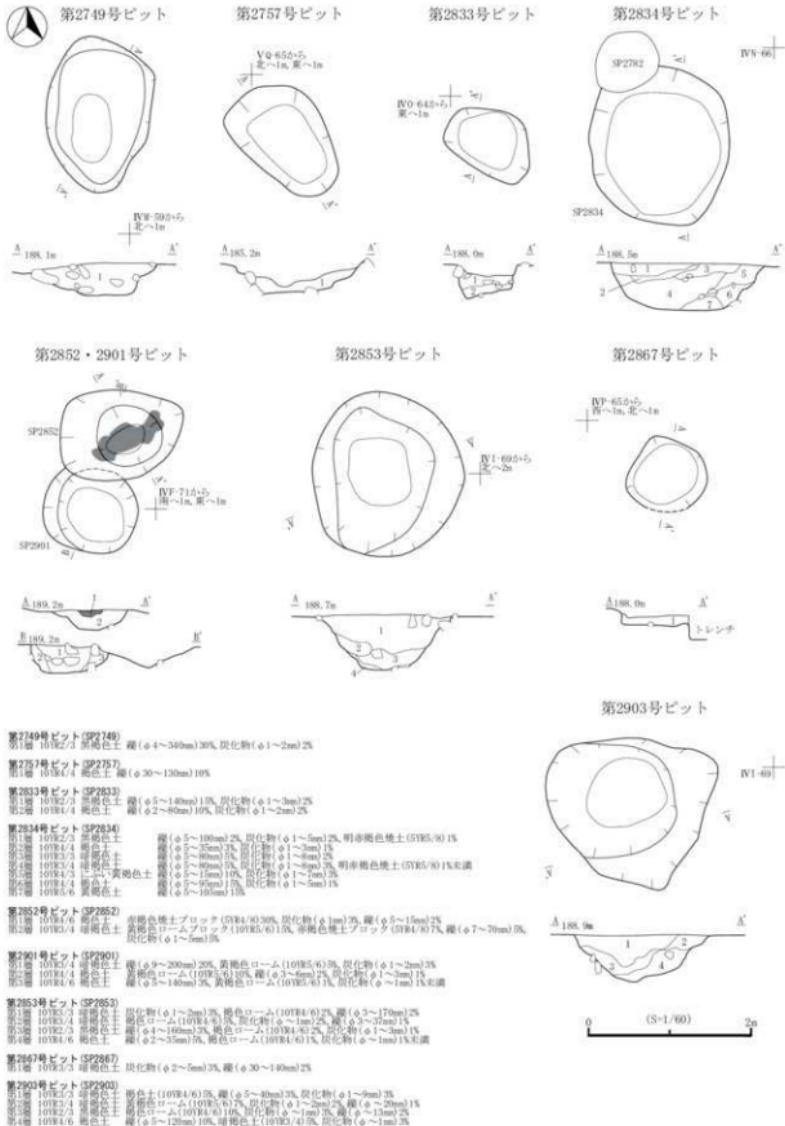


図76 A区ピット (10)

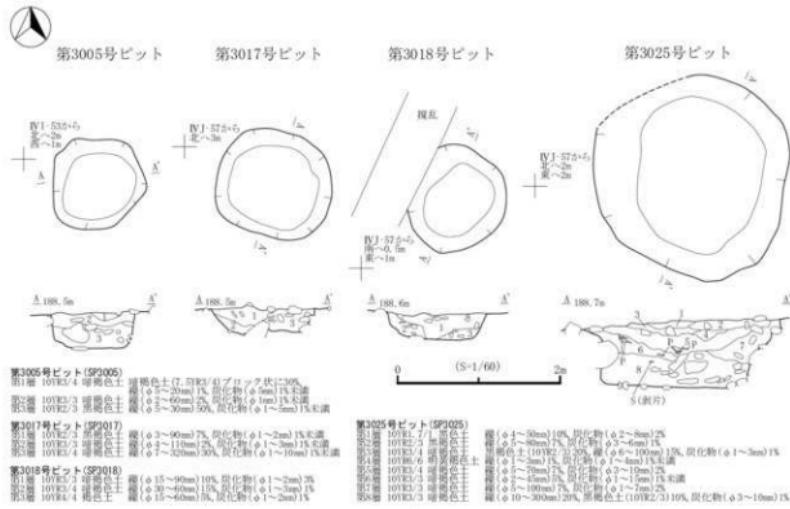


図77 A区ピット(11)

基程度が群在する貯蔵穴群と考えられるものもある。また、A群・B群1類には、ピットの分布状況・規模などから掘立柱建物跡の構成柱穴の可能性があるものが含まれている。具体的には、第26・27号掘立柱建物跡間の搅乱周辺の一群（第1079・1342・1358・1391・1416号ピット）、第35号掘立柱建物跡東側の重複が著しい一群（第2046・2344・2624・2794号ピットなど）、第16・36号掘立柱建物跡間の搅乱周辺の一群（第1736・1751・1803号ピット）がある。また、第22・23号掘立柱建物跡間にB群ピットが約30基分布するが小規模で浅く、底面標高値にもばらつきがみられ、建物跡として認識できなかった。ただし、ピット以外にも第101号焼土遺構が存在し、何らかの構築物が存在していた可能性がある。

なお、ピットとしたものの変遷を概観すると以下のようになる。

後期初頭のものは、環状に分布する掘立柱建物跡群の内側や沢4の東側に点在する。

後期前葉のものはA区全域に分布するが、とりわけ当該期の住居跡が分布するIVW～VF-60～68グリッド付近とB群1類の項で述べたようにA区南側のIV I～IV P-63～69グリッド付近にまとまりを持つ。また数は少ないものの、環状に分布する掘立柱建物跡群の内側にも分布する。

後期中葉のものはA区南側のIV L～N-65～67グリッドにわずかに分布する程度である。

後期後葉は集落が最も盛行する時期と考えられる。当該期のピットは同時期と考えられる堅穴住居跡（第104A・B・111号堅穴住居跡）及び掘立柱建物跡（第27・38・39号掘立柱建物跡）周辺に限定的に分布する。また、環状に分布する掘立柱建物跡群の内側にはみられない。（葛城・加藤・最上・工藤）

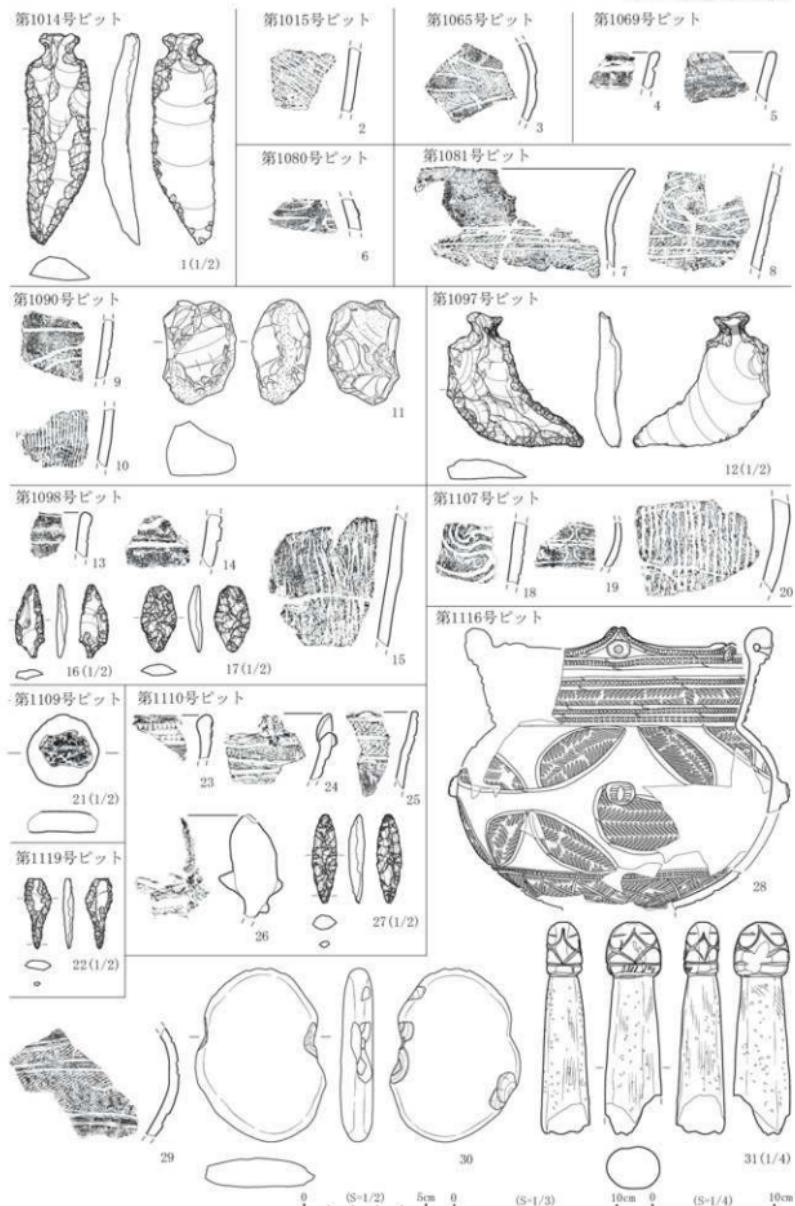


図78 A区ピット出土遺物（1）

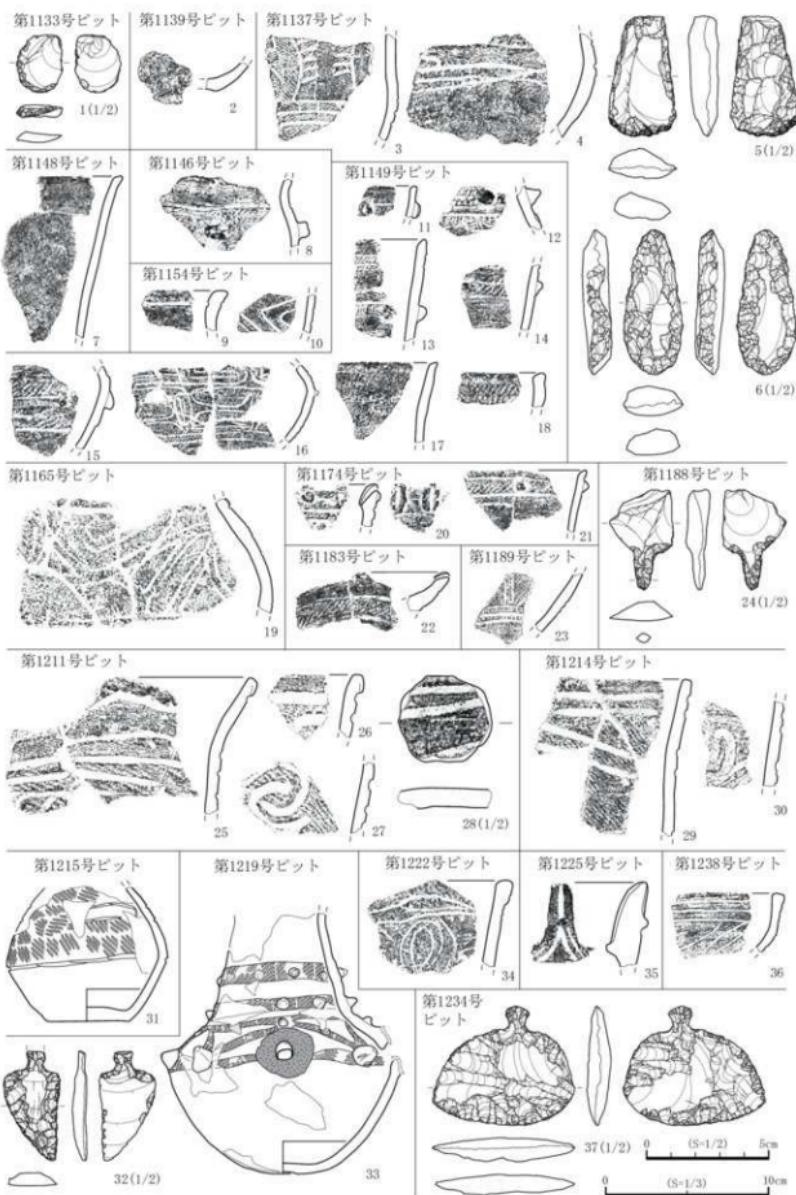


図79 A区ビット出土遺物（2）

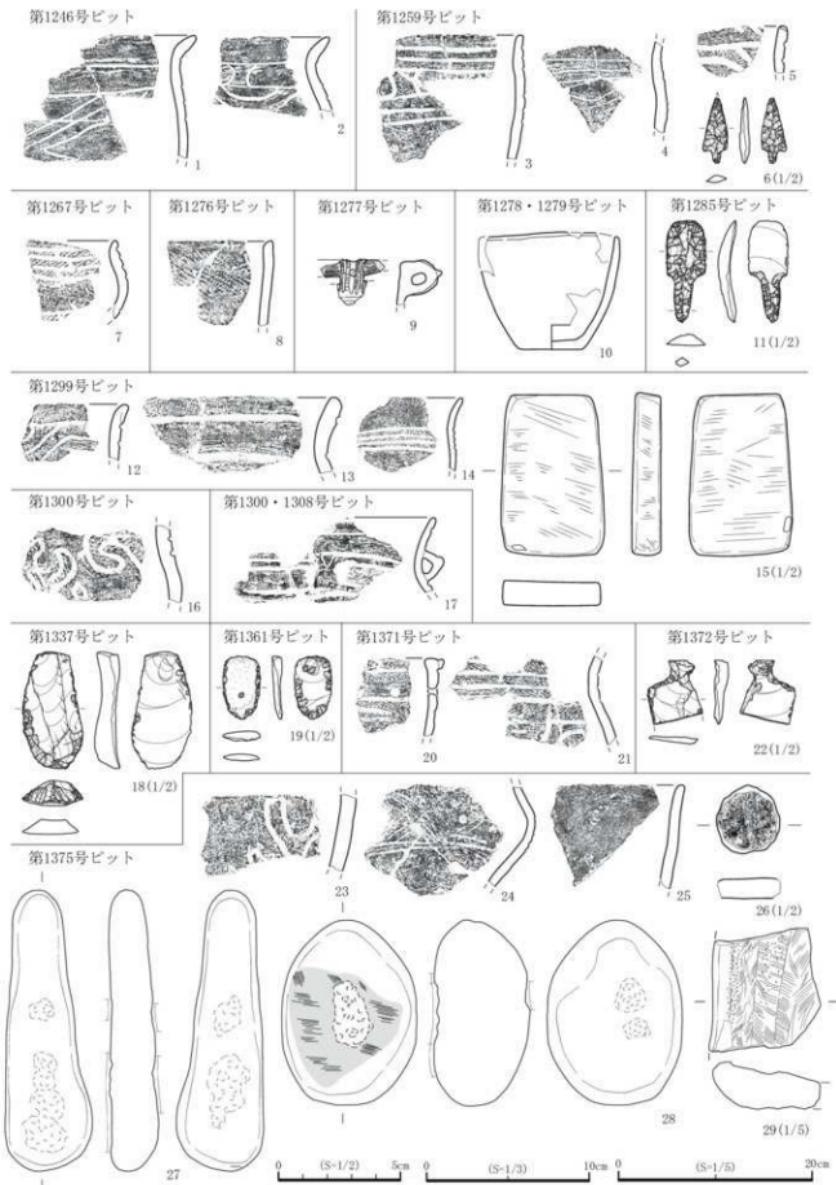


図80 A区ピット出土遺物（3）

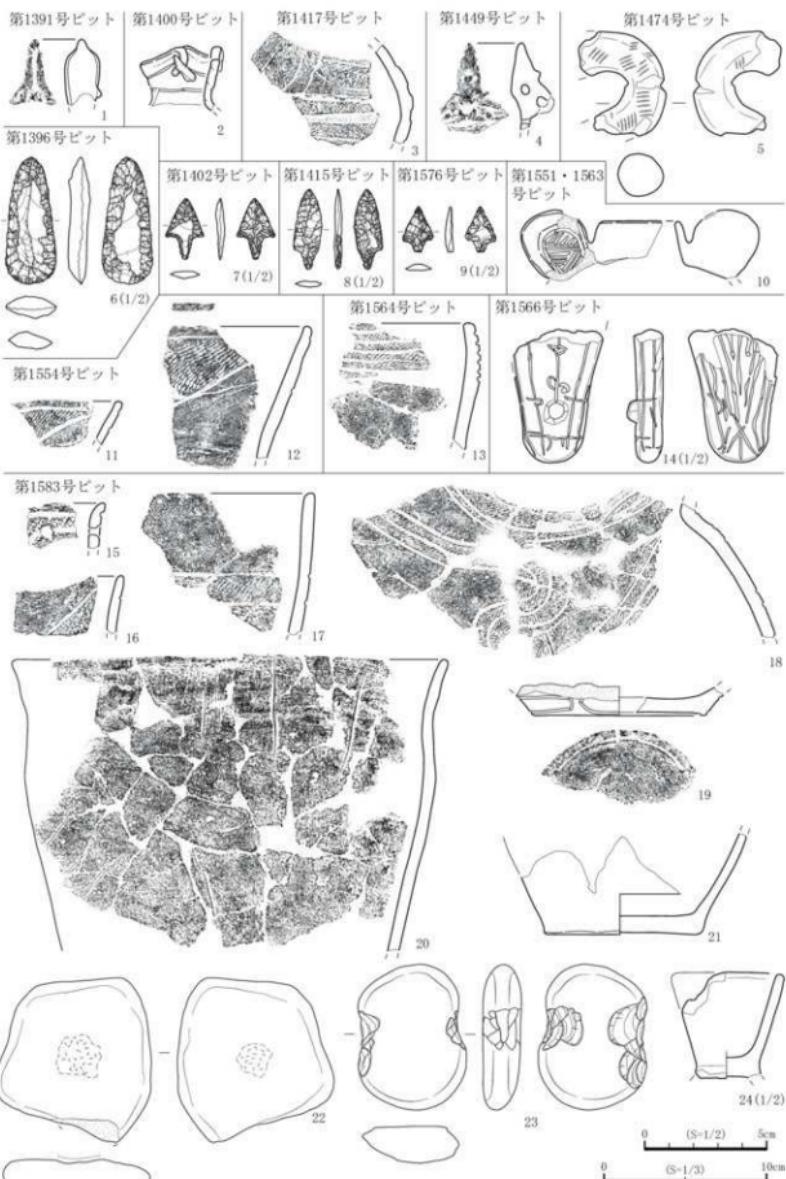


図81 A区ピット出土遺物（4）

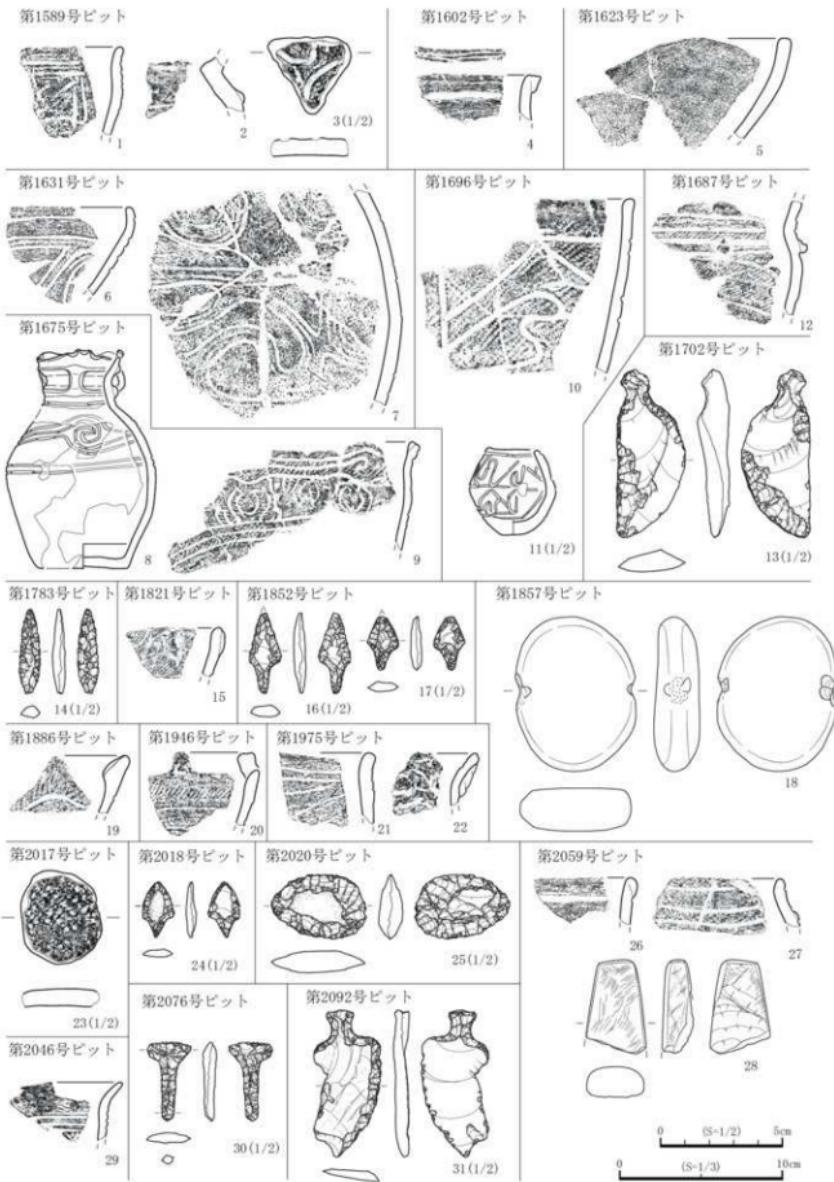
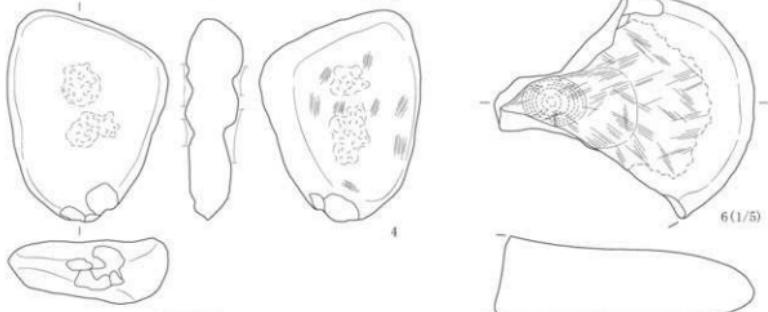
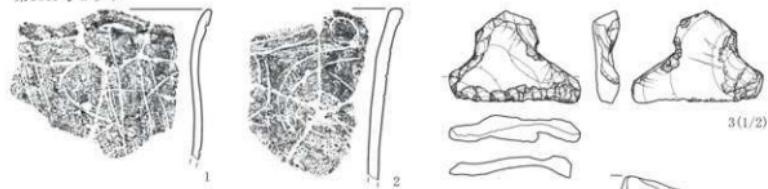
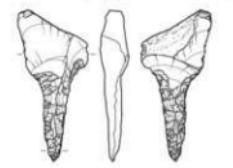


図82 A区ピット出土遺物（5）

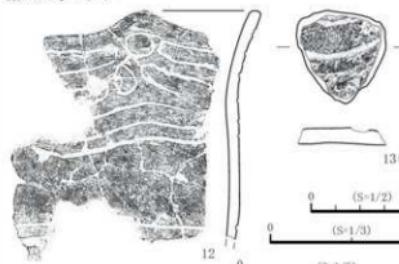
第1869号ピット



第2163号ピット 第2190号ピット



第2191号ピット



第2197号ピット

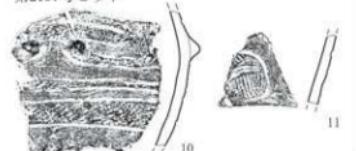
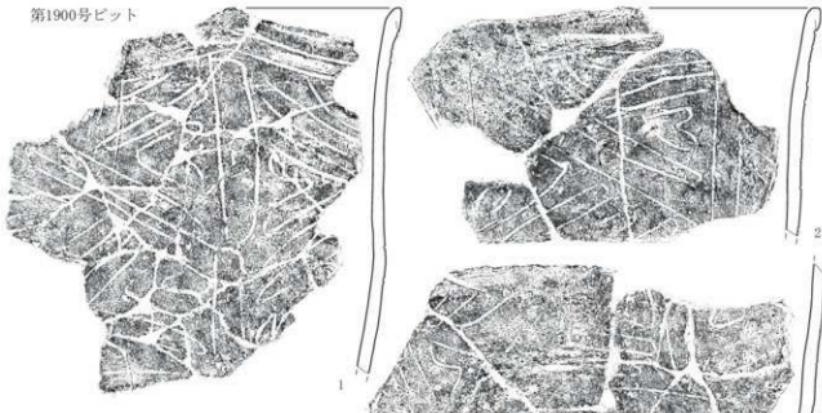


図83 A区ピット出土遺物 (6)

第1900号ピット



第2214号ピット



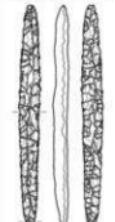
第2215号ピット



第2202号ピット

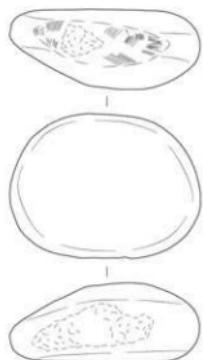


第2200号ピット



7(1/2)

第2273号ピット



13

図84 A区ピット出土遺物 (7)

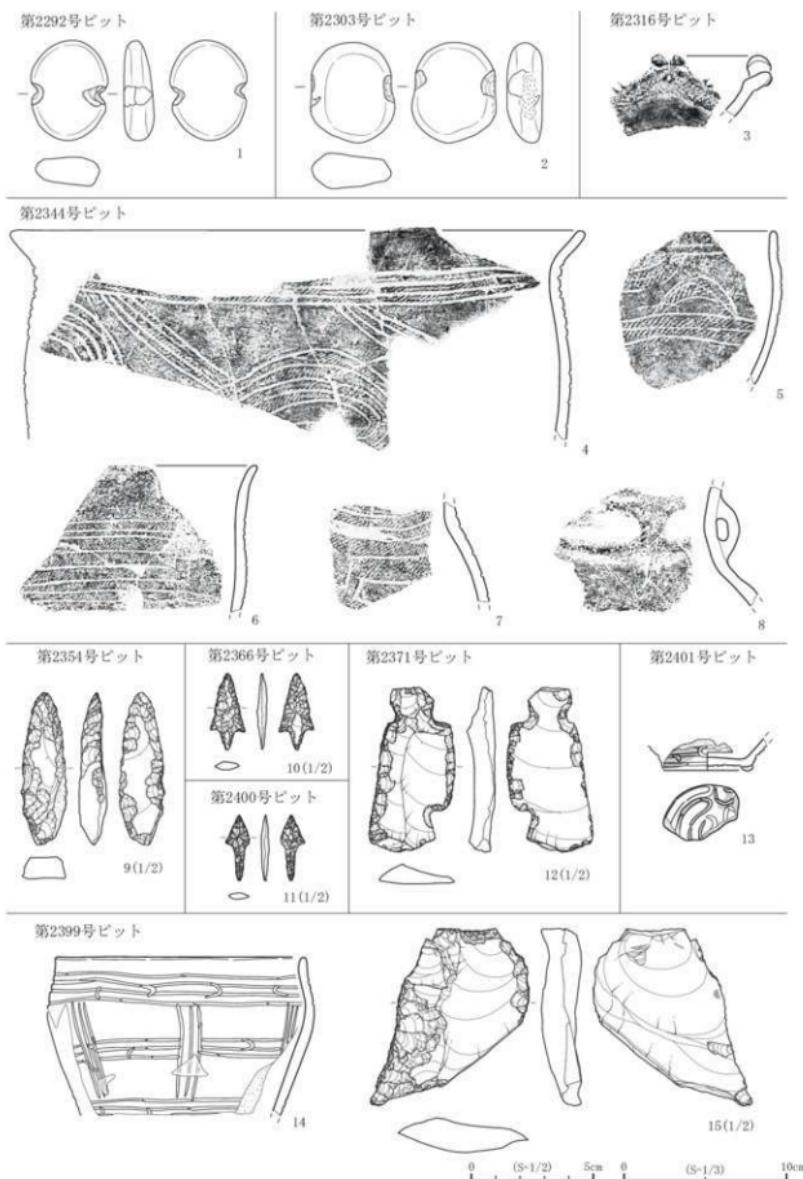


図85 A区ピット出土遺物 (8)

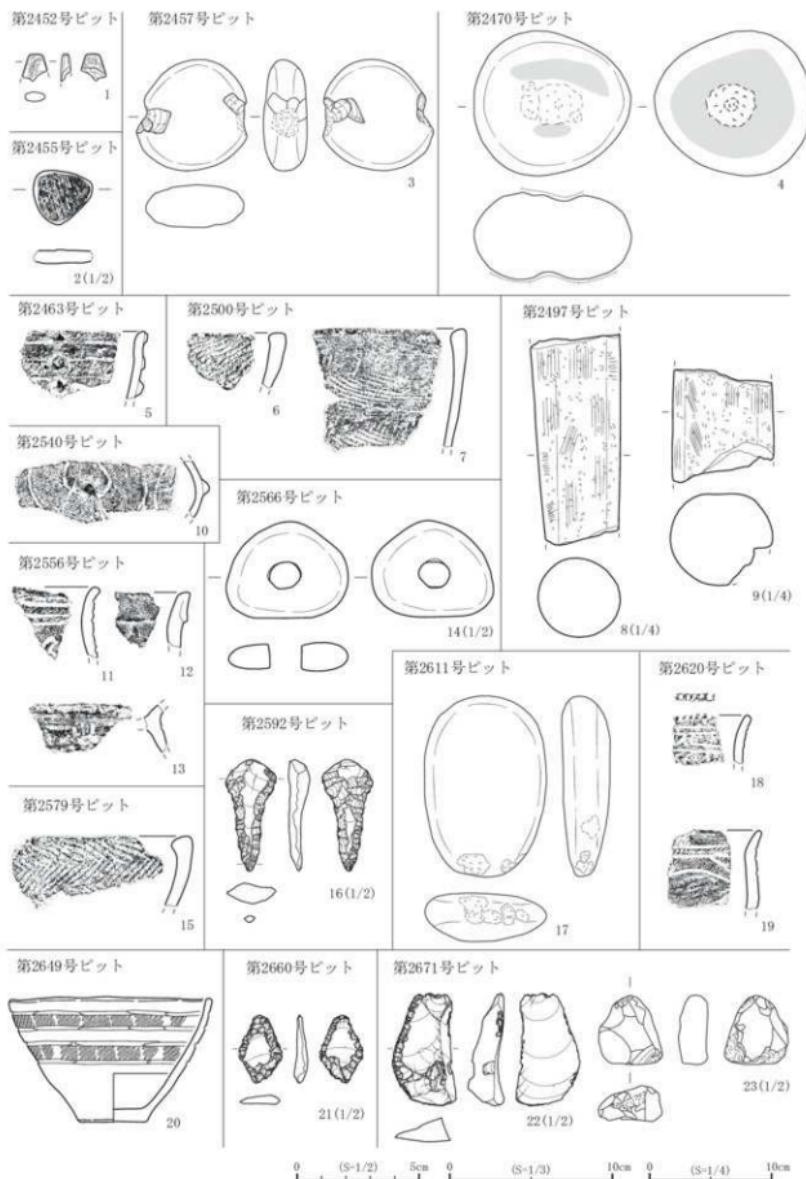
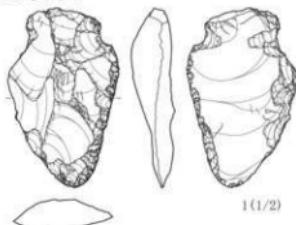
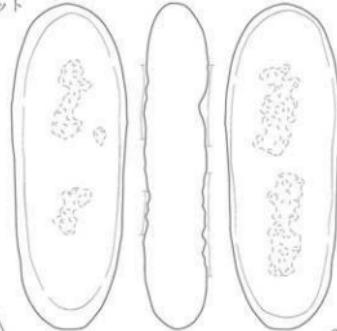
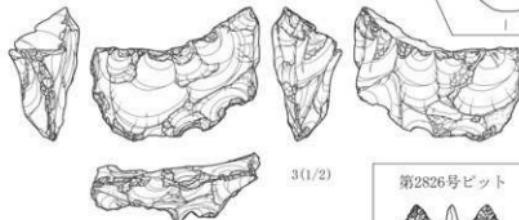
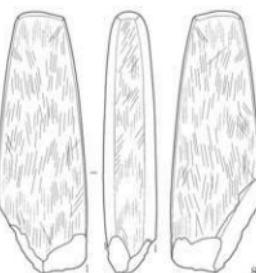


図86 A区ピット出土遺物（9）

第2713号ピット

第2784号
ピット第2813号
ピット

第2867号ピット



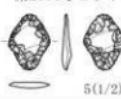
第2833号ピット



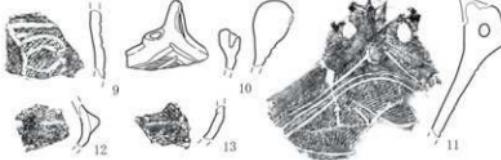
第2826号ピット



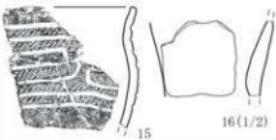
第2834号ピット



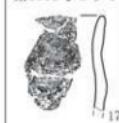
第3025号ピット



第3004号ピット



第3005号ピット



第3017号ピット

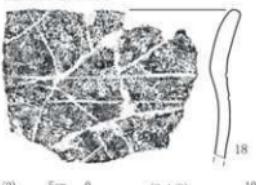


図87 A区ピット出土遺物 (10)

8 捨て場（図88～96）

【位置・確認】 A区南端のIVB～D-71～73グリッドに位置する。第III層を精査中に遺物の集中範囲を確認した。当初は住居跡の可能性を考えたが、掘り込みや炉、柱穴等の施設は検出されなかつた。また、遺物も窪地に廃棄されたような状況ではなく、平坦な出土状況であったため、捨て場として調査を行つた。

【重複】 第2915・2920・2934号ピットと重複し、本遺構が新しい。また本遺構の西側で第115号焼土遺構と重複し、本遺構が古い。

【平面形・規模】 捨て場の範囲は約6×4mで、南北方向にやや長い不整形を呈する。

【堆積土】 4層に分層した。遺物は、炭化物混じりの暗褐色土及び褐色土を主体とする1～3層の上面から集中して出土した。遺物が集中する堆積層はほぼ水平に広がるが、層下限の傾斜は北側で約10cm低い。また、層厚は厚い部分でも15cm程度で、北側に向かうほど薄くなる。捨て場出土遺物の取り上げについては、層厚がごく薄い状況であることから層位的に区分せずに1層相当として取り上げている。

【出土遺物】 捨て場からは多量の土器が出土した。この他、石器や土製品・石製品なども少量出土している。土器の出土量と比較して、土器以外の遺物の出土比率が極めて少ない特徴がある。捨て場の出土土器は総重量約160kgで、平成23・24年度調査分のA区出土土器の3割近くを占める。特に、捨て場範囲の南側にあたるIVB・C-72グリッドからは、個体土器が横倒しの潰れた状態で出土するものが多く、その周囲のグリッドからは破片で多量に出土する傾向が看取された。捨て場範囲の北側では層厚が薄くなるため、遺物の出土量も北側に向かうほど減少する。

土器はほとんどが第III群B1類・C類で、繩文時代後期前葉のものである。中でも第III群B1類土器は、十腰内I式新相の概ね单一時期の資料と考えられる。器種は深鉢形土器、壺形土器などがみられる。深鉢形土器は二次被熱の痕跡が認められるものが多い。

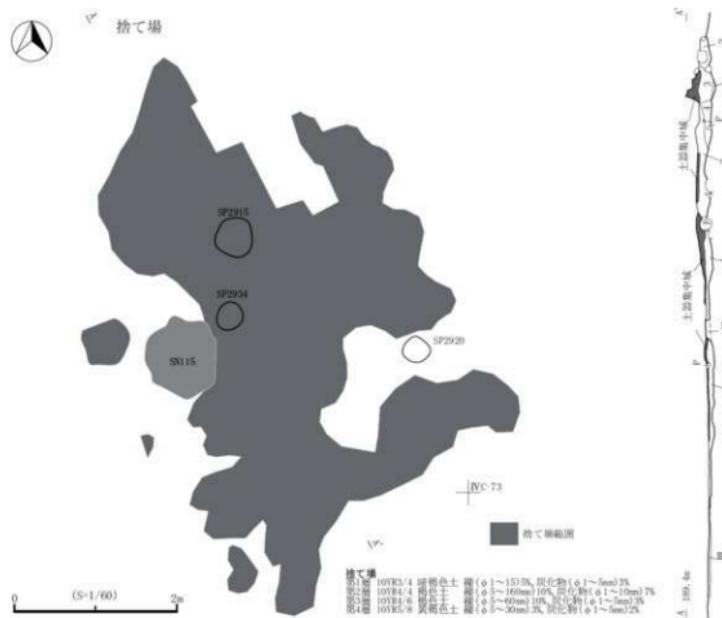
第III群B1類土器（図89～図95-1～21）は2～3条単位の沈線文が施文されるものが主体である。文様の施文手法としては充填繩文によるものが多く、他に沈線のみのもの、櫛齒状工具による充填文がみられるものがある。文様には入組波状文、波頭状文、蓮華花弁文、方形区画文などが多くみられ、クランク状文（図95-15）や鍵状文（図95-19～21）も少量みられる。充填繩文に用いられる原体は、単節LRが多数を占める。

図89-1は5単位の波状口縁の深鉢形土器である。文様帶は胴部上半にみられる。口縁波頂部下には波状文が施されている。胴部には曲線的な波状をなす三角形文が施文されている。緩いS字状の副次的な文様もみられる。同様の文様構成の土器としては、図90-2・図91-5の壺形土器がある。

図90-1は大型の壺形土器である。口縁部は平口縁で、口唇部には斜位の刻目が施されている。胴部の最大径部分が器高の2分の1ほどに位置し、文様帶は胴部上半にみられる。胴部には櫛齒状沈線による横位展開の入組波状文が施文されている。副次的に弧状やS字状の文様が配されることで、4単位の巴状の文様にもみえる。入組波状文や巴状文が施文されるものとしては、図92-1～3の深鉢形土器がある。また、櫛齒状沈線文が施文されるものとしては、図95-16～18の破片資料がある。

図90-3は壺形土器である。文様帶の幅は狭く、横位沈線により区画されている。区画内には長方形ないしは長椭円状の文様が施文される。同様の文様構成の土器としては、図95-1～14の破片資料がある。

図91-1・4・8は頸部に橋状把手がみられる壺形土器である。8は4単位の波状口縁で、口唇部に刻目が施されている。胴部には縦位の区画文がみられ、区画内にS字状と波頭状の入組文が施

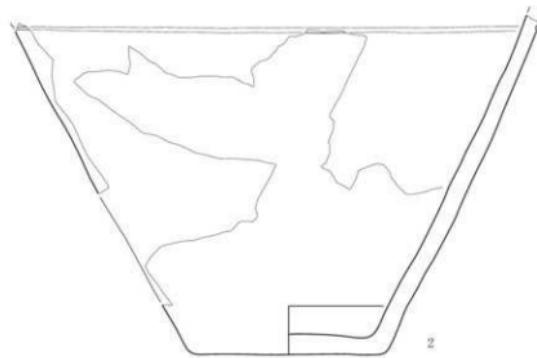
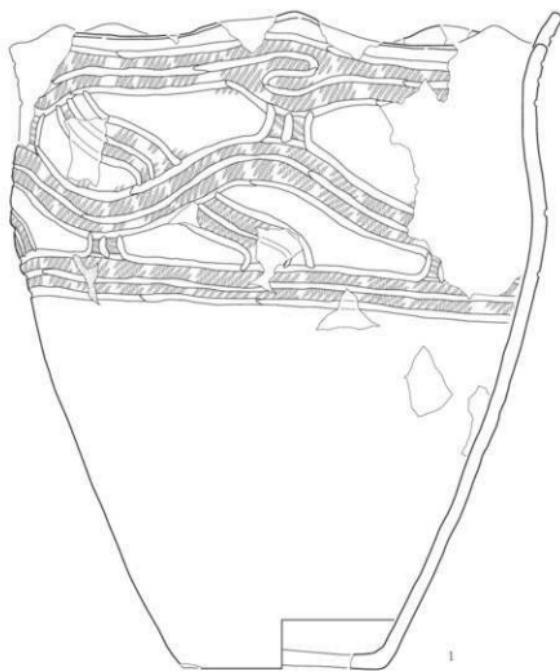


文されている。S字状と波頭状の入組文が施文されるものとしては、図94-9の破片資料がある。

図92～図94-1～8・10～17は波状文や蓮華花弁文が施文される資料である。破片資料がほとんどであるため全体的な器形は不明だが、胴部最大径が上位に位置し、口縁部が短く外反するものが多い。口縁資料の内、文様構成が比較的わかるものとしては、図92-7・9・12・図93-1などが挙げられる。口縁部は波状を呈し、口唇波頂部に円形刺突文がみられる。口縁波頂部下には波状文がみられ、胴部にはx字状に展開する波頭状文が施文されている。図93-2～11の口縁部にも波状文が施されており、口唇波頂部には円形刺突や刻目がみられるものや、粘土の貼り付けによる小さな膨らみが認められるもの（図93-7～9）も一定量存在する。また、口縁部の内面には沈線・刺突・隆帯による文様施文がみられるものもある（図93-1・2・10～12・17）。胴部文様は、x字状の波頭状文と蓮華花弁文の組み合わせ文様（図93-21・22・図94-3・12）や、文様の屈曲部や端部などに蓮華花弁文が施されるもの（図92-5）、典型的なx字状の波頭状文とは異なるが、形骸化した可能性があるもの（図93-17～20）がある。

第III群C類土器（図95-22～26）は、数量的には第III群B類と同程度出土しているが、特徴的なものを選別して図示した。22・23は網目状捺糸文が施されている。24は地文縞文のみの深鉢形土器で、胴部がわずかに膨らむ器形である。25・26は底部に木葉痕がみられる。

第III群G類土器（図95-27）は注口部片が1点出土している。器面は丁寧にミガキ調整されている。石器は38点出土し、石鏃2点（図96-1、非掲載0.8g）、石籠3点（図96-2～4）、石核1点（219.3g）、



0 (5-1/3) 10cm

図89 A区捨て場出土土器（1）



図90 A区捨て場出土土器（2）

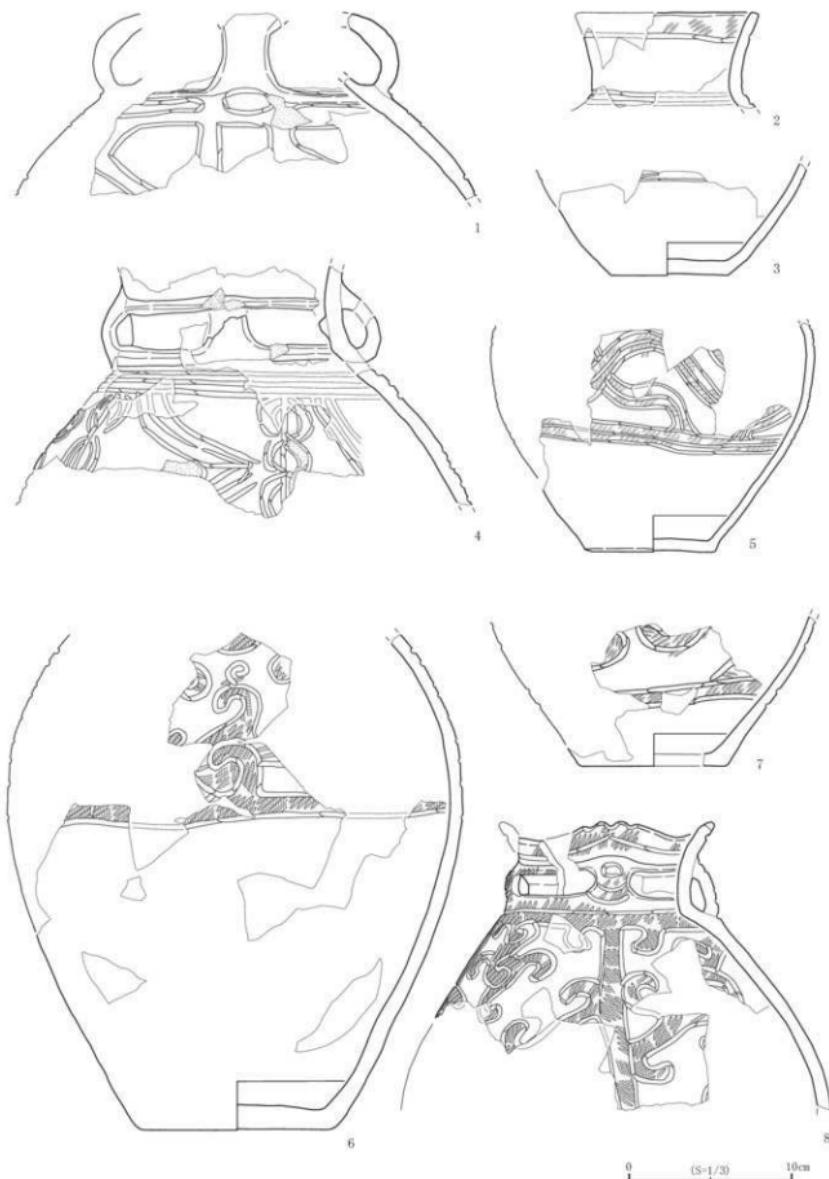


図91 A区捨て場出土土器（3）

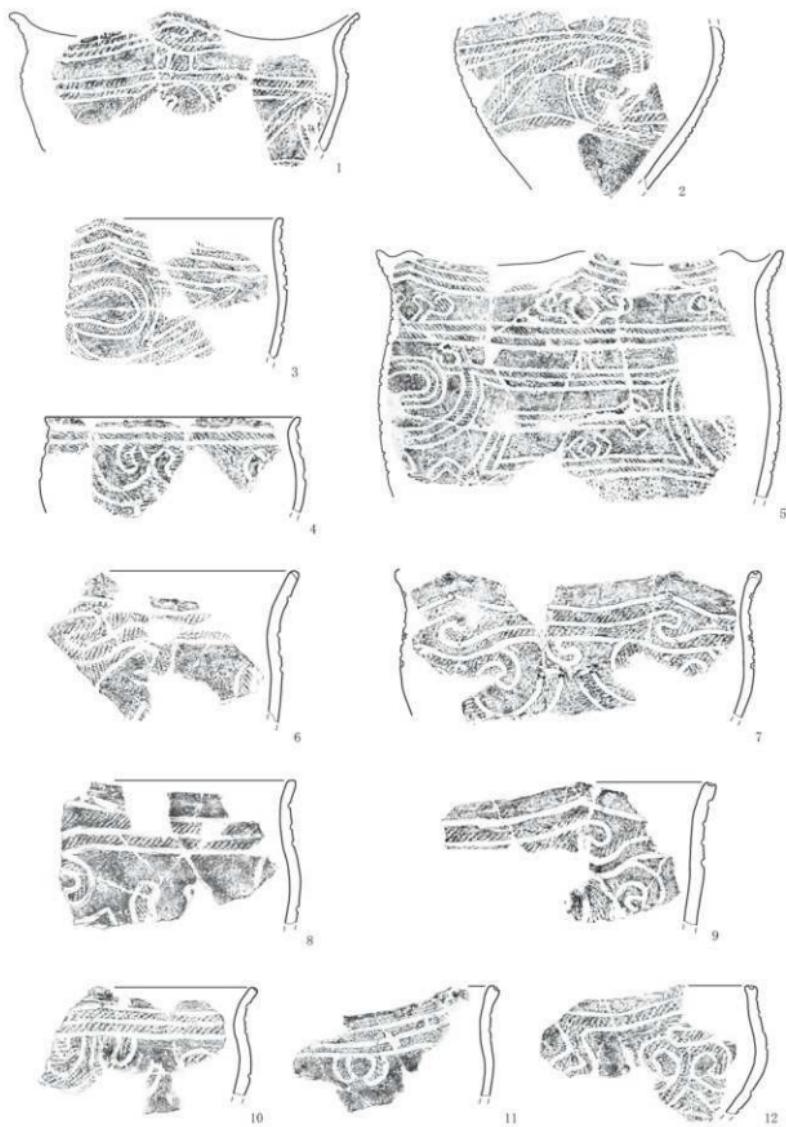


図92 A区捨て場出土土器 (4)

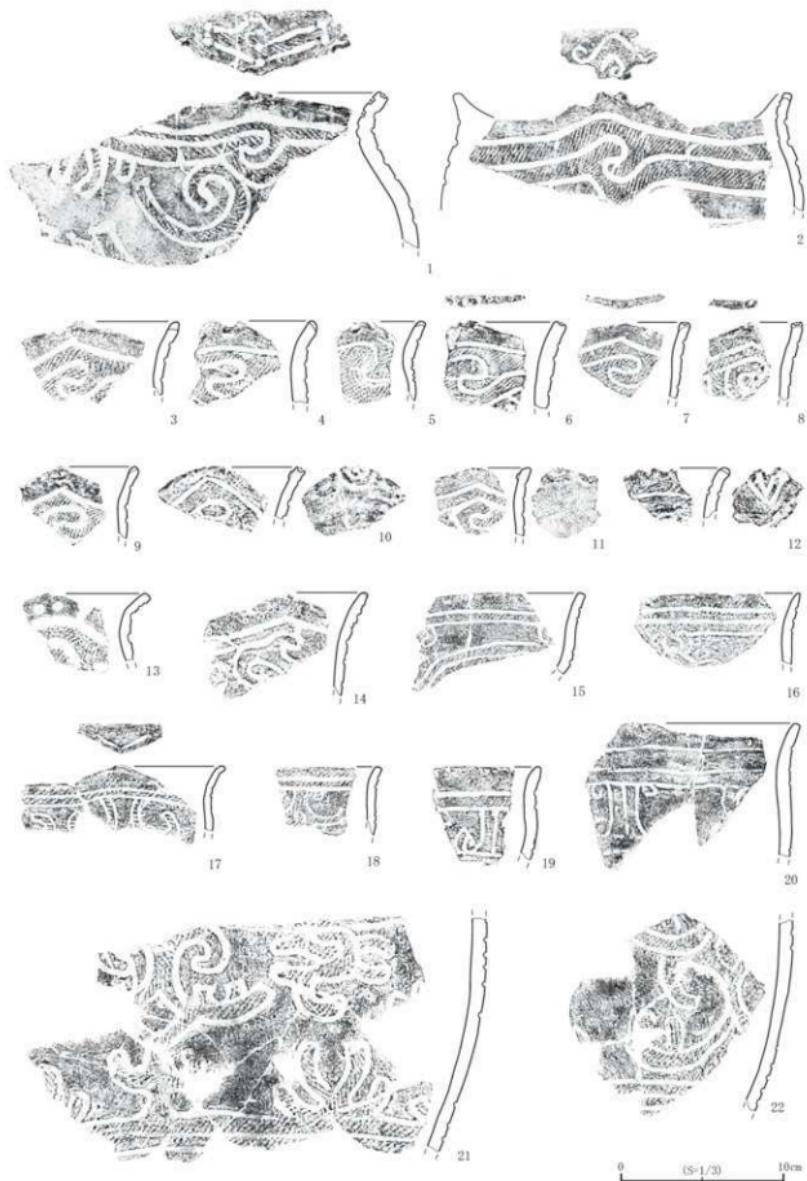


図93 A区捨て場出土土器（5）

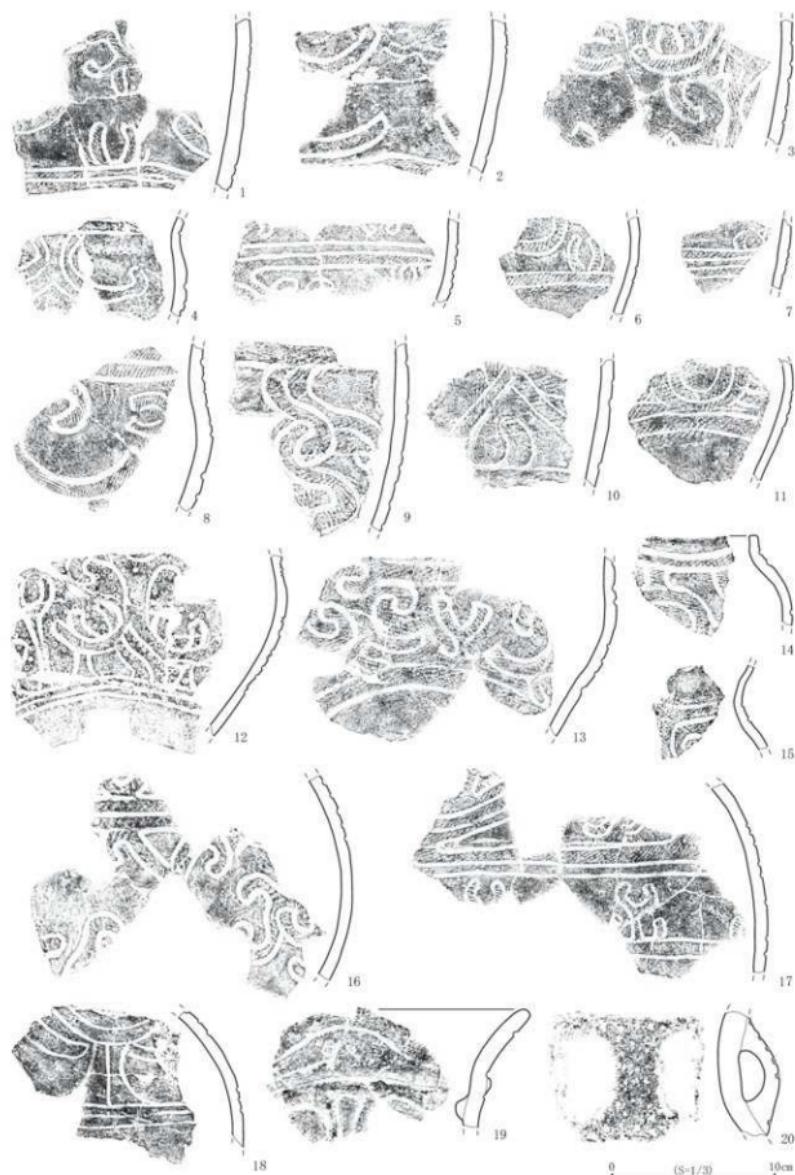


図94 A区捨て場出土土器 (6)

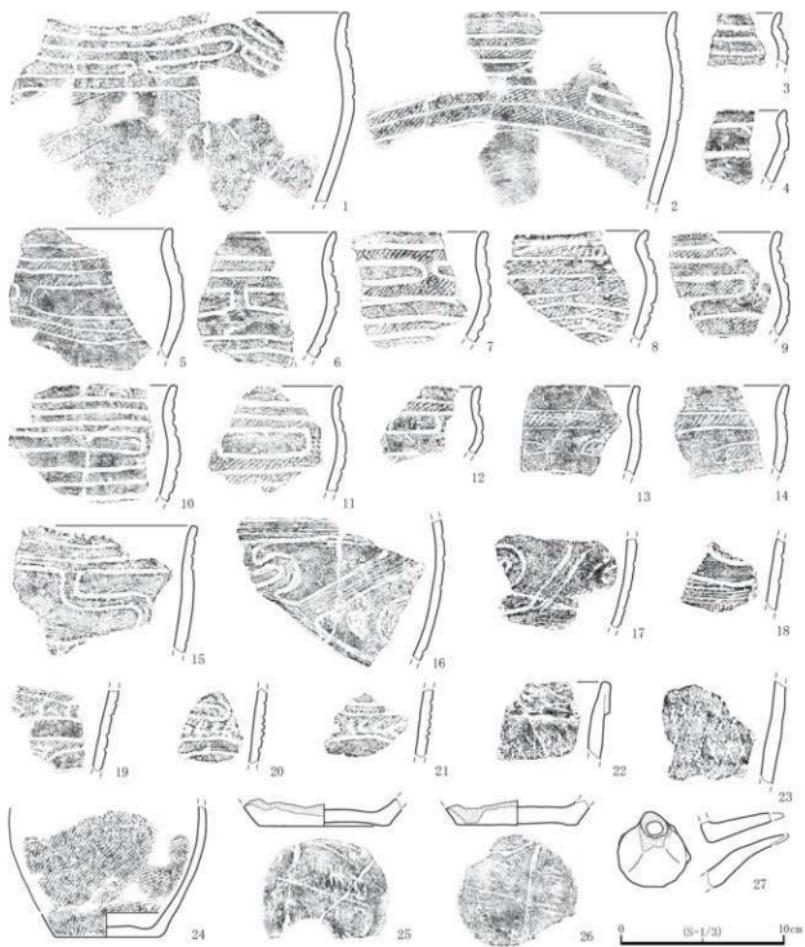


図95 A区捨て場出土土器（7）

スクレーバー1点(6.7g)、U.F.8点(208.0g)、R.F.8点(75.9g)、磨製石斧2点(図96-5・6)、石錐1点(49.4g)、石皿1点(図96-7)、剥片145点(1681.6g)が出土した。石錐は円基のものであり(図96-1)、石錐は大石平型がある(図96-3・4)。磨製石斧は刃部または基部が大きく欠損したものであり、いずれも利器として使用不能になったものである(図96-5・6)。石皿は石材が凝灰岩であり、ほぼ完形品である(図96-7)。皿部は1面であり、わずかに縁を作出し搔き出し部が認められるものである。磨面は平坦で、長軸方向の磨運動が推定できる痕跡と炭化物の付着が観察される。石皿には被熱の痕跡は認められないため、炭化物は使用時に付着した残滓と考えられる。土器片とともに無造作に投棄された状態

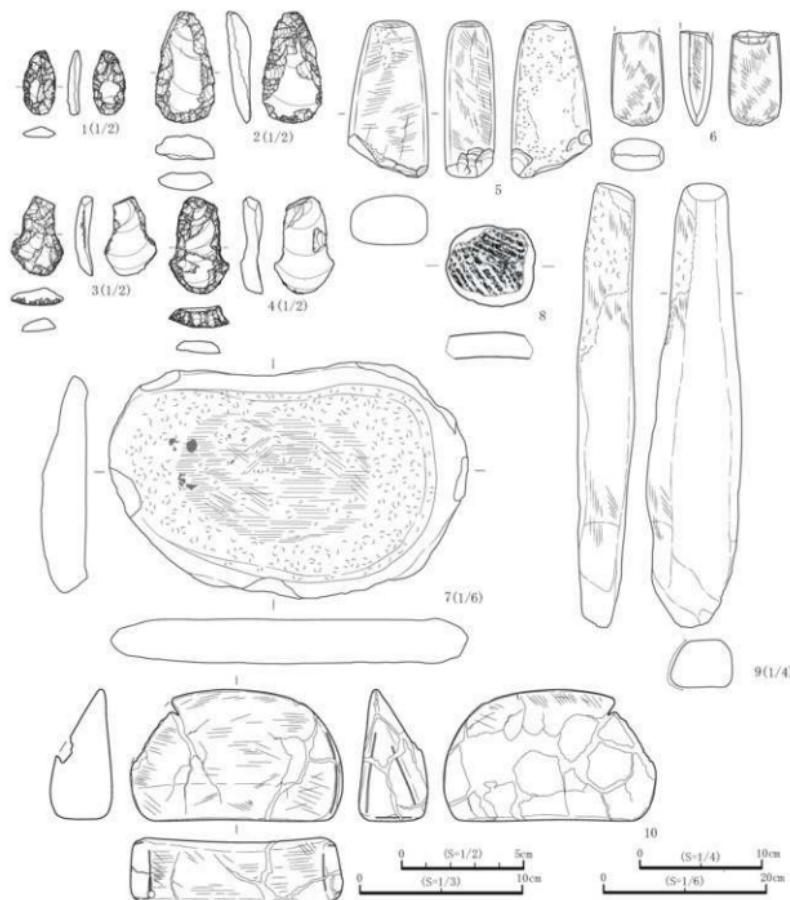


図96 A区捨て場出土石器・土製品・石製品

で出土した。剥片では黒曜石が1点(9.9g)出土している。石器の様相については、遺物量が土器に比べて少ないと、磨製石斧の外には破損したものが認められないことが特徴として挙げられる。

土製品は1点出土した。図96-8は単軸絡条体1類が施文される円盤状土製品である。

石製品は2点出土した。図96-9は石棒である。頭部はつくり出されず、上端付近が敲打整形された後研磨されている。図96-10は石冠である。被熱による破損が顕著である。両側面には線刻が施される。

〔小結〕本遺構は集落の中心と考えられるA区中央部とは離れた、A区南端の遺構の分布がまばらな区域に位置する。遺物の出土状況を考慮すると、さらに南側の調査区域外に広がっていた可能性がある。

る。本遺構が形成された時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。出土土器の様相から十腰内I式新相の比較的短期間に形成されたと考えられる。

(葛城・最上・工藤)

9 遺構外出土遺物

土器 (図97~図102)

A区の遺構外からは約330kgの土器が出土した。縄文時代前期から後期後葉にかけての土器が出土しており、中でも縄文時代後期前葉の土器の出土量が最も多い。本項では沢の出土土器についても合わせて記載する。出土層位は第III層及び沢4の1層からの出土が多い。土器の出土分布としては、環状に分布する掘立柱建物跡群の内側において非常に稀薄で、特に縄文時代後期後葉の土器にその傾向が顕著である。

第Ⅰ群

本群土器はIVN-59・60の沢4の2層中から小破片が出土した。器面観察が困難なほど摩耗が著しく、図示し得なかつたが、深鉢形土器の胸部破片と推測される。胎土に纖維の混入が認められ、円筒下層式の範疇で捉えられるものと思われる。

第Ⅱ群 (図97-1~図102)

本群土器は調査区南東側のIVKグリッド以南から少量出土した。図97-1は第Ⅱ群A類で隆帯の貼り付けと馬蹄形の縄文押圧がみられる。図97-2・3は第Ⅱ群B類である。2は隆帯の貼り付けと刺突文がみられる。3は二股状の口縁突起で、突起部には横位の粘土紐の貼り付けがみられる。図97-4は第Ⅱ群C類で地文縄文に懸垂文が施されている。

第Ⅲ群 (図97-5~図102)

A類 (図97-5~8) はIVM~R-59~63を中心とする沢4の1・2層から比較的まとまって出土した。地文縄文に三角形区画文を基調とする文様が施される深鉢形土器の破片資料がみられる。波状口縁、折り返し状口縁が主体で、口縁部は無文帯となるものが多い。沈線幅は幅広で、地文縄文は単節原体による縦位回転施文のものがほとんどである。口縁部が直線的に立ち上がるもの(5・6)は、折り返し状口縁部直下から胸部文様帶がみられるのに対し、頸部が括れるもの(7・8)は、口縁部無文帯の幅が広く、胸部最大径付近から胸部文様帶がみられる。6は三角形区画内に蛇行沈線文が施され、地文に縦位の撫糸文がみられる。

B1類 (図97-9・10~図99-18) はA区において最も出土量が多く、調査区のほぼ全域で出土した。特に、第105・106号堅穴住居跡周辺や沢4の1層からの出土が目立つ。環状に分布する掘立柱建物跡群の内側では出土量が少ない。器種は深鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器などがみられる。図97-9・10は波状口縁の深鉢形土器の復元個体である。9は口縁部、胸部最大径部、底部付近に横位沈線文が施文され、底部に網代痕がみられる。10は2~3条の沈線による曲線文が施文されている。図98-1は波状口縁の壺形土器で、巴状入組文が施文されている。図98-14~17は浅鉢形土器で、口縁部が短く外反するもの(14・16)と内湾するもの(17)がある。図98-18・19は底部に沈線文が施される資料である。19には網代痕を模したような基盤目状の文様がみられる。図99-1~13は曲線的な文様が施されるもので、X字状の波頭状文や蓮華花弁文が施文されるものが多い。図99-14・15には方形区画文、図99-16~18には櫛齒状沈線文がみられる。

B 2 類（図99-19～24）は調査区南側のIVXグリッド以南から少量出土した。深鉢形ないしは鉢形土器の破片資料がみられる。図99-19・20は口縁部が「く」の字状に屈曲して立ち上がり、最大径が口縁部に位置する。口縁部の無文帯の幅は広く、胴部文様帯の幅は狭い。胴部文様には菱形文が施され、菱形の外輪郭はわずかに弧線をなす。図99-21～24は口縁部がわずかに内湾気味に立ち上がる器形を呈し、器厚は薄い。口唇部は内傾するものもみられる（21・24）。口縁部の上位に、横位の沈線区画がみられる。23・24の胴部には波状の入組文が施文されている。24の入組文の上部には上向きの弧状文が配され、21・22もこれに類するものと思われる。

C 類（図100）は、縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての無文および地文縄文のみの一群である。本類土器の出土量は、第III群B 1 類とともに本遺跡出土土器の主体を占める。少量しか出土していない第II群土器との量比関係を鑑みると、多くは縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられるものと思われる。図100-1は膨らんだ胴部から口縁部が内傾して立ち上がる樽形の器形を呈し、口縁部付近に2条の横位隆帶と隆帶間に橋状把手がみられるもので、縄文時代中期後葉に位置づけられる。地文縄文のみの資料としては、網目状または縱～斜位の撚糸文が施されるもの（図100-4～7・9）や斜縄文が施されるもの（図100-8・10）などがある。撚糸文はR原体が多い。

D 類（図101-1～23）は調査区南側のVCグリッド以南から散在的に出土した。器面研磨が特徴的な壺形ないしは注口土器片（図101-20・21）も本類に含む。図101-1～19はD 1 類で、深鉢形土器、浅鉢形土器などの破片資料がみられる。口縁部は大きく開き、内湾して立ち上がる器形のものが多数を占める。口縁部には装飾突起がみられるものも多い（12～14・17～19）。1～8は横位に数条の平行沈線が施されるものである。平行沈線間に弧状や蛇行状の沈線区画がみられるものがある。口唇部は内側に肥厚するものもある（3・6）。6～8は口縁部の無文帯の幅が広い。7・8は口縁部と胴部の境界に段を有する。9・10には斜行沈線による鋸歯状文、11・12には入組文が施文されている。12は第3025号ピットの出土土器（図87-11）と同一個体で、口縁部頂部に橋状把手と扇状の突起がみられる。15は鉢形の注口土器、16は片口土器である。図101-22・23はD 2 類で、22は幅広の縄文帯によりクランク文が施文されている。縄文帯には0段多条の異方向回転による羽状縄文が施される。羽状縄文の条と条の接線は縱走している。23の屈曲部には刻目帯がみられる。

E 類（図101-24～28）は第104号竪穴住居跡の南側で比較的まとまって出土した。本類土器は口縁部や屈曲部などに刻目帯がみられ、他の文様構成・文様要素が不明瞭な破片資料を一括した。本類土器の属性は第III群D 2 類・F 1 類の土器にみられる。24～26は深鉢形土器の口縁部片である。口縁部は内湾して立ち上がり、口唇部が内側に肥厚している。二股状の波状口縁（24）や山形の波状口縁（25）などがある。27は沢4から出土した異形土器で、隆帶上に刻目がみられる。

F 類（図101-29～32・図102-1～16）は第104号竪穴住居跡周辺や、調査区西側の掘立柱建物跡群・竪穴住居跡群の周辺からの出土が目立つ。遺構内・外ともに、環状に分布する掘立柱建物跡群の内側からはほとんど出土しない。図101-29はF 1 類の壺形土器で、口縁部や頸部の屈曲部に刻目帯がみられる。頸部には推定4単位の貼瘤がみられ、胴部には木葉状文が施文されている。内外面に赤色顔料が塗布されている。図102-4は木葉状文の屈折部に大ぶりな貼瘤、そのやや上方には小ぶりな貼瘤がみられる。図102-6～8は口縁部に縄文帯がみられ、口唇部がやや肥厚している。6は平線に口縁部突起がみられる。図102-11はF 2 類で大型の口縁部突起の下に貼瘤がみられる。図102-13は櫛齒

状条線による充填文がみられるもので、第114・115号堅穴住居跡などからも同様のものが出土している（図19-7・図20-14）。図102-15はF3類で幅狭の帶縄文上に貼瘤がみられ、口唇部にも瘤状突起がみられる。

G類（図102-17～21）は縄文時代後期中葉から後葉にかけての無文および地文縄文のみの一群で、F類とほぼ同様の出土分布の傾向を示すが、沢3の堆積土からも出土している。17～19は器形や縄文施文の特徴が第III群B2類・D1類土器に類似するもので、縄文時代後期中葉に位置づけられる。19は「く」の字状に屈曲する頸部に撚糸圧痕文がみられる。17・18は器厚が薄手で、口唇部に縄文が施文されている。20・21は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口唇部が肥厚する深鉢形土器である。地文縄文のみのものはO段多条原体が多用される。羽状縄文は異種原体による施文がほとんどである。胎土は直径2～5mmの粗砂粒が比較的多く混入しているものが目立つ。
（最上）

石器（図103～116）

平成23・24年度調査において、遺構外から出土した石器は剥片石器は1242点、礫石器は153点で、剥片石器は石鎌100点（116.2g）、石槍4点（172.0g）、石錐10点（36.5g）、石匙26点（411.9g）、石籠11点（333.0g）、スクリーパー352点内I類223点（4698.6g）、II類127点（1939.2g）、不明2点（21.8g）、楔形石器3点（22.8g）、異形石器2点（4.2g）、石核39点（7126.4g）、U.F.286点（5723.7g）、R.F.409点（7289.0g）が出土した。礫石器では磨製石斧13点（1448.2g）、磨石15点（7615.1g）、敲石20点（4056.3g）、凹石43点（20181.0g）、石錐49点（6562.0g）、石皿9点（222833.0g）、台石3点（4347.8g）が出土し、本節の掲載石器は、器種別出土点数の比率を反映させ抽出した。

遺構外出土の石器は、第III層を除けば沢の堆積土からの出土が多い。出土位置では、環状に巡る掘立柱建物跡の南側から沢3・4の区域（VC～IVD-56～66）の出土が多い。石材は、剥片石器は珪質頁岩がほとんどで、石英がわずかにみられる。黒曜石はU.F.1点（7.9g）、R.F.1点（7.2g）と、剥片が32点（127.3g）出土した。礫石器は凝灰岩が多く、片岩やダイサイトがわずかに利用される。

石鎌は、平基有茎、凹基有茎、凸基有茎、平基無茎、凹基無茎、尖基、円基、柳葉形があり、出土量の多い順に凸基有茎のIIa類、平基有茎のIIc類、凹基有茎のIib類と尖基のId類（図103-53）の順で続く。平基無茎のIb類（図103-3）、凹基無茎のIa類（図103-1）、円基のIe類（図103-4～9）、柳葉形のIII類（図103-54）はごく少數の出土である。全長は、2～3cmの比較的短いものが多くみられる。分布状況は、IVM～VE-58～64グリッドに集中する。この地域は、環状に巡るように検出された掘立柱建物跡の南側に位置し、堅穴住居跡とピットがまとまって分布し、かつ沢4が検出されている。沢の堆積土からの出土が多い。

石錐は棒状のものが多くを占める（図103-55～58）。

石匙は柄の軸が刃部と平行するI類（図104-1～8）、直行するII類（図104-12・16～18）、刃部が斜行するIII類（図104-9～11・13～15）ある。出土量ではI類が約半数を占め、以下III類、II類の順に続く。分布状況は、A区全域から出土している。

石籠は、長さは4～6cm（図105-1～6）と10cm前後のもの（図105-7～9）があり、前者にはいわゆるトランシェ様のものも含まれる（図105-6）。分布状況は、A区全域から出土している。

スクレーバーは、I類のうち、下端部に急角度の調整を持つものが多くみられる（図106-10～17、図107-1～3）。II類は比較的大型の剥片を素材とするものでは図105-16、図106-3があり、小型のものは図106-9がある。出土分布状況は2箇所に集中がみられ、IVN～VD-61～65グリッドとIVG～IV-0-56～61グリッドの出土が多い。

楔形石器はごく少数の出土であり、調査区中央部第III層と南部の擾乱からの出土である（図105-12・13・14）。

異形石器は2点みられる（図105-10・11）。このうち図105-11は上部を欠損しており全体は不明であるが、十字形を呈するものとみられる。出土位置は調査区の南端部である。

U.F.は鋭利な縁辺の剥片であるものが選択的に利用されている（図107-4）。出土分布状況は大別し沢3と沢4堆積土と沢4東側に集中がみられ、IV0-59グリッドから15点、IVS-62グリッドから15点、IVP-63グリッドから12点出土している。

R.F.は調査区全域から出土し、特に沢の堆積土の1層から多く出土している。

石核は原礫面を残すものが多い。多打面石核が多く、打面転移を繰り返しながら素材剥片の剥離作業を行っている（図108-1～3）。

剥片は調査区のほぼ全域から出土し、出土量の多い順からIVK～VE-56～64、IVB～IVI-72・73、V M～VS-53～55の3箇所に集中域がある。黒曜石の剥片は、散発的な出土状況ながらもIVP～VE-61～64に集中している。

磨製石斧は、全長は数cmを測るものが多く、大型のものでも10cm程度である（図109-2）。刃部形状はすべて両凸刃である。石材は概して緑色凝灰岩であり、一部片岩もみられる。破損した後に敲石として転用したものが散見される（図109-4）。分布状況では、環状に巡る掘立柱建物跡の南側に位置するIVX軸以南の第I・III層より出土し、特に沢4の東側にあたる、IV0～IVQ-61～64の地域にやや密度の高い箇所がみられる。

磨石は多くが円礫を素材とするが、亜角礫も少数みられる。円礫を素材とするものには、機能面が曲面のもの（図109-10）と平滑なもの（図109-12・13・14）があり、後者が多い。機能面には、運動に伴う磨痕が観察され（図109-12・13）、敲打痕を伴うものもある（図109-13・15）。亜角礫を素材とするものは長さ10cm以上のもので、平坦な部分を機能面としている（図109-14）。円礫素材のものは、直径5cm程度の球形のものや（図109-11）、長さ15cm程度の枕状・円筒状の形状で（図109-10・15）、屈曲部を機能面としたものがある。石材は凝灰岩と流紋岩であり、前者が多い。分布状況は散発的である。

敲石は、多くが亜角礫を素材としている（図110-4～6）。全長は5～12cmの楕円もしくは立方体状を呈する。敲打痕が点的なもの（図110-2・3・6・8）と面的なもの（図110-4・5・7）がある。

凹石は、扁平な円礫が多く扁平な亜角礫も素材とされている。円礫を素材とするものは、面あたりの敲打部が一箇所のもの（図111-1～8）と複数箇所のものがある。面あたりの敲打部数は、表裏同数のものが多い。敲打部は、局所的に穿たれたものと比較的広範囲のものに大別され、前者の敲打痕は深いものが多い（図111-5・6）。

磨石・敲石・凹石の分布状況では、全般に散発的だが敲石と凹石は沢4付近から出土する傾向がみられ、特に凹石はIVM～IVQ-59～64グリッドから18点出土し、沢4とその東側に集中する傾向があ

る。堅穴住居跡や掘立柱建物跡、ピットが激しく重複する箇所は散発的な出土状況を示す。

石錘は、49点中切目石錘（I類）が2点（図115-11、非掲載187.7g）、打欠石錘（II類）が44点、不明3点が出土した。紐掛けの抉りはすべて短軸両端にみられる。II類は剥離または敲打により作出され、剥離が多数を占める。また、十字形の抉りを有するものが3点出土した（図115-3・非掲載151.9g）。分布状況は、IVN～IVY-58～65グリッドに集中し、特に南側に位置する沢4の堆積土から集中して出土した。特定のグリッドから集中して出土する例として、IVP-61グリッドの6点の出土が挙げられる。

石皿は皿部や縁を作出するI類と（図116-1～4）、原礫の平坦部を皿部とするII類がある（図116-5・6）。I類は平面形態が台形もしくは隅丸方形を呈し、脚を作り出すものがある（図116-1・2）。裏面に線条痕や整形による敲打痕が観察されるものもある（図116-2）。石材はすべて凝灰岩である。

台石は3点（4347.8g）、礫器は1点（563.4g）の出土である。

（工藤）

土製品（図117～119）

A区遺構外から出土した土製品は86点である。これには平成21・22年度調査で出土した土偶19点も含まれる。

土偶は26点すべてを図示した。図117-1は頭部破片である。前方に突出した逆三角形状の顔面に、隆起によって眉、鼻が、また刺突によって目、鼻穴、口がそれぞれ表現される。図117-2・3は沈線が施文される頸部破片である。図117-4・5は貫通孔をもつ腕部破片である。図117-6～12・図118-1は腕～胴部破片である。いずれも破断面に貫通孔が確認できる。図118-2～9は胸部破片である。8は臍の突起の周囲が埋んでいる。9は足付土偶の胴部下半片である。図118-10～12は胴部下半片である。図118-13・14は足部破片である。14は上下を横位の沈線で区画し、斜繩文が施文される。これらは無文のものを除き、格子目及び渦巻き状の沈線が施文されている。繩文時代後期後葉と考えられる図118-14を除き繩文時代後期前葉を主体とするものと考えられる。

円盤状土製品は総数44点出土し、15点を図示した。いずれも土器片の周縁を打ち欠き円形に整形している。図119-1～6・15は沈線が施文されるものである。15は土器の底部と考えられ、円形に幅広の沈線が施文される。図119-7～10は繩文が施文されるものである。図119-11～14は無文の一群である。これらは繩文時代後期前葉のものと考えられる。

三角形土製品は4点出土し、1点を図示した。図119-16は沈線が施文される。

ミニチュア土器は8点出土したが小破片が多く、図示したのは1点である。図119-17は深鉢を模した底部破片である。

耳飾は2点出土した。図119-18・19は鼓状を呈し、18は無文、19は表裏両面に刺突が施される。

動物形土製品は1点出土した。図119-20は四肢の先端部及び顔面を欠損する。腹部を除く全面には刺突が施される。四肢の表現があることから陸獣を模したと考えられる。

不明土製品は1点出土した。図119-21はやや湾曲した棒状を呈し、綱位の貫通孔がみられる。土器の口縁部の可能性も考えられるが詳細は不明である。

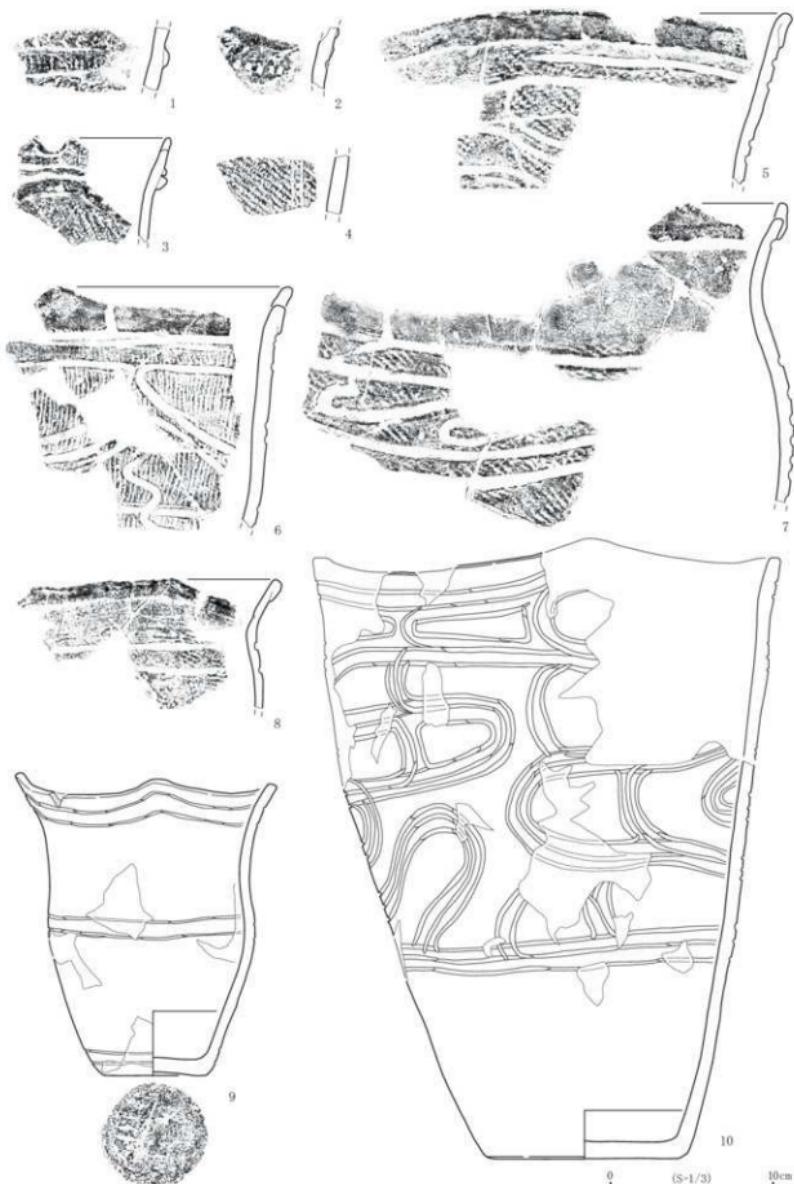


図97 A区遺構外出土土器（1）

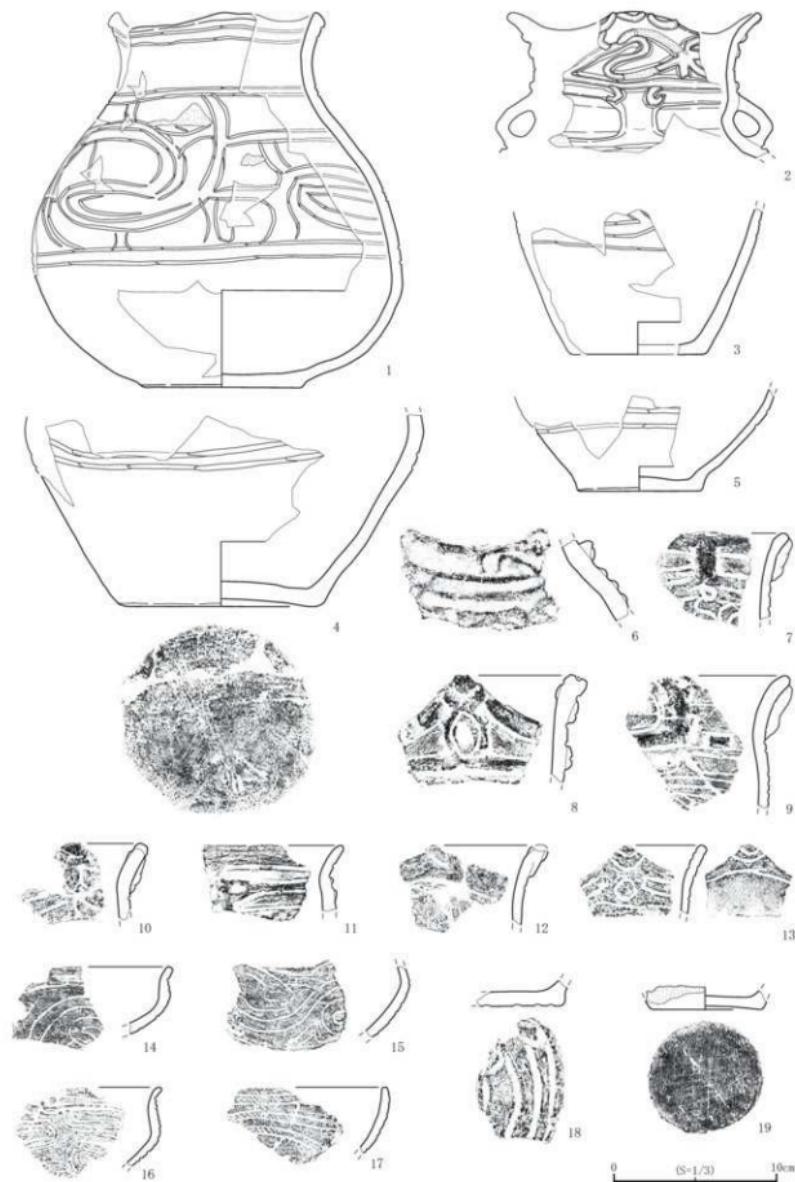


図98 A区遺構外出土土器（2）



図99 A区遺構外出土土器（3）

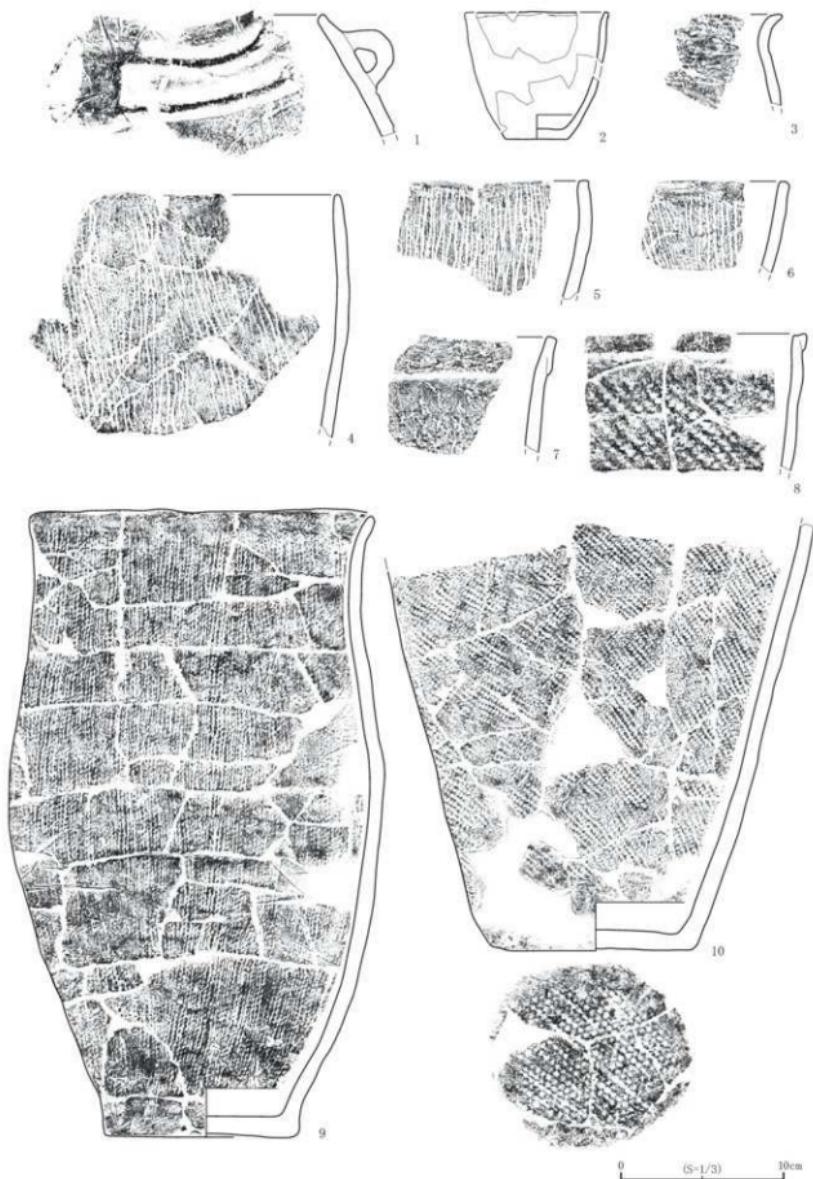


図100 A区遺構外出土土器（4）



図101 A区遺構外出土土器（5）

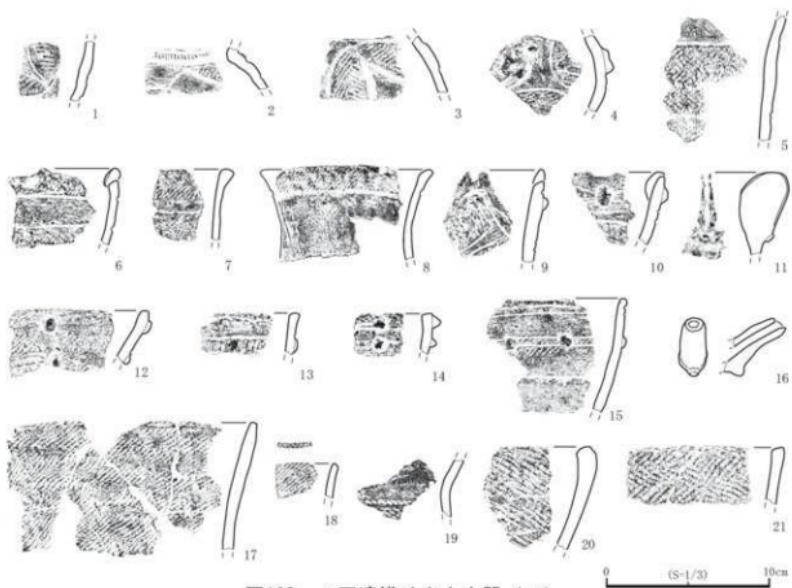


図102 A区遺構外出土土器（6）

石製品（図120）

A区遺構外から出土した石製品は17点である。

円盤状石製品は10点出土し、5点を図示した。図120-1～4は周縁が研磨加工されるもの、5は周縁が打ち欠かれるものである。石材は1～4が凝灰岩、5は凝灰質泥岩である。

岩版は2点出土した。6は凝灰岩製で楕円形を呈する。8は緑色凝灰岩製で台形状を呈し、上辺両端付近に2ヶ所の貫通孔をもつ。また表面下半には格子目状の線刻が施される。研磨加工されているが一部に成形痕が残る。

有孔石製品は1点出土した。7は凝灰岩製で小型の円形を呈し、円盤状石製品に類似するが中央に両面穿孔の貫通孔をもつ。

石棒は4点出土した。9～12はいずれも敲打整形後研磨加工が施される。9は泥岩製の小破片である。突帯には格子目状の線刻が施される。10は泥岩製で頭部を台形状に作り出しているが、表面が欠損しているため詳細は不明である。また、頸部及び胴部に横位の線刻が施される。11は断面円形で端部に向かうに従い扁平となり、全体としてやや湾曲する。また、頸部のくびれが弱いものの、扁平で円形の頭部をつくり出している。凝灰岩製である。12は沢4から出土した砂岩製の完形の石棒である。断面円形で両端部には入り組み状の線刻が施された球状の頭部がつくり出される。沢4出土土器の年代は縄文時代後期前葉～後葉であるが、断面及び頭部形状から後期後半に出現する成興野型に先行する葛沢型と考えられる（長田友也氏のご教授による）。

(葛城)

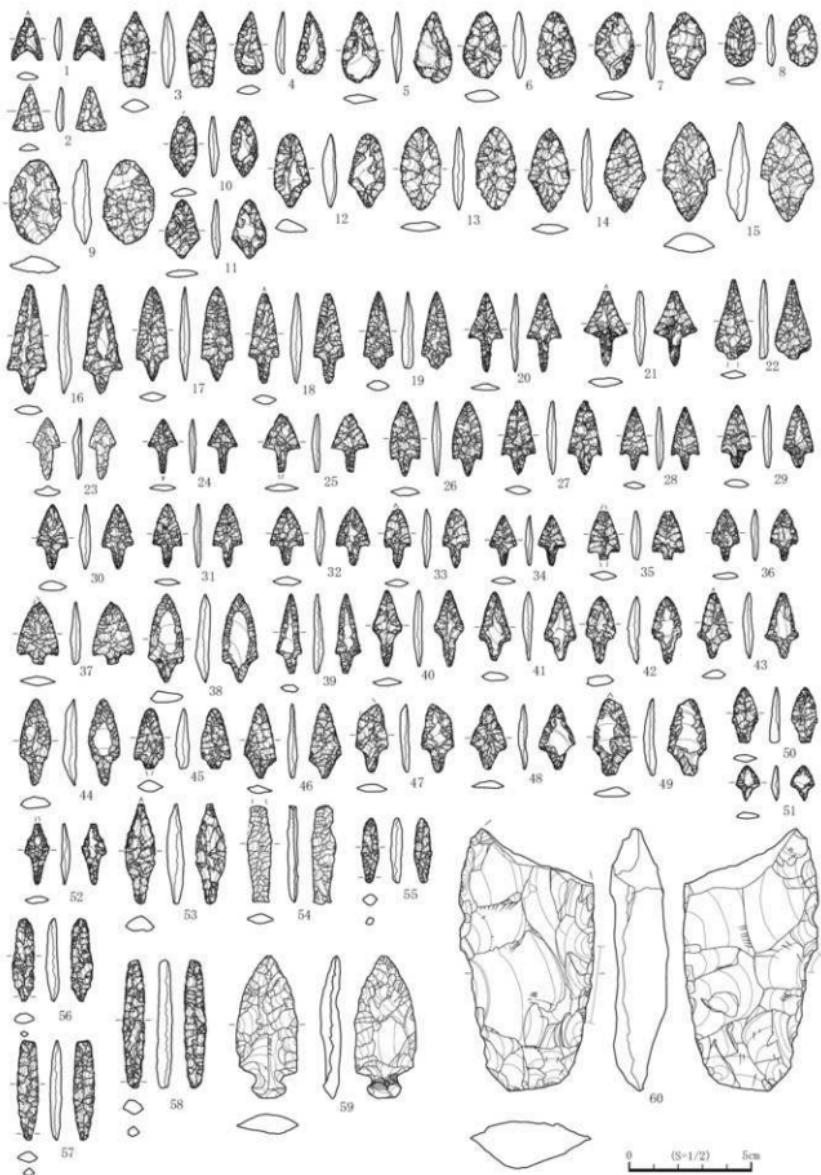


図103 A区遺構外出土石器 (1)

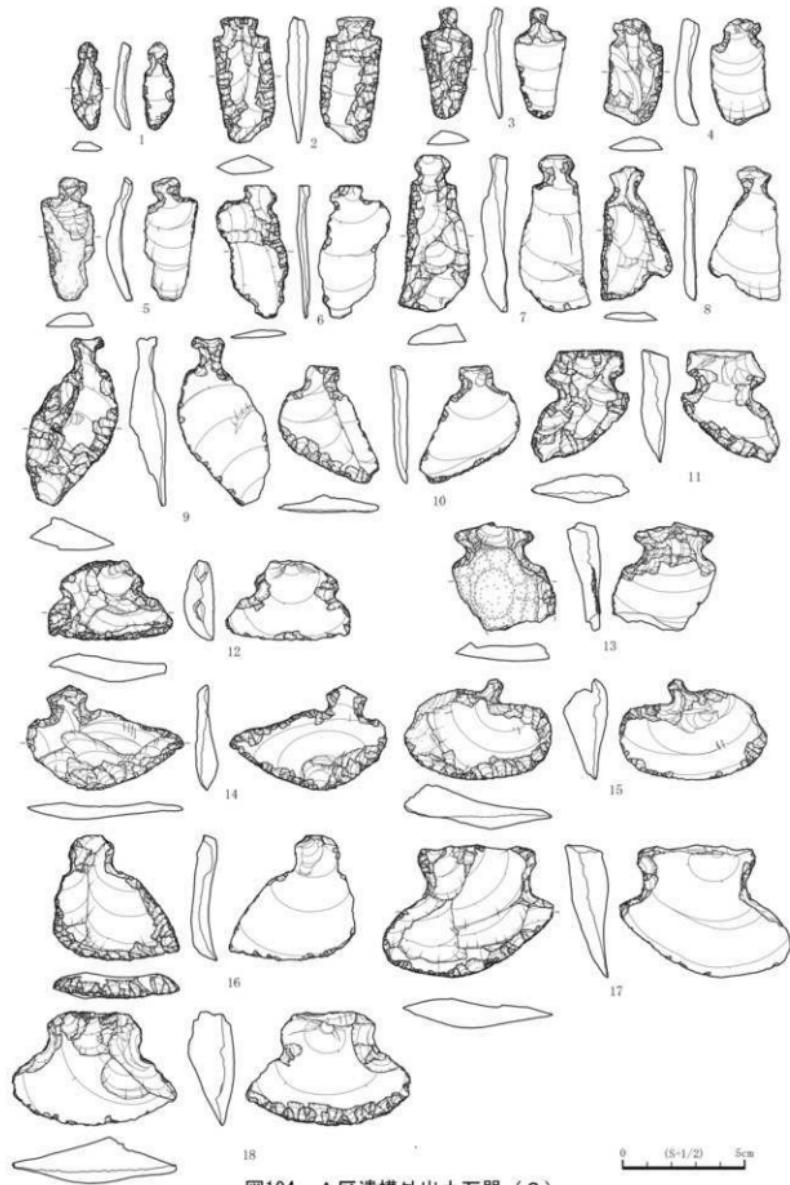


図104 A区遺構外出土石器（2）

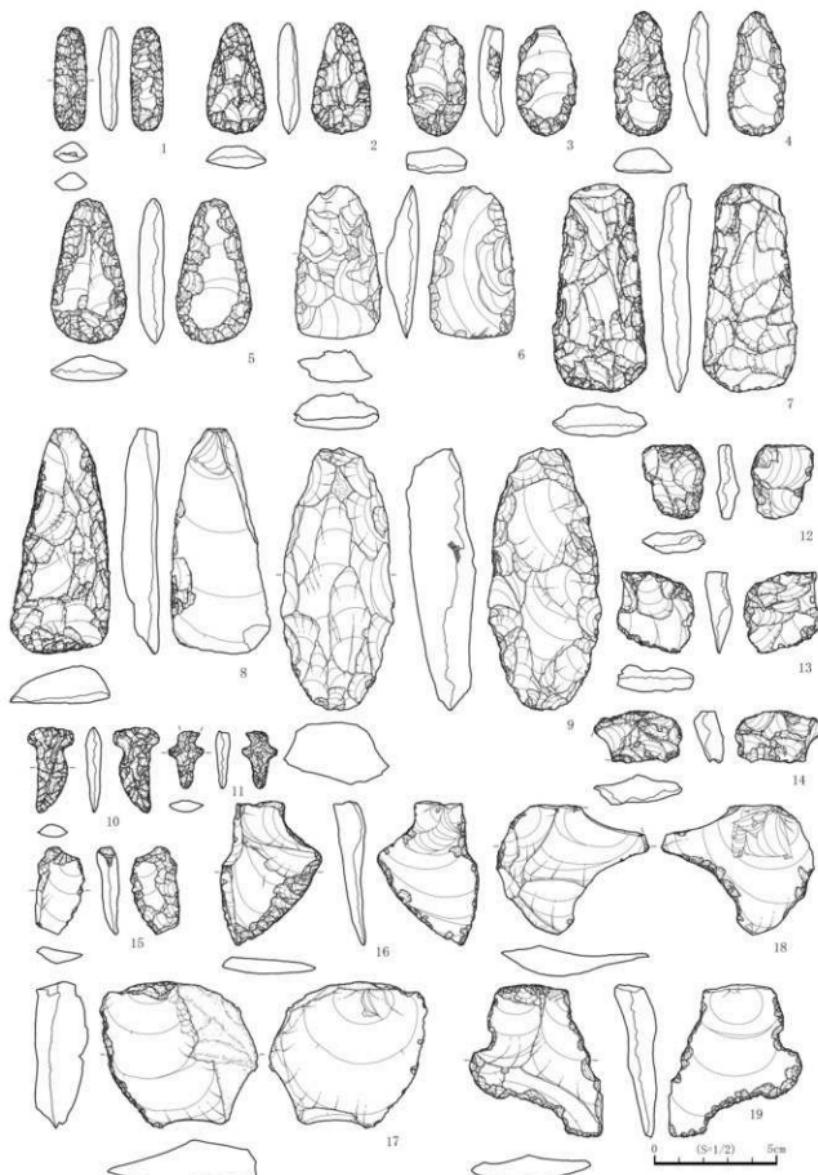


図105 A区遺構外出土石器（3）

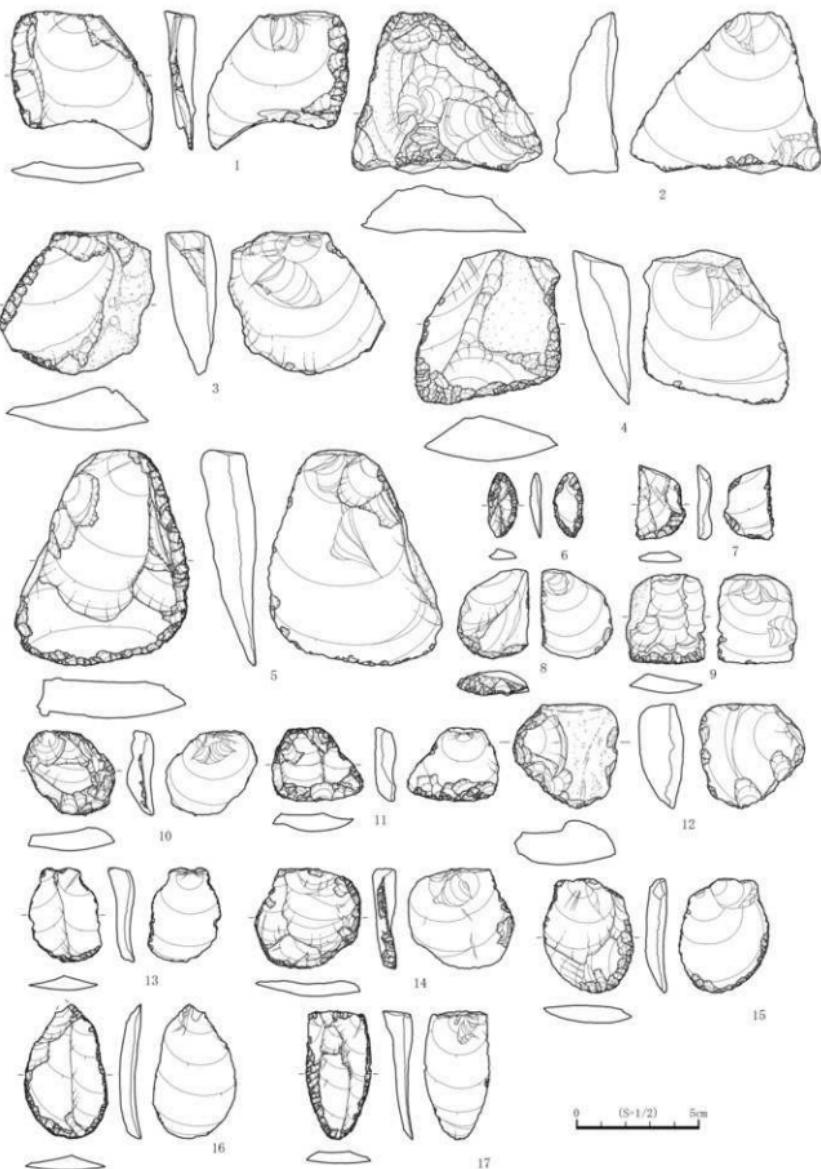


図106 A区遺構外出土石器（4）

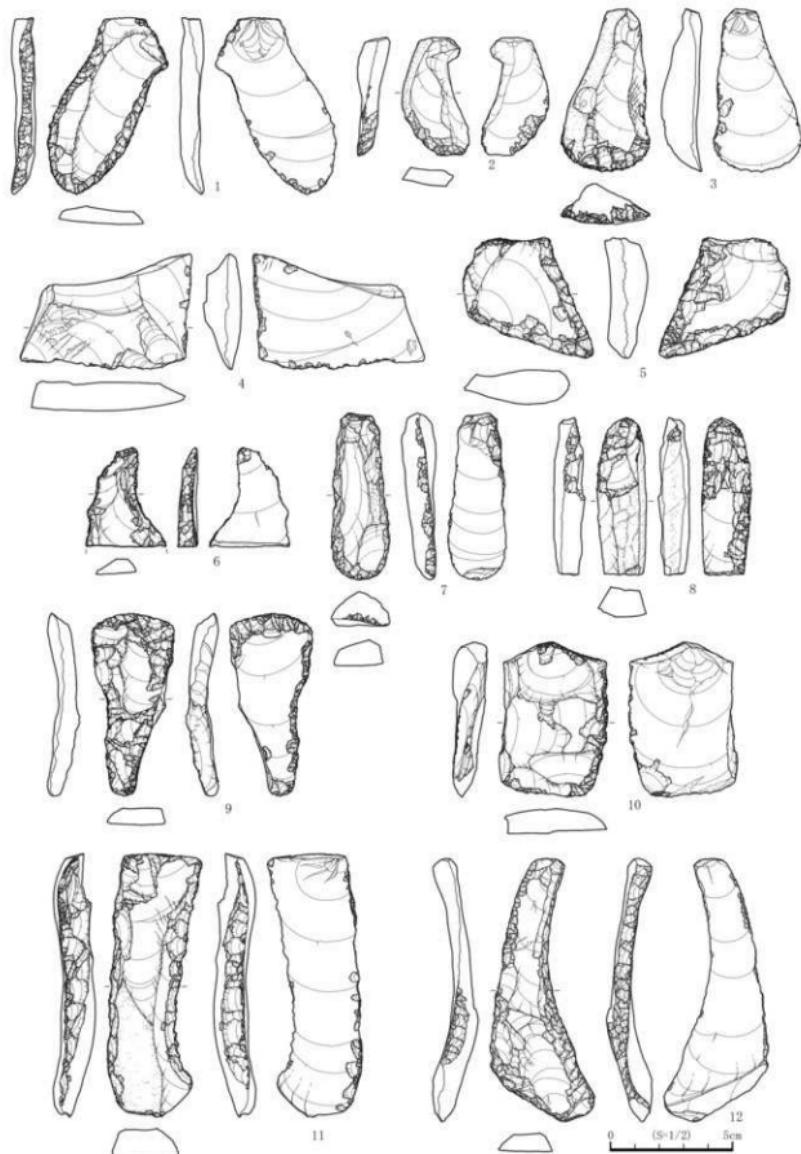


図107 A区遺構外出土石器（5）

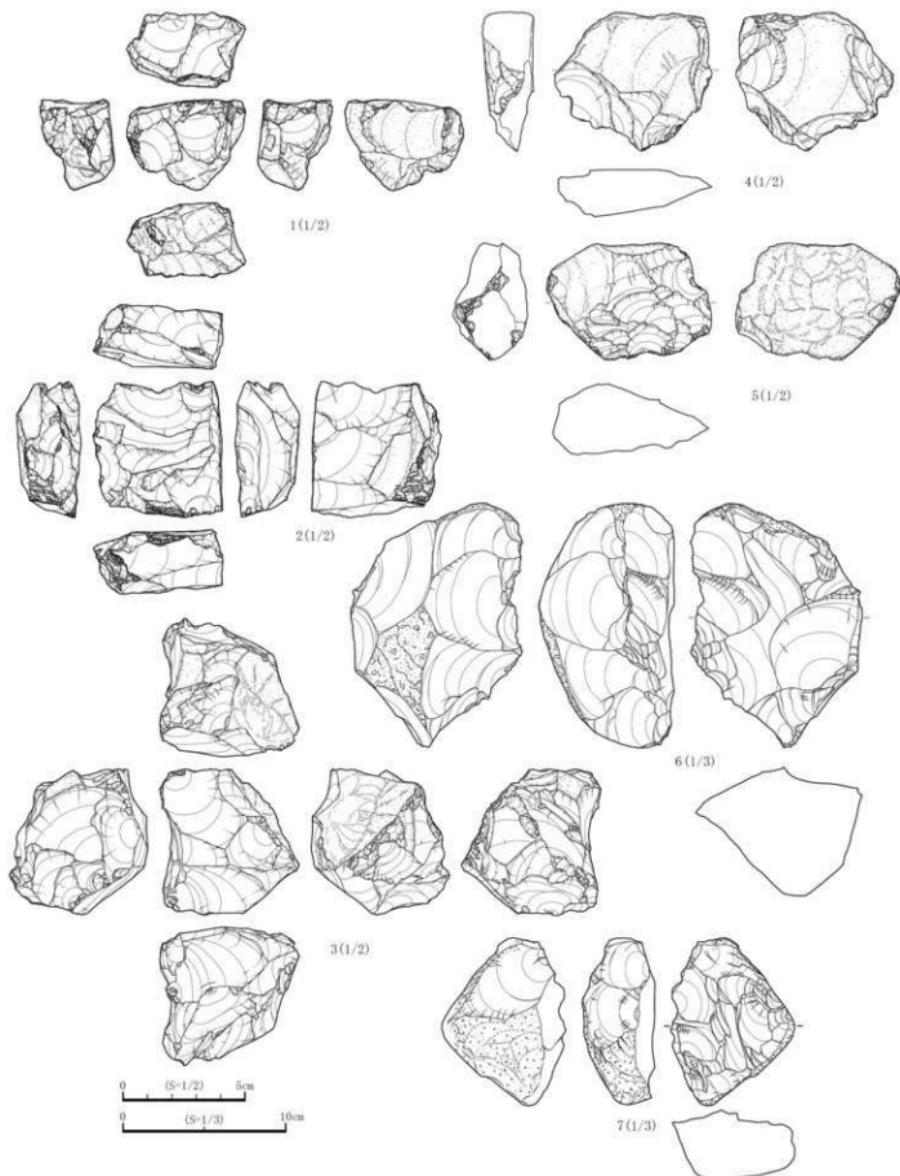


図108 A区遺構外出土石器（6）



図109 A区遺構外出土石器（7）

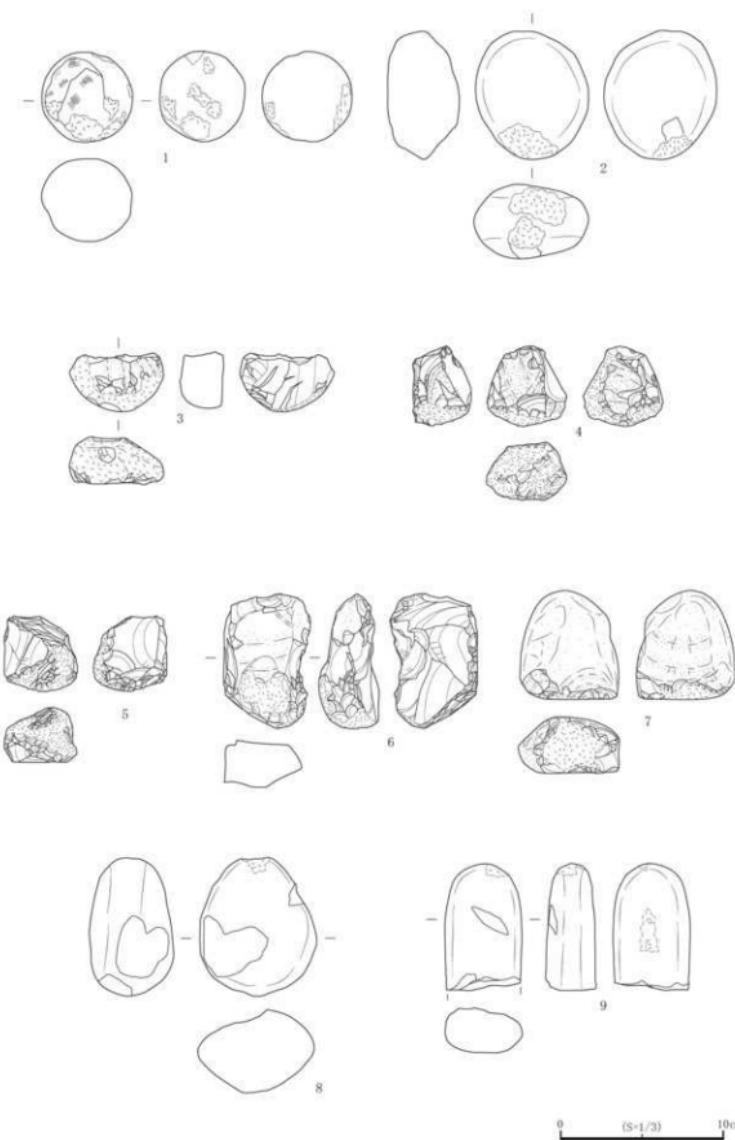


図110 A区遺構外出土石器 (8)



図111 A区遺構外出土石器（9）

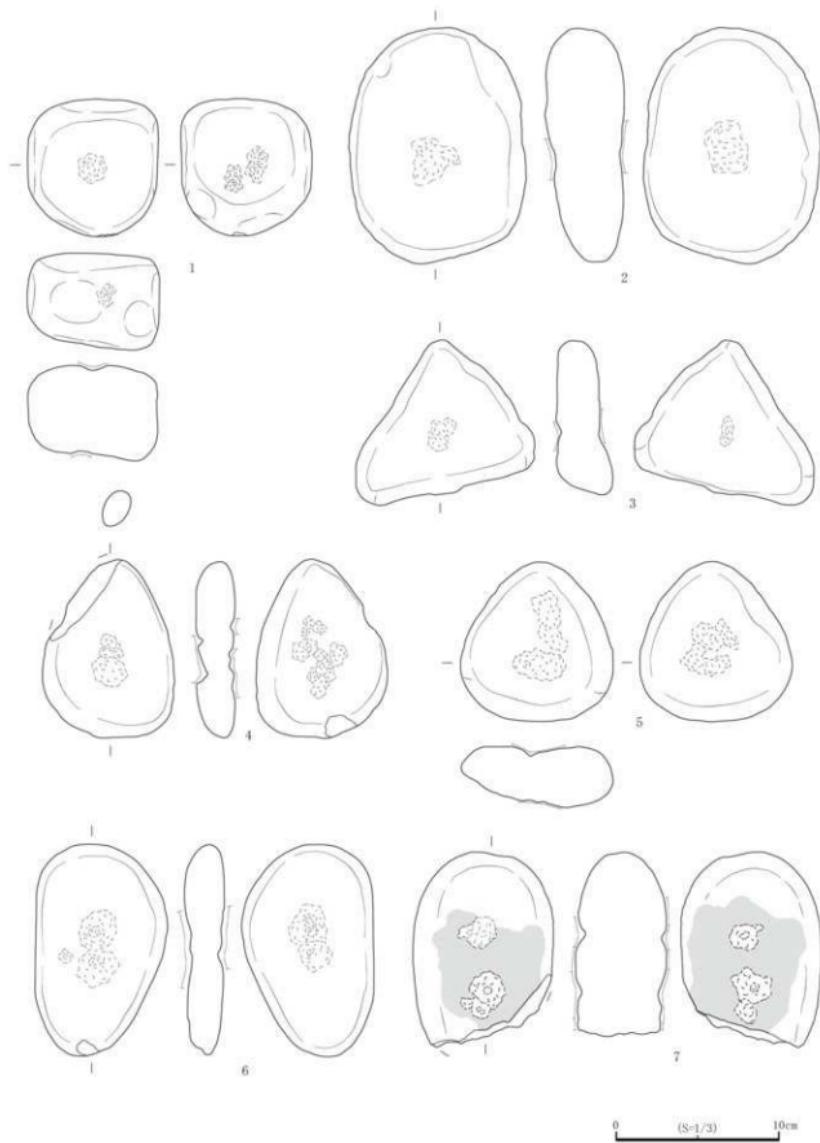


図112 A区遺構外出土石器 (10)

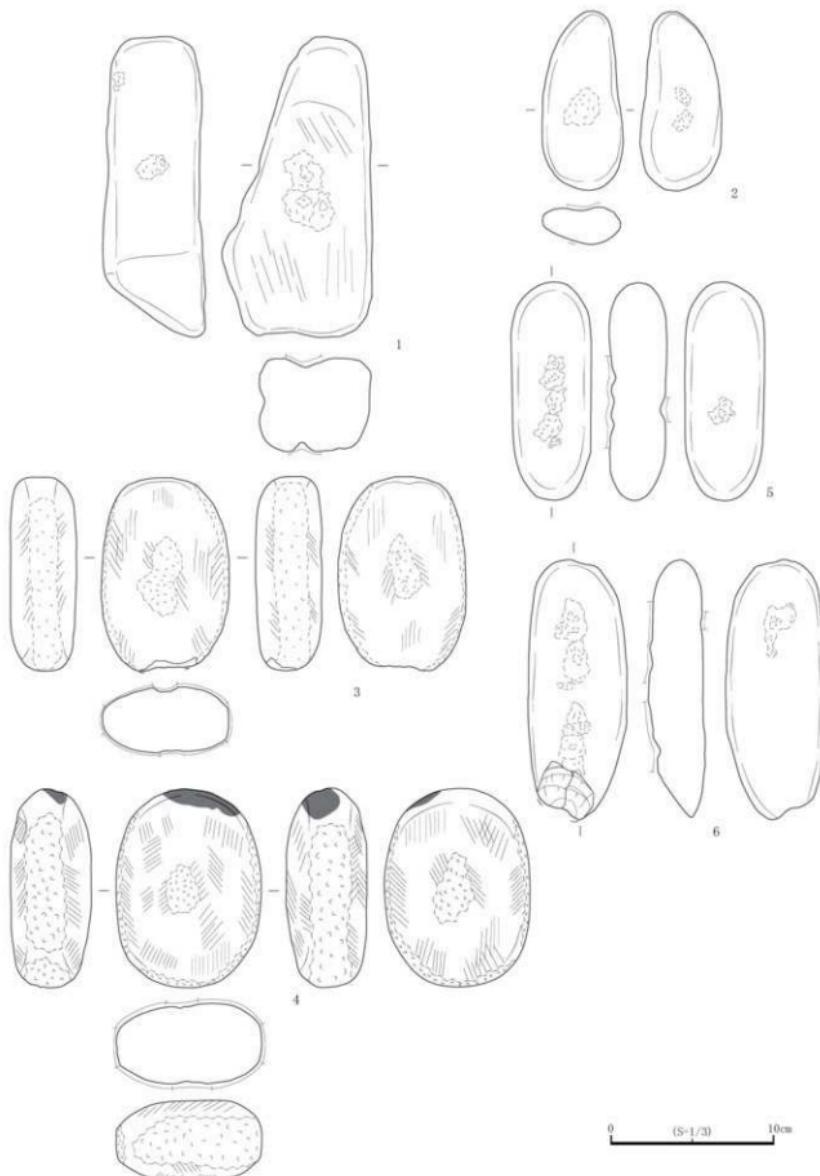


図113 A区遺構外出土石器 (11)

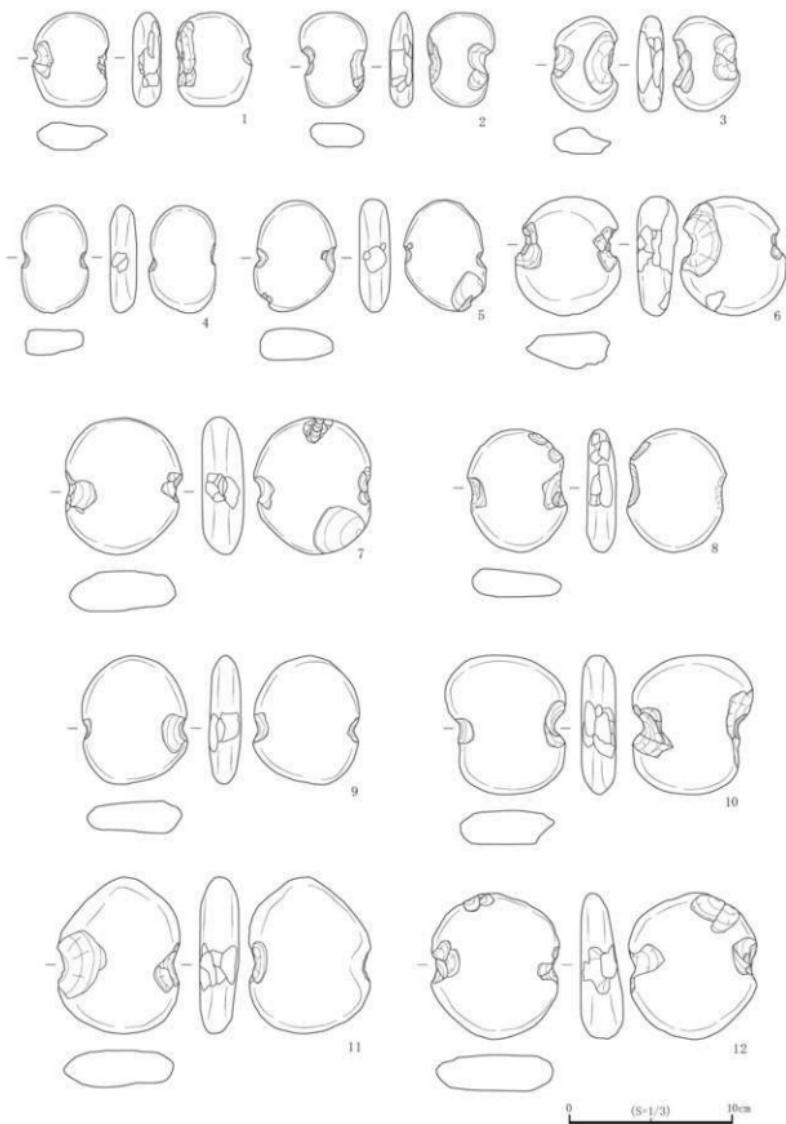


図114 A区遺構外出土石器 (12)

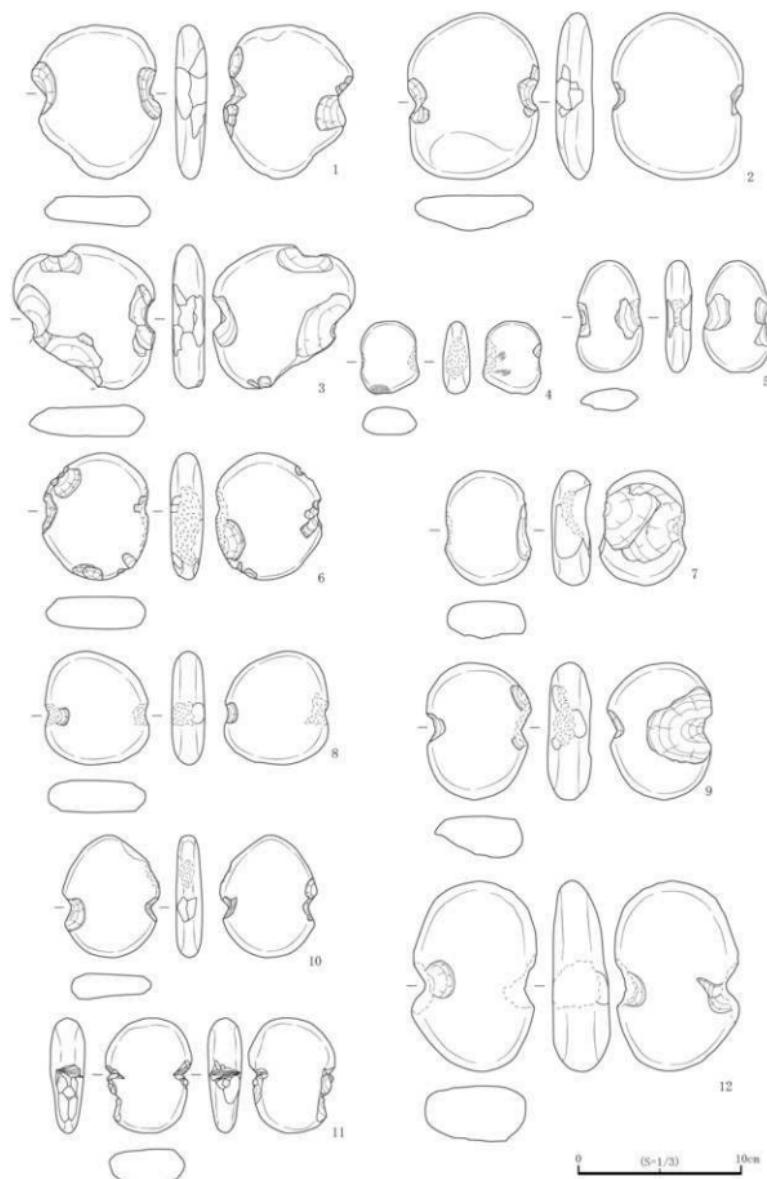


図115 A区遺構外出土石器 (13)

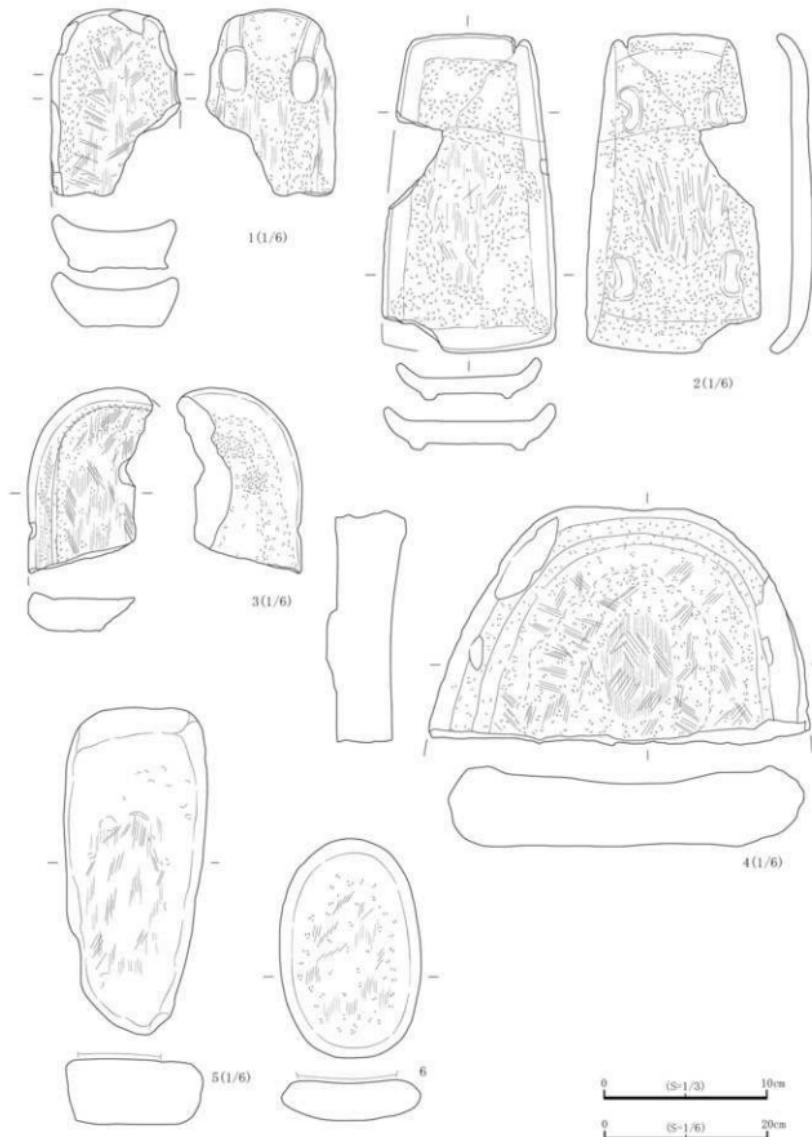


図116 A区遺構外出土石器 (14)

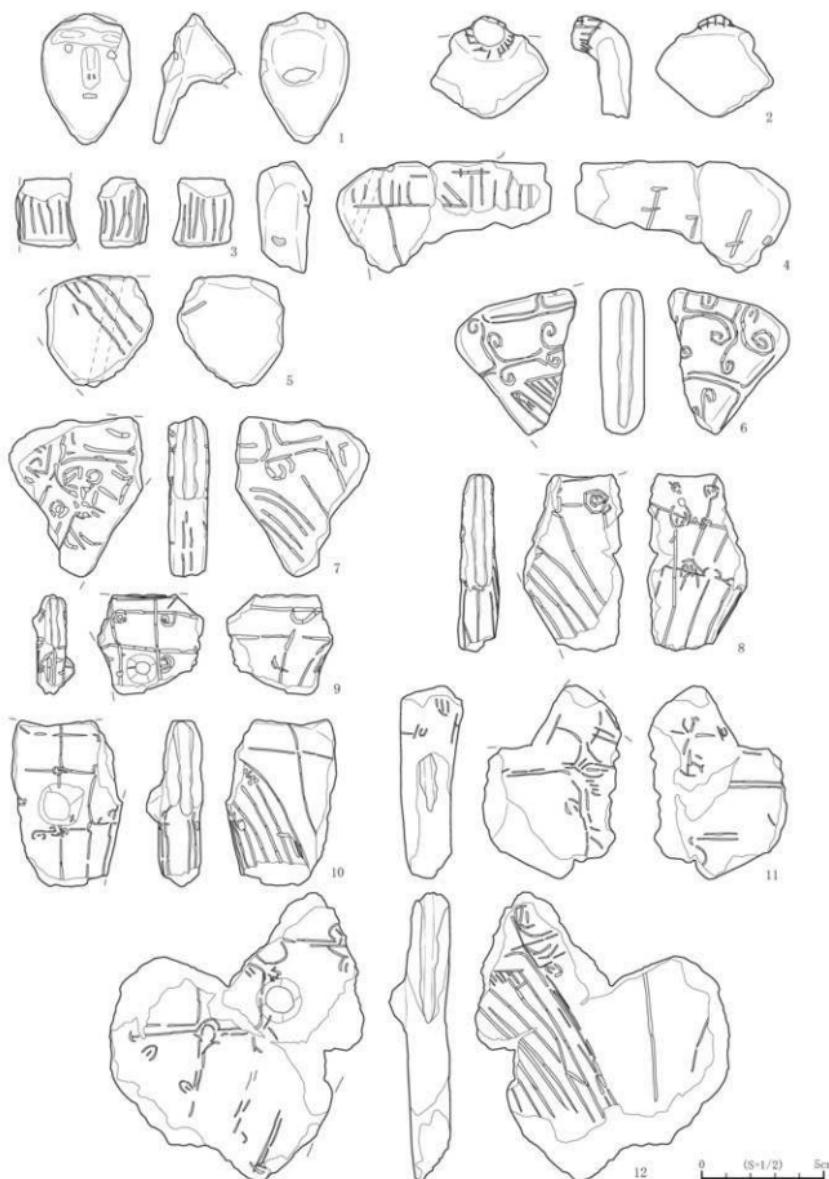


図117 A区遺構外出土土製品（1）

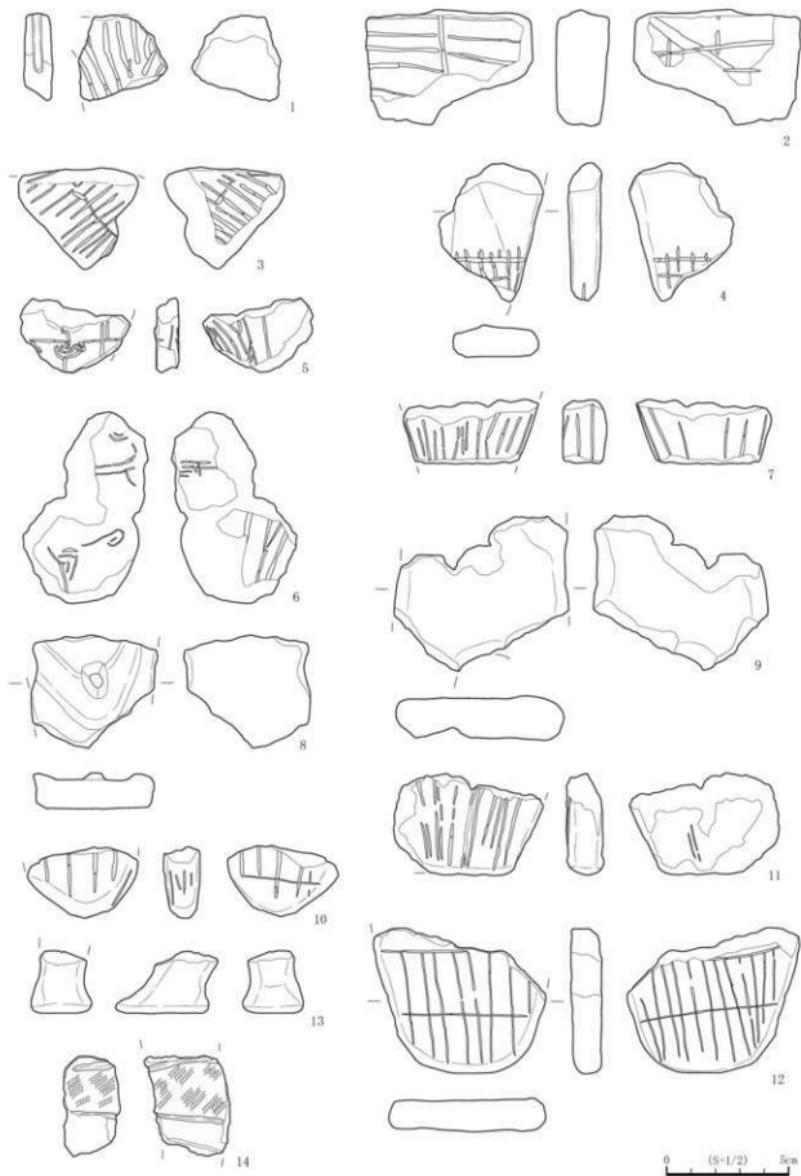


図118 A区遺構外出土土製品（2）

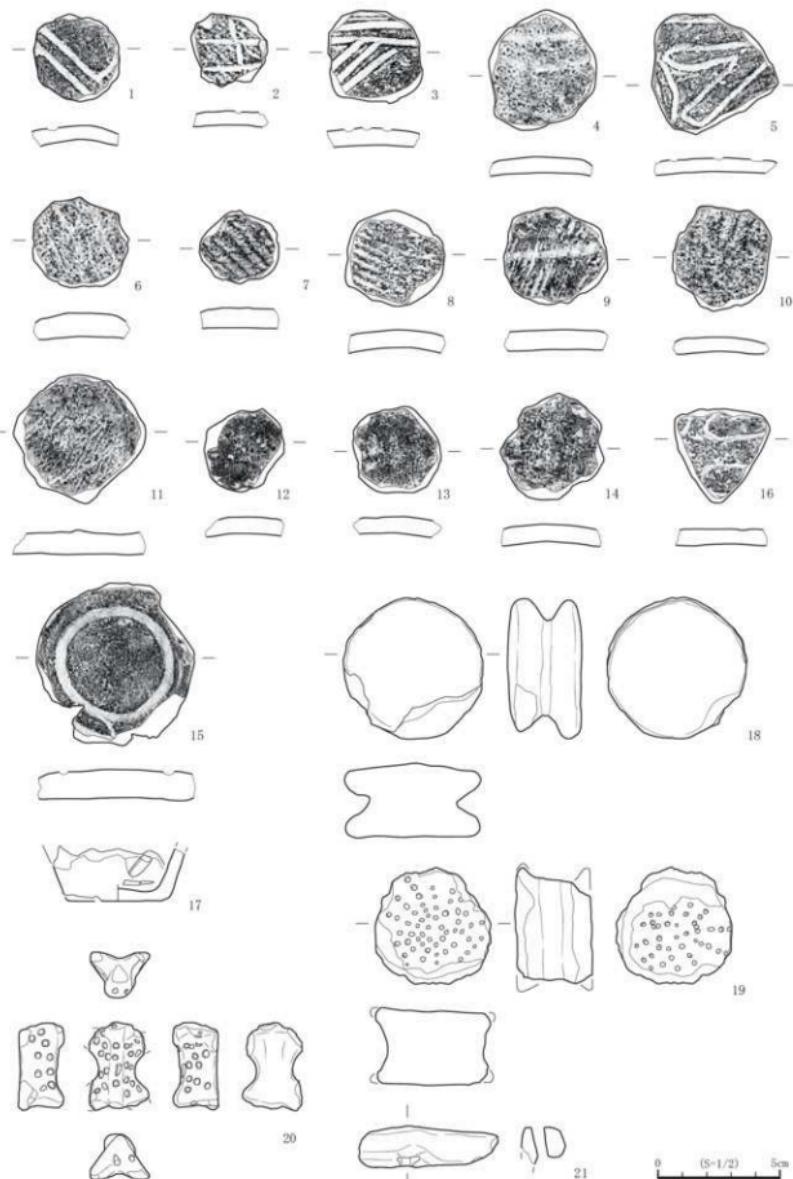


図119 A区遺構外出土土製品（3）

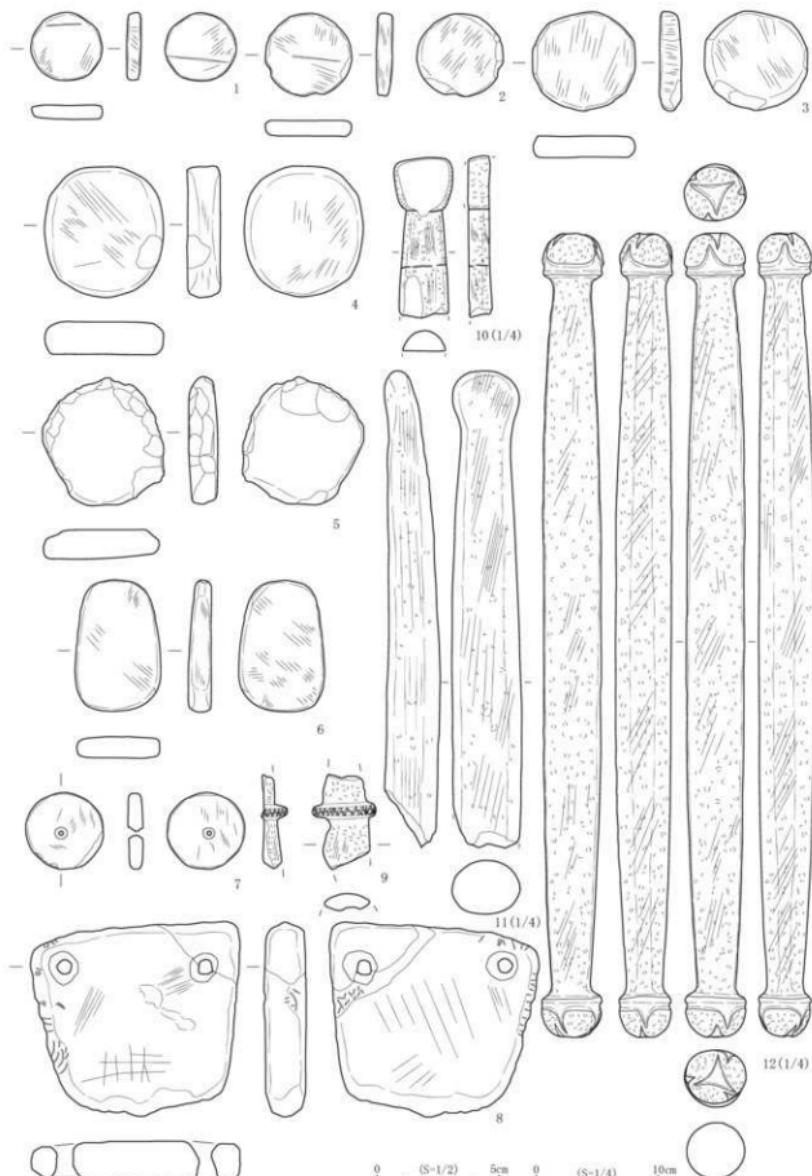


図120 A区遺構外出土石製品

第2節 B区

B区はA区南西部に隣接する標高189～192mの緩やかな傾斜面に位置する。A区とB区は現代の擁壁により便宜的に区分した。B区から検出された遺構は溝跡1条、ピット8基である。ピットについては第3章第1節の分類基準に従い報告する。また調査区中央からは南北方向に延伸する沢が検出された（第2章第5節参照）。

1 溝跡（図121）

B区第1号溝跡（BSD01）

【位置と確認】IVF・G-53グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

【重複】B区第7号ピットと重複し、本遺構が古い。

【平面形・規模】北側は現代の擁壁によって失われているため全体形は不明であるが、確認長4.27m、最大幅211cm、最大深48cmである。

【堆積土】褐色土を主体とする。層中には自然礫が多量に含まれる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【小結】遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、縄文時代後期前葉のものと考えられるB区第7号ピットより古いことから、縄文時代後期前葉以前のものと考えられる。

2 ピット（図122～124）

8基検出した。A群は検出されなかった。以下、分類ごとに述べる。

B群 柱痕が確認できなかったもの（図124）

1類 開口部の長軸規模が1m以上のもの

5基検出した。いずれも第V層上面で確認した。B区第1号溝跡を掘り込むB区第7号ピットを除き、重複するものはない。平面形は円形もしくは不整円形で、規模は長軸113～205cm、深さ38～79cmである。計測値の詳細は遺構一覧表を参照されたい。堆積土は暗褐色～黒褐色土を主体とし、B区第1・7号ピットは人為堆積、その他は自然堆積の可能性が高い。

B区第7号ピットは、ピット中央の2層から4層より3点の石匙、5・6層からは挙大の自然礫がまとまって出土している。石匙が複数出土している点、及び人為堆積と考えられる堆積土の状況を考慮すれば、土坑墓の可能性が考えられる。また、剥片に付着した炭化物を用いた放射性炭素年代測定により、 3490 ± 20 yrBPとの結果が得られている（第4章第1節参照）。

ピットの時期は、遺物が出土したB区第1号ピットが縄文時代後期初頭、B区第5・7号ピットが縄文時代後期前葉と考えられるが、その他のピットについては不明である。

遺物はB区第1号ピットから第III群A類土器（図124-1）、B区第5・7号ピットから第III群B1類土器（図124-2～5）が出土している。1は波状口縁の深鉢形土器で、地文縄文に三角形区画文がみられる。三角形区画内には弧状文が施文されている。石器はB区第5・6・7号ピットから出土があり、石匙3点、スクレーパー3点（19.7g）、磨製石斧磨り切り残片（2.7g）、剥片28点（211.0g）が出土した。このうちB区第7号ピットからの出土が多く、石匙3点（図124-6～8）、スクレーパー2点（15.0g）、剥片22点（147.3g）、磨製石斧磨り切り残片（2.7g）が出土した。

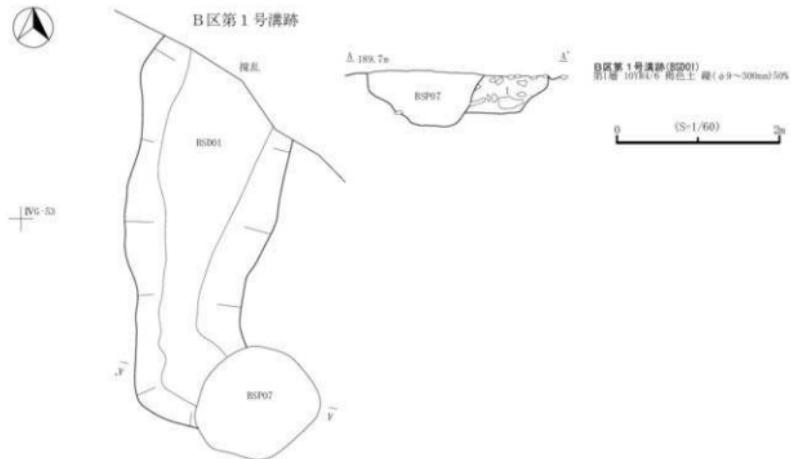


図121 B区第1号溝跡

2類 開口部の長軸規模が1m未満のもの

3基検出した。いずれも第V層上面で確認し、重複するものはない。平面形は円形で、規模は長軸64~75cm、深さ40~62cmである。計測値の詳細は遺構観察表を参照されたい。遺物は図示しなかつたが、B区第4号ピットから第III群B類土器の小片が出土しており、縄文時代後期前葉以降のものと考えられる。その他のピットの時期は不明である。なお、本類からは石器及び土製品、石製品は出土しなかつた。

〔小結〕B区から検出されたピットは8基である。墓の可能性が考えられるB区第7号ピットを除き、用途は不明である。ピット及びその他の遺構の分布がまばらな状況は、隣接するA区南端でも同様である。現代の搅乱によって破壊されていることを考慮しても、本区域は集落の中心部から離れた、人間活動の痕跡が希薄な区域と考えられる。詳細については第5章で述べるが、同様の傾向はC区北側でもみられる。

(葛城・永瀬・最上・工藤)



図122 B区ピット配置図 (1)

0 (S-1/100) 1m

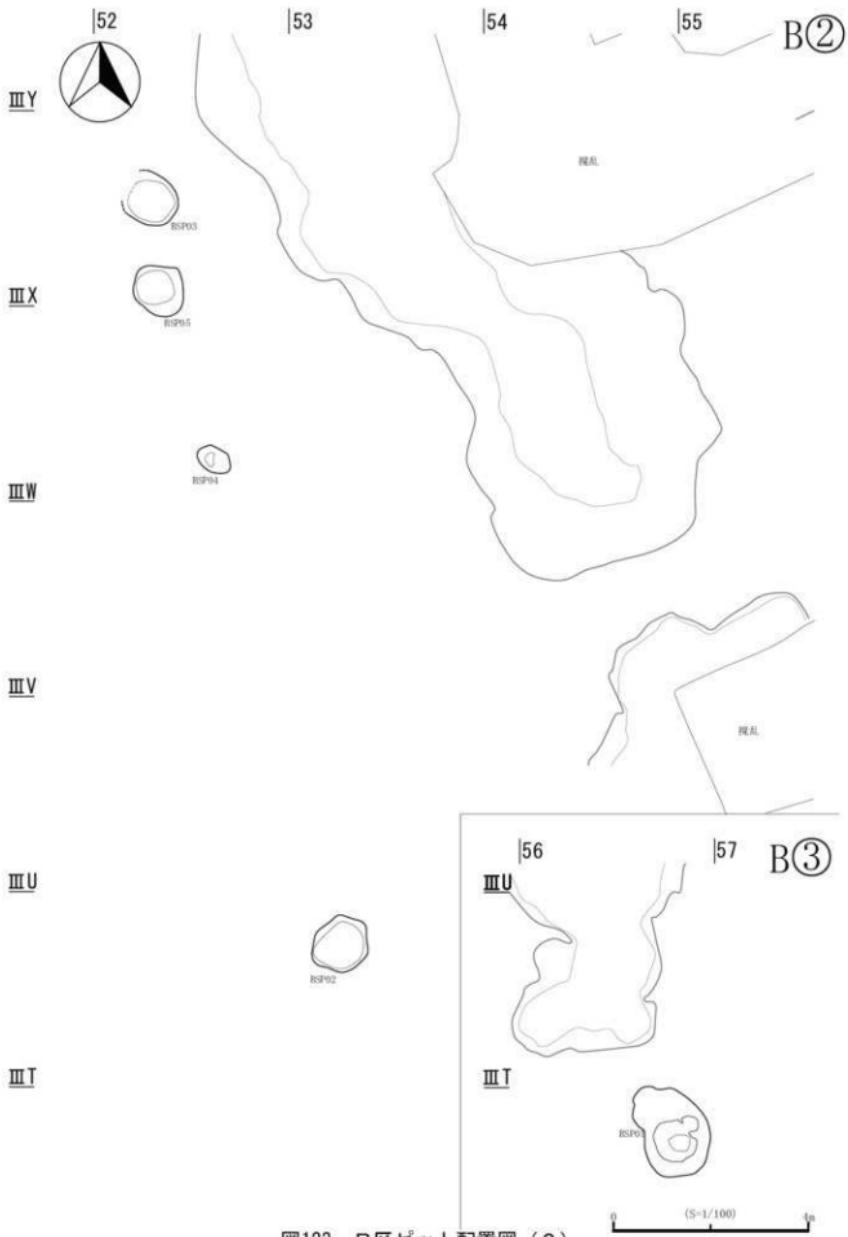


図123 B区ピット配置図 (2)

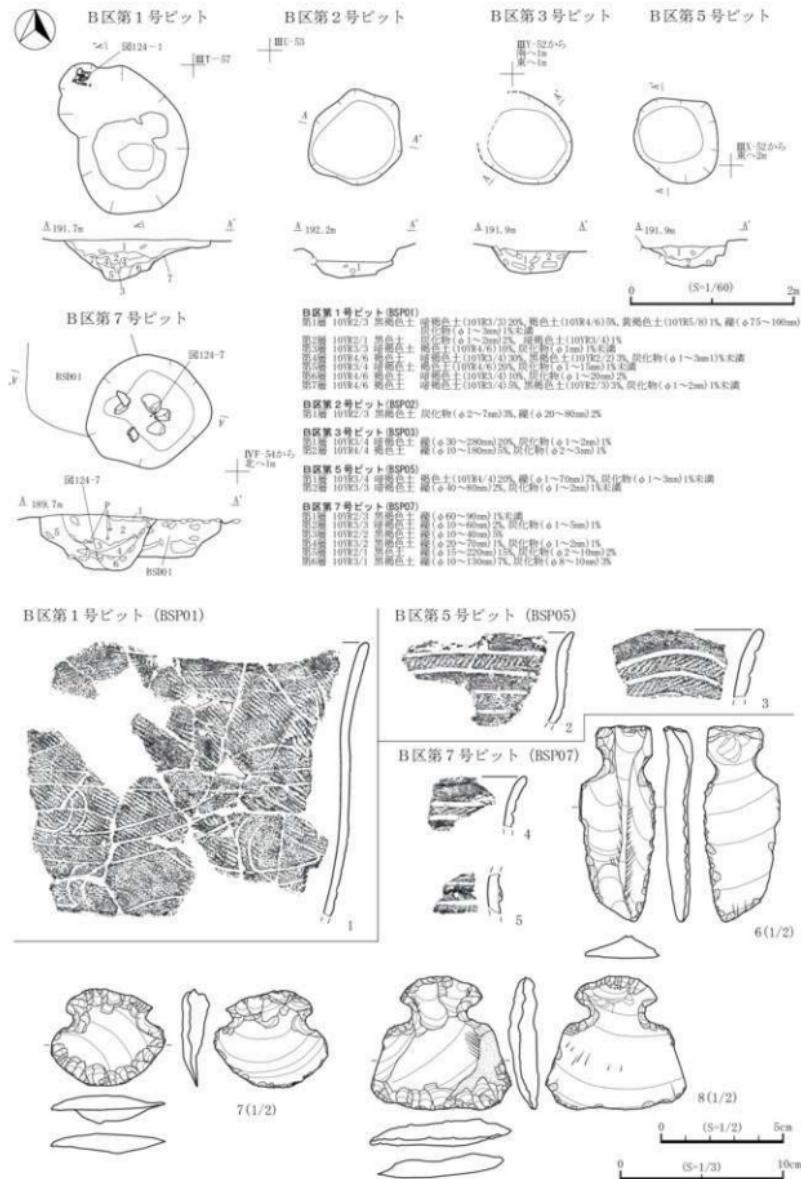


図124 B区ビット・出土遺物

3 遺構外出土遺物

土器（図125）

B区の遺構外からは総重量約30kgの土器が出土した。縄文時代中期から後期後葉にかけての土器が出土している。第III群B 1類・C類が主体で、第II群・第III群F類も少量みられる。沢堆積土からの出土が多い。

第II群

沢101のIIIW-54付近から第II群A類が少量出土した（図125-1）。

第III群

第III群B 1類は深鉢形土器、壺形土器などの器種がみられる。十腰内I式新相に位置づけられるものが主体で、器形・文様構成・文様要素などの特徴がA区の捨て場出土土器と類似するものが多い。文様には蓮華花弁文、方形区画文などがみられる。図125-3は波状口縁の深鉢形土器で、胴部に隆帯による方形区画がみられる。隆帯上には円形刺突文が施される。図125-8は口縁波頂部下に波状文、胴部に蓮華花弁文がみられる。図125-2・18は第III群C類で、18は4単位の波状口縁の深鉢形土器である。図125-16・17は第III群F類の壺形土器片である。（最上）

石器（図126）

B区遺構外から出土した石器は剥片石器は46点、礫石器は15点で、剥片石器は石鐵3点（5.7g）、石槍1点（59.2g）、石匙2点（12.2g）、石鏟1点（24.4g）、スクレーパー17点内I類14点（323.2g）、II類3点（82.2g）、石核3点（1503.7g）、U.F.15点（510.4g）、R.F.4点（139.5g）、礫石器では磨石3点（947.2g）、敲石1点（486.5g）、凹石9点（4506.7g）、石錘II類1点（107.8g）、台石1点（5370.1g）が出土した。

遺構外出土の石器は、第III層と沢101堆積土から出土しており沢堆積土からの出土が多い。

石鐵は、Ic類（1.9g）、IIa類（0.8g）、III類（図126-1）が出土した。石槍は、大型のもの（図126-2）が出土した。スクレーパーは17点出土し、沢101からは8点（210.4g）出土している。石核は沢101より2点（1087.2g）出土している。U.F.の出土位置は沢101堆積土中とIVBライン以北の出土が目立つ。R.F.は4点のみの出土であり特に出土量が少ない。剥片は122点（7529.0g）出土した。調査区のほぼ全域から出土し、III～IVE-51～55に集中している。このうち黒曜石の剥片は4点（86.2g）出土し、IVA-56から3点出土している。

磨石は2点（884.2g）、敲石は1点（486.5g）が沢101堆積土から出土した。凹石はII類がほとんどであり、磨石を転用したものもある（図126-4）。台石は1点出土した（図126-6）。局所的な摩滅による凹部は認められない。（工藤）

土製品（図126）

土製品は1点出土した。図126-7は沈線が施文される円盤状土製品である。

（葛城）

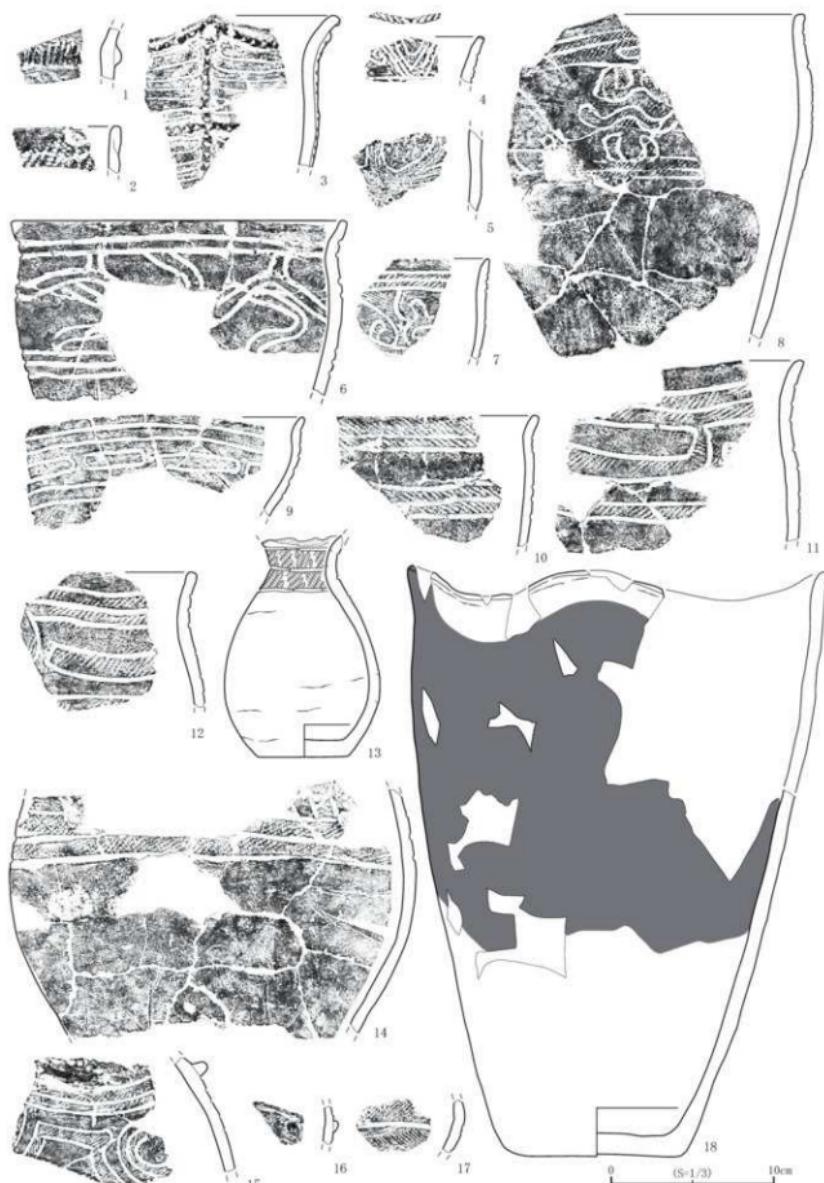


図125 B区遺構外出土土器

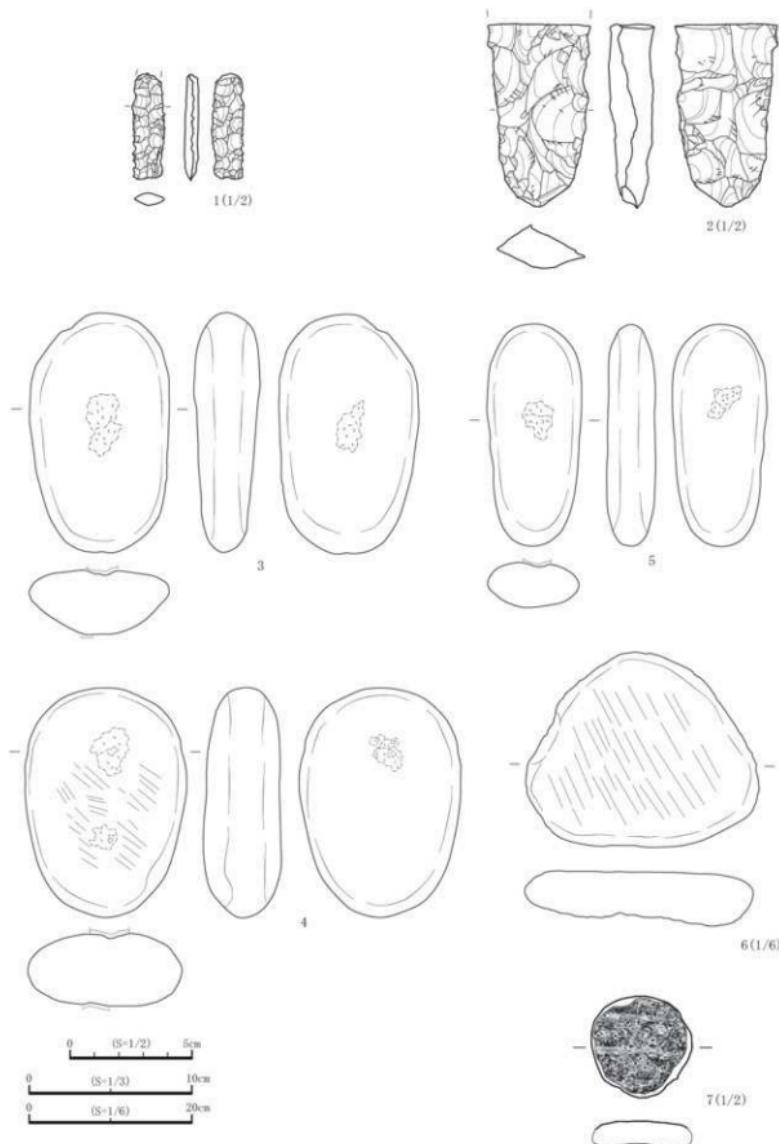


図126 B区遺構外出土石器・土製品

第3節 C区

C区の平成19年度の調査では、湯ノ沢川に面した川岸に遺構が散在して検出されている。本調査地点でも川岸に面した位置に遺構の検出が予想されたが、土器埋設遺構とピット各1基の検出に止まった。

調査区全体の表土を撤去して遺構確認を行ったところ、ほぼ全域に、宅地の造成・撤去に伴う搅乱が及んでいることが判明した。

搅乱を受けていない部分において上記の遺構を確認し精査した。ほかに、遺物が残存している可能性のある沢状の窪地部分については、トレンチを入れて確認を行ったが、遺物は出土しなかった。

1 土器埋設遺構（図4・127）

C区第1号土器埋設遺構（CSR01）

【位置・確認】C区第1号ピットと同じIIIH-102グリッドに位置する。ピットを誤って掘り込んでしまい、その際に検出された。当初、ピット内遺物と思われたが、土層断面から本遺構がピットの堆積土を掘り込んでつくられていることが判明した。

【重複】上述のようにC区第1号ピットと重複し、本遺構が新しい。

【平面形・規模】掘方に土を充填してから、深鉢形土器の胴部下半を、底部を下に正立に設置している。掘方本来の開口部規模は捉えられないが、径が約25cmの円形で、筒型に掘られている。ピットの底面を約16cm掘っている。

【堆積土】堆積土は、炭化物粒と焼土粒が混合する黒褐色土である。

【出土遺物】図127-1は第III群C類の深鉢形土器で、胴部上半が欠損している。胴部にはR Lが横位および斜位に施文されており、底辺部は指頭圧により張り出すようにつくられている。内面にはミガキが施されている。土器式は特定できないが、縄文時代中期に比定されるものである。

【小結】本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代中期のものと考えられる。

2 ピット（図4・127）

C区第1号ピット（CSP01）

【位置・確認】調査区北端のIIIH-102グリッドに位置する。第III層上面で検出した。

【重複】埋設土器と重複し、本遺構の方が古いと捉えている。

【平面形・規模】長軸が約130cm、短軸が約100cmの梢円形である。検出面からの深さは23cmで、断面はボウル状に落ち込む形状で、底面はいびつである。底面形状がいびつで定まらないのは、遺構の基底となる第IV層が礫を多量に包含していることに起因するものと思われる。

【堆積土】重複した大部分を掘り上げてしまい不足する部分が多いが、2層に分けられる。褐色土を主体にする土で礫を多量に混入する。自然堆積と思われる。

【出土遺物】ピット内出土遺物として取り上げた2点の土器片は、埋設土器と接合した。

【小結】本遺構の帰属時期は特定できないが、重複する埋設土器との関係から縄文時代中期以前のものと考えられる。

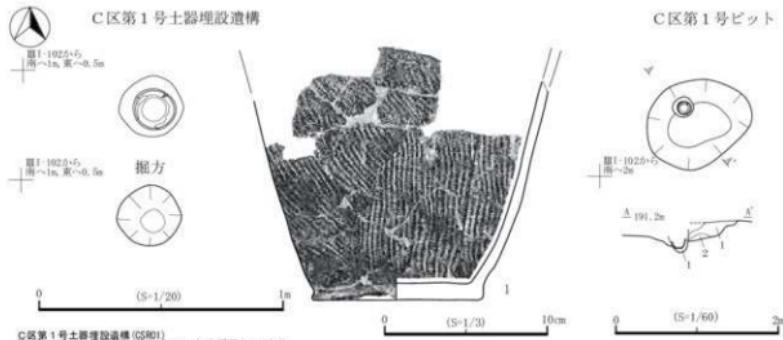


図127 C区第1号土器埋設遺構・C区第1号ピット

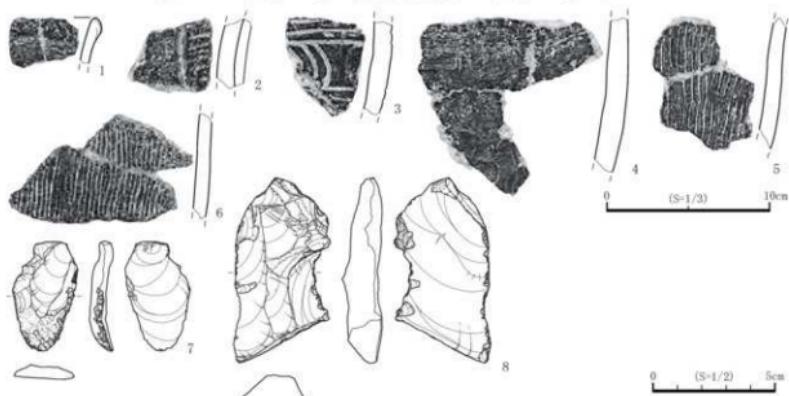


図128 C区遺構外出土遺物

3 遺構外出土遺物（図128）

平成19年度の調査では土器65箱分・石器41箱分の遺物が出土しており、本調査でも相応の数量が予想されたが反して少なく、出土遺物は前述の遺構内出土も含めダンボール1箱分である。

遺構外出土土器は総数51点・重量799.3g、剥片石器が総数4点・72.3gが出土した。

図128-1・2は第II群土器で、1は脆く剥落しているが口縁部に細い粘土紐が波状に付けられた円筒上層e式と思われる破片である。図128-3の沈線が施されている土器と図128-4の無文土器は同一個体で、第III群B1類である。図128-5・6は第III群C類で、単軸絡条体第1類が施されている。

石器では、スクレーパー1点（図128-7）とU.F.1点（図128-8）、ほかに剥片2点が出土している。剥片の内1点は黒曜石である。
(小田川)

第4節 補遺

A区西半部の報告済（第513集）区域出土の一部土製品について今回報告区域の遺物とあわせて報告する。

1 遺構内出土土製品（図129-1・2）

図129-1は第13号掘立柱建物跡の柱4（第160号土坑）掘方出土の棒状粘土製品である。手捏ね整形で、断面円形を呈する。上端を欠損しており用途など詳細は不明である。

図129-2は第20号土坑出土の土偶である。右肩付近の破片であり、表裏に弧状の沈線が施文される。肩部には貫通孔が施される。堆積土中からは後期前葉の土器片が出土しており、本遺物も同様の時期のものと考えられる。

2 遺構外出土土製品（図117-1～4・7～11・図118-2～7・9～11）

全て土偶片である。詳細については本章第1節に記した。

(葛城)



図129 第20号土坑・第160号土坑出土土製品